

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A research for making sentence patterns in colloquial Japanese (1) : On materials in conversation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001230

国立国語研究所報告 18

話しことばの文型(1)

— 対話資料による研究 —

国立国語研究所

1960

刊行のことば

音声で表現される話しことばは、瞬間的に消え去るものであって、とらえがたい。そのためか、話しことばに関する研究は、一般的に言ってあまり進んでいるとは言えない。国立国語研究所では、創立以来第一研究部内に話しことば研究室を設けて、話しことばに関する研究を進めてきてすでに「談話語の実態」という研究報告を公刊しているが、その後、未開拓と言ってよい話しことばの文法について調査研究を行なうこととし、最初に句型（センテンス・パタン）を明らかにすることを計画した。その研究成果の一部をまとめたのが本書である。句型についてはなお調査研究すべきものがあるので、それは本書の続編として近い将来に公刊する予定である。

話しことばの研究は当然音声面をも重視しなければならない。ことに句型を考えるのにはイントネーションに注目すべきである。この方面は、まだ新しい研究領域として残されていたものだけに、今回の研究調査は方法論の上で少なからず、困難があった。本書について各方面から御批評を賜わるならばまことに幸である。

この調査研究は、話しことば研究室長大石初太郎を中心に、飯豊毅一、宮地裕、吉沢典男が担当した。

1960年3月

国立国語研究所長 岩淵悦太郎

目 次

はじめに——この報告書の構成——	1
I 研究の概要	2
1. 研究結果のあらまし	2
1 文の認定について	2
2 表現意図	4
3 構文	5
4 イントネーション	7
5 総合的文型	8
2. 研究目標—われわれの立場—	10
1 文型研究を選んだわけ	10
2 文型をどのようにとらえようとするか	13
3 対話資料による文型研究の意義	16
4 基本文型との関係	18
3. 研究方法・研究担当者	20
1 表現意図・構文・イントネーションの総合	20
2 録音資料・内省・実験	21
3 研究担当者	25
4. 作業経過	25
1 年次経過	25
2 いくつかの作業についての説明	26
2・1 研究文献の検討	26
2・2 書きことば資料等による準備的研究	26
2・3 イントネーションの実験的調査	27
2・4 表現意図に応ずる発話の実験的調査	28
2・5 独話資料の収集	30
3 今後の予定	30
5. 資料	31
1 資料一覧	31
2 共通資料と非共通資料	33
3 資料の処理	34

3・1	録音収集	34
3・2	文字化と訂補	35
3・3	文切りと文の選別	36
3・4	カード化	40
4	資料の使い方	41
Ⅱ	基礎的研究	42
1.	文の認定について	42
1	はじめに	42
2	共通資料の冒頭部において、まず問題なく文として採りうるもの	45
2・1	実例	45
2・2	基本的な問題	54
3	共通資料の冒頭部における問題点の処置	57
3・1	△印について	57
3・2	*印について	58
3・2・1	*印1 重複の表現など	58
3・2・2	*印2 省略の表現	61
3・2・2'	*印2' 省略質問文	63
3・2・3	*印3 文頭の間投語	65
3・2・4	*印4 押さえの表現	65
3・2・5	*印5 提示の表現	66
3・2・6	*印6 選択要求の表現	68
3・2・7	*印7 倒置の表現	70
3・2・8	*印8 「ト」の表現	75
4	問題点のまとめ	77
5	おわりに	83
2.	表現意図	86
1	はじめに	86
2	表現意図の2類について	87
3	表現意図の分類と、その細分に応ずる文表現の分類について	88
4	表現意図に応ずる文表現の文末部分について	89
①・1・1	声的感動詞による表現	90
①・1・2	語的類型を持つ感動詞による表現	91
①・2・1	形容(動)詞類による表現	91
①・2・2	形容(動)詞を含む文的類型による表現	91
②・1・1・1	態の表現	93
	完了……(93) 存続……(94) 存続経験……(94)	

	移行……(94)	例示……(95)	変化……(95)
	伝聞……(96)		
②・1・1・2	様 ^{よう} の表現 ……………		97
	受身……(98)	可能……(98)	
②・1・1・3	時の表現 ……………		98
	過去……(99)	現在……(100)	
②・1・2・1	断定の表現 ……………		101
②・1・2・2	希求の表現 ……………		103
②・1・2・3	推定の表現 ……………		103
②・1・2・4	意志の表現 ……………		104
②・2・1	判断未確定の表現……………		105
②・2・2	判断への疑念の表現……………		105
③・1・1・1	確認要求の表現 ……………		109
③・1・1・2	判定要求の表現 ……………		112
③・1・2・1	選択要求の表現 ……………		114
③・1・2・2	説明要求の表現 ……………		115
③・2・1	消極的行為要求の表現……………		119
③・2・2	積極的行為要求の表現……………		122
④・1・1	声的受け……………		127
④・1・2	語的類型を持った応答詞……………		128
④・2・1	指示詞(＋文末助辞)……………		128
④・2・2	その他の類型的表現……………		130
5	前記以外の表現……………		130
6	おわりに……………		135
3.	構文 ……………		137
1	はじめに……………		137
1・1	構文における対象……………		137
1・2	構文観……………		138
2	調査方法……………		139
2・1	従来の研究方法……………		139
2・2	この調査の方法……………		141
2・3	調査単位……………		144
	部……(144)	連部……(145)	一次の部……(150)
2・4	格……………		154
2・5	整理のしかた……………		168
3	結果 ……………		176

3・1	部の配列	178
3・2	構文の型(表)	181
	自動詞文(181) 他動詞文(1)(201)	
	他動詞文(2)(209) 形容詞・形容動詞文(228)	
	名詞文(238) 副詞文(245) 感動詞文(247)	
4.	イントネーション	249
1	はじめに	249
2	イントネーションのつかまえ方	249
2・1	イントネーションをどのように考えたか	249
2・2	イントネーション研究の立場について	251
2・3	イントネーションをどのようにつかまえるか	252
2・4	イントネーション5種のまとめ	260
2・5	イントネーションについての実験的調査	261
	1回目の実験的調査(261) 2回目の実験的調査(263)	
	結果についての検討(264) 実験についての反省(267)	
3	資料の分析・処理	267
3・1	分析の手続きと表記法について	267
3・2	資料の処理	269
4	結果の概要	269
5	イントネーションは「文型」とどのように関係するか	273
5・1	「表現意図」と「イントネーション」との関係	274
5・2	具体例についての検討	276
	詠嘆表現と結びついたイントネーション(277)	
	判叙表現と結びついたイントネーション(278)	
	質問的表現と結びついたイントネーション(280)	
	命令的表現と結びついたイントネーション(283)	
	応答表現と結びついたイントネーション(284)	
5・3	文末形式とイントネーションとの相関	285
5・4	まとめ	289
Ⅲ	研究のまとめ	289
1.	総合的文型の立て方	289
2.	総合的文型の試み	292
1	詠嘆表現	292
1・1	未分化的な表現	292
1・2	やや分化した表現	293

2 判叙表現	295
2・1 判断既定の表現	295
2・2 判断未定の表現	302
3 要求表現	305
3・1 確認要求の表現	305
3・2 判定要求の表現	309
3・3 選択要求の表現	312
3・4 説明要求の表現	313
3・5 消極的行為要求の表現	317
3・6 積極的行為要求の表現	318
4 応答表現	320
4・1 未分化的な表現	320
4・2 やや分化した表現	320
5 各表現の典型一覧	324
おわりに——反省——	325
参考文献	328
索引	338

はじめに ——この報告書の構成——

この報告書の主要部は、Ⅰ. 研究の概要、Ⅱ. 基礎的研究、Ⅲ. 研究のまとめ、の3章から成る。

「研究の概要」の章は、1. 研究結果のあらまし、2. 研究目標、3. 研究方法、4. 作業経過、5. 資料、の5節から成る。研究方法・作業経過・資料等についてやや詳しく報告するのは、とりわけ話しことばの研究においては、操作の面に問題があり、吟味を加える必要のあるものが多いと考えられるからである。「基礎的研究」の章は、1. 文の認定について、2. 表現意図、3. 構文、4. イントネーション、の4節から成る。詳しくは後述するが、われわれは、文型を、表現意図と構文の型とイントネーションの型の総合としてとらえようとした。そのために、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの体系の把握を、基礎的研究として行なった。それがここに報告される。また、文をどう認定するかをきめて、具体的発話の資料を文に切ったが、それに関する理論的考察および実際の処理についても、この章で記述される。「研究のまとめ」の章は、基礎的研究の立場で分析された結果にもとづき、一つの試みとしての簡単な総合的文型を立ててみたものである。

終りに、この研究に関する反省を付記する。

なお、分担執筆をしたおもな部分は、次のとおりである。Ⅰ. 研究の概要——大石初太郎、Ⅱ. 1. 文の認定について、Ⅱ. 2. 表現意図——宮地裕、Ⅱ. 3. 構文——飯豊毅一、Ⅱ. 4. イントネーション——吉沢典男

I 研究の概要

1. 研究結果のあらまし

文型のための基礎的研究として行なった、文の認定、表現意図、構文、イントネーションのそれぞれ、および総合的文型について、あらましを述べる。

1 文の認定について 従来の文法論上の文の規定は、具体的な話しことばの処理に際してはじゅうぶん有力ではない。そこで、文法論上の文の規定とできる限り密接に調和させるよう努力しながら、具体的に、文の切り方をきめた。

資料のうち、およそ1割前後が文の認定に関して問題となるものであるが、それを上記のやり方で処理して、文として認めるもの、文として不完全とするもの、を定めた。そのまとめを示す。

I 単純な文（一般にまず問題なく文とされる類を除く）（——線部が1文）

- (1) 感動詞文 例「アー ア ア ア」 「ア ナルホド」
- (2) 応答詞文 例「ウン ウン」 「イヤ イヤ」
- (3) 接続助詞由来の終助詞終止文 例「カルク ウゴカスカラネ」 <軽く 動かすからね>
- (4) 単純提示文 例「マッシロニ ヌツテアルデショウ, アレ ナカナカ タイヘンヨ」 <真白に 塗ってあるでしょう, あれ なかなか 大変よ>
- (5) くり返し表現の一つごとの文 例「サア アゲテ アゲテ」
- (6) 述語並列的表現の一つごとの文 例「オオドオリヤナンカ デルト ゼンゼン ダメデスカ, ゼンゼン ノレマセンカ」 <大通りやなんか 出ると全然 だめですか, 全然 乗れませんか>
- (7) 補充表現としての完全な文 例「モウ ナイ, モウ ヤツテナイ」
- (8) 省略文由来の慣用による完全な文 例「ポスターラ ドウゾ」 「ドウゾ ヌチラへ」

II 文的要素（~~~~線部）を含む文（——線部が1文）

- (1) くり返し表現としての文節または文節連結を含む文 例「アトカラ
ソコへ イレタンダッテ、ソコへ」
- (2) 補足の表現を含む文
- i 先行の指示語に対する補足の表現 例「イハイト ソレカラ アレニ
 カイテアルジャンナイ、アノ セキヒニ」<位牌と それから あれに
 書いてあるじゃない、あの 石碑に>
- ii 倒置の表現 例「イロイロ アルデショウ、クモノ ナマエガ」<いろ
 いろ 有るでしょう、雲の 名まえが>
- iii 言いかえによる補足の表現 例「ヤマビラキ、タニガワノ ヤマビラキ
 ノ マエ」<山開き、谷川の 山開きの 前>
- (3) 挿入文を含む文 例「デモー ナンカ ソウイウ ザイリョウ…ザイリ
 ョウッテ イウノカシラ、テンピトカ ソウイウ モノガ ズイブン
 イルンジャンナイ?」 <でもー なんか そういう 材料…材料って
 いうのかしら、天火とか そういう 物が ずいぶん いるんじゃない>
- (4) 挿入的提示文を含む文 「コトシハネー、コトシハ モウ ダッテ アタ
 シタチ ホラ イモウトト ヤコウデ イッテサ アサ ツイテ スグ
 スベッタデショウ、ダカラ モウ ノム ヒマナンカ ナイモン」<今
 年はねー 今年は もう だって あたしたち ほら 妹と 夜行で
 行ってさ、朝 着いて すぐ 滑ったでしょう、だから もう 飲む
 ひまなんか ないもん>
- (5) 副詞的文を含む文 例「モクヨウビカラカシラ、オシルト ヨル アルデ
 ショウ」<木曜日からかしら お昼と 夜 有るでしょう>
- (6) 提題文を含む文 例「エトカネ ソウイッタ アノー シュミデスネ、ナ
 ニカ ゴザイマセンカ」<絵とかね そういった あのー 趣味ですか
 何かございませんか>
- (7) 引用文を含む文 例省略
- (8) 選択要求表現文 例「ゴク カタチハ マールイデスカ、ナガインデス
 カ」<ごく 形は ^{まる}丸いですか、長いんですか>

(9) 言い直し文を含む文 例「ニホンゴジャナイ、トウキョウゴダロ?」

(10) 反唱文を含む文 例「ソレデ イインデスカ」
「ソレデ イインデスカ、
マダマダデスヨ」

Ⅲ 不完全文

(1) 不整文 例「ソノ ウエヘ ウチガ デキテ ドウデモ コウ ナッチェ ア
ア ナッチェッテ モウ ナガイ……フルインダロウ、ムカシノネ」<その
上へ うちが 出来て どうでも こう なって ああ なってって も
う 長い……古いんだらう、昔のね>

(2) 省略文(中絶文も) 例「オナマエハ?」「ゴカンケイナク」

以上のⅠ・Ⅱを文型研究の対象とし、Ⅲを対象外とする。

2 表現意図 表現意図とは、言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容のことである。表現意図に、臨時的表現意図と一般的表現意図とを認めることができる。ここに取り上げる表現意図は、一般的表現意図、すなわち、ことばの形式との対応が社会的習慣として認められるものである。

表現意図、およびそれに応ずる文表現を下記のように分類した。

A 相手に対して、あらたに何かを表現しようとする意図

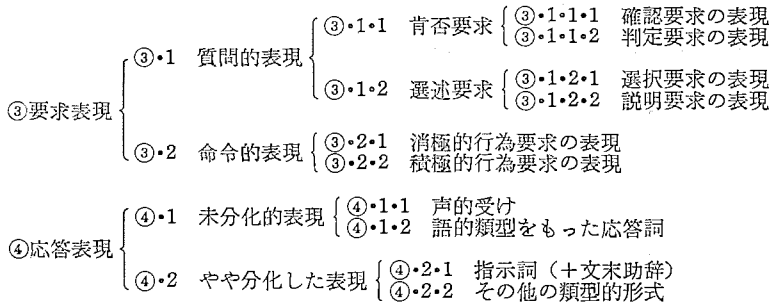
- a 相手に対して求めるところのない表現意図——①詠嘆表現
②判叙表現
a' 相手に対して求めるところのある表現意図——③要求表現

B 相手のことばに対して何かを表現しようとする意図

- b 相手に対する受容・応答の表現意図——④応答表現

以上の下位分類として、

- ①詠嘆表現 { ①・1 未分化的表現
①・2 やや分化した表現
- ②判叙表現 { ②・1 判断既定の表現 { ②・1・1 事実の叙述 { ②・1・1・1 態の表現
②・1・1・2 様 の表現
②・1・1・3 時 の表現
②・1・2 断定の様相 { ②・1・2・1 断定の表現
②・1・2・2 希求の表現
②・1・2・3 推定の表現
②・1・2・4 意志の表現
- ②・2 判断未定の表現 { ②・2・1 判断未確定
②・2・2 判断への疑念



以上の細分された文表現について、主として文末に、どのような特徴的形式があるかを調べた。たとえば、次のごとくである。

確認要求の表現 ~ネ?, ~ダロウ?, ~デショウ?, ~ジャナイ?, ~ジャナイカ?

判定要求の表現 ~カ?, ~ノ?, ~ソジャナイ {カ}?, ~? (文末昇調をもつ)

なお、上掲の分類のほかに、コミュニケーションの発始および終止に関する表現と見られる「呼び掛け」「あいさつ」、判叙表現・要求表現のそれぞれの中の未分化的表現である「反唱の表現」「疑問兆候の表現」、要求表現の形式で究極は判叙を表わす「反語の表現」がある。

3 構文 文末述語を中心として、これと直接関係を結ぶ構成要素の配列・組み合わせによって、構文の型を調査した。文の構成要素の関係方式に、「主・述の関係」「体言的修飾・述の関係」「副詞的修飾・述の関係」等、一定の格を認めて、それによって処理したのである。なお、その際、それぞれの格関係を特徴的に表わす助詞の類を重視した。

このような構文の型は、文末述語の詞の性質と密接な関係がある。それゆえ文末述語の詞にもとづいて、自動詞文・他動詞文・形容詞形容動詞文・名詞文・副詞文・感動詞文などに分類し、そのおのおのについて構文の型を調べた。一例として、形容詞形容動詞文の構文の型を、ある大まかな段階で示せば、次のとおりである。(形容詞述語のものだけを示す。)

(1) 述語だけの文 「ウマイ」

(2) 副詞的修飾語 (以下、副修語とする) のある文 「ジツニ | ウマイ」 「オソラク | イマハ | モウ | ソンナニ | ナイデショウ」

- (3) 体言的修飾語（以下、体修語とする）のある文 「ヒョウジュンゴニ | チカイ」 <標準語に 近い> 「ニンゲンニハ | ゲンザイト ショウライヨリ | ナイ」 <人間には 現在と 将来より 無い>
- (4) 体修語・副修語のある文 「マア | インゴニ | チカイ」 <まあ 隠語に 近い>
- (5) 主語のある文 「コレハ | ウマイ」
- (6) 主語と副修語のある文 「ホッカイドウ | トテモ | スバラシイ」
- (7) 主語と体修語のある文 「ジカンハ | ナンジゴロマデ | ヨロシイカ」 <時間は 何時ごろまで よろしいか>
- (8) 主語と体修語・副修語のある文 「ヨノナカニ | アクニンナンテ モノハ | ホントニ | ナインデス」 <世の中に 悪人なんて ものは ほんとに 無いんです>
- (9) 主語の二つある文 「ソレハ | カンケイガ | ナイ」
- (10) 主語二つと副修語のある文 「ソんなノ | センセン | ミタ コト | ナイ」 <そんなの 全然 見た こと 無い>
- (11) 主語二つと体修語のある文 「オレナンカ | ジッカントシテ | ナニモ | ナカッタ」 <おれなんか 実感として 何も 無かった>
- (12) 主語二つと体修語・副修語のある文 「アレ | ジッサイ | ダンセイノ ホウニ | ドクシャガ | オオイ」 <あれ 実際 男性の 方に 読者が 多い>
- (13) 主語の三つある文 「ダンシククラスッテ | キョウシツノ クウキガ | ウルオイガ | ナイナ」 <男子クラスって 教室の 空気が うるおいが 無いな>
- (14) 主語三つと副修語のある文

「ヤッパリ | ワタシタチモ | ムカシノ ホウガ | レイゴモ | タダシカッタ」
<やっぱり わたしたちも 昔の 方が 礼儀も 正しかった>

（以上は、取り扱った資料の範囲で現われた型をかかげたものである。）

形容詞形容動詞文の構文について、おもな特徴を上げると、次のとおりである。

i 体言的修飾語に関して

一般に、体言的修飾語の用いられることが少ない。

限られた体言的修飾語の用いられることがある。

比較を表わす「ヨリ」はよく用いられる。

時を示す「ニ」、場所を示す「デ」「マデ」は用いられる。

ある限られた形容詞（たとえば「近い」）には、「ト」「ニ」などが用いられる。

ii 主語について

対象語の用いられることがかなり多い。

主語が二つ、あるいは三つあると解しうる場合がある。

なお、文の構成要素の配列の順序について考え、その比較的固定化しているものについては必要な限り注記を施し、さらに別に一節を設けて、まとめて考察した。

4 イントネーション イントネーションは、文の成立にもっとも関係の深い、文末のイントネーションに限定して仕事を進めた。

まず、イントネーションをつかまえるため、文末部の発話段落の音調形式から分類し、次の5種のイントネーションの別を立てた。

〈名称〉	〈音調形式〉	〈具体例〉
1. 平調		ガク ガクヨ ヒドイ イク ハタラク
2. 昇調1		ガク ^ノ ガク ^ネ ヒドイ ^ノ イク ^ノ ハタラク ^ノ
3. 昇調2		ガク ^ネ ガク ^サ シャ ^ノ シン ^キ ハタラク ^ネ ハタラク ^ヨ
4. 降調		ガク ^ノ アリマセン ^ヨ イレル ハタラク ^ノ
5. ◎型類 (特殊なもの)		
A類		ソウネー オドロイタナー
		ソウネーエ オドロイタナーア
		ソウネー オドロイタネー
		ソウネー オドロイタナー
B類		イクネー ハタラクナー
		イクネーエ ハタラクナーア
C類		イグー ハタラクー

(注) (斜線)は終助詞, (◎)は附加的長音であることを示す。

(音調としての高低関係は、上下の相対的2段観でとらえた。ノ・ハ・ノなどについては、後の「イントネーション」の章参照。

次に、総合的文型にイントネーションがどのように参画するかを見るために、イントネーションと表現意図との対応を調べた。イントネーションは表現意図と直接的関係をもち、構文とは直接的関係をもたないと見られるからである。その結果、イントネーションは、表現意図を表わすところの文末部の特徴的形式を通して、表現意図と関係をもつと考えられた。

文末部の特徴的形式に添ってあらわれるイントネーションは、その特徴的形式の細かい違いによって、それぞれ機能が異なる。その関係を次に表示する。特に表現意図と結びつく平調・昇調1につき、判叙表現・要求表現との関係を示す。

	表現意図からみた特徴的文末形式	平調だと	昇調1だと
1	～ダ、～デス、～ウ（意志）	判叙表現	<反問>
2	～カナ、～カシラ	判叙表現 (判断未確定の表現)	左に同じ
3	体言どめ、用言どめ ～助動詞（ダロウ、デショウを除く） ～助詞（終助詞を除く）	判叙表現	質問的表現
4	[不定詞を含む形式]	質問的表現	左に同じ
5	[命令表現形式]	命令的表現	左に同じ
6	～ダロウ、～デショウ、 ～ジャナイ、～ノ	判叙・質問の両方に用いられるが、主として判叙表現	判叙質問の両方に用いられるが、主として質問的表現
7	～カ	判叙・質問のいずれにも	左に同じ
8	～ナ、～ネ（確認要求の表現のときが特徴的形式となる。）	（平調はほとんどあらわれない）	質問的表現

5 総合的文型 表現意図を中心にして総合的文型をとらえることにした。すなわち、表現意図に應ずる各種の文表現において、どういう構文の型、イントネーションの型が用いられるかを整理してみようとした。

文型を細かくとらえようとするか、あらくとらえようとするかは、どういう

目標で作業をするかによって違いますが、今は、直接には、実用的目的に立たず、文法研究として、ある段階における基本的な型（いわゆる「基本文型」ではない）をとらえようとして、必ずしも細かい構造の文型を出そうとはしなかった。そのため、表現意図に応ずる文表現の分類も、細かい下位分類を切り捨てたところがある。構文については、主語・述語とも、必要な助辞類だけに注目して、その他その構造に関しては問わず、修飾語は副詞的・体言的の類を一括して扱い、成分の順序に関しては、いっさい触れなかった。詳細は「構文」の章にゆずった。以上の規模で、限られた資料について、どのような型の種類が用いられているかを調べ、それに基づいて、それぞれの文表現における典型と考えられるものを出した。

記述は次の順序による。

◎表現意図に応ずる文表現のそれぞれについて

○構文の型の列挙 型ごとの例文 イントネーションの付記

○その表現のまとめ

○資料にあらわれた例文の数

○その表現の典型

◎各表現の典型一覧

総合的文型にもいろいろの目標や方法によるものがありうるので、これは一つの総合的文型の試みだといわなければならない。

次に、各文表現の典型一覧をかかげる。

1. 詠嘆表現

<未分化的な表現>

A. <感動詞の>独立語

<やや分化した表現>

B. (主語(ハ))—(用修語)—<形容(動)詞の>述語

2. 判叙表現

A. (主語(ガ・ハ))—(用修語)—述語

B. (主語(ガ・ハ))—(用修語)—述語カ・カナ・カシラ

3. 要求表現

(1) 確認要求の表現

(主語(ガ・ハ))—(用修語)—述語^ネ・^ナ・^{ダロウ}・^{デショウ}・^{ジャナ}
イ(ノ・カ)

(2) 判定要求の表現

(主語(ハ・カ))—(用修語)—述語^(カ)

(3) 選択要求の表現

(主語(ハ))—(用修語)—<判定要求の形式の>述語, —(独立語)—
—(用修語)—<判定要求の形式の>述語

(4) 説明要求の表現

A. (主語(ハ))—(用修語)—<不定詞を含む>述語^(カ)

B. (主語(ハ))—(用修語)—<不定詞を含む>用修語—述語^(カ)

C. <不定詞を含む>主語(ガ)—(用修語)—述語^(カ)

D. <不定詞を含む>主語(ガ)—(用修語)—<不定詞を含む>用修語
—述語^(カ)

(5) 行為要求の表現

(主語(ガ・ハ))—(用修語)—<すすめ・希求・依頼・命令などを表わ
す形式の>述語

4. 応答表現

<未分化的表現>

A. <応答詞の>独立語

<やや分化した表現>

B. (主語(ハ))—(用修語)—<応答を表わす形式の>述語

2. 研究目標——われわれの立場——

1 文型研究を選んだわけ 話すことと書くこととは、言語行動として違った条件・性格をもち、それにしたがって、話されたことばと書かれたことば、すなわち、言語行動の結果として成立したものとしてのことばは、違った構造をもつところがある。特に日本語のばあい、歴史的事情によるところもあって両者の相違が著しいとされる。この相違の上に日本語の種々の「問題」が根ざ

していることも疑いのないところである。したがって、日本語の改善のためには、その基礎として、話しことば・書きことばの両者の構造を明らかにすることが必要であり、特に、これまでに開発されているところの少ない話しことばの上に研究調査の進められることが必要である。その話しことばの研究調査の上の課題として、昭和31年度以降、われわれは文法を選んだ。その中で、まず文を問題とすることにし、文型をとらえることを、具体的目標に立てた。

「話しことばの文法・書きことばの文法」という考え方はへんだとも言える。日本語の文法は、日本人(詳しくは一般者としての日本語生活者)の観念の中に一つの体系として存在するもので、それに、「話しことばの」「書きことばの」というものはないはずで、一つの日本語文法があるだけだ、と考えられる。しかし、一方、ある文法的要素はほとんど話しことばの上に限られて用いられ、別のある文法的要素はほとんど書きことばの上に限られて用いられるというような事実はたしかにある。たとえば、助詞など、いわゆる文法的語彙の上にも、そういう区別のあるところがある。活用形の使い方などにも、それがある。また、話しことばの上だけでとらえられる、イントネーションのような音素的要素が文法的機能をもつというような事実もある。不整・誤用等、文法からはずれていると見るべき現象が話しことばに多くあらわれることはたしかで、そのために、「話しことばは文法的にでたらめだ」とか、「話しことばには文法がない」とかいうような感じももたれるのであるが、こういう感じは、必ずしも、不整・誤用などの事実だけに基づくものではないかもしれない。話しことばが、文法的構造において、しばしば書きことばと違ったすがたを示すことによるところもあるのではなからうか。構文においても、書きことばではふつう用いられないようなものが、話しことばでは用いられる。書きことばに基準を置いての感じからは、それと違う話しことばの上のあらわれが変則のものに見えることがあろう。

以上のように、文法に関して、話しことばと書きことばとは、さまざまな事実の上の相違をもっている。これを、いわば「文法的事実」については話しことばと書きことばとの間に少なからぬ相違がある、ということができよう。ここで、われわれの研究目標の「話しことばの文法」あるいは「話しことばの文

型」というよび方の意味も、おのずから明らかになる。すなわち、話しことばの文法的事実に実現される文法、言いかえれば、話しことばの領域ではたらく日本語の文法（裏がえせば、話しことばの文法的構造）、話しことばの領域で用いられる日本語の文型、ということにはかならない。

このような意味における「話しことばの文法」「話しことばの文型」が研究されなければならない理由は、単にそれ自体のためだけではないといっている。次のようにいうことができよう。

文法について、話しことばと書きことばとの相違を問題にする立場からは、主として、上のような文法的事実が対象となるが、実は、話しことばについての文法の研究は、「日本語の文法体系」の研究に直接参与することになると考えられる。というのは、これまで日本語の文法研究では、実地の話しことばを資料とする研究があまり行なわれず、単に、そこにある文法的事実の把握が不十分であるというだけでなく、日本語の文法体系を補うべきものも、そこになお残されていると思われるからである。こういう意味で、そこに、日本語の文法研究の開拓されるべき面が残されていたと思われるからである。われわれは具体的発話としての話しことばを中心的資料として、話しことばの文法の調査研究を、文型をその具体面として、進めてきた。この仕事は、基礎的には、話しことばの構造を明らかにすると同時に、現代日本語の文法の研究の進展に寄与するものとなることを期待するのである。

文を研究の対象としたのは、文法研究の立場から見て、書きことばと話しことばとが大きなちがいをもつところは、文の構造の上にあると察せられるからである。（文章についても、重要な問題があることはたしかであるが、文章そのものの基本的把握の不十分な現在としては、これはあと回しとせざるをえない。）

また、文型を目標とすることは、実用的目的を考えた仕事だとも見られよう。事実、これまでの文型研究は、大部分ことばの教育のためという立場で行なわれてきた。また、文型研究に対して、ことばの教育の側からの期待が強く、文型研究が本来の意義をそれへの寄与に見いだすのも当然だともいえる。われわ

れは今、当面の目的を、国語教育や外国人に対する日本語教授のためというふうには置いていないが、そういう方面に対する基礎的研究としても役立てられるものを、研究結果として生み出そうとしているのである。のちにも述べるが、基本文型というものを考えるためにも、有用な基礎的資料の一つになるべきものである。

2 文型をどのようにとらえようとするか 従来の文型研究について見るに、文型をどのようにとらえるか、あるいは、さらに根本的には、何を文型と考えるかについて、研究者の間で考え方は必ずしも同じではない。おもなものについて見よう。

まず、国語学会編「国語学辞典」の「文型」の項（永野賢氏執筆）には、次のようにある。

…(略)…文型は、(1) 文の構造に関する文型、(2) 表現の種々の場合における文型、(3) 語の用法に関する文型の三つに分けて考えられる。(1) 文の構造に関する文型とは、文の構成要素（成分）の配列や組合せの方式であって、いわゆる単文・複文・重文の別とか、主語・述語・修飾語（客語・補語）・独立語の相互関係などである。その基本的な型をつかむには、文の構成要素の関係を表現する助詞や助動詞に基くのが便宜とされる。……(略)……(2) 表現の種々の場合における文型とは、一々の文表現そのものの種々の意向や態度（発言の意図）および種々の慣用的な表現形式について類型を立てたものを言う。従来、文の種類として、平叙文・疑問文・感嘆文・命令文の分類がなされたのは、この一例とみなすこともできる。が、文型という時は、さらに細かな類型に分ち、具体的なことばに即した各種の表現の型をあげるのが普通である。……(略)……(3) 語の用法に関する文型は、広義の文型に属するものであって、助詞・助動詞およびこれに準ずる形式名詞・慣用的連語・副詞など、文表現に多く用いられる語の用法に関する文の典型を言う。……(略)……以上三種の文型は、分類というよりは観点ないしねらいの違いに基くもので、重複がある。文法論的には(1)と(2)とに限り、さらに体系化される必要がある。しかし教育的には広義の立場に立ち、具体的な文の典型の選定に重点が置かれるべきであろう。……(略)……

この、「文の構造に関する文型」「表現の種々の場合における文型」「語の用法に関する文型」の分け方は、最初、青年文化協会「^{日本語}練習用日本語基本文型」(1942)において使われたものであるが、その後、文型の説明で、この分け方が使われることが多い。(前記「国語学辞典」のほか、白石・新聞・広田・松村氏編「国語教育辞典」、西尾・倉沢・滑川・飛田・増淵氏編「国語教育辞典」)

等) また、この分け方に沿った文型研究をいくつか見ることができる。たとえば、永野賢氏「学校文法概説」(1958)には、「文の構造に関する文型」「文表現の意図に関する文型」の2種がかかげられている。宮城県教育研究所「基本文型とことばの指導」(1956)には、「(3)の『語の用法に関する文型』を中心とし、その中で、(1) (2)にも触れていこうとした。」と説明された文型がかかげられている。遠藤嘉基博士「文法」(講座「コトバの科学」7; 1958)に、「文型は、これを分ければ、表現の型と構成の型とになる。」として示されている見解も、「表現の種々の場合における文型」「文の構造に関する文型」という分け方に近い。

文型研究の初期のもので、岡本千万太郎氏「基礎文型の研究」(「国語教育」25の2・3 4・5; 1950のち「日本語教育と日本語問題」に収める。)が注目されるが、これは、「文型とゆうのは類型文において見いだされる文の型(形式)である。…(略)…文の型とは文の構造の形式であって、この形式は、文を構成する文節または文節群の相と格とによって決定せられる。」として、おもに助詞・助動詞を目じるしとして文型を立てようとしたものだが、これも、「文の構造に関する文型」に属すると見られるものであった。

この岡本千万太郎氏「基礎文型の研究」、青年文化協会「^{日本語}練習用 日本語基本文型」、また各種の日本語教科書やその学習指導書の類に示された日本語の文型の研究は、外国人への日本語教授のためという立場でなされたというのが実情であったが、近年、国語教育の上で文型への要求が高まってきて、その研究もあらわれている。前記のいくつかの文献のほかにも、近ごろ、いくつかわれわれの目に触れているものがある。(巻末の「参考文献」参照)

以上見てきたものに対して、性格の違うものをあげることができる。

三尾砂氏「国語法文章論」(1948)には、場と文との相関から分けた文の類型が示された。永野賢氏は、前記、岡本千万太郎氏「基礎文型の研究」を言語教育の方法としての文型の代表、三尾砂氏「国語法文章論」のものを文法論としての文型の代表とされた。(注1)

三上章氏「基本文型論」(「^{国語教育}のための国語講座」; 1958)では、コト・話手・相手・場面の組み合わせによって文の基本型を立てる立場が示された。これも文

法論としての文型に属すといえよう。

以上のように、従来、文型研究にはいろいろの立場があり、いろいろの種類
の文型が考えられた。これを、具体的な文の型をかかげて言語学習に役立てる
ことを目標とする教育的立場の文型研究と、ことばの体系を明らかにすること
をおもな目標とする文法論としての文型研究とに分けることはできるけれども
いずれも文の類型に関する文法的研究であるといえる。われわれの文型研究も
もちろんそれである。しかし、すでに述べたように、われわれは教育的立場の
文型研究を行なおうとするものでなく、基本的には、文法論としての文型研究
を行なおうとするものである。その立場で、文型をどうとらえるか、そのやり
方は従来の諸研究をも吟味した上で定めた。

さて、われわれは文型をどうとらえようとするか。いいかえれば、われわれ
は何を文型としてとらえようとするか。われわれは次のように考える。詠嘆・
質問・命令等、内的要素としての表現意図が、外的要素としての語句連結およ
びイントネーションと結合して、発話が成り立つ。そして、その語句連結は構
文の型によってささえられ、そのイントネーションはイントネーションの型に
もとづいて実現される。したがって、「発話において認められる社会習慣的特
徴」(服部四郎博士)に属するものとしての文は、表現意図と構文の型とイン
トネーションの型と語句とを要素とする。このような文の類型である文型は、
表現意図と構文の型(語句の上の特徴的形式を含めて)とイントネーションの
型との総合において、とらえられるものである。このような文型が文末部分を
中心としてとらえられるべきことは、日本語の性質上、まず自明のことであ
る。われわれの文型も、のちに具体的に示すように、文末を中心とするもの
となった。

なお、服部博士は、「文は、音調の型(及び強調の型)、文型・統合型、形式
に分析される。」^(註2)とされ、われわれは文型の概念をこれとことにするもので
ある。

なお、念のためにいえば、文型研究の立場で取り上げられるべきものは、一
般的表現(具体的発話における個別的表現に対立し、その抽象によって得ら

れるもの、あるいは、具体的発話の個別的表現がそれにもとづいて実現する原型)に属するものであることはいうまでもない。社会習慣の特徴としての文を取り上げて、その類型を見ようとするものだからである。表現意図はすなわち一般的表現意図、さらにいえば、一般的表現者の一般的表現意図であり、構文はすなわち一般的構文、つまり構文の型であり、イントネーションはすなわち一般的イントネーション、つまりイントネーションの型である。具体的発話の資料を操作するという方法を取るにしても、それは、文の実現として取り扱われるのである。すなわち、その発話のもつ構文・イントネーションは、型の実現と認められるものでなければならない。したがって、臨時的な不整表現のようなものは取り上げられない。(不整表現かどうかの区別の細かいところにはもちろん問題がある。)また、表現意図は、臨時的のものでなく、一般的のものが、そこにおいておさえられなければならない。たとえば、「ドウシテモ イクノカ」が、「行ってはならぬ」の意味で発せられたとしても、これを禁止表現として扱うことはできない。

以上のような立場を取るわれわれの文型研究が、従来の多くの文型研究に比べて特色づけられる点は、表現意図・構文の型・イントネーションの型の総合によって文型をとらえようとするところにあるといえる。特に、話しことばについて考えるわれわれは、イントネーションを一つの重要な要素として取り上げたが、従来の文型研究においては、このような音声的要素を取り上げて適切に位置づけたものをほとんど見なかった。

なお、現代日本語の話しことばの文型といっても、われわれは、共通語について考えている。

注 1. 永野賢「学校文法概説」

2. 服部四郎「ソシユールの langue と言語過程説」(「言語研究」第33号)

3 対話資料による文型研究の意義 話しことばの文型研究にあたって、われわれは、まず対話のことばを資料として進めることにした。

話しことばの態として、ふたり以上の言語主体のことばのやりとりという形で進行する対話と、ひとりの話し手が一方的に(多くの場合多数の)聞き手に向かってする話として進行する独話との別が、考えられる。両者は相異なる条

件の上に成り立つ言語行動で、その発話の上に、かなりの差異をもつものである。表現意図の種類の出方に相違があり、また、構文についてもイントネーションについても、相違がある。また、傾向として、独話においては、表現は安定した整った構造を取り、対話においては、不安定な整わない構造を取る。対話の表現には、不整や誤用、また、それらに近接する形が少なくない。また、一般に、対話の表現は、場面に依存することが多く、音声的表出に依存することが多く、身体的表出に依存することが多い。不整・誤用も、そのことに関係することが多い。そのため、表現意図と形式との対応関係がとらえにくかったり、ひいて、文の切れ目がとらえにくかったりして、資料操作上の困難も大きい。独話の表現は書きことばに近く、対話の表現は書きことばに遠いともいえる。こういう点からすれば、研究の手順としては、まず独話資料による研究に当たることが得策である。対話資料による研究を第2段の仕事とし、独話資料の操作によって得た経験を土台として対話資料を取り扱うという順序を取ることが能率的であると考えられる。なお、国語問題の対象領域としての重さを考えてときは、日常談話的なことばよりも、マス・コミュニケーションの独話のことばなどの方が、研究対象としての価値を大きくもつともいえよう。

しかし、一方、書きことばと対立する話しことばの特性が、独話よりも対話の上に、いっそう濃くあらわれるということからは、対話資料による研究は、話しことばの文法研究としても、最も大事な領域であるといわなければならない。安定し、整った表現である独話資料の方に、文法にのっとった発話はいっそうよく実現される、したがって、文型もとらえやすいということはたしかである。しかし、そこにもれて、対話資料の方に特徴的にあらわれる文型があるだろうということも、考えられる。われわれは、こういう意味の対話資料の価値を考えて、まずこれに取り組んだ。だが、そのために、作業速度は予想以上におそく、特別の努力をつづけながらも、当初の計画から、ある程度期限を延長せざるをえなかった。

ところで、このような対話資料にもとづく文型研究は、話しことばの文型研究として、どういう位置をもつかということについては、一応吟味しておく必要がある。対話が話しことばとしての性格を最も濃くもつものだとしても、対

話に話しことばの文型がすべてあらわれるとは、必ずしもいえない。独話の中に、対話にはあらわれない文型があらわれるかもしれない。対話に用いられる文型の種類と独話に用いられる文型の種類とを比較してみれば、両者の間に差違が見いだされるであろう。そういう意味で、対話資料によるわれわれのこの研究は、話しことばの文型研究の一つの段階だといわなければならない。そのため、われわれは、この作業に引きつづいて、独話資料による研究に入ろうとしているのである。

さらにまた、現代日本語の文型のためには、似たような論理で、書きことばについての研究が必要ともなろう。概念的には、話しことばの文型に対立させて、書きことばの文型を考えることができる。しかし、両者の領域はおそらく大部分が重なりあうものであろう。したがって、日本語の文型の研究のためには、書きことばの資料によって始める方が方法的にらくであり、能率的に成果が収められるだろうとも思われる。しかし、話しことばの領域内を明らかにすることが、現在の段階ではやはり重要な仕事だと、われわれは考える。「基本文型」の研究という立場になれば、また別である。

4 基本文型との関係 文型と基本文型とは、概念的に一応区別されている（たとえば、国語学会編「国語学辞典」、西尾・倉沢・滑川・飛田・増淵氏編「国語教育辞典」等に、別項目としてかけられている。）が、区別なく、文型あるいは基本文型と漠然と考えられていることもある。これは理由のあることだと思われる。文型とは、とにかく、文の類型あるいは典型というべきものであって、すでにそれは、具体的個別からの抽象によって得られたもの、あるいは、具体的個別の奥にひそむ原型的なものという性格をもつ。それを基本性というならば、基本性というものが、文型の本来の性格だといえよう。文法的構造の上の基本性が、文型の性格である。こういう見方からは、文型即基本文型で、文型とは基本文型以外のものでないともいえよう。われわれが研究結果として報告するものも、こういう意味では、一種の話しことばの基本文型となるのである。

だが、また別の見方からは、文型と基本文型とは別なものとして考え分けられる。すなわち、基本文型は文型の基本的なものと考えられる。たとえば、国

語学会編「国語学辞典」の「基本文型」の項（石黒修氏執筆）では、次のように説明されている。

一つの言語の中で最も普通に用いられる基本的な文型。……(略)……子供のかたことのように一部の語だけしか言われないとか、……(略)……親しい間などで、ぞんざいと言う時にはその中心となる語だけと言って、あとの語を省略することもあるが、これらに対して基準となる完全な文の型が基本文型である。また、口語と文語、話しことばと書きことばとか、話しことばの中でも、親しい間、改まった場合、男と女、子供など、書きことばでは文学的、論文的、説明的などの文や手紙によって、それに用いられる語やスタイルが違って、それらに共通する表現の型が基本文型である。……(略)……基本文型は調査に基き頻度によって、典型的な語の並べ方を求めたものである。……(略)……

文型をどのようにとらえようとするかによっても、基本文型の考え方は相違するところがあると思うが、いずれにせよ、われわれは今、文型の中の基本的なものというような意味の基本文型を直接とらえようとする立場にはいない。日本語の基本文型のためには、もちろん、対話資料による研究だけでは不十分である。むしろ対話資料などをあまり重視しないという立場で、別の行き方を取ることが考えられよう。また、基本的 ということは何によってきめるかこそ、重要な問題で、頻度調査によってきめるとすれば、そのための相当な規模の作業が必要となる。頻度のほかに考えられるべきこともあろう。しかし、今われわれはそういうことをいっさい考えていない。日本語の基本文型のためには、あらためて次の段階の計画を必要とする。しかし、われわれの今とらえる文型が、基本文型のための作業の、一つの有力な基盤になるであろうことは疑わない。頻度調査を行なうにせよ、何らかの心理的分析などの方法が考えられるにせよ、あるいは、教育の立場などから発達性の角度で見ようとするにせよ、われわれのとらえる研究を基盤にして研究調査の展開されることが期待される。

なお、話しことばの文型、話しことばの基本文型を、特に「話型」「基本話型」とよぶこともあるが、「文」の概念を話しことば・書きことばに共通に用いるからは、特にこのようによび分けることを、われわれはしない。

3. 研究方法・研究担当者

1 表現意図・構文・イントネーションの総合　すでに述べたように、表現意図・構文・イントネーションの総合において文型をとらえようとするのが、われわれの立場である。文は統一体である。これを、表現意図と、成分の統合型すなわち構文の型と、音調の型すなわちイントネーション（特に、主として文末でとらえられるイントネーション）の型とに分析する。統一体としての文は、この表現意図、構文の型、イントネーションの型の総合が語句形式を通してあらわれるところに、成立する。そういうものとしての文の類型をとらえようとするのが、われわれの立場であり、われわれの方法の基本である。従来の文型研究においては、この総合的結合の一部分が注記のような形で示されているものがあつた。（たとえば、青年文化協会「日本語練習用日本語基本文型」）われわれの文のとらえ方からすると、この総合的結合をとらえることが、仕事の目標になるのである。

仕事の進め方としては、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの体系をまず追究して、その結果の上で、総合的結合をとらえる方向に向かうことにした。すなわち、まず、表現意図・構文・イントネーションの三つの面の追究を基礎的研究として、これに労力と時間とを大きく費やした。

表現意図・構文・イントネーションのそれぞれに関する研究は、従来十分に開拓されているとはいえない。表現意図に関しては、これまで内外の学者の試みもごく基本的な分析の程度を出ず、その分類も大別にとどまっている。日本語について文の性質上の種類として一般に行われてきたものも、必ずしも十分なものとはいえず、事実の処理にあたっても有力なものではない。構文に関しては研究が少なくないが、文法論の基盤の相違に従って異なる整理のしかたが示され、また、それぞれに批判がある。ことに話しことばの構文のためには、この際、方法についての十分な吟味が必要である。イントネーションについては、従来、その規定のしかたもさまざまであり、型としての把握も不十分であつた。極端な言い方をすれば、観察はあつても、体系的研究はまだ始められていないといえる状況である。このような状況のため、われわれはこれらの根本

的な諸問題に取り組むことを必要とし、それらを解決し、あるいはそれらに関するわれわれの立場を限定した上で、作業を進めなければならなかった。すなわち、基礎的な方法論的な段階のために努力を注がなければならなかった。

基礎的研究としての表現意図・構文・イントネーションの研究、および総合的文型の立て方については、Ⅱ・Ⅲの章で、それぞれ述べられる。

2 録音資料・内省・実験 われわれは、この研究のために、各種の対話のことばを資料とした。だが、われわれは現実の発話の資料を分析操作してその結果を報告しようとしたものではない。いいかえれば、われわれの行なおうとしたものは実態調査ではない。われわれのとらえようとする文型は、文法体系に属するものであって、それは現実の発話の資料からそのまま導き出されるものではない。文法の研究においてとらえられるべきものは、社会の共通的な言語意識だといっている。現実の発話は、もちろん、言語意識に基づいて実現されるものであるが、そこに、種々の事情に由来するゆれやずれも少なくない。まず、特殊な場合、個人的なくせとしてのかたよりもありうる。すなわち、非共通的な個人の言語意識というものがありうる。これは捨てられなければならない。次に、種々の条件による臨時的な誤発・混線・不足・重複等の、ことばの不整がある。それらは、大体、言語意識からずれて出たもので、文型からはずれたものとされなければならない。また、共通語の文型を求める立場からは方言や各種の集団語や幼児語などの中にある、特殊な構造もえり分けられなければならない。われわれが発話資料を文型研究のために使うのは、それに、共通的な言語意識の反映を期待するからにほかならない。したがって、資料の上に、上記のような取捨選別が当然必要となる。取捨選別は、共通的な言語意識に照らしてなされる。方法的には、共通的な言語意識を分有しているはずの作業者の言語意識によって検定されることになる。すなわち、われわれは自分たちの言語意識をよりどころとし、それへの照合、すなわち、内省によって、資料に取捨選別を加えた。しかし、一方、共通的な言語意識といっても、そのうちかなりのゆれがある。一人あるいは条件のかたよった少数者が判別するということには、時に危険もある。実は、根本的にいって、発話資料を用いるということは、研究者の片よった言語意識による結論を防ぎ、文法・文型の体系

を客観性のあるものにするための方法である。したがって、その資料を、研究者の言語意識にもとづく取捨選別を加えた上で取り扱うということは、資料と研究者の言語意識との相互吟味によって、客観的なものをとらえようとするものである。その際、なお、資料を判別する研究者の目にかたよりがあってはならないと警戒することは必要で、そのために、判別の目の視野を広くしなければならない。そこで、われわれは、資料の取捨選別に当たっては、特に問題となる例については、研究室内の共同吟味によって処理した。また、研究所内での小調査を行なって参考にしたものもある。研究所内での、約60名を対象とした小調査としては、次のようなものを行なった。

(1)「ガ」「ヲ」等の格助詞の使用が問題になる場合。——「ソナナ カッコウデ
千メートルグライヲ 歩イタヨ」「時間ハ ドレグライガ カカッタノカネ」等の文例について、へんか、へんでないかをたずねた。

(2) 対象語格を表わす「ガ」と「ヲ」の使い方が問題になる場合。——「ワタシハ
リンゴヲ スキデス」「ワタシガ 水ガ 飲ミタイデス」等の文例について、へんか、へんでないかをたずねた。

(詳しくは「構文」の章にゆずる。)

共通的な言語意識からはずれるものの中に、変化の傾向を示していると思われるものなどが、しばしばある。もちろん、興味のある事実であるが、われわれの立場では、これらはすべて捨てられた。

言語意識への照合によって選別すると同時に、われわれは、われわれの採るところの文法理論の体系によって選別を加えたといえる。資料の取捨選別には文の認定がからみ、結局、文と認定される資格をもつ部分だけを切り取って、他を捨てたのであるが、文の認定は、一方、言語意識への照合により、一方、われわれの採るところの文法理論の体系によるものであった。その詳細については、「文の認定について」の章で述べられる。

われわれは各種の対話の発話資料を取り扱ったが、文型をとらえるための資料として完全、十分なものをそこに期待するということは、はじめからしなかった。発話資料はあくまでも、文型をとらえるための手がかりである。われわれは、発話資料を使いながら、社会の言語意識の分有と考えられる自己の言語意識にもとづき、一方、われわれの採るところの文法理論の体系によって処理する仕事を進めた。こういう基本態度を取ったため、資料の収集においても、

特定の観点から少数の資料を選定することにした。なお、資料の具体的な内容とその操作についての詳細は、後にゆずる。

われわれは、研究の進行の上である種の実験的調査を行なった。その一つは一定の条件（一定の場面と一定の素材）を与えて発話させ、どのような文があらわれるかを見るものであった。これを、「表現意図に応ずる発話の実験的調査」とよぶことにした。もう一つは、一定の文的形式を与え、種々の状況（意図・情緒など）を指定して発話させ、どのようにイントネーションが実現されるかを見るものであった。これらはいずれも、対話資料の補充あるいは裏づけのためのものであった。これらについても、詳細は後にゆずる。

また、イントネーションの把握分析のために、われわれはピッチレコーダーを用いた。すなわち、声の高低変化を視覚映像として定着させたものを、イントネーション把握のための参考資料として用いたのである。

しかし、ここでわれわれは、このような機械による音声の分析作業について考え方をはっきりさせておかなければならない。

ソナグラフやピッチレコーダーなどの機械によって、われわれは、音声の高低・強弱・長短などを（ソナグラフによれば、^{ねいろ}音色の相違、たとえば、「ア」と「イ」のちがいを）図形化することができる。すなわち、聴覚的対象の視覚的対象に置きかえられたものをもつことができる。このことは、研究的操作のためにひじょうに大きな便益であることはいうまでもない。しかし、この視覚的対象に置きかえられたものは、純粋な物理的把握によるものであって、その中に、聴覚的把握とだいたい対応するものもあれば、対応しないものもある。高低変化などはだいたい対応するが、強弱変化などはいちじるしくくい違うところがある。すなわち、音声学的強さと物理学的強さとの間には、かなりのずれがあるのである。このような要素に関しては、もちろん、聴覚的把握の補助あるいは裏づけなどのために物理的把握による材料を用いるということは成り立たない。（音声研究にもさまざまな方向・部面があるので、音声の強弱変化についても、物理的把握そのものの有用であるところは、大いにある

にちがいない。たとえば、通信工学のための音声分析等、近時発達のようやく著しい方面には、われわれの関与しえない面で、強弱変化の機械的分析も大いに意味をもつものがあるであろう。) イントネーションやアクセントのような高低変化の要素に関しては、聴覚的把握の補助あるいは裏づけとして、機械的分析は有用である。

しかし、これについても注意すべきことがある。われわれが今目ざしているものは、音調上の一種の社会習慣的型としてのイントネーションである。それを文法的要素としてとらえようとするのである。もともと、具体的発話における、聴覚的にとらえられる範囲の高低変化は、それ自体きわめて微細で、その微細な変化が表現の細かな別に対応するところもあるのであるが、それを、われわれの目的のためには、どの程度にか捨象して、イントネーションの型をとられようとしているのである。(ここに、文法研究の立場におけるイントネーション研究の核心がある。) こういう立場では、機械的分析によって、聴覚的にとらえられるよりもいっそう細かく高低変化をとらえるということは、必要がないといっている。現在のわれわれの研究は、大体こういう立場にある。音声学的な立場で、細かい変化を厳密に追究するために機械的分析の方法を用いるということも、もちろん意味のある仕事であると思うが、今は、われわれは、それをしようとしていない。したがって、われわれは、機械による分析を、聴覚的分析のためのあくまでも補助手段と考えて、作業を行なった。一つには、操作のしやすい、空間的に定着された図形を手がかりにして、イントネーションをとらえる。また一つには、聴覚的な分析の能力の訓練のために、機械的分析を利用する。というのは、図形と照合しながら聞くという作業をくり返すことは、作業者の耳を鋭くするのにかなり役立つのである。(前記のような意味での「必要以上」の音調変化をとらえる能力も、研究者の能力としてはもちろん無意味のものでなく、必要な変化を十全にとらえるためには、特別なくわしい把握の能力をもつことが望ましい。)

われわれは、以上のような考え方で、機械的分析をイントネーション研究のための補助的方法として用いたのであるが、その作業の詳細については、「イントネーション」の章にゆずる。

3 研究担当者 以上の方法による研究作業を行ったのが、第1研究部話しことば研究室の大石初太郎・飯豊毅一・宮地裕・吉沢典男の4名である。特に基礎的研究は、表現意図を宮地、構文を飯豊、イントネーションを吉沢が担当し、随時、問題を全体の協議討議にかけて進めた。全体の進行運営には、主として大石が当たった。なお、この研究の間に、木積きよ子(2年、特に表現意図)・染谷佳子(5か月)・栗原徳子(7か月)・大平富美子(1年、特に構文)・泉喜与子(2年、特に表現意図)・吉村香苗(2年、特に構文)らの研究補助員が、研究を助けた。また、文字化資料の訂補・カード化等のために、臨時の作業者を数回に及んで使った。

4. 作業経過

1 年次経過 この研究は、昭和31年度に始められて、昭和34年度前半に、だいたい完了した。この間の年次経過は、およそ次のとおりである。

- 昭和31年度 研究方針の樹立、作業計画の立案
関係する研究文献の検討
表現意図の研究(書きことば資料や少量の対話資料による準備的研究等)
構文の研究(書きことば資料による準備的研究等)
イントネーションの研究(演劇のことばについての観察、実験的調査等)
対話資料の録音収集、その文字化
- 昭和32年度 対話資料の補充のための録音収集、その文字化、文字化資料の整理、そのカード化
表現意図に応ずる発話の実験的調査
表現意図の研究(対話資料を分析しながら)
構文の研究(対話資料を分析しながら)
イントネーションの研究(対話資料の分析、および実験資料の機械的分析によって)
- 昭和33年度 文字化資料の再訂補
文の切り方の検討——方針決定・資料処理
表現意図の研究の続行
構文の研究の続行(構文に関する小調査も)
イントネーションの研究の続行(実験的調査)
独話資料の録音収集、その文字化・整理・カード化
- 昭和34年度 表現意図の研究のまとめ
構文の研究のまとめ(構文に関する小調査も)

イントネーションの研究のまとめ
総合的文型の試み
報告書記述

2 いくつかの作業についての説明 上記のうち、文の切り方、表現意図の研究、構文の研究、イントネーションの研究、総合的文型の試み、については、それぞれ、別の章で詳しく述べられる。ここには、それらのための準備的作業や側面的作業に関して、主として方法や経過の報告という立場で述べる。

2・1 研究文献の検討 文型・表現意図・構文・イントネーションに関係する従来の研究文献を検討して、細かい研究計画をきめたり、研究方法を立てたりするための参考とした。最初に文献のリストを作ったが、その後も逐次追加された。それらは、巻末の「参考文献」に示すとおりである。

2・2 書きことば資料等による準備的研究 表現意図および構文に関しては、はじめに書きことばの資料によって考えて、あらましの見通しを得ようとした。現実の発話の資料の取り扱い、なかなかめんどろな事情があって、簡単でない。第一に、表現の不整が少なくない。次に、意味（表現意図を含めて）とことばの形との対応のずれることもある。さらに、現実の発話の表現は場面に依存することが多く、発表の立場も理解の立場も、場面に制約されるところが大きい。したがって、個別性の強い表現になる。このような事情のために、発話資料に対するときは、不整やずれの選別ということが必要になり、また、場面との関連、表現の個別性という点に特に注意をはらうが必要になる。個別性を捨象して一般的表現をとらえようとする立場では、その用意をもって臨まなければならない。そこで、初めから、このような条件をもつ発話資料について作業するよりも、そうした条件の単純な書きことばの資料によってだいたいの見通しを得るような作業を行なうことが、得策である。非能率的な混乱を避けることができる。こういう考え方で、表現意図と構文については、書きことば資料をおもに使って、準備的研究にはいった。具体的に述べると、次のとおりである。

表現意図の研究のためには、次のものを扱った。

日本文芸家協会編	創作代表選集	第2～16巻（第4巻欠）
同	戯曲代表選集	第1～4巻

のうちの会話文から、対話単位 700 余、これを文に直して 2200 余文。

雑誌「言語生活」の「録音器」欄（話しことばを文字化したもの）、話しことば研究室保管の対話録音テープから 700 余文。

構文の研究のためには、次のものを扱った。

柳田国男編 新しい国語（小学校国語教科書）

山本有三編 国語（同上）

長沼直兄編 改訂標準日本語読本（外国人用日本語教科書）

から、会話文の中の 2100 余文、地の文の中の 1500 余文。

以上の表現意図と構文とのそれぞれのために採った資料は、相互に利用することもあった。

この作業によって、表現意図については、理論的考察にもとづく分類に対する裏づけがなされ、表現意図の第 1 次的な分類・体系を得た。構文についても理論的考察と相まって、分析方法の第 1 次案を得た。

2・3 イントネーションの実験的調査 イントネーションについては、最初に演劇のせりふや日常的談話のこゝばの観察によって考察を進め、次いで、次のような第 1 回の実験的調査を行った。

被験者 劇団「葦」の俳優男女各 3 名。すべて 20～30 歳台で、東京生まれ、東京育ち。

（俳優を被験者に選んだのは、もちろん、自然な音声表現を実現するように演じてもらうためであった。結果において、やや誇張された、それだけに、意図あるいは情緒に応じた音声表現の典型的な実現が得られた。のちに別の機会に、ラジオのアナウンサーを被験者として似た実験を試みたことがあるが、これは、俳優のようにうまくはいかなかった。）

実験テキスト 省略（「イントネーション」の章参照）

この実験は、われわれのイントネーション研究の初期段階で行なわれたもので、準備的研究に属するものであった。すなわち、イントネーションをあらかじめはっきり限定した上で、そのあらわれ方を見ようとしたものではなく、まず大まかにイントネーションを考えて、その実現を予期すると同時に、意図や情緒に応ずる各種の音声的要素のあらわれを見て、それらとの関連においてイントネーションをどう限定するかを考えようとしたものであった。結果において、複雑な総合的な音声表現を分析することの容易でないことを考えさせられ

たが、イントネーションについて考え方を進めることができ、以後のイントネーションの研究調査の方法は、この調査の反省にもとづいて立てられた。またこの実験で得た資料は、整理選択の上、ピッチレコーダーにかけて分析され、イントネーション研究のために利用された。

第2回の実験的調査は、俳優養成所の生徒男女各2名を被験者とし、脚本の実演によって行なった。その結果および反省については、「イントネーション」の章で述べられる。

2・4 表現意図に於する発話の実験的調査 被験者に一定の表現意図などの条件を与えて発話させ、どのような文があらわれるかを見たものである。これは主として、次のような理由によって企てられた。対話資料を一応整理してみた結果、表現意図の分類によってみて、文例の多い部分と文例の少ない部分とがある。資料の文例の少ない部分については、ねらいうち的に資料を補充する努力も払われたが、それと同時に、意図あるいは場面を与えて発話させ、文例を得るということをも試みたのである。すなわち、この調査である。なおまた、同一の意図に対して違ったことばのあらわれることが予想されるが、その実際をたしかめて、われわれの研究作業の進め方の参考にしようとした。以上のような意味の補助作業として、この実験的調査がなされた。具体的内容は、あまし次のとおりである。

被験者 劇団「葦」の若手俳優ないし研究生男女各3名。すべて東京生まれ、東京育ち。

(被験者を劇関係の人を選んだのは、劇のせりふとして対話を演ずることに馴れた人たちは、要求された条件に沿ってものを言うことも、一般人に比べて容易だろうと考えたからである。実験後、被験者の感想としては、ひとしく、やりにくかったという。ことばがせりふとして与えられている劇の場合と違うからである。劇関係の人たちをこういう実験の被験者として選んだことの効果がどれほどあったかは、よくわからない。)

調査内容 面接録音調査と行動発話録音調査とを中心とし、家庭取材を付随させた。6名の被調査者に対して同一の調査をした。

1. 面接録音調査(被調査者に面接して、質問その他の対話を行ない、録音する。)次の3項のうち、(3)が中心である。

- (1) あいさつ・雑談など。
- (2) 問答による身上調査——質問形式は一定せず、自由対話による。
- (3) 質問10項——下掲の質問によって答えさせる。(うち、2項を例示する。)

○ ある朝のことです。出勤の家人(登校の弟妹)が、起きなければならない時刻が来ました。あなたは何とって起こしますか。

一度起こしても、また、寝てしまったようです。二度目に起こすとき、あなたは何とって起こしますか。

○ 自宅から外出しようとするあなたは、家に近いとりつけの肉屋にたち寄って、豚肉の上を100匁と牛のひき肉50匁を、あとで、家にとどけておいてもらいたいということをたのみます。そのとき、このまえもらった豚肉は、アブラ身が多すぎて、まずかったので、そんなことではこまるともんくをつけ、そんなことがないようにしてほしいと注意します。これらのことを、あなたはどのように言いますか。

2. 行動発話録音調査(発話を要する行動をさせ、録音する。)

次の3項のうち、(3)が中心である。

- (1) 用事伝言——(略)
- (2) 時刻知らせ——研究室へ行って時刻をたずね、電話で会議室へ知らせる。
- (3) 電話かけ——下掲のような用件で電話をかけさせ、テーブコーダー電話用ピックアップを使って録音する。あらかじめ電話先に依頼して適宜応接してもらうようにしたり、交換手と連絡して研究室につなげて、室員が電話先をよそおって応接したりした。(3件のうち、1件を例示する。)

○ 次に「清川」といううどん屋へ注文してください。

当方は国語研究所大会議室です。

注文するものは、

たぬきうどん	3つ	きつねうどん	2つ
たぬきそば	1つ	なべやき(うどん)	2つ
たまごどんぶり	1つ		

あと30分したら届けてほしいというように言ってください。(代金はあと

ばらいです。)なにかが、ないとか何とか言ったら、あなたの判断で、似よったものを適宜にとりよせてください。

3. 家庭取材——被験者の家庭内での日常談話のうち、次のようなものを手書きによって記録することを求めた。

- (1) 頼み・願い・いいつけなど、要求するところのある表現。
- (2) いいあい・けんかのような場面での表現。
- (3) たしなめ・ことなどの表現。

時間は2時間ずつ2回、計4時間程度。

発話者の言語環境と場面の説明をつけて提出。

(要求は、発話を忠実に記録することであったが、提出されたものを見ると、記録者によって多少変容されたと察せられるものが多かった。変容の理由は、一般的なこととして二つ考えられる。第一は、発話の進行に手書きが追いつきかねること。第二は、ありのままの発話から無意味あるいはそれに近い部分を捨てたり、不整表現を整理して受け取ったりするという言語生活者から、突然、臨時に機械的レコーダーになることのむずかしいこと。こうして、この調査では、十分に信頼できる結果が得られなかった。)

2・5 独話資料の収集 話しことばとしての性格の最も濃い領域として、われわれは、まず対話を取り上げた。しかし、話しことばを全体として考えれば、もちろん、対話は限定された領域である。「話しことばの文型」というためには、したがって、対話だけを資料とするのでは不十分であり、独話の資料を取り扱うことも必要である。そこで、われわれは、昭和33年度には、とりあえず対話の文型と独話の文型との対比を目標として、独話資料の録音収集・文字化・カード化等を進めた。しかし、その後、作業計画を改めて、対話資料による研究を先にまとめ上げることにし、独話資料の作業は一時中止した。

3 今後の予定 ある程度、独話資料を整理して、見通しも得ている。対話資料による研究をまとめたあと、引きつづき独話資料による研究を進めて、話しことばの文型を明らかにしようと考えている。なお、独話資料について研究を進める際は、対話資料による研究の際にとどかなかった部面にも及びたい。ある種の文連結型、句と句との関係等が、その問題として浮かんでいる。総合的文型についても、さらに立て方を進展させたい。なお、構文に関しては、い

っそう詳しい構造について、一応調査ができていて、この報告書の記述から省かれるところがある。これも次の機会にまとめたたい。

5. 資料

1 資料一覧 われわれが取り扱った対話資料は下記のとおりである。

リール No.	略 称	時 間	話 し 手	話 体	場面・内容など
1	ことばの研究室(1)	30分	男7, 女10 (男1, 女2)	デス	NHK放送—現場録音と解説—(A)易者の話, (B)デパートめぐり
2	ことばの研究室(2)	115分	男29, 女11 (男4, 女8)	デス	同上 (A)就職試験, (B)女の社交場, (C)新聞記者のことば, (D)まねかざる客, (E)受付風景, (F)民衆と警官
3	三人の女性	*28分55秒	女10	ダ・デス	友人どうしの, および友人の家族との雑談
4	K高校生	30分	男3, 女3	ダ	学友どうしの雑談
5	新聞人二十のとびら	*26分30秒	男7, (女1)	デス	NHK放送—クイズ—
6	歌手二十のとびら	30分	男3, 女3 (女1)	デス	同 上
7	私はだれでしょう	30分	男6, 女6	デス	同 上
8	研究室の電話(1)	60分	男14, 女3 (女1)	デス	研究室での電話応対16種
9	石野家	30分	男1, 女3 (男1, 女1)	ダ・デス	家族の雑談
10	三人の青年	30分	男3	ダ・デス	同僚の雑談
11	街頭録音	40分	男8, 女5	デス	NHK放送—現場録音—(A)はやりことばについて(B)新内閣にのぞむ
12	職安女子部	*35分59秒	男1, 女8	デス	職業安定所職員と求職者との面接
13	職安男子部	30分	男5	デス	同 上
14	絵画館のおばさん	30分	男3, 女5	ダ・デス	掃除婦たちと国研所員との雑談
15	荒井美髪店	30分	女5 (男1, 女4)	デス	美髪店主と客との雑談
16	三鷹学生(1)	*34分45秒	男4 (女2)	ダ	友人どうしの雑談

18	I 夫妻	30分	男 1, 女 1	デス	夫妻の雑談
19	N 家座談	30分	男 2 (男 2, 女 2)	ダ・デス	近隣・知人の雑談
20	ことばの研究室(3)	60分	男 15, 女 6	ダ・デス	NHK放送 (A)東京の女学生, (B)東京語の今昔, (C)声と体格
21	葦 雑談(1)	30分	男 3	ダ・デス	新劇俳優たちの雑談
22	葦 雑談(2)	*31分55秒	男 3, 女 2	ダ・デス	同上
23	S 女子大生	30分	女 8	デス	学友どうしの雑談
24	友の会	30分	女 5	デス	家庭主婦の雑談
25	無尽の会	30分	女 6	デス	同上
26	浮世床(1)	30分	男 3 (男 2)	デス	理髪店主人と客との雑談
27	結婚式申込み(1)	*32分45秒	男 4, 女 3 (男 3)	デス	式場申込受付係の客との応待
28	接客用語について	30分	男 5, 女 4	デス	デパート店員と国研所員との対話
40	松根屋	30分	男 6, 女 1	ダ	店主と古い使用人との雑談
41	公聴部陳情	30分	男 3, 女 1	デス	都公聴部への陳情者と係員との対話 (A)土地種目変更について, (B)騒音について
42	警視庁補導	60分	男 12, 女 2 (男 3, 女 1)	ダ・デス	警視庁補導官の街頭少年補導 (A)家出少年, (B)偽学生, (C)浅草街頭補導
44	U 氏談	30分	男 3, 女 4	ダ・デス	U 氏の談話およびその家族の雑談
45	独身者	30分	男 2, 女 3	ダ・デス	独身者の座談会
46	タクシー苦情	30分	男 6, 女 2	デス	タクシー指導委員会への苦情の電話の応対
47	歯科大学生	30分	男 2	ダ	学友どうしの雑談
48	麻布主婦	30分	女 4	ダ	家庭主婦の雑談
49	かまくら主婦	30分	女 2	ダ・デス	同上
50	研究室の電話(2)	30分	男 9, 女 3	デス	研究室での電話応待 8 種
52	少年印刷工	30分	男 5	ダ	少年工員の雑談

53	養老院	30分	男 2, 女 2	デス	養老院での老人の雑談
54	下町家庭	60分	男 4, 女 3	ダ・(デス)	家族の雑談
55	組合団交	60分	男 5 (男 5～6)	ダ・(デス)	官公労組と当局との団体交渉
56	ラジオ家庭欄	38分	男 1, 女 9 (女 3)	デス	NHK放送—対談・現地ルポ— (A)便利帳, (B)着物の話, (C)楽しむ奥さんたち
57	朝の訪問	30分	男 3, 女 1	デス	NHK放送—対談—
58	井戸端	30分	男 1, 女 5	ダ・デス	共同洗濯場での主婦たちの雑談
59	ラジオ家族会議	53分	男 1, 女 2	デス	NHK放送—仮設家族の座談会—
77	質問 10 項応答(1)	60分	男 3, 女 2	デス	研究室での面接録音調査
80	同 上(2)	15分	女 1, 男 1	デス	同 上

注 1. 「時間」は、* をつけたもの以外は、およその時間を示した。なお、示されているものは録音時間であって、発話時間ではない。

2. 「話し手」は、男女別の数だけを示した。() の中には、発言量のごく少ないものの数である。

3. 「話体」は、だいたいを示した。デゴザイマスはデスに含めた。

4. 「場面・内容など」は大まかな注記である。

以上の資料は、全体として、各種職業・各種年齢層・男女の話し手を含み、各種の場面のものにわたって、なるべく多様な文がとらえられるように、選んだものである。

2 共通資料と非共通資料 以上のうち、No. 3 三人の女性、No. 5 新聞人二十のとびら、No.12 職安女子部、No.16 三鷹学生、No.22 “葦” 雑談(2)、No. 27 結婚式申込み の6種が共通資料で、他が非共通資料である。

共通資料とは、基礎的研究としての表現意図・構文・イントネーションの三つの作業で、共通に取り扱った資料である。研究の進行途上で、三つの作業の相互の関連を明らかにし、連絡を保つためのよりどころとなり、さらに、総合的な文型のための中心資料となったものである。総合的文型の文例は、共通資料の中から選ばれた。

共通資料は、選ばれた資料の中からさらに、全体として、話し手の性・年齢

や話体などの上で片よりのないように、また、場面・内容などに多様性もち、なるべく各種の表現意図にもとづく各種の形をもつ文がとらえられるように、という配慮で選んだものである。

共通資料のほかのもの、すなわち非共通資料は、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれに単独に、あるいは2者に共通に取り扱われた資料である。それぞれ文についての着眼点が違うので、共通資料の不足を補うものが別別に要求されたのである。

共通資料について、その大体の内容を見るために、ある中間的な整理の段階でカード枚数（文の数）を数えてみたところをかかげる。

		詠嘆	判叙	要求	応答	問題 カード	計
No. 3	三人の女性	43	284	154	245	51	777
No. 5	新聞人二十のとびら	82	299	323	196	40	940
No. 12	職安女子部	2	198	277	139	76	692
No. 16	三鷹学生	20	448	169	169	111	917
No. 22	“葦” 雑談	14	400	151	175	84	824
No. 27	結婚式申込み	3	95	81	100	44	323

この表は、対話における、表現意図の別から見た文の分布の大体の傾向を示すものでもある。

3 資料の処理 まずテープ録音によって資料を収集し、これを文字化し、さらにカード化して取り扱うようにしたのであるが、その間の作業について述べる。

3・1 録音収集 資料の一覧表にも示したように、NHK の放送のものがあ、これはほとんど NHK からその録音テープを借用してリプリントした。その他は、話しことば研究室でこれまでに録音収集してあったもの、他から話しことば研究室にゆずられて保管されていたもの、また、われわれが、新しく録音したものである。選択に当たっては、場面や話題などから推してなるべく多様な文型のとらえられそうなものをねらった。対話者のうちのある者には録音されていることがわかっていないという程度の、かくし録音も少数あるが、大部分が、話し手にわかっている状態で録音したものである。わかっている話

し手においては、発話にある程度制約の加えられることが考えられる。それは文型の出方に影響する。たとえば、興奮した場合に出るある種の文型はとらえにくい。われわれは、そのため、特に喧嘩その他、感情的な場面の録音をもねらったが、これはきわめて困難であった。

3・2 文字化と訂補 録音資料の文字化をカナタイプの専門業者^(注)に依頼した。この専門業者が会議の速記録などを作る場合のやり方とちがった、忠実な文字化を、われわれは注文した。語のおきかえ、語形の修正、語順の変更、語の脱洩等は絶対に許されない。音声の不明瞭な箇所を推定で埋めるということも、じゅうぶん慎重になされなければならない。相づちの応答詞や遊びことばの類も、もらしてはならない。このようなことを厳重に注文した。業者としては誠意をもって仕事をしてくれたことを、われわれは認めた。しかもなお、結果においては不十分のところが多く、われわれは自分の手でこれに厳密な訂補を加える作業を行なわざるをえなかった。これは作業量として非常に大きなものとなり、予定をかなり狂わせた。32年度に一応訂補を行なったが、33年度に性能のいいレシーバー（藤木電器KK製ダイナミック・レシーバー‘Elega’）を用いて再訂補を行なったが、資料作業のほとんど最後まで、その仕事が尾を引いた。

正確な文字化の困難に、分析すると、二つの面がある。はやい速度で、しばしば予測されない形やくずれた形で出てくることばを、ありのままにおさえることのやりにくさと、不明瞭な音声の聞き取りのむずかしさとである。前者は、しかし、時間をかけて忠実に作業するということで克服できる。後者はなかなか手ごわい。やや不明瞭な部分については、同一材料が違う作業者によって別のものに聞き取られたり、時間を隔てて聞くと、同一作業者に同一材料が別のものに聞き取られたりすることが少なくない。そう思って聞けばそうも聞こえるということもある。要するに、作業者の生理的条件や心理的条件によって、かなり聞き取りが左右されるのである。こういう状況のため、聴取困難で切り捨てざるをえない部分があり、また、推定によってきめたところがあった。推定は、ふたり以上が何回か聞き返してみても一致したところによった。性能のいいレシーバーで聞けば、静かな環境で録音器の音を外に流して聞くより

も、はるかに明瞭に聞き取られる。だが、それでもなお、これをなまのことはの聞き取りに比べれば、聞き取りの可能性はどれほどか落ちると思われる。それは、一つには、われわれが使う録音器の録音・再生の能力の限界による。また一つには、対話の場面に居あわせて話し手や場面に属する具体的な諸条件と照合してことばをとらえることができるとできないとの相違であろう。対話の場面に居あわせて聞く時は聞き取りやすいというのは、話し手や場面に属する条件と照合することにより、推定が行なわれやすいのである。(もっとも、このことは、対話の場面に居あわせて聞く時は「わかりやすい」ということと全く同じではない。生活的な立場では、一般に、ことばの意味を聞き取ろうとする。その際は、ことばの形の細部まで一様に厳密に聞き取ろうという態度をもたない。音声不明瞭で聞き取れない部分があっても問題にならないところがある。こういう意味のわかりやすさと、ことばの形の聞き取りやすさとは別である。)とにかく、日常的な対話などの録音資料を取り扱う際に、こういう制約のあることはやむをえない。

注 録音タイプ速記社その他。同社は県議会の会議などを録音し、それをカナタイプによって文字化し、会議録を作る仕事などを行っている。

3・3 文切りと文の選別 訂補を施して資料台帳を作成した上で、文に切る作業を行ない、その文に選別を加えた上で、文ごとにカードに書き取った。(ただし、カード化したのちにも、訂補は加えられ、また、その結果、文の切り取り方を変更したところも少なくなかった。)

文切りは、「文の認定について」の章で述べるところの見方にもとづいてなされた。どのように文を切り取ったかの具体的なことは、ここにはいっさい省略する。作業は、必要に応じて録音テープを聞きながら、台帳の上に文切りをマークしていくというやり方で進めた。文を切り取るに当たって、音声的なあらわれと照合しなければならない場合が多く、音声的なあらわれに決定をゆだねなければならない場合もある。その音声的なあらわれというものは、イントネーションと間をとを主とするが、そのほかにも、声の強弱や長短、また音色などの要素も加わり、全体として印象的にとらえられるものが、しばしば重要視される。

以上の作業に、さらにイントネーション記号の記入が加えられて、資料台帳が作り上げられた。

文の選別は、すでに述べたように、われわれの言語意識に照らし、われわれの採るところの文法理論の体系に照らして、正常な文と認められるものだけを取り上げるという選別である。具体的には、聞き取り困難のための不完全形や不整表現や中絶、すなわち他の発言にさえぎられなどしての言いさし切れなどを捨てることである。省略の表現もまた、カード化ののちに、理論的検討の結果、対象外とすることになった。それについては「文の認定について」の章で述べられる。(中絶と省略との別は、一般論的にも、具体例についても、必ずしも明確ではない。)

省略や不整表現を取り上げる話しことばの研究は、もちろんありうるであろう。しかし、あくまでも抽象的の典型をとらえようとする文型研究は、立場が違う。だがまた、話しことばには話しことば独特の、それなりに完全とされるべき形のあることを認めなければならない。それはぜひとも拾い上げられなければならない。不整表現を捨てるという場合にも、書きことばを扱う基準をもって判別しようとする、話しことば独特の形を無視するという不当を犯さぬともかぎらない。そうした警戒をもちながら、われわれは、不整表現を捨てた。話しことば独特の形ともいうべきものを含んで、どういふものが残されたか、どう解釈・整理されたかは、「文の認定について」の章で述べられる。

次に、不整表現の例をかかげる。

- (1) ○「アレガネー ケイキガ ヨク ナッテサー ソレデネ ソコニネー アノー ケッキョクネ ソノ ヒトモネ ダンナサンガ シンジャッタ、 ソコへ ヒッコ シンタ トタンニ」 <あれがねえ 景気が 良くなつてさー それでね そこにねえ あのー 結局ね その 人もね だんなさんが 死んじゃった、 そこへ ひっ越した 途端に>(22-15-18)(注)
- (2) ○「ソノ ウエへ ウチガ デキテ ドウデモ コウ ナッテ アア ナッテッテ モウ ナガイ……フルイダロウ ムカシノネ」<その 上へ うちが 出来て どうでも こう なつて ああ なつてつて もう 長い……古いだろう 昔のね>(22-14-11)
- (3) ○「ダケド ニンゲン ナンデスヨ カオラ パット ミタ トキニ ソパカス シカ モウ メニ ツカナイト イウヨウナ アレネー ヤッパリ ワタシミタイ

ニサ バット<笑>ビジンダナト オモウヨウニ<笑>ソバカスナドハ ソノ ツギニ ナルヨウニ……」 <だけど 人間 なんですよ 顔を ぱっと 見た 時に そばかすしか もう 目に つかないと いうような あれねえ やっぱり 私みたいにさ ぱっと 美人だなと 思うように そばかすなどは その 次になるように……>(22-22-8)

- (4) ○「ダケドサー オレガネ アノー オレノ トモダチノ カケマージャンノ オーソリティートサ キイタンダヨ キノウ アッタカラ」 <だけどさー おれがね あのー おれの 友だちの かけマージャンの オーソリティーとさ きいたんだよ きのう 会ったから>(16-1-10)
- (5) ○「ソコノー ミボウジンヲネ ダレカノ ショウカイデネ イトウトフクノ ニゴウサンニ ナッタンダッテサ、ネッ」 <そこー 未亡人をね だれかの紹介でね イトウトフクの 二号さんに なったんだってさ、ね>(22-15-18)
- (6) ○「ソウシタラネ ソンナ ハズハ ゼッタイ ツウヨウ シナイッテ イウンダ」 <そうしたらね そんな はずは 絶対 通用しないって 言うんだ>(16-1-12)

以上の例について、大まかな解釈を加えてみる。

- (1) は、語順の倒錯。(途中で言いかけのまま次の表現に移り、あとから補う。)
- (2) は、ことばの不足。(十分な表現をなしていない。)
- (3) は、話線のそれ(途中で言いかけのまま次の表現に移る。), および中絶。
- (4) は、語順の倒錯,あるいは助詞の誤発(「ニ」→「ト」)。
- (5) は、話線の混淆(中途から別の話線にすべる。),あるいは助詞の誤発(「ガ」→「ヲ」)。
- (6) は、話線の混淆。

誤発を含めて、不整は、発言の際、言語意識の十分な管理を欠いた結果としてあらわれた、不統一・ずれ・不足などの現象だといえよう。その意味では、不整はすべて個別的、偶発的なものである。だが、本来的には、ずれや不足と見られるものの中に、個別的、偶発的なものでなく、傾向的なものもないではない。たとえば、「……ヲ スキダ」「……ヲ キライニ ナル」のような形式は、今は、「……ヲ 書ケル」「……ヲ 読メル」や「……ヲ 食ベタイ」「……ヲ 飲ミタイ」につづいて、かなり一般的に行なわれ、その言い方がへんだという印象を、しだいにもたれなくなってきたようだ。

○「ホント コマッチャウンデスヨ」(3⁽²⁾-9-4)

○「ソナ ナライワヨ」(3⁹¹-17-3)

など、「ホントニ」「ソナニ」を本来の形とするものだが、こういう形も珍しくない。

○「ドウイウ コト シテマシタ」(12-1-13)

○「ジッサイ アノ エイガハ ハクリョク アッタネ、アスコノ ボクシングノ トコロハ」<実際 あの 映画は 迫力 あったね、あすこの ボクシングの 所は>(16-4-1)

○「ゴコンレイデ アツカワナイ モノ ナインデゴザイマス」<ご婚礼で 扱わない 物 無いんでございます>(27-4-1)

などにおける助詞「ヲ」「ガ」「ハ」などの省略も、かなり一般的である。このような類になると、もはや、不整あるいは誤発と扱うことは問題であろう。たとえば、

○「ドッチノ オツキアイモ スルケレドモネ、サアト イウト ヤッパリ カライ ホウ サキニ テ ダスネ」<どっちのお付き合いも するけれどもね、さあと 言うと やっぱり 辛い 方 先に 手 出すね>(3⁹²-16-5)

○「カイシャノナンテ ヤマ ハイソナイモノネー、カイシャノハ」<会社のなんて 山 はいんないものねえ、会社のは>(3⁹³-8-2)

の「(カライ ホウ)ニ」「(ヤマ)ニ」の省略を正常な表現と認めがたいと扱うとしても、上掲例の「ガ」「ヲ」「ハ」の省略を同様に扱うことができるかどうか。本来からいえば、ずれ・不足であっても、すでに慣用的な形と認められ、言語意識の受容するところとなっていると認められるものがある。そこに書きことばの上にはほとんどあらわれない、話しことばの上だけに与えられる事実もあるのである。そこで、慣用的な形として、どの範囲までを認めるかが問題となるが、一般論として、典型的なもの、というわくを立てて処理せざるをえない。しかし、具体的には、典型的・準典型的・不整のふり分けが問題になる。それをきめるためには、客観的調査も必要である。だが、われわれは今は、これについては、だいたい主観的判定によって処理した。先にも述べたように、研究所内を対象とする小調査も一、二の問題については行なったが、だいたいのものについては、われわれ研究室員の合同判定に従った。

不整表現に関連して、なお、次のような処置をした。

(1) 次の例におけるように言い直されているときは、言い直された部分を切り捨てた。

○「マエニ……ノヨウナ オシゴトヲ キボウシテマスカ」<前に……のような お仕事を 希望していますか> (12-1-21)
(～は切り捨てた部分)

○「ヤハリ ニホンジンデナケリヤ ニホンジンダッタラ セツタイ アンナ ケン トウノ バメン デキナイネ」<やはり 日本人でなければ 日本人だったら 絶対 あんな 拳闘の 場面 できないね> (16-4-7)

これは、論理的関係をたどる処置である。また、この切り捨ては、文末でない部分について行なったものである。次の「重複」についても同様である。

(2) 次の例におけるような重複は、その部分を切り捨てた。

○「ソレカラ アノ セキニコウセイデ スグ アノー ゴバイシャクニント ゴホンニンノ オナマエヲ オイレニナレバ スグ インサツガ デキルヨウニ ナ ッテオリマス」<それから あの 責任校正で すぐ あのー ご媒酌人と ご本人の お名まえを お入れになれば すぐ 印刷が できるように なっております> (27-3-11)

(3) 語順の倒錯も、単純なもので、簡単な置きかえで正常な表現になるものは、そのようにして取り扱ったものもある。ただし、語順については、文節単位の交換可能性が一般にすこぶる大きいので、倒錯とすべきかどうか慎重を要する。倒錯と取り扱ったものは、事実、あまり多くはなかった。

以上、(1)(2)(3)のような処置をしたのは、なるべく多様の型をとらえるために資料を生かしたかったからである。

なお、資料の選別に関して、次のことを言うておかなければならない。われわれの研究は共通語を対象としたものであるが、われわれの録音資料の中には関西アクセントなどのまじっているものがあつた。しかし、問題とした文末のイントネーションをとらえる上に特別な支障は認められなかつたし、そのほかの点でも資料とするにさしさわりを認めなかつたので、これを資料から除外するということはしなかつた。

注 () 内は資料の典拠。数字は左から順に、資料の番号 (31ページの「資料一覧」参照)、資料台帳のページ、そのページ内の行を示す。以下すべて同じ。

3・4 カード化 以上のようにして整理された文を、一つごとにカードに

転記した。カードは分類作業に便利なエッジパンチカードを使った。このカード化された文例について、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの立場から分析を加え、その結果の記号を記入し、分類のためのパンチを入れた。

4 資料の使い方 〆 われわれの手もとに資料として整えられたものは、録音テープと文字化台帳と文ごとのカードである。分析作業は、主として文のカードを操作して行なった。しかし、表現意図や意味、ひいては構文を見定めるためには、カードだけでは困難な場合もあり、前後の脈絡をとらえる必要のあるときは、文字化台帳に帰って見た。また、具体的な音声を聞いてみないと表現意図や意味を正しくとらえかねる場合も多く、そのときは必ず録音テープにもどって吟味した。要するに、カードを主とし、文字化台帳や録音テープもしばしば使って、作業を進めたのである。

おわりに――

話しことばの研究は、これまで特に未開発の状況にある。そのため、研究はどうしても基礎的な部面から出発しなければならない。対象のとらえ方も新しい目でもってされ、研究方法も新しくうみ出していかなければならないところがある。われわれのやり方はまだ不十分な点が多いが、そういう考え方で取りかかって得た、ある段階における成果をここに報告するものである。記述するところは、基礎的研究が中心になり、研究のまとめとしての総合的の文型も、方法研究のための一つの試みであるともいえる。

(大石初太郎)

Ⅱ 基礎的研究

1. 文の認定について

1 はじめに 話しことばを資料として、文型の調査研究を行なうばあいには、まず、なにを文と認めるかを規定しなければならない。文型とは、“文の”類型だからである。

もちろん、文型とは文の類型だと言っても、唯一の観点から少数の類型が容易に見いだされるときまっているわけではない。そればかりでなく、類型を見いだすことだけが目的ならば別であるが、これを、話しことばの文に関する文法的な調査研究に役立て、あるいは、教育その他の応用にも役立てることを考えるならば、その目的に応じた類型のとらえかたが、いくつか考えられてよいはずである。すでに、教育上、文型として示されているいくつかの実例は、その目的に適した形であらわされている。(すくなくとも、あらわそうとしているのだと推測する。)しかし、すでに示されたいくつかの文型一覧表の類について見ても、いろいろな観点がありうるということがわかるのであって、そのうちのどれをとるかは、さらにこまかい目的によって、ちがってくるであろう。ここで行なう文型の調査研究は、その点では、なにを目的とするかと言えば、「研究目標」にも触れられているように、教育その他の応用にも用いることのできる基礎的な文型そのものの文法的研究である。ただし、ここでの文法的研究とは、普通いう形態的ないしは外形的な文法よりは、やや広義であって、これに関連して意味的要素・音声的要素をも考慮に入れている。話しことばの研究のなかでの文法研究という、さらに広い範囲への配慮があるからでもあり、また、話しことばの文法というもののあるべき姿を、普通いう文法よりは、やや広く考えたいと思うからでもある。

さて、なにを文と認めるか——。この問題は、古くから言語学上の難問の一つであって、ここに諸説を検討し、あたらずさわらずの規定をしたところで、

実際の調査研究に当たって、あまり有効なものとはなりえない。普通いうところの文は、事実上、かなり抽象的理論的なものだからである。そこで、以下には、具体的に、どう規定していったか、という作業上の規定を主として示すことにする。しかし、ここで断っておかねばならないことは、われわれは、単に、作業上、こう規定したということから出発したのではないということである。従来の文法論上の文は、抽象的に規定され、その規定の結論に至るところの、推論の過程は、客観的に認められるものでなければならないが、その弱点は、文の特徴的形式や、特徴的意義内容を説き、それに応じた文の大まかな分類を行なうことに終始して、それによって具体的な文の多くを説明することがむずかしいということである。あるいは、そのような特徴を説いて文を規定した学者たちが、具体的な文の処置に努力を払うことが少なかったと言ってもよい。さらに言えば、文法そのものが、典型的な文の形式や意義から割り出された一般的な法則であって、個別の現象の説明のためのものではないと考えられて来たということである。われわれは、具体的に個別の文をとり出して、その類型を見ようとしたが、その方法として、理論上・文法論上の文の規定と、個別的・具体的な文の切りとりかたとを、相関的に、考える限り厳密に、調和させる努力を最後まで払ったつもりである。つまり、理論上・文法論上の文の規定ないし分類の、その網の目からもれてしまって、取りおさえにくい文を、かなりの数、ならべてみて、その位置づけを考え、理論上の文の規定とのつながりを考えつつ、理論の欠陥を補い、また、実際の作業を進めたのである。先人の規定・分類も、多かれ少なかれこの過程を、当然、とおっているわけであるが、その具体例自体が、なお、ほとんど典型的な書きことばの文にとどまっているために、われわれのように、現実の話しことばを対象とするとすると、かなり、効力の弱いものになってしまうのである。

文成立論の細部については、近年『陳述』の論議として、盛んなものがあつたが、ここには、われわれのとった立場について、少し触れておかねばならない。

まず、文は、一般的に言って、表現者（話し手）の判断や命令や質問など（これを「表現意図」と呼んだが、これについては後に述べる。）を表現してい

るひとまとまりの言語形式である。表現者の意図は、意味的な面では、いくつかの成分の統合体に、また、音声的な面では文全体の音調に実現されるのであるけれども、その特徴的なものは、いずれも、文末部分に集中的にあらわれる。それゆえ、文末述語を意図表現成分の代表とし、文末音調を意図表現音調の代表とすることができると思う。要するに、文の意味内容および外的形式の2つの、文末へのあらわれを重視するものであって、これに対する文の他の部分は、附随的な要素であると思うのである。したがって、何を文の陳述を負う述語と認めるかが、実際上も理論上も、大いに問題となるところであり、以下、しばしば、これについて、触れるところがある。

さて、「研究方法」「資料」の項で、述べられているように、われわれは、「文的単位」に従って、最初は、まず、録音テープを聞き、同時に、そのカナ文字化された文章を読んで、常識的に、文と言ってよいと思われる部分ごとに、線 | | で区切っていった。この際は、あまり細部にこだわらずに、やや大き目に区切ってみた。次に、その区切りに従って、1枚ずつのカードを採り、全部発話の順にならべて、さらに、何回か、録音テープを聞きなおし、その区切り方に誤りや問題はないかどうか、文字化の細部について、なお、一層よく聞き取って書き加え、訂正するところはないかどうか、くわしく訂補を行なって、問題カードをチェックし、問題点については、各自の意見を、必要ながぎりで書き添えた。この過程で、次第に、話しことばを対象として、文的単位を区切るばあいの具体的問題点が、あきらかになっていったわけであるが、結果から見ると、まず問題なく、文として、カードに採りうるものが、全部のカードのうち、90%前後に及ぶことが、あきらかになった。つまり、文のカードを採るばあいに、いろいろな観点から言って、問題を残すものは、量的にはその1割程度にすぎないのである。1割程度と言っても、そのなかには、発音自体が不明瞭なために、解釈がいくつかにかかれるとか、文末の認定が、はっきりできないとか、というようなものも含まれているから、それらを除外すると、文の認定自体のために、理論上、問題になるものは、1割よりも、ずっと少ないことがわかった。この残されたカードの問題点の考察を経て、われわれの文的単位

のカードは、処置されたのであるが、まず、以下に、問題なく、文のカードとして、採った実例を示し、次に、問題カードの実例を示してその考察と作業上の処置を述べ、その次に、全体としての処置の結果をまとめて述べることにしよう。そこでは、多少、理論的な問題についても、触れようと思う。

2 共通資料の冒頭部において、まず問題なく文として採りうるもの 単に文カードの実例を羅列しても、具体的な問題点を示すことはむずかしいから、以下に、われわれの共通資料の定本の、はじめの部分を例示し、そのなかで、まず問題なく文として採った実例を指摘することとする。下記実例の記述の要領は、つぎのとおりである。

- (1) 文として採りうると、まず考えられるものは、その部分の下に____線を引いた。
- (2) 1枚のカードに採った部分の前後には、| |線を入れた。(この部分は____線の有無にかかわらない。)1枚のカードに採るかどうかが、問題になるものについては、大きいほうについて、ひとまとまりとしておいた。
- (3) 問題があって、簡単には、文として採りにくい部分(____線がついていない。)のあとには、*印をつけた。
- (4) 発音の不明瞭なところがあるために、____線を引いてないものあとには、△印をつけた。
- (5) 行は、話し手のかわるたびに、改めた。ただし、ひとつづきの文の途中で、相手の応答のことばなどが、挿入された場合は、その応答のことばなどを、/ /線でかこみ、その下に.....線を引いて、挿入するにとどめて、行をいちいち改めなかった。また、/ /の前後の部分、簡単には文として採りにくく、△印や*印のつけられたものばあいには、.....線を引かなかった。したがって、問題なく文として採るものについては、

○|____ /○...../ ____|

の形で、ひとまとまりが示されることがあることになる。△印や*印があるものばあいには、上の____線や.....線が引かれていない。

2・1 実例

R.No.3 (三人の女性)

- | ナニカ ジャベッテ |
- | オヒル ソ}{ツクッタノ タベルノ? | Δ
- | ソウソウ | *
- | へー | | タノシミネ | | ナンニングライ } | テルノ? | Δ
- | ワタクシガ イッテイル ヒハネー ヨニンネ |
- | アー | | ソウ |
- | デモー オヤスミスルトネ / ○ ウン / フタリグライノ トキモ アンノ |
- | へー |
- | <笑> |
- | スクナクッテ イイワネー |
- | ソウ | | イインダケレド ナンダカ センセイニ キノドクネ |
- | アー | | ソウ | | デモ ヨーク オシエテクダサルデショウ |
- | ソウ | | トッテモ イイ センセイナノヨ |
- | フーン |
- | フツウノ オウチ? |
- | ソウネー / ○ フン / チイサナ オリョウリジュクミタイナ モンカシラ
ネー | *
- | へー |
- | ホカニモ オデシサンガ タクサン イルノ? |
- | ソウ | | モクヨウビカラカシラ / ○ ウーン / オシルト ヨル アルデショウ | *
- (注「オシル」は「オヒル」<お昼>)
- | ア | | ソウ |
- | デモ タイガイ ヨルネ |
- | ウーウン |
- | オツトメノ カタナンテ / ○ アー ソウネ / ヨルジャナキャ イラッシャレ
ナイシネー | *
- | ウン |
- | コトシナンカ トクベツ ニンズガ スクナインジャナイ? | <笑声>
- | ナニ? |
- | コノ アイダノネ (オシル(シ)ナンテ) トッテモ キレイダッタワヨ | Δ
- | へー | | ドンナノ ツクッタノ? |
- | アノネ チャント ワクガ アルノネ |
- | ウーウン |
- | ソソテネ ソコニ タマゴノ ナンカ ウラゴシモ イレテネ / ○ ウーン /
ジブンデネ デンプモ ツクルノヨ |
- | アー | | ソウ |
- | タララネ ユデルデショ / ○ ウン / ソレデ…… | *

- | アレ ムズカシイデシ ョウ? |
- | ウン | | デモネー / ○ウン / シオウデニ ジテネ / ○ウン / ソシテ ミ
リントネ / ○ウン / タマゴノ キミネ, ソレ ツカッチネ / ○ウン / ス
リバチデ スルノヨ | *
- | アー | | ソウ |
- | ネ | | ソレーヲ コウ イルノ, オナベデ | *
- | へー | |
- | ゼンゼンネ ショクベニ ツカッチモ ホラ ウツテルミタイナ アンナネー
/ ○ウン / アクドイ イロニ シナケレバネ / ○アー ソウネ / トッテ
モ キレイダシネ / ○ソウネ / キモチガ イイワ |
- | ヤッパリ タベル モノハ ミタメモ キレイナ ホウガ イイワネ |
- | ナンデモ ジブンデ ヤレバネ / ○ウン / キモチ ヨク タベラレルデン
ョウ |
- | ソウネ |

R. No. 5 (新聞人二十のとびら)

- | ソウデス | (注 録音が途中からはじまっている。)
- | コリャ ソラデシヨ | <拍手>
- | エ? |
- | ソラ ソノモノ……デスカ? |
- | イヤ | | ソラ ソノモノ ジャアリマセン |
- | シカシ ソラニ アルモノネ ウン | *
- | エー | * | ハイ タカギサン | *
- | ソノ ソラニ アルモノハ ヤッパリ コウブツ? |
- | エー | | モウ ソレハ モウ ソウナンデスガネ, エー | *
- | コタイ? |
- | エ |
- | コタイデスカ? …エキタイ? | *
- | コタイ? |
- | エー |
- | エキタイ? |
- | エー |
- | ドッチカ ハッキリシテクダサイ | <笑>
- | エキタイデシヨウ |
- | エキタイ? |
- | エー |
- | エー | エキタイニ ハイリマスネ | <拍手> | ソウデス | ハイ ガラシマサン | *

- | ウツクシイ? |
- | エー | | キレイデスヨ | <拍手>
- | キレイ? |
- | エー | | ミテ キレイデスネ | | ハイ フルヤサン | *
- | ソラ アノ クモーミタイ(ナ) | Δ <拍手> (注「ソラ」は「ソレハ」<それは>)
- | ソウデス | | クモデス |
- | ウン |
- | クモデスネ | | ソコデ クモニモ イロイロアルト | *
- | ウン |
- | ウン |
- | ハイ カラシマサン | *
- | イワシグモ | <笑>
- | イセ | | イワシー…エー | * | イエ | | イワシグモデハアリマセン, エ | * | ウロコグ
モトカ モウシマスガ, (クモ) デハアリマセン | Δ | ソウイウ クモデス, ヨウ
スルニ | | ハイ アリタケサン | *
- | ソラ ナニカ コウ ソレヲ モチイテ ナニカ ヒユニ ツカイマスカ? |
- | エー? |
- | ヒユ ヒユ | *
- | アー アー アー アー | * | ア | | ヒユニネ | * | エ | | ベツダン ツカイマセン
ネ / ○ エー / エー | | ナニ オカングエニナッタカナ, / } } - / エー | * |
ハイ タカギサン | *
- | ソレハ クモノ キショウガクテキナ テクニククラ イエバ イインデスカ? |
- | ムズカシイデスネ, ヤッパリネー, エー | <笑>
- | ロンセツイイント シテハ…… | *

R. No. 12 (職安女子)

- | ショウワ ハチネン シチガツ イツカネ | | ジュウクデシタネ | | パンチハ
スミダク オオヒラチョウ ヨノノ ニパンチネ | | キンシチュウデ オリタラ
オウチマデ ナナフングライデスネ | | ココマデ ジュウゴフンネ |
- | オデンワ ナインデスネ | | ナニナニカタト シナイデモ テガミ トドキマス
? |
- | ハ? |
- | ナニナニカタト シナイデモ テガミ トドキマス? |
- | エー |
- | ツウキンノ キボウデスカ | | オンゴトハ ナニヲ キボウシマス? |
- | コウイン |
- | エ? |

- | コウインデス |
- | コウインサンガ イイノ | | マエニ ソウイウ ケイケンガ アルンデスネ? |
(注 「ソウイウ」は「ソユウ」に近い。)
- | エー |
- | コノ セカイ メリヤスダケ? |
- | エー | | ソウデス |
- | ドウイウ コト シテマシタ | (注 「ドウイウ」は「ドユウ」に近い。)
- | アノー ケイトモノヲ ケンビンシテタンデス |
- | ケイトッテ アノ セーターナンカ? |
- | イイエ | | テブクロ |
- | テブクロネ | | ユシツノ テブクロデスカ? |
- | エー | | アノ スグ アッセンシテ イタダケナインデスカ? |
- | ソウネー アノ コウインサンデネ、モノニ ヨッタラー アノ イタシマスヨ |*
○ | アー | | ソウデスカ |
- | フーン |
- | マエニー……ノ ヨウナ オシゴトラ キボウシテマスカ? ソレトモ アノー
コウインサンナラ ホカノ オシゴトデモ イインデスカ? |*
○ | エー |
- | ナンデモ イイ |
- | ナルタケ テンインガ…… |*
○ | テンインガ イイノ? |
- | テンインダト ジカンガ オソイカラ |
- | ソウ | | カエリガネ |*
○ | ナイ トキハ ショウガ ナイケド |
- | ナイカラネ | | ソロバンハ ドウデス(カ) |△
○ | テンインダッタラ スグ ソノバデ…… |△
○ | テンインハネ アノー スミコミノ テンインサンハネ ソクジツ ショウカイ
シマスケドネ フツウノ オミセノ テンインサンハネ、アノー ヤハリ モウ
シコミヲ ウケテカラネ、センバツシテカラ アノー ショウカイ スルンデス |
| コウインサンガ イイノネ | | ソロバンハ ドウデスカ? |
- | マダー デキナイデス |
- | デキナイ |
- | エー |
- | タシザン ヒキザンクライハ デキル | | ソノ テイドデスカ? |
- | エー |
- | ジテンジャハ……? |*
○ | ノレマス |

R .No. 16 (三鷹学生)

- | ナンブングライ ヤッテオラレルンデス? |
- | サンジップン, コレネ | *
- | モウ ハイッテルヨ |
- | キイタ? |
- | アノ ミシマクンチデ ヤッタンダッテサ |
- | マツイエクンガネー ホンイチノネー アノ イースーチーノ / ○ タカインダッ
テサー. スゴク / タンキダヨ |
- | タカインダッテサー, スゴク | *
- | サンゼンイクツナ |
- | サンゼンナナヒャクイクラダ |
- | サンゼンナナヒャクイクツカ |
- | ソレデー ソ(レ) タンキデ... | *
- | ソウ |
- | イースーチーデサー..... | *
- | キタナイナー |
- | コレ ゼッタイ コレハネー アノ ドコノ マージャンクラブヘ イッテモネ
ー ソノ アガレルッテ イウンダヨ |
- | ダケドサー ソレガネー アノ オレノ トモダチノ ソノ カケマージャンノ
オーソリテートサー キイタンダヨ, キノウ アッタカラ | *
- | シタラネー ソンナ モノハ ゼッ ゼッタイ ツウヨウンナイッテ イウ
ンダ | △
- | ウーン |
- | モットモ フリコンダカラサー オレハ ダマッテタヨ, モンク イワナイデサ
ー, ソレデ イイッテ | *
- | ダケド オシカッ オシカッタネ | *
- | ウーン |
- | オシカッタヨ |
- | ダッテ ソノ ツギニ センキュウヒャクニジュウ ハッタソダ | △
(注 「ハッタ」は「ハイッタ」〈はいった〉の意らしいが不明。)
- | ナニ? |
- | ソレデ ホントウナラ アレ フリコンデナカッタラ ウイタモンネ |
- | ソウダ |
- | アレ ニシガキクンガ ハンタイシタモンネ |
- | イチバン サイゴニ マンガン フッタデショウ? |
- | エッ? |

- | イチバン サイゴガ アガッタノハ ソノ マエ |
- | ソノ マエカ |
- | ウン |
- | ソノ マエノ カイネ, アレハネー ズルインダ(ヨ)ネ, スゴクネ |*
- | ウン |
- | サイシュウパイダッタロウ? |
- | ソウ ソウ ソウ ソウ |*
- | ネッ |
- | ウン |
- | ウン |
- | シカモ ニマイ モッテンダモンネ |

R. No. 22 ("葦"雑談(2))

- | エー フリートーキング | | サンガツ ニジュウイチニチ | | オヒガンデゴザイ
マス | | エー アノー ソチラカラ アノ... |* |
- | コイケデス |
- | ハイ |
- | チバデス |
- | ヒグチデス |
- | ミドリデス |
- | スギタデス |
- | ト イウトコロカラ ハジマッテ |* |
- | ト イウトコロカラ ハジマッテ ジャ ミナサンニ グット オンジャベリラ
ンテイタダキマシヨウ |* |
- | ト イウ ワケデス |* |
- | ナニ ジャベレバ イイノ |
- | ナニ ジャベロウカナ |
- | ナニカ コウ ヤッパリ キメナキャネ |
- | ヤッパリネ / ○ ハナシガ チルニ シテモサ / コウイウ メンバーガ ソロ
ウト アンマリ タイシタ ハナシガ デソウデモナイカラ | <笑> |
- | ソナナコト ナイヨ | | グット コウドダネ |
- | オゲイジュツ? |
- | ソノ オカタイ オゲイジュツノ ハナシハ ヤメマシヨウヨ |
- | ジュンスイデスカ |
- | ナニカ コウ |* |
- | グットクダケテ |* <笑> |

- | ウン | | クダケテ | *
- | クダケスギタリシテネ | *
- | オチテ | *
- | イヤー ソウイウノハ ヤメマシヨウ | * <笑> | アトアト ノコル コトラ
カンガエテ ヤッパリ スコシ オヒノノ イイ ハナシラ イタシマシヨウ |
- | ジョセイガ グット エレガントデスカラ |
- | ソウ ソウ ソウ | *
- | ジャー マー キョウハ オヒガンデスノデ, <笑> ホトケサマノ オハナシ
デ | * <笑>
- | ホトケサマノ オハナシ |
- | ソレハ イイデスヨ |
- | ホトケサマノ オハナシナンド | <笑>
- | ホトケサマッテ…アノネー ウチニ イッパイ アルンデスヨネ, カミダナト
カサー オイナリサントカ ホトケサマトカサー ホウボウニ カザッテアルノ
ヨネ | * | ダケドー カミダナダノネー ソノー オイナリサソニ テラ アラス
キハ シナクテモネー アタクシデモ デスヨ, ホトケサマニ テラ アラス
キハ スルンダケド | * | ダカラ ホトケサマッテ イウノハ ナニカ… / レイナ
ソカ / レイコントハ イカナイケドサ ナニカ アル キハ スルワ |
- | ウン | | ウン ボクモ ソウナンダ | *
- | ソレイガイハ アンマリ チョット コウ セイシン コモラナイ, ヤッパリ |
- | アー シカシ / ウン / ホトケサマヘネー / ウン / アノ テラ アラス
ッテ イウノハネー / ウン / イキテイル ヒトノ タメニ ヤルラシイヨ |
- | ウン | | ソウヨ |
- | ウン |

R. No. 27 (結婚式申込み)

- | マダ ソノ アノー ナニラ マジカデ ナイモンデスカラ アノ / ハー /
ウチアワセニ クル ヒトハ スクナインデスガネ | *
- | ハー |
- | マダ キョウラ クンノハ ミンナ ソノ ヒラ キメニ (クルンデスガネ) | △
- | ハー |
- | ソイデ ソイデ ヨゴザンスカ? |
- | モウ スコシ ナンカ アルト イイノネ? |
- | デモネー ケッコウ オキヤクサマ キガ ツカナイノヨ |
- | ソウヨ | | アンガイ キガ ツカナイワヨネ |
- | ジャー ナンカ コノ ウエヘ チョット コウ カブ <笑> テ… | △
- | イヤ | | コウヤッテ (リャ) ワカリマセンヨ | △

- | ワカッテモ ダイジョウブデス |
- | モウ スコシ ハナシテモ イインデスケド(ネ) | Δ | ネッ |
- | ソウ |
- | マア イイデショウ | | ヤッテミマショウ, スコシ | *
- | イラッシャイマセ |
- | イラッシャイマセ |
- | カワモトデス |
- | ハー | | ドウゾ コチラへ | *
- | アマノデスガ コノ アイダハ ドウモ オセワニ ナリマシテ |
- | アクルヒ サツク オデンワ シテオキマシテ… | Δ
- | へー へー | *
- | ジュウガツ サンジュウ イチニチデシタネ? |
- | へー |
- | サンジュウイチ {ジ} チノ ジュウイチジ ジュウ / ○ ジュウイチジ サンジュ
ップン へー / ジュウイチジ サンジュップンニ アノ ヘンコウ デキテオ
リマスネ? | Δ
- | エー ソウイウニ カイテゴザイマス | * | ドウゾ | *
- (注 「ソウイウニ」は「ソウイウフウニ」〈そういう風に〉の意。)
- | カイテゴザイマスネ, クジハン トリケシテ | *
- | ア | | アリガトウゴザイマシタ |
- | ゴニズハ ヨンジュウメイサマ |
- | ヤクヨンジュウメイデスネ | | アノ ヨウシラ コノ アイダ イタダクノラ
ワスレテイキマシタネー / ○ へー / イマ イタダキ…ター | Δ
- | へーへ | *
- | コチラへ オイデニナッタノハ ゴザイマス ワケデスナ? |
- | エ? | | {テ} アレハネー タダ アマノダケノナマエ カイテアッテネー
/ ○ {ジ} オカキレ ネガウ ワケデスカ / エ ソレ アノ イエ トコ
ログアネー ソレネー ソノ アニガ イッサイ ヤッテイルンデスヨ / ○ ハー
/ トコロガ アニキイタラ ソノ ナンノネー アノー ナマエヲネー
シラナイカラ ヨウシ モラッテキテ ソノ カキイレルカラ… / ○ ア ソ
ウデ{テ} カ / エ アタラシイノラ カ…カイテ マタ… | Δ
- | コレハ モー ダイタイ アノー アチラノ オハツホリ ヨウトデゴザイマスネ
ー / ○ エー / … |

さて、上記実例に___線を引いて、“まず問題ない”文としたものの中にも、なお説明を要するものがないではない。例を示せば、冒頭の「ナニカ シャベッテ」でさえ、規範文法では、省略のある不完全な文だ、それゆえ文とは

認めない、という事にも、なりかねない。また、「ソレーヲ コウ イルノ、オナベデ」は、いわゆる倒置文であるが、陳述を負う述語が来れば、文が切れるという文法論上の見方に従えば、そこまでで文であって、そのあとの部分、ここでは「オナベデ」という部分は、補充のための不完全な文である。したがって、全体は、“文+不完全な文”に2分されるであろう。また、「ア ソウ」「アー ソウ」は、類型としてしばしばひとまとまりに発話されるうえに、「ア」「アー」は、間投詞であって文頭に置かれたものとも見られるから、まとめて1文と考えるもいいかもしれない。

このような問題は、細かくは、なお他にもありうることである。気づいた範囲で、これらをまとめて、3・2 および4に述べることにするが、文認定の基本問題に、ここで、すこし触れておきたい。

2・2 基本的な問題 およそ、文という文法論上の単位をさだめるばあい、その基盤となるものは、大きく分けて2つあると思われる。

(1) 言語意識

(2) 文法体系

(1)の言語意識は、言語使用に関する一言語主体の素朴な反省によって認識されるものであって、その言語意識が当言語に関して一般的であるかどうかは、実証の過程を通らなければ、厳密にはわからないものである。しかし、現代語では、日々のコミュニケーションの事実を支えられて、われわれは、大体のところ、一般的な言語意識のあらわれを、自分自身の、あるいは、他人の、具体的な発話について、たしかめることができる。なぜならば、コミュニケーションの成立した具体的な発話のつかさねから、抽象的に形成されていくものが言語意識だからであり、言語意識は、多かれ少なかれ、発話にその姿を見せるものと考えられるからである。その意味で、言語意識は個人のものでありながら、社会的なものを基盤としている。それゆえ、細かい部分では、ある人は、“一般的だ”と言い、ある人は“一般的ではない”と言うが、その類は量的には、大きなものではありえない。おそらく、それは前記の、この調査研究のための反省から出て来た“1割程度”という量を、うわまわることはないのではあるまいか。とくに、文の認識に関しては、もっとずっと少ないものなのかも

知れない。量的に少ないということは、しかしながら、質的に問題が小さいことを意味するものでは、もちろん、ない。結果的には、(2)の文法体系のなかで、これらをどう取り扱うかが最も問題となることは当然である。ここでは、たゞしばしば、「素朴な」とか、「主観的な」とか言って、批難されやすい言語意識が、文の認定に関しても、やはり大きな一基盤であることを、明確に認めれば足りるのである。

たとえば、「カク(書く)」という語は、カ行五段の語尾変化を持つという。ここで「カクという語」というばあいには、すでに「語」という言語意識と「語」の規定とが含まれなければならないが、この問題は、しばらく別とすれば、とにかく、「カク」という語は、現実^レに文に用いられるとき、その形を変えるという形態上の事実がある。そこでは、一応、意義の変化を深くは問わないで、形態上の変化だけを問題としている。つぎに、そのなかの一つの「カク」という語形は、現実の文で、意味上、終止法・連体法などの役割を持つ。「カク」の形が、そのどちらの用法かは、現実の文での役割を、他の語との連接関係と意味との上で、判定しなければわからないことはもちろんであるが、たとえばその一つに終止法があるということができるのは、実は、それが文の終わりに用いられるという事実が、多数の文の用法の帰納的結果として、社会習慣としても、したがってまた、同時に個人の言語習慣としても、存在するからである。したがって、文の終わりであると認定するのは、「カク」という形があらわれるからではなくて、「カク」という形が、そのあとに特定のことは以外はともなうことなく、それでひとまとまりの意味を表現し終えることが、社会習慣として、大多数の個人習慣として、存在するという事実をささえとする。その意味で、言語意識を、文の認定に持ちこむ必要がある。

また、電話の応対を調べると、「コチラハ ヤマモトト モウシマスガ」とか、「チョット イマ セキヲ ハズシテオリマスガ」とかいうように、いわゆる接続助詞「ガ」で、言い終えることが、非常に多い。あいまいな言い終えかたであるとも言えるが、聞く人も、このあとに、何か^レが言い残されているとか、何か^レが言いつづけられるはずだとかいう期待を持って、待っているということはない。それなりに言い終わりだと思^レう習慣がある。すなわち、接続助詞

としての「ガ」の用法から、終助詞的用法に転用されている。これを、接続助詞の終助詞的用法という臨時的なものと認めるか、別の終助詞「ガ」として立てるかのきめての一つは、「ガ」で言い終える習慣が一般的かどうかの認定、すなわち、言語意識の問題である。(他の一つは、文法体系の問題であるが、これはつぎに述べられる。)

(2)の文法体系は、一言語研究者が採用する理論体系の一部門であって、「文_{II}」という語を、術語として使用する以上、それが位置を占めるべき体系が基盤として求められることは言うまでもない。ここでは、推論の過程にあやまりなく、文の規定を、具体的事例の説明のためにも、もっとも有効なように、行なわなければならないのは当然であるが、「文_{II}」という語を術語に使う以上は、(1)の言語意識との因縁をたち切ることがいいかどうか、問題である。言語現象が人間の精神的肉体的両面での全人間の活動の結果である以上、その言語意識を無視することは、言語現象の真実を探求する方法ではあるまい。もとより、定義としての概念規定に、言語意識という語を用いる必要は、必ずしもないが、それにもかかわらず、文の文法体系中での位置づけに当たって、言語意識を除外することは正当なことではないであろう。かように(1)と(2)とのつながりを考えれば、(2)の文法体系を基盤とする文の規定も、(1)の言語意識という直観的・非分析的要素を包含しつつ、客観的・分析的に推論をかさねてゆかねばならぬものであろうと考える。

上記事例は、____線部分について、まず問題なく、文と言ってよいと思うものである。そこに、現代の一般的言語意識として、異論が出ることは、ちょっと考えられない程度のものであるので、前記(1)の言語意識に関する範囲では、問題ないと思う。少なくとも、共通資料にこれらを対象としてとりあげ、種々の考究を行なったわれわれ4人には、異論がなかった。このような事例を、全共通資料から選ぶと、前記のように、その全カードの約9割前後に及ぶのである。この数えかたは、____線のない部分を、たいていは個別に1カードにとったうえでのことであるから、たとえば、「ソウソウ」が、あとで述べるように、2カードにわけられるとか、斜線／／で区切って、上記では.....線をつけた部

分を、さらに別カードにとるとかいうことをすれば、多少、変るであろう。しかし、△印をつけた文のように、単に、発音のごく一部が不明瞭であるために、____線をつけなかったものもあり、これらのうちには文の問題だけについて言えば、まず問題なく2文とはなりえないものであると言えるものがあるから、全体として多少の増減はあっても、文の認定については、だいたい9割ぐらいは、問題ないものだと考えられる。

このような経験的事実をも加えて、言語意識を包含するものとしての文を考えるならば、大略、つぎのようになろう。文は、話し手が、自己の感情や判断、叙述や命令、質問、応答などを表現するひとまとまりのことばである。文を構成する要素は、形式（服部博士規定の用語による）と表現意図および構文の型と音調の型である。文型は、表現意図・構文の型・音調の型の3つの総合が、形式をとおして、あらわれる文の類型である。

（全般的な基本問題については、次項以下に各説があるが、はなしことばでの文そのものの問題については、ここには触れない。「はなしことばの文」（『言語生活』昭和34年3月号）において、つぎの点については、述べた。すなわち、もし、「話しことば」を「発話」の意味に解し、「文」をその抽象的形式の意味に解するならば、「話しことばの文」ということば自体、2つの相いれない概念を結ぶという点で、矛盾を含む。「話しことば」を「発話」の意味に解することに異論はないが、「話しことばの文」とは、「発話」と「文」との、具体と抽象との間にあって、「文」により近く位置する単位としての、やはり抽象的形式であり、ここでの「話しことばの」という形容の語は、「話しことばを資料とし、ここから抽象の段階を踏むところの」の意味である。）

3 共通資料の冒頭部における問題点の処置 前記実例のうち____線をひいていない部分は、文の切りかたのうで、なんらかの問題点を含むものである。（ただし、前述のように____線を引いた文についても、考察すべきものを含まないではない。これについては、後に述べる。）

3・1 △印について △印をつけたものは発音に不明瞭なところがあるものであるが、このなかには、文中のごく一部が不明瞭なものとか、文の途中から全くわからなくなるものとか、文の末尾の部分が不明瞭なものとか、いろいろ

のものがある。文の構造や全体としての意図表現に、そう大きな影響のないものもあり、大きな影響のあるものもある。性質が一樣ではないことは、前記実例を一見しただけでもわかることである。さらに厳密に言えば、録音を文字化するとき、カナモジをもってする以上、われわれの解釈が、ある程度は、どうしてもはいる。程度の差はあっても、ローマ字化・発音記号化するばあいも、同じである。とくに、促音・長音・撥音など、いわば不安定な音素のばあい、これが発音自体として、あるのかないのか、判定のむずかしいことがある。また、かなり長い部分についても、録音のやや不明瞭なばあいには、ある程度の推定を行なわねばならない。われわれの日常談話は、もっとずっと程度のひどい推定のうえに、そのコミュニケーションが成り立っている。だから、その文字化は、発話を可能な限り文字化するのであって、現実の発話そのものを、常に推定し解釈していると言える。そのなかで、とくに不明瞭で、文字化の決定しにくいものに△印をつけたのであって、これ以外は、みな明瞭で異同がないとは言いきれない。録音を聞きなおせば聞きなおすほど、細かい部分での異同が発見できると言っても過言ではない。そのために、われわれは、かなりの努力を積み、少なくとも2人以上が、少なくともそれぞれ3回以上は、聞きなおして作ったカードおよび定本ではあるが、なお、完全とは言い切れないと感じないではいられない。現在の、われわれの耳と、録音機械・再生装置・レシーバーなどが、将来、もっとよくなれば、一層、完全なものに近づきうるだろうと思うが、目的が、文字化自体にない以上、この程度で作業をとどめねばならないし、とどめるべきかと思う。

3・2 *印について これに対して、*印をつけたものには、理論上さまざまな意味で問題となるものが含まれている。普通、省略と言われる表現のうち、言いさしの表現などは、あまり、理論上の問題を含んではいないが、その他の大部分は、かなりの考察を必要とする。以下、逐次、述べることにする。

3・2・1 *印1 重複の表現など まず「ソウ ソウ」を例としよう。「ソウ」1語で応答の文となりうることはいうまでもないが、類型として、その2つ以上の重複したかたちが、しばしば、あらわれる。はなしことばを、直観的に、文的な単位で切つてゆこうとすると、この重複したかたちの途中で切ることは、

かなり、ためられる。作業のはじめはもとより、作業の終わり近くまでも、これら、重複表現の、文としての切りかたには、決定しかねるものが残った。その事情を考え、略述すれば、つぎのようになろう。

これらを、ひとまとまりの文だと、直観的に考えたい理由は、第1には、発音上の印象であって、これは、(1)発音に切れ目がない。(2)全体として短く一気に発音される。(3)アクセントの形として核を1つ持つ、あるいは核を持たないで、アクセントの形としてひとまとまりである、という“事実”をささえとする。第2に意味上の印象であって、これは、(1)「ソウ ソウ」全体でひとまとまりとなり、単独で、「ソウ」という文と“当価な意味”を持つ。(2)「ソウ ソウ」の一つ一つの「ソウ」には、したがって、「ソウ」単独の文の持つ意味はない。少なくとも相対的に意味が稀薄であって、独立性が弱いと感じられる、という“感じ”をささえとする。

これに対するわれわれの処置の結論は、“切る”ということであって、直観的な印象と、そのささえとなる“事実・感じ”をしりぞけた。その理由は、つぎのごとくである。

第1に、発音上の“事実”は、文の切りかたに関して積極的には、問題とならない。短い同文が2つつづいたとき、全体として1つのアクセント的まとまりとなることは、しばしば起こることである。「イキマス イキマス (行きます 行きます)」「イヤダ イヤダ (いやだ いやだ)」「アケタ アケタ (開けた 開けた!)」などのように。したがって、これらの重複表現をも、みな1文とするなら別であるが、そうでなければ、アクセントの問題は、文を切るうえでの積極的理由にならない。また、これらの重複表現を、みな1文とすることは、陳述を負う述語または独立語1つを含むひとまとまりのことばを1文とする立場に反する。強いて1文とするためには、述語の概念を、かなり変更せねばならない。また、“発音に切れ目がない”“全体として短く一気に発音される”ということは、現実の発話で、いくつかの短い文が連続するばあいには、いくらか起こることであって、これらをつづけて1文とするためには、文法上の文の概念よりも、音声上の事実を優先させなければならない。文の認定全般にわたって、音声上の事実を優先させることはできないから、このようなばあ

いだけ例外的に扱うことは不当である。したがって、この点に関して、たとえば「文の特徴の一つは、その前後に発音の切れ目があることだ」という表現は、正確ではない。「文の特徴の一つは、その前後に発音の切れ目を置きうることだ」と言うべきである。以上のようにして、発音上の「事実」は、「ソウ ソウ」を、積極的に1文と認める根拠とならないと考えた。

第2に、意味上の「感じ」は、文法上の文の認定が、所詮は意味を根拠とする問題である以上、文法体系の立てかたによっては、積極的根拠となりうるものかもしれない。しかし、われわれは、「ソウ」1語文の持つ意味（服部四郎博士の術語を用いれば、「発話の意味」ではなく、「文の意義」と「ソウ ソウ」の一つ一つの「ソウ」が持つ意味とのちがいは、決して大きくはないものであって、「ソウ ソウ」という連続した全体として、「ソウ」単独とはちがう意味が生まれるのは、同語同文のくり返しのばあいにかぎらず、一般に、文の組み合わせの生む当然の結果であると考えた。もちろん、くり返しの表現は、他の文の組み合わせとはちがうところがあって、多分に、強調・感情・情緒の表現を含むものであるが、文の組み合わせの一形態と考えても不都合はない。その点呼掛の「モン モン」の類とはちがう。現代では、単独の「モン」という表現をわれわれは持たないからである。むしろ、一面では、笑い声の表記された「ハハハハ」「ヘッヘッヘッヘッ」が、語形としては不安定なものと似たところがある。(1つでも2つでも3つ以上でも、しばしば類型的にあらわれる。) また、一面では、「ソウ」は「ソウダ」「ソウデス」と判断辞をともないうるが、「ソウ ソウ」は、「ソウソウダ」「ソウソウデス」とは言わないから、「ソウ ソウ」が「ソウ」と同質の1語ではないことが明らかであり、その点、前記「イキマス イキマス」「イヤダ イヤダ」「アケタ アケタ」と似ている。つまり、「ソウ ソウ」は一つ一つが述語性を持ち、「ハー ハー」「ヘー ヘー」などの応答の表現の類型的重複表現に、もっともよく類似するものと言える。「ソウ ソウ」の一つ一つの「ソウ」は、単独で用いられたばあいの「ソウ」よりは、たしかに、相対的に稀薄な意味しか持たないが、それは、「ソウ」という文の意味の中での動きであると解釈しても不都合はない。そこで、「意味上の1文という感じ」も、文法論上のこのような文の認定には、しりぞけられ

てよいと考えた。

大略、以上のようにして、「ソウ ソウ」「ソウ ソウ ソウ ソウ」など、全部、「ソウ」1つごとに切ることとした。ただし、現実には、しばしばあらわれる類型として注意し、将来、文の組み合わせの類型をとりあげることがあれば、ただちに扱うべきものの類に加えることとした。

同文の重複ではなくて、これとよく似た表現には、つぎのようなものが、前記実例のなかに見える。いずれも2文とするものである。

「アー ソウ」「ア ソウ」「ウン ソウヨ」

「エー ソウデス」「アー ソウデスカ」(以上同例多数, 出典略)

「ネ ソレーヲ コウ イルノ, オナベデ」〈ね それーを こう いるの, お鍋で〉(3¹¹-3-6)

「エー エキタイニ ハイリマスネ」〈えー 液体に はいりますね〉(5-1-7)

「エー ケレイデスヨ」(5-1-9)

「イエ イワシグモデハアリマセン」〈いえ 鯛雲ではありません〉(5-1-14)

「ハイ タカギサン」(5-1-16)「ハイ カランマサン」(5-1-7)

3・2・2 *印2 省略の表現

「ロンセツイイントシテハ…」〈論議委員としては…〉(5-1-18)

「ナルタケ テンインガ…」〈なるたけ店員が…〉(12-1-22)

「エー アノー ソチラカラ アノー…」(22-1-1)

「ナニカ コウ…」(22-1-19)

「グット クダケテ…」(22-1-20)

「クダケテ」(22-1-21)

「オチテ」〈落ちて〉(22-1-22)

「ジャー マー キョウハ オヒガンデスノデ ホトケサマノ オハナシデ」〈ジャー マー きょうは お彼岸ですので 仏さまのお話で〉(22-2-2)

これらは、文の成立条件である陳述を負う述語・独立語を欠いているから、「省略文」と、普通言うものだが、意識的に省略したり、他の人の発言によってさえぎられて省略したり、現実の発話では、いろいろのばあいがある。これらは、すべて、われわれの対象としての文ではないと認めて、除外した。理由は、一つには、上記のように、陳述を負う述語または独立語を、文成立の条件とみとめたからであり、また、そのかたちが、社会習慣として、述語を含んだ意義をあらわしていないと認めたからである。

たとえば、「ナルタケ テンインガ……」は、その前後から推定すれば、「ナルタケ テンインガ イイ」とか、「ナルタケ テンインガ イインデス」とかをあらわすということは、比較的容易にわかるのであるが、「ナルタケ テンインガ」自体で、社会習慣として、そのような意義を、つねにあらわすとは、言えないことは言うまでもない。したがって、これを省略による不完全な文として、対象から除外するのである。

ただし、もとは省略による不完全な文であったものが、固定して、それだけで、特定の意義を、社会習慣として持っている、認められるものがある。前に記した事例の冒頭の「ナニカ シャベツテ」というのも、今日の話しことばとしては、(女性に多いが、)固定して「ナニカ シャベツテ クダサイ」とか、「ナニカ シャベツテ チョウダイ」とかをあらわすと認められるから、省略による不完全な文とはしないこととした。ほかに、

「オツトメノ カタナンテ ヨルジャナキヤ イラッシャレナイシネー」〈お勤めの方なんて 夜じゃなきゃ いらっしゃれないしねー〉(3⁴¹-2-5)

「テンインダト ジカンガ オソイカラ」〈店員だと 時間が 遅いから〉(12-1-24)

「ナイカラネ」(12-2-3)

「ヤッパリネ コウイウ メンバーガ ソロウト アンマリ タインタ ハナシガ デソウデモナイカラ」〈やっぱりね こういう メンバーが 揃うと あんまり たいした 話が 出そうでもないから〉(22-1-13)

「ジョセイガ グット エレガントデスカラ」〈女性が ぐっと エレガントですから〉(22-2-1)

「ナイ トキハ ショウガ ナイケド」(12-2-2)

「ホトケサマツテ…(略)…ホトケサマニ テラ アワス…キハ スルンダケド」
〈仏さまって…(略)…仏さまに 手を あわす…気は するんだけど〉(22-2-5)

「ナニカ コウ ヤッパリ キメナキヤネ」〈何か こう やっぱり 決めなきゃね〉(22-1-12)

「クダケスギタリシテネ」(22-1-21)

など、接続助詞終止のうち、慣用として、それだけで理由をあらわしたり(…ダン、…ダカラ)、あいまい婉曲な終止をあらわしたり(…ダケド、…シタリシテ、…シナキヤ)するばあいは、省略ではなくて、文を構成していると認めた。ただし、たまたま、そこで言いさしたものと認められるものは、省略に扱

った。その判別は、録音ではもちろんのこと、現場にあっても、困難なことがあるが、あきらかに言いさしの省略と認められるもののほかは、省略としなかった。理由は、一つには陳述を負う述語が、すでにそこには存在するからであり、一つには、社会習慣としての終止のかたちを、話しことばでは、このへんまでひろげてよいものだと考えたためである。

やや特殊な終止に、つぎのようなものがある。

「ソコデ クモニモ イロイロ アルト」くそこで 雲にも いろいろ あると」

(5-1-11)

口ぐせで、しきりに言う人もあるが、自分の判断や叙述を確認して終止する表現とおもわれ、参考の資料としたなかの、あるラジオの独話に例が多かった。「ト」のまえにポーズのないことが多いが、時にポーズがあることもある。典型とは言いがたいが、社会習慣としての終止のかたちを、話しことばでは、ここまでひろげてよかるうと思う。

3・2・2' *印2' 省略質問文 「ジテンジャハ…?」く自転車は…?」(12-2-11)

このような、省略形のままでの質問の表現は、言いさしの省略文「ジテンジャハ……」とちがって、そのかたちのままで質問をあらわす意図が明瞭であるから、文としての完了の感じをともなう。その理由は、質問の昇調によって、質問という陳述をあらわしているからである。したがって、述語はないけれども、陳述はあるという、変わった表現の文である。対比すれば、

「ジテンジャハ ノレマスカ」く自転車は 乗れますか?」

「ジテンジャハ フレル」く自転車は 乗れる?」

「ジテンジャハ 」く自転車は?」

のように、述語を欠き、陳述が昇調によってあらわされる。けれども、依然として、質問をあらわす昇調は、述語の役割を持つのではない以上、省略文というべきである。すなわち、「省略文」とは、「述語を欠く文」と定義されるのである。

したがって、前記実例のうちで、「ヒユニネ」く比喩にね」(5-1-16)、「カエリガネ」く帰りがね」(12-2-1)など、また、前記実例には出ないが、

「トウキョウヘ?」、「ボクニ?」、「アシタモ?」、「ダレニ?」、「ドコヘ?」、「キミ

ニカ?」,「ドコヘサ?」

などは、みな、陳述はあっても、述語を欠く文であるから、省略文と認めて、われわれの対象とはしない。ただし、話しことばの実状として、省略文が、かなり、多いという事実を見のがしてはならないことは言うまでもない。それは、ちょうど、話しことばでは不整表現が、かなり、多いという事実を見のがしてはならないということ、そしてまた、不整表現は、われわれの文型の問題の対象から除外するということと、事情が似ている。もちろん、不整表現とちがって、省略文には、論理的なあやまりがあるのではない。文の規定のうえて、不完全なものとするにすぎない。しかしまた、場面や文脈の助けを借りるならば、どんな文節でも語でも、独立的に使うのであるから、その点で、不整表現の文が、場面や文脈の助けによって、現実にくくなくとも1回は通用したというばあいと事情が似ているのである。

しかし、なお、これと関連して、つぎのような問題がある。

「ジテンシャハ…?」と、「トウキョウヘ?」とは性質のちがうところがある。「トウキョウヘ?」は「トウキョウヘカ?」または「トウキョウヘデスカ?」から「トウキョウヘ イッタノ(デス)カ?」に延長できるが、「ジテンシャハ?」は「ジテンシャハカ?」または「ジテンシャハデスカ?」とは言い難い。「トウキョウヘ?」が「トウキョウヘカ?」「トウキョウヘデスカ?」の意味で用いられているにもかかわらず、省略文だとすれば、「トウキョウヘカ?」「トウキョウヘデスカ?」をも省略文と認めることになるのであろうか。

この疑問は、場面や文脈の問題を持ちこまないでも、文法論上の問題として、当然起こりうることである。「ジテンシャハ?」は、それ自体では、判断辞「ダ」「デス」の省略されたものではありえないのだから、述語である可能性は存在しない。しかし、「トウキョウヘ?」は、「ダ」「デス」の省略されたものとして考えることができるのだから、述語である可能性が、ある。

そこで、形式上判断辞のない「トウキョウヘ?」は、「ジテンシャハ?」と同類の述語省略の不完全な質問文なのか、それと異質の判断辞省略の質問文(述語としてはたらきを持つところの質問文)なのか、区別がつかない。理論上は移行過程が認められればそれでいいが、共同作業としては具合がわるい。そ

ここで、これについては、判断辞のない「トウキョウヘ？」の類は、「ジテンシヤハ？」と同類のものとして、省略質問文に扱い、作業対象とせず、判断辞のある「トウキョウヘデスカ？」類は、これらとは異類のものとして、述語を持つ質問文に扱い、作業対象にすることとした。

3・2・3 *印3文頭の 間投語

「ソウネー チイサナ オリョウリジュクミタイナ モンカシラネー」(そうねー 小さな お料理塾みたいな もんかしらねー) (3¹¹-2-2)

「ソウネー アノ コウインサンデネ モノニ ヨッタラー アノー イタシマスヨ」(12-1-19)

「イヤー ソウイウノハ ヤメマシヨウ」(22-1-22)

「ウーン ボクモ ソウナンダ」(22-2-10)

文頭に置かれる間投の語は、文頭という特殊性のために、独立させて文とすることができないではない。また、形式として、感動詞・応答詞とおなじであり、品詞としての間投詞を立てるわけでもないから、感動詞または応答詞による文として、独立させても、品詞論上・構文上の不都合はない。したがって、これを1文として切るかどうかは、もっぱら、あとの文への意味上のつづきかた、および、それと相関して意味上の独立性の程度という、意味の問題になる。その判別は、主観的なものはいることを防ぎえないが、前記言語意識の問題として、大略、つぎのように考えた。

応答表現として、それだけで完結しているものは、もちろん、1文とするが、(1)肯否の応答をあらわすことなく、(2)単に、相手のことばを受けていることとの表現にとどまっておき、(3)つぎの自分のことばを提起するための契機とするにすぎないものは、1文と認めない。

上記実例は、みなそのような意味で、文頭の間投語であると認められたものである。その最も単純なものが、前記実例のなかでは、

「エー フリートーキング」<えー フリートーキング> (22-1-1)

のような、話頭の間投語である。この「エー」は、肯定の応答表現ではない。これを1文としないことは言うまでもない。

3・2・4 *印4押さえの表現 「押さえ」とここで名づけるのは「自己確認」と言ってもよいが、つぎのように自分の発話の終わりの応答詞によるものである。

「モウ ソレハ モウ ソウナンデスガネ、エー」(5-1-3)

「イワシグモデハアリマセン、エー」〈鯛雲ではありません、えー〉(5-1-14)

「シカシ ソラニ アルモノネ、ウーン」〈しかし 空にあるものね、うーん〉
(5-1-1)

これらは、応答詞のはたらきの1つとして、話しことばの特徴的表現にあげることができる。自分で自分の発話の押さえとして、自ら確認することを表明し、結果として、相手に対して押しつけることをあらわすこともある。理論上は、話頭に置かれる応答詞の機能に連続すると見られるが、文の問題として考えるときは、応答詞の応答表現とちがいで、その単独の用法はない(つねに自分のことばのすぐあとにつけくわえて表現する)という事実のために、ちょうど、語における接尾語のように、文以下の段階にあるものと認められる。ただし接尾語の性質とちがって、前文との間に、論理的な意味の切れ目がある。前文の陳述のあとに、前文全体の押さえとして表現されるからである。それは、間投性終助詞「ネ」「ナ」が、文末で文を押さえるのとほとんど機能を同じくする。事実「ネ」「ナ」も、この「エー」などと同様に、前文をいったん切ってから、すぐあとにつけくわえられることがある。文の末尾における間投語的要素と言える。

そこで、このような押さえの表現は、単独で文と認めず、それを含めて1文とした。

したがって、前記実例の、「イワシー…エー」は、「イワシー…」自体が、省略文と認められるから、全体でも省略文と認め、1文にとらないし、末尾の押さえの「エー」だけで1文とすることも認めない。

ただし、実際の発話で、応答表現としての「エー」か、この押さえの「エー」か、意味上区別しにくいばあいは、前文のあとに、すぐつづくものはすべて押さえと認めた。そこに、

「ベツダン ツカイマセンネ /○エー/ エー」〈別段 使いませんね /○えー/ えー〉(5-1-16)

のように相手のことばの挿入があっても同様である。

3・2・5 *印5提示の表現

「タラヲネ ユデルデシヨ、ソレデ…」〈鱈をね ゆでるでしょ、それで…〉

(3⁽¹⁾-3-1)

「デモネー シオウデニ シテネ ソシテ ミリントネ タマゴノキミネ, ソレ
ツカッテネ スリバチデ スルノヨ」〈でもね 撫うでに してね そして 味
齋とね 卵の 黄味ね, それ 使ってね すり鉢で するのよ〉(3⁽¹⁾-3-3)

これら提示の表現のうち、後者のように、文中にあって全体としては挿入に準ずる語句として扱うるものは、問題がない。前者に類する表現が問題であって、文頭にあるために、それだけで、確認を求める表現の文として、独立するものにも扱うことができる。その区別は客観的にできないから、作業上の約束として、このように、文頭にある提示的表現のうち、確認要求の文とも見られるものは、すべて独立の文に扱うこととした。したがって、この例のようなものは、これだけで1文、「ソレデー…」以下別（ここでは省略のある不完全な文）に扱うこととした。

これに類する例を共通資料からえらんで、あげておく。

「ナンカネ タノムデショウ, ト, トウキョウナラ アー ショウチシマシタトカ
ネ カンコマリマシタトカ イウネ…(略)…」〈なんかね 頼むでしょう, と,
東京なら あー 承知しましたとかね かしこまりましたとか いうね…(略)…〉
(22-1-13)

「マッシロニ スッテアルデショウ, アレ ナカナカ タイヘンヨー」〈真白に
塗ってあるでしょう, あれ なかなか 大変よー〉(3⁽¹⁾-6-7)

「アノー デスマスクジャナイケレドモサ ビョウインニ イクト ビガンジュツ
ト イウ, ヤツケレルデショウ, アレ…(略)…」〈あのー デスマスクじゃな
いけれどもさ, 病院に 行くと 美顔術と いう, やってくれるでしょう, あれ
…(略)…〉(22-20-3) (注 「ト イウ」は「ト イウノラ」の意。)

ついでに触れておきたいが、これらのほかに、提示の表現には、話しことばの特徴的なものとしてあげるべきものがある。「部分提示の表現」と名づける
ところの語句がこれである。前記事例には出てこないが、

「アントキハ モウサ マエノ ヒ カエツテキタジャナイ, モウ ネムクテ ネ
ムクテ…(略)…」〈あん時は もうさ 前の 日 帰って来たじゃない, もう
ねむくて ねむくて…(略)…〉(3⁽³⁾-3-1)

「キガ チイサインダケド マックロンナルマデ オイトクデショウ, アマイワヨ
ー」〈木が 小さいんだけど 真黒んなるまで おいとくでしょう, 甘いわよー〉
(3⁽³⁾-12-5)

「ココラノハネ コウ カジルデショ, コウ シャリシャリト モウネ アンマリ

ナンテ イウノ アノ…(略)…」〈こころのはね こう かじるでしょ、こう
ジャリジャリと もうね あんまり なんていうの あの…(略)…〉 (3⁹¹-17-6)

など、意味上はつづいていると解釈されるものであって、たとえば、はじめの例では、「あの時は、前の日に帰ってきたから、だから、とてもねむかった」の意である。文中の句的部分について、話し手が相手への確認を求めようとするために、質問の形態をとるものである。文頭にあるばあいは、前述のように、これだけで1文に扱うこととしたが、このような文中のばあいには、意味のつづきから言って、1文としてここまでで切ることにはできない。

われわれの資料には、あらわれなかったが、

「ウグイスガ スネ、ス ツクレバ イイト オモウノ」〈鶯が 巢ね、巢 作れば いいと 思うの〉

「ボク、ホンネ、ホン ワスレテキタンダ」〈ぼく 本ね、本 忘れて来たんだ〉

「コナイダ ヤマダクンネ、ヤマダクンガ キタヨ」〈こないだ 山田君ね、山田君が 来たよ〉

「ヤマダクンガ カゴシマネ、カゴシマカラ デテクルンダッテ」〈山田君が 鹿児島ね、鹿児島から 出て来るんだって〉

などは、その語的表现である。これらは、すぐあとに、その語をくりかえして表現しているが、その語をくり返さず、指示の語を用いることもある。前記、「…ミリントネ タマゴノ キミネ、ソレ ツカッテネ スリバチデ スルノヨ」がこれである。また、指示の語をも省略してしまって、

「ウグイスガ スネ、ツクレバ イイト オモウノ」〈鶯が 巢ね、作れば いいと 思うの〉

「コナイダ ヤマダクンネ、キタヨ」〈こないだ 山田君ね、来たよ〉

などと言うことがある。これらは、いずれも文中の語について、話し手が相手に確認を求めようとする意識の表明であって、そこまで1文として切ることには、意味上、しないことは言うまでもない。

3・2・6 *印6 選択要求の表現 「コタイデスカ、…エキタイ？」〈固体ですか、…液体？〉 (5-1-4)

このように、yes, no, の返事を求める質問が、2つ以上、それも、質的関連があるもので対立的な概念内容を持つものがならべられるときは、他とちがった理由で、まとめて1つの文とした。理由は、(1)これらの質問の一つ一つで

あれば、yes, no, で答えられるが、2つ以上ならばと、そのどれかを選択し決定することを求められるために、yes, no, では答えられなくなるという事実、(2)全体をまとめて「コタイデスカ、エキタイデスカ、ドッチデスカ？」という表現に延長できる。つまり全体として、「ドッチデスカ？」という説明要求の表現に近いと解釈される事実、以上2点である。「コタイデスカ、…エキタイ？」の類は、狭義の文の規定であれば、あえて1文とせず、2文(以上)に分割してよいものである。それは、一つ一つ質問をあらわす文だからである。ここで選択要求の表現を1文としたのは、したがって、後述するところの表現意図の問題にかかわる。そこでは、質問の表現を、2類4種にわけて、その一つに選択要求を置いてある。それは、上記のように「ドッチデスカ？」とか、「ドレデスカ？」とかいう表現と同類であって、合わせて選択要求の表現とした。(イエスペルセンのいう X-question の文を拡大したことになる。) 考えたかとしては、選択要求の表現は2文以上から成立するということもできないではない。しかし、それでは、一つ一つの文に対する応答の成立を予期し、合わせて2つ以上の対話単位を構成することを予想することになる。「コタイデスカ、…エキタイ？」などの選択要求の表現の中での一つ一つの語句は、そのような資格を持つものではない。全体2つ以上がまとめて質問の表現を構成し、それが相手の応答を待ってはじめて1対話単位をなす。yes, no で、一々応答しないのはそのためである。その意味で、これを1文とすることとした。すなわち、ここでは、対話における表現意図の問題が弁別の基準とされる。

“他とちがった理由で、” というのはその意味である。

前記実例には、このほか、

「マエニ…ノヨウナ オンゴトヲ キボウシテマスカ、ソレトモ アノー コウインサンナラ ホカノ オンゴトデモ イインデスカ？」〈前に…のような お仕事を 希望 していますか、それとも あのー 工員さんなら ほかの お仕事でもいいんですか？〉 (12-1-21)

があり、これらのほか、共通資料には、つぎのような例がある。

「アサデスカ、パンデスカ？」〈朝ですか、晩ですか？〉 (5-1-20)

「ゴク カタチハ マールイデスカ、ナガインデスカ？」〈ごく 形は ^丸丸いですか、長いんですか？〉 (5-3-5)

「エー ソレジャ シンブンジャノ ニンゲンカ、ジャガイノ ニンゲンカ？」

〈えー それじゃ 新聞社の 人間か、社外の 人間か?〉 (5-12-6)

「ヤッパリ シンブンニ カンケイガ アルト イッテモデスネー コノ^ニ ヘンシ
ユウテキナ コトカー、アルイハ ソノ シンブンノ ジギョウト イウ セン
タイノ ケイエイテキナ コトカ、ドッチデスカ?」〈やっぱり 新聞に 関係
が あると いてもですねー この 編集的な ことか、あるいは その
新聞の 事業と いう 全体の 経営的な ことか、どっちですか?〉(5-12-21)

「カラダ ジブンデ ヒカクテキ ジョウブト オモワレマス? ソレトモ アマ
リ ジョウブデナイト オモイマス?」〈体 自分で 比較的 丈夫と 思われ
ます? それとも あまり 丈夫でないと 思います?〉 (12-21-11)

「カラダノ ホウ ジブンデ ヒカクテキ ジョウブト オモワレマス? ソレト
モ ビョウキ シヤスイデスカ?」〈体の 方 自分で 比較的 丈夫と 思わ
れます? それとも 病気 しやすいですか?〉 (12-6-18)

「キョネンノ イマゴロカ、モット マエカ?」〈去年の 今ごろか、もっと 前
か?〉 (16-10-7)

3・2・7 *印7倒置の表現 「ソレーヲ コウ イルノ、オナベデ」〈それーを こ
う いるの、お鍋で〉 (3^{III}-3-6)

このような倒置の表現は、話しことばには、かなりしばしばあらわれる。日本語では、陳述を負う述語は、文末に位置するのが普通の文の型であることは、言うまでもないが、ここで“普通の”というばあいには、そのよりどころは、2つあると思う。一つには、話しことば・書きことばを問わず、“社会習慣として普通であると思う”ということ。二つには、文法論上の文の規定として、“文末には述語が位置すると考えるのが普通である”ということである。これら2つのよりどころには、考慮の余地が大いにある。前者にあっては、社会習慣の幅を少しひろげて考えれば、とくに、話しことばでは、きわめて普通のことであって、上例について言えば、「……オナベデ」までで、ひとまとまりだと、だれしも思うにちがいない。後者については、文末には述語が位置し、主語や修飾語は、その前に位置するのが普通であるにはちがいないが、述語があれば、そこで、すべての文は成立し完了すると言うこととは、別問題である。“普通”でなくても、文法論上の規定に矛盾がなければよいはずであるし、“正位置”でなければ文でないとは言えない。もちろん、きわめて狭義に規定してしまえば、特定の位置しか許さないことになるが、少なくとも話しことばの文型を問うとき、そのような狭い範囲の規範に終始することは、望ましいことではない。倒

置は、修飾成分が被修飾成分より後置されることであり、必ずしも述語への修飾成分が、述語より後置されることだけを言うのではないが、倒置ということば自体が、なお後置成分の修飾能力を認めているのであり、補充との区別がはっきりしないと言われるのも、そのためである。

要するに、広義に社会習慣を解し、倒置もまた話しことばの文型には存在することを認めてよいと考える。

しかし、後置の修飾成分として、修飾の感じを生みえないような、^間が置かれるときは、別文と認めなければならない。「ソレヲ コウ イルノ、(間)オナベデ」とでも表記されるようなものは、「文+省略の不完全文」と認めるべきである。これを名づけて補充の表現と言うほうがよいかと思うが、名称のことは、しばらくおく。

意味上も、^間のうえでも、倒置の表現による1文か、そうではないのか、判定に苦しむばあいには、形態上、つぎのように規定した。すなわち、“倒置の表現は、^間に無理がなく、後置成分の可逆性のものに限定する。似た形態をとっても、不可逆性のものは、その後置成分を単独の省略文または独立の1文と認める。

以上のように考えて、共通資料の倒置表現をまとめた結果は、つぎのとおりである。

倒置表現全 293 例の後置部分は、ほとんど主格を含めた広義連用修飾格に立つ成分であって、その他のものは、少ない。その他のものとは、連体修飾格・独立格に立つ成分である。

また、後置部分の大部分は、成分の機能として単一のものであって、2つ以上の成分の機能を持つものは、少ない。(1つか2つかの区別は、解釈によってちがってくることがあるから、問題になるばあいもあるが、1つか2つか迷うものは2つにかぞえてあるから大体のところに変りがない。また、實際上、2つか3つか迷う例が、1例だけあったが、それ以外に3つ以上のものはなかった。)

したがって、概括的に言えば、後置部分は、“単純な連用修飾格に立つ成分1つのものが多い”といてよい。以下にその数と用例を示す。(★印については後に記す。)

全 293 例	I	1 成分後置 240 例	(1) 主格後置……………	例数 89
			(2) 用修格後置……………	143
			(うち)副詞……………	(52)
			数詞……………	(4)
			その他……………	(87)
			(3) 体修格後置……………	6
			(4) 独立格後置……………	2
			(うち)接続詞……………	(2)
	II	2 成分後置……………		28
	III	★印……………		25

用例抜萃

I 1成分後置のうち、(1)主格後置 (抜)

「ナンカ コウ ボウミタイン ナッテイルト イウ イミデスカ? ホソナガイ
ト イウノハ」〈なんか こう 樺みたいん なっていると いう 意味ですか
? 細長いと いうのは〉(5-10-13)

「ソリヤ ハカニヨッテ チガウヨ, オオキサハ」〈そりゃ 墓によって ちがう
よ, 大きさは〉(22-8-8)

「カイミョウハ カイテナイダロウ, アレ」〈戒名は 書いてないだろう, あれ〉
(22-3-20)

「シッキガ アルカラネー ヤッバリ クサルンダヨ, キナンテ」〈湿気がある
からねー やっぱり 腐るんだよ, 木なんて〉(22-10-21)

「ナンダカ クサイロガ ニゴッタミタイナ ヘンナ イロジャナイ, ウダイスツ
テ」〈なんだか 草色が 濁ったみたいなの 変な 色じゃない, 驚って〉(3⁰²-3-3)

「ソレデモ ガッコウヘ イッタカラナ, オレモ」(16-12-22)

「オハカマイリニ イッテ ミタ コト ナイ, アタクシモ」〈お墓参りに 行っ
て 見た こと ない, あたくしも〉(22-4-10)

「イロイロ アルデショウ, クモノ ナマエガ」〈いろいろ あるでしょう, 雲の
名前が〉(5-1-18)

「ジムインサンハ ダイタイ イマ イチバン オオインデスヨ, キュージンガネ」
〈事務員さんは 大体 今 一番 多いんですよ, 求人がね〉(12-13-18)

1成分後置のうち、(2)用修格後置 (抜)

「ソウイウノガ イッパイ カイテアンノ, マワリニ」(22-7-1)

「ソウスト ソノ ハカヘネー アトカラネー イレルンダッテサ, コツラサ」
〈そうすと その 墓へねー あとからねー 入れるんだってさ, 骨をさ〉

(22-6-22)

「ヨウスルニ アアイウ モノヲ ハイシテサ ソウイウ モノヲ ニジュウノト
ビラノ カワリニ イレロツタンダ、ソコヘ」〈要するに ああいう ものを
廃してさ そういう ものを 二十のとびらの かわりに 入れろつたんだ、そ
こへ〉(16-21-8)

「ナンカ モウ クシヤクシヤニ ナッチャイマシタネ、トチュウデ」(5-11-13)

「ヤッバリ インエイノ ホウガ マダ チカイワネ、アジヨリモ」〈やっぱり
陰影の 方が まだ 近いわね、味よりも〉(22-23-19)

「ソレカラ コナイダ ブチガ モッテイタネ、ソノ ソバカス ケス クスリ」
〈それから こないだ ブチが 持っていたね、その そばかす 消す 薬〉
(22-21-22)

「ナニカ ナマデ スグ タベラレル モノ カウノハ チョット キモチガ ワ
ルイワ、ドシテモ」〈なんか 生で すぐ 食べられる もの 買うのは ちょ
っと 気持が 悪いわ、どしても〉(3¹¹-4-1)

「イチジクガ タクサン ナッテ ショウガ ナイワ、ウチ」(3¹²-8-7)

「コウイウ ヒト イイワネ、ソレテイクノニネ」〈こういう 人 いいわね、連
れて行くのにね〉(3¹³-15-10)

「オレナンカ マイバン オヤジノ オショウバンダヨ、コレニ イッパイダケ」
〈おれなんか 毎晩 おやじの お相伴だよ、これに 1杯だけ〉(16-12-4)

〈副詞〉(抜)

「ソウイウ クモデス、ヨウスルニ」〈そういう 雲です、要するに〉(5-1-13)

「ズメグライデショウ、チュウド」〈雀ぐらいでしょう、ちょうど〉(3¹²-3-7)

「ムズカシイデスネー、ヤッバリネ」(5-1-18)

「ヤッチミマショウ、スコシ」(27-1-9)

「ハイルデショ、モチロン」(22-9-21)

「ウンドウハ ドンナ モノヲ ヤリマスカ? ダイタイ」(12-20-23)

「フメマセン、ゼンゼン」〈踏めません、全然〉(12-11-14)

「アレハネ ズルインダヨネ、スゴクネ」(16-1-19)

〈数詞〉(全)

「マイニチデスカ? ヨソカゲツ」〈毎日ですか? 4か月〉(12-16-8)

「ウン アルンダ、イッカイ」〈うん あるんだ、1回〉(22-8-4)

「ハイッタ コト アルヨ、イッペン」(22-10-16)

「ヤナカデネ ハイッチャッタシタダ、サン…サンカシヨグライ」〈谷中でね はい
っちゃったんだ、3…3か所ぐらい〉(22-9-2)

1成分後置の(3)体修格後置 (全)

「クモノ ナマエデス、キワメテ カンタンナ」〈雲の 名前です、きわめて 簡

単な〉 (5-1-22)

「ソレカラ コレニ…コレガ マー ダイタイ ホンカードデゴザイマスネ、ナカヘ イレル」〈それから これに…これが まー 大体 本カードでございますね、中へ 入れる〉 (27-3-2)

「アレハネー ウラニ カイテアルンジャナイノ、オハカイシノ」〈あれはねーうらに 書いてあるんじゃないの、お墓石の〉 (22-4-8)

「ゴマカシナノヨネ、イッジュノネ」〈ごまかしなのよね、一種のね〉 (22-21-14)

「イトハンダヨ、オオサカノ」〈いとはんだよ、大阪の〉 (16-15-22)

「ソレニ シタカラノ キョリガ アルンデショウ、ナンメートルッテ イウ」〈それに 下からの 距離が あるんでしょ、何メートルって いう〉(3¹²-1-4)

1 成分後置のうち、(4)独立格後置 (全)

〈接続詞〉

「アー ソウイタシマショウ、ソイデハ」 (27-2-20)

「ナイ ホウガ イイヨ、ソリャー」 (16-14-24)

II 2 成分後置 (抜)

「ナーンデスカ、トチュウデ ヤメチャッテ、カンケイナイッテ」〈^{なん}何ですか、途中で やめちゃって、関係ないって〉 (5-12-3)

「キレイナンダネ、アレ、ミンナ」 (22-12-20)

「ユッタカ、ソナナ コト、オレハ」〈言ったか、そんな こと、おれは〉(22-22-13)

「イイナー、アレナー、ジッサイ」 (16-3-14)

「ケイザイテキナ ハラダナ、キサマノ ハラ、ダケド」〈経済的な 腹だな、貴様の 腹、だけど〉 (16-18-7)

「アクルヒグライ オイシインダ、マタ、ソノ トキハ」〈明くる日ぐらい おいしいんだ、また、その 時は〉 (3¹³-14-1)

「ヤキシバ オイシイワヨ、トッテモ、コノウチノ」 (3¹³-20-4)

「ボクハネー ド…ドコモ マワラインダモノ、トウキョウニ イタ コトハ イタケド、ジュウネン」〈ぼくはねー ど…どこも 回らないんだもの、東京にいた ことは いたけど、10年〉 (16-19-4)

「サンジュウゴネンゴロ ツクラレタンデショ、アレ、センキウウヒャク」〈35年ごろ 作られたんでしょ、あれ、千9百〉 (16-6-2)

「ジャ ミンナ オンナジ コト カイテアンナ、アレ、タシカ」〈じゃ みんな 同じ こと 書いてあんな、あれ、たしか〉 (22-4-19)

「デモ タカインダモノネ、アレネ、チョットネ、オネダンノ ホウガ」〈でも 高いんだものね、あれね、ちょっとね、お値段の 方が〉 (16-19-23)

(註) 上記のうち最後の1例は、解釈のしかたによっては、3成分倒置と認めること

もできる例である。

Ⅲ ★印

- ① ★印用例の大部分は、くり返しの表現のものである。それらは可逆性がないか、または弱いという点で、純粹の倒置表現に入れがたいと考えることもできる。 22 例(抜)

「スッパインデ ミナサンチニ オアゲシヨウト オモウンデスケド シツレイダカラネ、アマリ スッパインデ」〈すっぱいんで 皆さんちにおあげしようと思うんですけど 失礼だからね、あまり すっぱいんで〉(3⁹²-10-3)

「ハカノ ナカ ハイッタ コト アル? オハカノ」〈墓の中 はいったこと ある? お墓の〉(22-8-3)

「アカクナッテモネ コウ コノヘンガ ガクガクスルヨウナ キガ スルンダヨ、ヒザノ アタリガ」(16-11-20)

「ソイカラ アスコニ アレガ アンデスヨ、ビジツガッコウガネ」〈そいから あすこに あれが あんですよ、美術学校がね〉(16-18-16)

「ソウカセンベー…オイシイナ、アレネ」〈草加せんべー…おいしいな、あれね〉(3⁹³-18-5)

- ② ①に準ずるが可逆性のやや強いものがある。 2 例(全)

「アレハネー ボクノ トモダチデネー チョウコクカガネーー チョウド ブンキョウノ アノ ブンキョウクヤクショノ ソバニ スンデタンデスヨネ、ヒサカタチュウ」〈あれはねー ぼくの 友達でねー 彫刻家がねー ちょうど 文京の あの 文京区役所の そばに 住んでたんですよ、久堅町〉(22-12-15)

「チョット アサ ハヤカッタデスカラネ、クジ ジュップングライデシタカ」〈ちょっと 朝 早かったですからね、9時10分ぐらいでしたか〉(27-5-15)

- ③ 数詞を後置するが可逆性が弱く、単なる補充の表現と見るほうがよいかもしれないものがある。 1 例(全)

「ダイシツキ」…ダケデゴザイマスネ、ニマイ」〈(台紙つき)…だけでございますね、2枚〉(27-6-16)

3・2・8 *印8「ト」の用法

「ト イウ トコロカラ ハジマッテ、ジャ ミナサンニ グット オシャベリヲ シテイダダキマシヨウ」〈と いう 所から 始まって、じゃ 皆さんに ぐっ と おしゃべりを していただきますよう〉(22-1-8)

「ト イウ ワケデス」(22-1-8)

このような、やや特殊な会話の受けかたは、「ト…」以外にもある。

「ソウイウノモ アルヨ」「ノモ アルダロウケド アンマリ ミナイネ」(22-6-7)
「オンロシイッテ コトデハナイ」「ナイノ？」(22-28-13)
「トウキョウニモ ゴザイマス」「ア ニモ アル」「ニモネ」(5-7-14)
「ア アノ カブトトカ ナンカネー ヨク アノー オッテ ツクリマスネ、コ
ドモサンガ、エー」「ジャナイノ？」「ジャナイデス」(5-6-16)
「カテイデモ ツカイマス」「カテイデモネ」「デモ」(5-14-3)

これらは、典型からはずれる特殊な表現であり、前の発話を受けて、あるべき部分を、場面と文脈とによりかかることによって、省略してしまったものである。前述した省略は述語省略であり文末省略であるが、これは文頭省略である。ただ、そのなかで、「ト」は、他と少し性質がちがう。「ノモ」は、一般に文節のなかでの附属的要素であるにとどまって、文頭に立つことがないと認められるのに対して、「ト」は、「トハイエ」「トイウワケデ」「トイウノデ」のように、文頭に立って、他の語と一緒に接続詞の役割を果すことがある。また、文節に切るばあいに、つねに文節のなかで、その末尾に位置する附属的要素かどうか、問題になるところである。前述のように、やや特殊な終止に、「ソコデ クモノモ イロイロ アルト」(5-1-11)のように、判断叙述の文を押さえる表現もある。しばしば言われるように、「ト」には、指示詞の役割があって、その能力が、このようなばあいに、あらわれる。ただ、他の純然たる指示詞とちがって、今日では、このように「イウ」「オモウ」などと結合したり、「トニカク」のような熟合語のなかで、その力をあらわしうる程度の、独立性の弱いものであるから、「ソウ」などと同様には扱えない。理論上は、機能の連続性を認めれば足りるが、作業上は「ソウ」に準ずると認めるか、文頭省略と認めるか、いずれかに決定しておく必要がある。ここではなお、独立性の弱いものと認めて、これらは、文として不完全なものに扱うこととした。したがって、前記実例中の、

「ト イウ トコロカラハジマッテ」(22-1-8)

は、その意味でも、また文末の述語の省略という意味でも、不完全な文と認められる。

上述の前記実例のほか、共通資料には、つぎのようなものがある。

「ト イウワケナノヨ」(22-11-13)

「テ イウト チョット チガッチャウンジャナイカナー」(22-25-4)

「ト モウシマスト」(5-7-19)

4 問題点のまとめ 以上のようにして、前記事例にあらわれた問題点を処理したが、このほかに、いくつかの問題点があった。それらを通じて、文として認めるものを定めて、われわれの文型をもとめる作業の対象とし、また、文として不完全なものと認めるものを定めて、対象外とした。以下に、そのまとめを述べる。

文は、「陳述を負う述語または独立語1つを持ち、社会習慣として、ひとままとまりの意味をあらわして言い切ることば」と規定する。

われわれの対象外とする文的な表現は、(1)不整文(誤用文を含む)、(2)省略文(中断文を含む)であるが、対象とするかしないかのさかい目にある表現も、いく種類がある。主要な部分については、前述したが、なお、以下各項で、述べるところがある。

単純な文のうち、一般の述語または独立語1つを持つ文については、述べるまでもないが、その他の問題になりそうな文について前述したところを含めて例とともに簡条書にしておく。

1 単純な文(____線部が1文)

(1) 感動詞文

「ア ア ア ア」(5-1-16)

「ア ハ」(5-3-10)

「ア ナルホド」(22-19-2)

「ア ソウカ」(5-6-23)

(2) 応答詞文

「ウン ウン」(16-13-14)

「フ フ」(22-8-1)

「イヤ イヤ」(22-8-12)

「ハ ハ」(27-8-1)

(3) 接続助詞由来の終助詞終止文

「ダケドネー モウ トル ホウガ オモシロクッテ」〈だけどねー もう 取る
方が おもしろくって〉(3⁽²⁾-13-10)

「カルク ウゴカスカラネ、カラダ」〈軽く 動かすからね、体〉(3⁽²⁾-6-6)

「ドッチデスカト キカレルト コマリマスガネ」〈どっちですかと 聞かれると 困りますがね〉 (5-12-24)

「デモ コトシハ ナンデスカ スコシ サイテマスケド」〈でも 今年は なん ですか 少し 咲いてますけど〉 (3⁽²⁾-4-10)

(4) 単純提示文

「ダッテネー カエツテキテサ ヨル トウキョウヘ ツイタデシヨ, ソイデ ア
クルヒネ カイシャノ バスリョコウデネー イッタダモン」〈だってねー
帰って来てさ 夜 東京へ 着いたでしょ, そいで 明るる日ね 会社の バス
旅行でねー 行ったんだもん〉 (3⁽³⁾-2-2)

「ソレデ シバラク マツテイルト カワクデシヨ, ソコラ トルンダナ」〈それ
で しばらく 待っていると 乾くでしょ, そこを 取るんだな〉 (22-19-12)

「ソウイウ ヤシキノ ナカニ ハカガ アンダヨネ, ソコヘ ウメテッカラ ソ
ノマンマニ ナツテ…ソノ ケッキョク トリコワシニ ナッタリナンカシテ
ソノマンマニ ノコッチャッテンノネ」〈そういう 屋敷の 中に 墓が あん
だよね, そこへ 埋めてっから そのまんまに なって…その 結局 取りこわ
しに なったりなんかして そのまんまに 残っちゃってんのね〉 (22-14-8)

(5) くり返し表現の一つごとの文

「アゲテ アゲテ」 (22-17-6)

「ヒユ ヒユ」〈比喻 比喻〉 (5-1-15)

「ヤッテタ ヤッテタ」 (22-20-6)

「ソウデス ソウデス」 (5-8-11)

(6) 述語並列的表現の一つごとの文

「オオドオリヤナンカ デルト ゼンゼン ダメデスカ? ゼンゼン ノレマセン
カ?」〈大通りやなんか 出ると 全然 だめですか? 全然 乗れませんか?〉
(12-6-6)

「デモネ マニノ トコハ ヤクニシュウカングライノ ケイケンガ アルデシヨ,
サイショカラ ソレダケ モラッテタ ワケジャナインデシヨ?」〈でもね 前
の ところは 約2週間ぐらいの 経験が あるでしょ, 最初から それだけ も
らってた わけじゃないんでしょ?〉 (12-3-9)

「アノ…デ カラダラ スゴク コウフニ ウゴカスノネ, オチツイテナイノネ」
〈あの…で 体を すごく こうぶに 動かすのね, 落ちついてないのね〉
(3⁽²⁾-3-6)

「コノー ソバカスト イウノハ ネブカクナインダッテネ, ソシテ ヒョウメンダ
ケナンドスッテネ」〈このー そばかすと いうのは 根深くないんだってね,
そして 表面だけなんですってね〉 (22-20-19)

(7) 補充表現としての完全な文

「ダス、ダス、ダスヨ、アノ シラキハ ダスヨ」〈出す、出す、出すよ、あの白木は 出すよ〉(22-10-5)

「モウ ナイ、モウ ヤッテナイ」(16-5-3)

(8) 省略文由来の慣用による完全な文

「ポスターヲ ドウゾ」(5-2-10)

「ソイジャー ドウモ」(27-5-24)

「ドウゾ コチラへ」(27-8-17)

II 文的要素(____線部)を含む文(____線部が1文)

(1) くり返し表現としての文節または文節連結を含む文

「スッパインデ ミナサンチニ オアゲンヨウト オモウンデスケド シツレイダカラネ、アマリ スッパインデ」〈すっぱいんで 皆さんちに おあげしようと思うんですけど 失礼だからね、あまり すっぱいんで〉(3⁽⁹⁾-10-3)

「ハカノ ナカ ハイッタ コト アル? オハカノ」〈墓の中 はいったこと ある? お墓の〉(22-8-3)

「アトカラ ソコへ イレタンダッテ、ソコへ」(22-6-18)

(2) 補足の表現

i 先行の指示語に対する補足の表現

「イハイト ソレカラ アレニ カイテアルジャナイ、アノ セキヒニ」〈位牌とそれから あれに 書いてあるじゃない、あの 石碑に〉(22-5-12)

「ソレヲネー エイゴデ イウ パアイ ヒジョウニ ムズカシインデスッテ、ビョウキノ ジョウタイヲ セツメイスルッテ コト」〈それをねー 英語で言う場合 非常に むずかしいんですって、病気の 状態を 説明するって こと〉(22-23-10)

「アレヲ コウ ホラ ケズッチャッタデショ、ガケヲネ、ホトンド」〈あれをこう ほら 削っちゃったでしょ、崖をね、ほとんど〉(22-12-18)

ii 倒置の表現

「イロイロ アルデショウ、クモノ ナマエガ」〈いろいろ あるでしょう、雲の名前が〉(5-1-18)

「ソウイウノガ イッパイ カイテアルンダ、マワリニ」(22-7-1)

「ヤケドシタノネ、キョネンハ」〈やけどしたのね、去年は〉(3⁽⁹⁾-4-6)

「アジッテ イウノモ チガウカラネ、セイカクニ イウト」〈味って いうのもちがうからね、正確に 言うと〉(22-23-18)

iii 言いかえによる補足の表現

「ヤマビラキ、タニガワノ、ヤマビラキノ マエ」〈山開き、谷川の 山開きの前〉(3¹¹-8-8)

「アノ ヒトタテハ イッパク、マルイッパクシタノヨネ、チョウド」〈あの たちは 1泊、丸1泊したのよね、ちょうど〉(3¹¹-5-6)

「ソレヲ センブ イワユル カロウトニ ナオシタ ワケネ、コンクリ ハッテシタヲ コウネ、アナニ」〈それを 全部 いわゆる かるうとに 直した わけね、コンクリ はって 下を こうね、穴に〉(22-10-19)

(3) 挿入文を含む文

「デモ一 ナンカ ソウイウ ザイリョウ…ザイリョウツテ イウノカシラ テンビトカ ソウイウ モノガ ズイブン イルンジャンナイ?」〈でも一 なんか そういう 材料…材料って いうのかしら 天火とか そういう ものが ずいぶん いるんじゃない?〉(3¹¹-9-6)

「ナンカ フツウニサー アノー ナントイウノカナ一、キニ…キニ…キニ クワナイテ ヨウナ コトラネ イヤラシイテ イウ ワケデスヨ」〈なんか 普通にさー あのー なんとというのかなー、気に…気に…気に くわなくて ようなことをね いやらしいて 言う わけですよ〉(22-26-6)

「ダカラ ガイジンガ キイタ バアイ ドウナノカシラ、ヤッパリ コウ ザー ット キイテミテサー キョウトベンヲ イチバン ウツクシト カンジルカシラ」〈だから 外人が 聞いた 場合 どうなのかしら、やっぱり こう ざーっと 聞いてみてさー 京都弁を 一番 美しいと 感じるかしら〉(22-27-17)

(4) 挿入的提示文を含む文

「ダケドネー フシギニサ タトエバネー ウチナンカデモネ ソノー テチノ シャジント…(略)…コウ シャジंगा カザッテアルンデスヨ、ソウスツト…(略)…ヲ イッテミタクナルネ」〈だけどねー 不思議にさ たとえばねー うちなんかでもね そのー 父の 写真と…(略)…こう 写真が 飾ってあるんですよ、そうすつと…(略)…を 言ってみたくなるね〉(22-2-22)

「ワタクシモ アレ ホラ ヨク デパートナンカデ ヤッテルデショ、アノ ガラスバリ マワリ シテネ ミンナ ナガメテルデショウ、スト ミテルト ナンカ ヤリタクナッチャッテネ」〈私も あれ ほら よく デパートなんかで やってるでしょ、あの ガラスバリ まわり してね みんな ながめてるでしょう、すと 見てると なんか やりたくなっちゃってね〉(3¹¹-5-8)

「コトシハネー コトシハ モウ ダッテ アタシタチ ホラ イモウトト ヤコウデ イッテサ、アサ ツイテ スグ スベッタデショウ、ダカラ モウ ノム

ヒマナンカ ナイモン」〈今年はねー 今年は もう、だって あたしたち ほ
ら 妹と 夜行で 行ってさ、朝 着いて すぐ すべったでしょう、だから
もう 飲む ひまなんか ないもん〉 (3⁽³⁾-5-2)

「コレ スッカリ センテイ スレバ ヨロシインデスガ、アノ フトイ キガ ア
ンデシヨ、アアイウ ウエニ {イキッテノハ アノー ダシテンマッテ イケ
ナインデスッテネ} 〈これ すっかり 剪定すれば よろしいんですが、あの
太い 木が あんでしょ、ああいう 上に {いい木ってのは あのー 出してし
まって いけないんですってね〉 (3⁽²⁾-4-3)

(5) 副詞的文を含む文

「モクヨウビカラカシラ、オシルト ヨル アルデシヨウ」〈木曜日からかしら、
お昼と 夜 あるでしょう〉 (3⁽¹⁾-2-4)

「ツユラ スウンデシヨウカ、ナンカ チョイチョイット ツツイテマスネー」
〈露を 吸うんでしょうか、なんか ちょいちょいっと つつついてますねー〉
(3⁽²⁾-2-10)

(6) 提示語を含む文

「ダカラ アサト ヒルト バントカネ、ソノ ジカンダケシカ ナイラシイノ
ヨ」〈だから 朝と 昼と 晩とかね、その 時間だけしか ないらしいのよ〉
(3⁽¹⁾-11-10)

「サイシヨハネー アノ センタクノ タライネ、コンナ オオキナ、アレニ イッ
パイ トレマシタ」〈最初はねー あの 洗濯の たらいね、こんな 大きな、
あれに いっぱい 取れました〉 (3⁽²⁾-7-9)

「エトカネ ソウイッタ アノー シュミデスネ、ナニカ ゴザイマセンカ」〈絵
とかね そういった あのー 趣味ですね、なにか ございせんか〉
(12-13-23)

(7) 引用文を含む文

「ソントラネ ウドン タベナイト オモッテ ウドンノネー オドンブリ モッ
テコナカッタラネ、『ボクニ タベサセナイ、ボクニ タベサセナイ』 ッテ プ
ンプン オコッテンノ」〈そしたらね、うどん 食べないと 思って うどんの
ねー おどんぶり 持ってこなかったらね、『ほくに 食べさせない、ほくに
食べさせない』って ぶんぶん おこってんの〉 (3⁽³⁾-18-10)

(8) 選択要求表現文

「ゴク カタチハ マールイデスカ、ナガインデスカ?」〈ごく 形は ^丸丸いです
か、長いんですか?〉 (5-3-5)

「カラダノ ホウ ジブンデ ヒカクテキ ジョウブト オモワレマスカ、ソレト

モ ビョウキ シヤスイデスカ?」〈体の方自分で比較的丈夫と思われ
れますか、それとも病氣しやすいですか?〉(12-6-18)

「エー ソレジャ シンブンジャノ ニンゲンカ、ジャガイノ ニンゲンカ?」
〈えー それじゃ 新聞社の人間か、社外の人間か?〉(5-12-6)

(9) 言いなおし文を含む文

「アノネ アー 『ビノ…ビノ… ビノサイテン』 ジャナカッタ、ソウソウ 『ジョセ
イビヘノミチ』」〈あのね あー『美の…美の 美の祭典』じゃなかった、そうそ
う『女性美への道』〉(22-20-5)

「ソレハネー アノー アタラシイ シンブン、デキタバツカリノ シンブント
フルシンブント ワケテネー エート キョウノ シンブンジャナイ フルシン
ブンノ ホウダ」〈それはねー あの一 新しい 新聞、出来たばかりの 新
聞と 古新聞とに 分けてねー えーと きょうの 新聞じゃない 古新聞の
方だ〉(5-3-20)

「アレハ ドウイウ イミ? ニホンゴニ イヤッ…ニホンゴジャナイ トウキョ
ウベンニ ナオスト」〈あれは どういう 意味? 日本語に いや…日本語じ
ゃない 東京弁に 直すと〉(22-28-3)

「ニホンゴジャナイ、トウキョウゴダロ?」〈日本語じゃない、東京語だろ?〉
(22-29-19)

(10) 反唱文を含む文

「イヤ、ツツム タメニ ツカッテル…ツカッテルンジャナインデスネ、エー」
〈いや、包む ために 使ってる…使ってるんじゃないんですね、えー〉(5-6-9)
〔ソレデ イインデスカ〕「ソレデ イインデスカ、マダマダデスヨ」(5-4-15)

Ⅲ 不完全文〔対象外〕

(1) 不整文

「ソノ ウエヘ ウチガ デキテ ドウデモ コウ ナッテ アア ナッテッテ
モウ ナガイ…フルインダロウ、ムカンノネ」〈その 上へ うちが 出来て
どうでも こう なって ああ なってって もう 長い…古いんだろう、昔
のね〉(22-14-11)

「アレガネー ケイキガ ヨク ナッテサー ソレデネ ソコニネー アノー ケ
ッキョクネ ソノ ヒトモネ ダンナサンガ シンジャッタ、ソコヘ ヒッコシ
タ トタンニ、ソレデー ミボウジンガ ヒトリ スンデイタ ワケヨ、ソコノ
一…(略)…」〈あれがねー 景気が よく なってさー それでね そこにねー
あの一 結局ね その 人もね だんなさんが 死んじゃった、そこへ 引越した
とたんに、それでー 未亡人が ひとり 住んでいた わけよ、そこの一…
(略)…〉(22-15-18)

(2) 省略文

「オナマエハ？」(27-7-21)

「オシエテイタダイテネ、ニュアンスニ トンダモノ」(22-28-23)

「ゴカンケイナク」〈ご関係なく〉(22-16-9)

(中絶文)

「アレ アノー ナンダイ チヨノヤマジャナイ ヨシバヤマノ コウエンカイ…
…」〈あれ あのー なんだい 千代の山じゃない、吉葉山の 後援会…〉

(16-15-19)

「アンマリ アアイウ トコロヘ テヲネ クワエテシマッテ ホントニ…エー」
〈あんまり ああいう 所へ 手をね 加えてしまって ほんとに…えー〉

(3⁽²⁾-15-4)

「ソウネー ヨコタ、ヨコタ ンー ヤッパリー ソウネ ヨコタ エー…」〈そう
ねー ヨコタ、ヨコタ ンー やっぱりー そうね ヨコタ えー…〉(27-7-16)

5 おわりに 文の認定は、基本的にも具体的にも、さまざまな問題を含んでいる。ここに、実例とともに述べたところで、そのすべてを尽くすとは、もちろん、言えないし、原則的な方法上の技術の点でも、なお、考究の余地があらうと思われる。しばしば触れたように、文法論上の抽象的単位概念としての文と、それと相関しつつも、なお、質的差異を含むところの作業上の具体的単位としての文との、そのからみあいの問題が、もっとも、大きい。また、一方では、従来、いろいろな意味を含み負わされて来た漠然たる文の概念も、文という術語を使う以上は、無視することはできない。まったく、あらたな規定をすとしても、従来の漠然たる概念と無縁ではありえない。あらたな術語とあらたな規定とを用いるにしても、内容上、従来の文の概念と、共通するところがないということはありえないばかりでなく、かなりの部分が共通すると言ってよい。要は、漠然たるところを厳密に規定することが必要だと思われる。その点で前述するところに、われわれは安住しきれぬものではないけれども、具体的実例に即しつつ、共通資料の範囲で、多少とも、問題を厳密に考究する努力を払った。

かえりみて、なお基本的な問題のむずかしさが、大きく多いことを感じないではいられないけれども、具体的な処理に関しては、質的には、これぐらいの

ところに落ちつこうかと思われる。もちろん、量的に、すべての問題を尽くしたとは言えないが、共通資料以外のかんりの資料に当たってみても、さしあたり、非常に問題になる点が、前述するところ以外に、それほど、あろうとは思われない。むしろ発話の具体例に即して、文の問題を考えると、つねに、ひっかかることは、音声要素とのからみあいの事である。大まかなところでは、こまかな音声要素を度外視しても、発話における文に該当する部分は、たいいてい、わかるばかりでなく、文法的単位として文を認める限りでは、原則的には、音声要素は抽象された形態として扱うべきものである。しかし、意味が、所詮その基盤の第一である以上、意味の解釈のために、ばあいによっては音声要素をも加えて、考慮しなければならないことがある。文における音声要素としては、いわゆるポーズと音調（高低の配置）とが、その第1の要素であり、ついで、強弱・遅速、さらには音色その他、さまざまな音声要素が関係してくる。現実の発話は、これらの複雑なからみあいとして存在するが、それらのうち、第1の要素だけを取りあげるとしても、なお、これで文としての切りかたの判然とするものが、そう多いわけではない。それは、単に、音声要素が、文の切れ目を認めるのにきめてとなりにくいということばかりではない。むしろ、逆に、はじめから、文字化の過程で、音声要素の一部を加えて意味の解釈をしているということであって、それだからこそ、いまさら、あらためて、音声要素を考慮しても、それによって得るところは、そう多いものではないのである。つまり、文字化してゆくときに、見おとされて来たわずかの部分だけが、ひろわれる程度にとどまると思われる。もちろん、ポーズや音調については、自然、はじめから配慮がなされているとしても、強弱や遅速については配慮が少ない。したがって、細部については、逆に強弱が音調の認定に関与したり、遅速がポーズの認定に関与したりするということはあることであるが、それも、そう多いことではあるまいし、直接、文の切りかたの問題にかかわることは、一層、少ないと思われる。

いずれにせよ、音声要素を、あらためて、ふりかえって考慮しなおすとしても、それによって、文としての認定の問題が、すべて解決することはありえない。ただ、話しことばの研究では、文の問題にかぎらず、つねに音声要素への

配慮を忘れ得ないことを注意すべきかと思う。

そのような意味で、音声要素への配慮を、つねに失わないとしても、問題は、やはり、いかに文を認めるか、その目的は何か、という基本的なことにかえてくる。上述したところが、文法的な文規定の手順と、技術的な文処理の方法と、その両面を含むことは当然であるとしても、その両者の間には質的差異と同時に質的連関がある。その差異性にも注目して、完全に問題を分離させてしまうことも正当ではなく、また、連関性にも注意して、問題を混乱させることも適当ではあるまい。それにもかかわらず、論述の過程に、そのいずれかの危険を感じさせるものがないとは言えない。その理由は、一つには、結果の記述に、かなりのスペースをさかねばならないから、その結果に至る理論的なあとづけに欠けるところが出てくるためと、一つには、なお、両者の分析と総合とが、十分スムーズに行なわれてはいないところがあるためではあるまいかと思う。前者は、報告書の性質上、ある程度は、避けがたいものとしても、より根本的には、文法というものの考えかた、さらには文法に関する共同研究というものの考えかたの問題とからむであろう。結果として、文法が文法的事実の記述に終始するものとするならば、上述するところで十分であろうが、文法を一言語の語や文に関する法則の体系的把握とその解釈を行なうことと考えるならば、上述するところでは、まだまだ、足りないであろう。後者は、文法にかぎらず、また、言語研究にとどまらず、人文科学の方法に関する一般的基
本問題である。これらの点に関して、われわれは、さらに、実際の発話に即しての観察・調査とともに、基礎的考察をつづける必要がある。ただちに、量的調査に走ることは、問題の性質上、必ずしもよいことではない。ここでも、両面への配慮がなくてはならないと思われる。 (宮地 裕)

2. 表現意図

1 はじめに

1・1 話しことばの文型をとらえるのには、一方では、理論的考察が不可欠であり、一方では、多くの文を集めて、その構造などを、現象に即して帰納的に調査する必要がある。以下の各項は、そのうちの分担部門での基礎的考察と、いくつかの文を対象とする具体的な処理の結果とを述べるものである。この表現意図の項に関しても、その両面に触れよう。

1・2 ここで、まず、表現意図という概念内容を明らかにしておかなければならない。ここに言う表現意図とは、言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容のことである。(概念規定に関しては、全体的理解が望ましいが、個別の記述としては、以下各項を参照されたい。)*

1・3 およそ、現実の発話は、その現実の場面で、個別の話し手が、個別の相手に対して、行なうところの発話行動の中にあるが、その発話から、文型の調査研究の対象としての文をとりあげると、現実の場面での話し手やその相手は抽象されて背後に薄れてしまい、社会習慣として、一般には、文節の連結から構成される文のかたちだけが浮かび出る。文型は、そこに見出されるところの文の類型であるから、それは、文からさらに抽象された社会習慣の型である。発話から文を抽象し、文から文型を抽象する。この過程に、つねに存在する無形の基盤の一つは社会習慣であるが、これを確かめるものは個別的には研究者あるいは研究者たちの言語意識であり、量的には一般の多くの人々を対象とした意識調査のデータである。また、もう一つの基盤は前述のように文法理論である。われわれは、当面、このうちの量的な言語意識調査は行なわないで、作業を進めた。おおすじの見通しをつけることを当面のしごととし、要すれば、次の段階で量的調査も行なおうと考えたからである。

このように、文型をもとめるには、発話から、いくつかの抽象段階を(少なくとも大きくは2つの抽象段階を)踏むけれども、それが現実の発話の場面に登場させられたならば、いつでもそこで通用するということを予想しなければならない。少なくとも、文の段階までは、話し手や相手や場面は、捨象される

のではなく、抽象的に存在するものである。それらは、いわば、文の背後に薄れてはいるけれども、つねに背景として存在している。文をとりあげるとき、われわれの目は、たしかに、その前面の文のかたちに焦点を合わせているし、合わせなければならないが、われわれは、つねに、その背景に個別の話し手や相手や場面があることを自覚しなければならない。ちよつと焦点を遠くに合わせれば、それらが明瞭に浮かび出るのであり、そのような状態における文であることを、とくに話しことばの文を扱うときには、忘れえないと思う。

2 表現意図の2類について

2・1 発話から文を経て文型に至る抽象の過程に応じて、発話の授受の主体も、場面的要素も、意味的要素も、形態的要素も、それぞれに変化の過程を踏む。表現意図は、そのうちの意味的要素の一つであるが、これには、個別的表現意図と一般的表現意図とが区別される。

2・2 たとえば、「ガッコウ オクレルヨ」〈学校 遅れるよ〉が、「早く起きなさい」をあらわし、「ザンネンデシタ」〈残念でした〉が、「もう帰って下さい」をあらわすことがあったとしても、それは、個別的な場面で成立する意味の伝達であって、個別者としての発話者と、個別者としての受話者との間で成立した一回的表現と理解にとどまっていて、なんら社会的一般性を持たない。この〈起きなさい〉《もう帰って下さい》という「発話の意味」(服部四郎博士の用語)の、全体を、その相手への行為の要求という意味で「命令的表現」と呼べば(この術語については後述)、「ガッコウオクレルヨ」「ザンネンデシタ」という発話に、このばあい、こめられた命令するという表現意図も、また、個別的一回的なものであって、なんら、社会習慣との対応を持たない。このような表現意図を「個別的表現意図」という。

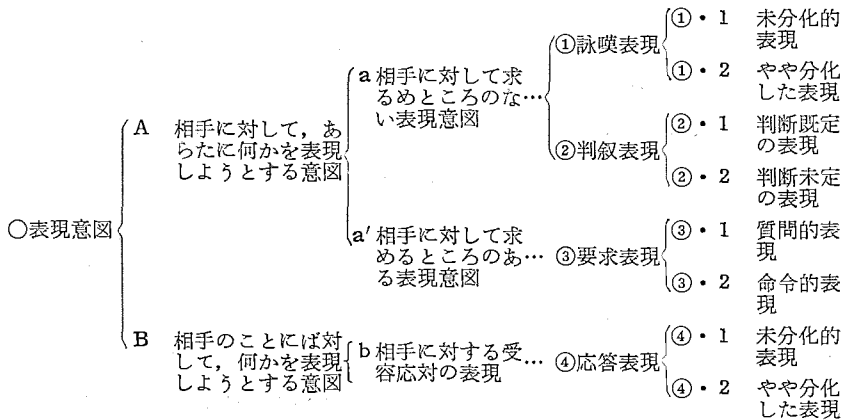
これに対して、〈学校遅れるよ〉〈残念でした〉という「文の意義」(服部博士の用語)の全体を、事実についての判断叙述という意味で、「判叙表現」と呼べば(この術語についても後述)、この文の意義と形式との対応は、ともに、まったく社会習慣に反するところがないと認められる。このように、一般的習慣的な表現意図を、「一般的表現意図」という。

2・3 このような一般的表現意図の言語主体は、すでに、個別者としての

発話者ではない。たまたま、発話の意味が、文の意義に、そのまま一致するものであったとしても、それぞれの全体的意図は、理論上、別ものである。その意図を表現する主体もまた、別ものである。ここに、個別者としての発話者に対して、一般者としての話し手を想定することができる。(必要があれば、表現意図と対応させて、前者を「個別的表現者」、後者を「一般的表現者」と呼ぶ。表現者に対する受容者も、要すれば、「個別的受容者」「一般的受容者」と呼びわけらる。)

3 表現意図の分類と、その細分に応ずる文表現の分類について

3.1 表現意図を、下記のように分類する。(A・Bから a・a'・b に至る。)



3.2 上記分類のうち、まずAは、一般の多くの文を生む表現意図であって、相手に対して、あらたに何かを表現しようとするものであり、さらに相手に対して求めるところがあるか、ないかで、a・a'に2分される。Bは、相手のことばに対する受容応対の表現意図であって、AとBとは、合して1つのコミュニケーション単位を構成する表現を生む意図である。つまり、Aで誰かがしゃべって、Bで相手がこれに応じた時に最小の1対話が成立すると考える。ただし、答としてではあっても、あらたに何かを表現しようとするならば、それは、すでにあらたなAに転じたものであると考える。

3.3 「…」で仕切られているところから右の、第3分類以下は、次第に、表現意図に応ずる文表現の形式との関連が緊密なものであり、そこでは、文表

現の形式との対応をとくに重視して、分類した。したがって、表現意図の大きな分類ではなく、表現意図から見た文表現の分類である。その意味で、ここには詠嘆表現・判叙表現・要求表現・応答表現、およびそれ以下の名称がついてある。さらに、この下位分類も、こまかく施してあるが、ここには紙の幅が足りないから省略し、実例とともに、後述することとした。結果的に見て、②判叙表現と③要求表現とが、もっとも形式上の分化もこまかいということは注意しておくべきであろう。

4 表現意図に応ずる文表現の文末部分について

4・1 以下に述べるところは、上記分類の細部と、その分類各項における実際の発話からの文例である。

4・1・1 ①詠嘆表現は、一般に「感動文」「詠嘆文」などと言われるものに当たる。その分類原理は、諸説のあるところであるが、他の、いわゆる判断文・疑問文・命令文などが、多少の差はあっても、みな分析的な表現として、その判断的内容を含むのに比べて、これは、直接的・非分析的な表現であるという点では、ほぼ、諸説の一致するところであり、妥当な見解であると考えられる。われわれも、この表現が、相手に対する言語的影響力を度外視し、話し手みずからの内的な感情や感覚を、非分析的な言語形式のままに、直接に表明したものと考えて、①のナンバーを付け、一般に、もっとも、言語的影響力の弱い表現であると認めた。

ただ、一般に「感動文」「詠嘆文」と呼んでいるもののなかには、われわれの分類で考えるところより、ずっと多くの種類のものが含まれることが多い。「ハイ」「イエエ」などの応答表現や、「オイ」「ヤマダクン」などの呼掛表現も、すべて一括して感動文・詠嘆文と言うのが普通である。われわれの分類では、これらのうちで、もっとも狭義な、感情・感覚の表明としてのものだけを、詠嘆表現とする。応答表現は、大分類のところ、すでに分離されたが、他を、詠嘆表現から分離するについては、各項でその理由を述べることとする。

さて、詠嘆表現の下位分類は、つぎのごとくである。

- ①詠嘆表現
- ①・1 未分化的表現 (感動詞による)
 - ①・1・1 声的感動詞による表現
 - ①・1・2 語的類型を持つ感動詞による表現
 - ①・2 やや分化した表現 (形容(動)詞類による)
 - ①・2・1 形容(動)詞類による表現
 - ①・2・2 形容(動)詞を含む文的類型による表現

詠嘆表現のもっとも単純なものは〈笑声〉(「アハハハ」「フフフフ」)や「アー」「アラ」「ウーン」など、語というよりは声と言うほうがいいくらいのものであるが、次第に分化をとげて、「イター」「痛ー」「キタナ」「きたな(汚)」「コレハウマイ」「これは うまい」「キモチワリイ」「気持悪い」などにいたる。この程度の分化をとげたものは、すでに判叙表現だとも言えようが、その、意味の面からの弁別は、判然とできるものではない。たとえば、「イタタ」「いたた(痛)」、「イタッ」「いたっ(痛)」、「イタイッ」「痛いっ」、「イタイ」「痛い」のどこで詠嘆と判叙との別をつけるか、意味上は、はなはだ困難だと言わねばならない。そこで形式のちがいで区別するとすれば、これは規定のしかたの問題だけで、多少のうごきはゆるされる。そこで、ここでは、形容(動)詞を中心とする類型的表現で、イントネーションその他から、詠嘆の気持の顕著なものまでを、詠嘆表現と認めることとした。したがって、形容(動)詞語幹、あるいは、その連体形どめの用語、「コワ!」「恐!」、「アツ!」「熱!」、「バカ!」「馬鹿!」、「バカナ」「馬鹿な!」などから、「ヒドイ人!」、「ひどい人!」、「コワイコト!」「こわい事!」などの「修飾語+体言」、および、「コレハヒドイ!」「これはひどい!」、「マッタクヒドイ!」「全くひどい!」などの「修飾語+形容(動)詞述語」のかたちまでを含めることとした。

4・1・2 以下、実例を示し、多少の説明をのべる。

①・1・1 声的感動詞による表現

「ホー」、「オー」、「ハー」、「アアー」、「フーン」、「へー」、「ハー」etc. (出典略)

これらは、上記カナモジによって、十分、その発音をあらわしうるような性質のものではない。それゆえ「声的」の語を冠してあるが、いずれも、これに近いという程度の発音で、音素として見れば、はなはだ臨時的なものばかりであり、その点で、次項と区別した。このほか、〈笑声〉と、定本に表記したも

のも、入れられる。文型の普通概念からは、ほどとおいようであるが、その発始の表現と解される。文中に間投される「エー」「アー」などのなかにも、実は、これと同種のものが多い。

①・1・2 語的類型を持つ感動詞による表現

「ホー」、「オー」、「ハー」、「ア」、「アー」、「フーン」、「ヘー」、「ハー」etc. (出典略)

これらは、前項と表記は同じであるが、あいまいな発音ではないものであって、われわれの“語”としての意識にのぼっているものと言える。前項のうち、〈笑声〉は、これにはいらないが、前項との区別の判然としないものもある。われわれの共通資料では、「アー ナルホド」〈あーなるほど〉、「ア ソウカ」〈あそうか〉などの形で実現するものが多かった。

①・2・1 形容(動)詞類による表現

「ウマイ！」(5-3-20),
「ソマイ！」(5-4-17),
「ソマイ ソマイ！」(5-3-22),
「オイシイ！」(22-17-11),
「キモチワライ！」〈気持悪い！〉(22-13-18),
「イイワネ！」(22-16-13),
「キタナイナー！」(22-13-18),
「スゲーナー！」(16-2-9),
「アツイ！」〈暑ーい〉(27-6-6),
「イイナー！」(16-11-22)
「ナルホド！」(5-2-7), (5-4-21), (5-4-23),

これらは、前述のように、一步、判叙表現に近づくものであるが、特定の品詞による表現、あるいはそれに準ずる表現であって、形式として、ある特徴を持つと認められる。すなわち、形容(動)詞類、または、その語幹による単独の表現で、一般に卓立表現の音調をとまなう。(「キモチワライ」は1語と認めた。)形容(動)詞類としたのは「チクショウ」〈畜生〉、「イタタ」〈痛た〉など、形容(動)詞語幹的だが、特殊なものもありうるからである。

①・2・2 形容(動)詞を含む文的類型による表現

「オイシイワヨー、ナメルト」(3^m-8-7)
「スクナクッテ イイナー」(3^m-1-7)

「オイシイナ、アレネ」(3⁹¹-18-5)

「コレハ ウマイ」(5-4-23)

「ナカナカ ソマイ」(5-3-22)

「オイシイワ、スゴク」(22-17-11)

「イイナー、アノ エイガハ、ジッサイ」(いいなー、あの 映画は、実際)

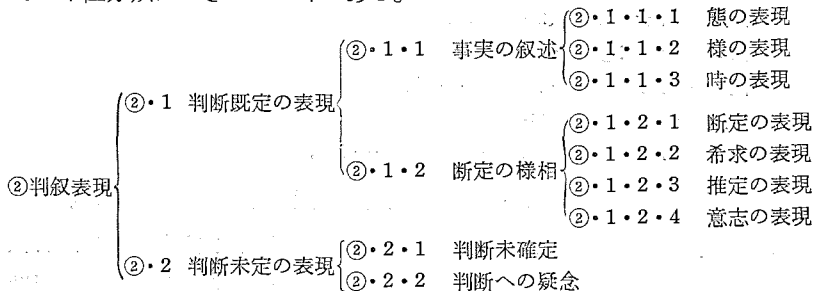
(16-3-14)

○「エライモンダナ」(16-7-6)

これらは、ますます判叙表現に近づくものであるが、前項の型に、主語を含めてさまざまな連用修飾語がつくことが形式上の特徴である。一般に卓立表現音調をともなう。

4.2.1 ②判叙表現は、一般に「判断文」「現象文」「解説文」と言われることが多い。ことがらについての言語主体の判断や、ものごとの叙述などをあらかず意図によるものであって、相手に求めるところのない表現である。もちろん、相手がこれを聞き、これを理解することを求めるという範囲では、求めるところがあるが、ここで求めるところがないというのは、そのような広義のものではなく、ことばとしての応答を求めたり、行為としての動作を求めたりすることがないという意味である。

その下位分類はつぎのごとくである。



4.2.2 判叙表現の最も一般的な型は、教科文法では「ナニナニが ナニナニだ」「ナニナニが ドウコウだ」「ナニナニが ドウコウする」という主語・述語の関係から成り立つものであるというが、実は、この型そのものにも、日本語には「は」と「が」との使いわけもあって、種々問題のあることは、言うまでもない。しかし、前述したように、われわれの当面の作業としては、一般に、文の成立の最低条件である述語あるいは独立語に、その中心を置くので

あるから、判叙表現については、第一に述語に重点を置いて分類すべきである。表現意図の文形式への実現は、結果としても、述語においてであって、主語を含むところの修飾語が、関与するところは、少ない。

もちろん、現実の発話には、分類の各項の複合した形式が多い。たとえば、「タオレカケ テシマッ テイ タ ツケ」〈倒れかけてしまっていたっけ〉では、態の表現としての「……しかける」(起動)・「……してしまう」(完了)・「……している」(存続)・「……したっけ」(回想)の4つが複合していると見られる。しかし、一方、それらがそれぞれ単独で文末最後部に用いられることもあることは言うまでもない。「タオレカケタ」「タオレテシマッタ」「タオレタツケ」など。したがって、上の例文については回想という態を表現する意図によるところの判叙表現と認められる。かようにして、判叙表現の下位分類は、その文末最後部の形式によって表現される意図内容によるのである。

4・2・3 以下に実例を示して、多少の説明を述べる。(細分類における実例と説明とをさきに記し、あとでそれらの上位分類の説明を述べる。)

②・1・1・1 態の表現

態というのは、用言によってあらわされる概念の分化を示す表現であって、いわゆる助動詞の複語尾性よりは、一層用言の語尾的性格の強い形式によってあらわされる。したがって、複合語としての用言に加えられてもよいものがあり、教科文法では、補助的な形式用言とすることが多い。

○～テシマウ (～チャウ) 完了

「デ ダイタイ ソレガ イタマッタラネ オコメラネ イレチャウノヨ」〈で大体 それが いたまったらね お米をね 入れちゃうのよ〉(3¹¹-12-4)

「ザルジャーネー スダ コボレチャウ」(5-10-20)

「…～ケイセイガ アブナクナッテカラネ ナンデスカ アワテテ ハイッチャウ ツタモンデスカラ」〈…～形勢が あぶなくなってからね 何ですか あわててはいっちゃったもんですから〉(12-9-12)

「ソレカラ コンナ ナッテヨー ドウニカ コウニカ イツノマニカ チェンジニ ナッチャウノ、ソレデ」(16-8-4)

「ソウイウノ ミタラ モウ デリケイトニ デキテマスカラ シンケツナド オコンチャウ」〈そういうの 見たら もう デリケイトに できてますから 貧血など 起こしちゃう〉(22-14-4)

「デンワデンタラネ アレ コノ…コノ アイダモ チョット ジュッパングラ

イデ デチャイマシタカラネ、カワグチカラデモ」〈電話でしたらね あれ この…この あいだも ちょっと 10分ぐらいで 出ちゃいましたからね、川口からでも〉 (27-5-7)

○～テアル 存続

「チャントネ ヤッパリ イッペン ヤイテアンノネ」〈ちゃんとね やっぱり いっぺん 焼いてあんのね〉 (3⁽⁹⁾-18-1)

「ヒラヒラ ステテアル」 (5-6-9)

「…～ウチナンカデモネ ソノー チチノ シュシントネ アニノ シュシント…～…カザッテアルデスヨ」〈…～うちなんかでもね その一 父の 写真とね 兄の 写真と…～…飾ってあるんですよ〉 (22-2-22)

「ソレデ ダイナンカイ ナントカ ホウヨウトカ ナントカッテ コトガ カイテアルヨ」〈それで 第何回 なんとか 法要とか なんとかって ことが 書いてあるよ〉 (22-5-6)

「…～…チャントネ コウネ ヒトツツネー トビラガ アッテネー モンガ ツイテテネー ノウコツシテアルノ、ゼンブ」〈…～ちゃんとね こうね 1つつねー とびらが あってねー 門が ついててねー 納骨してあるの、全部〉

(22-9-4)

「エー ソウイウニ カイテゴザイマス」 (27-1-15)

○～テイル 存続経験

「モウ チョイチョイ キテマスヨ」 (3⁽⁹⁾-2-8)

「ダカラ コノ モンダイハ ホカニ エー ベツナ イイカタラ シテイマス」
〈だから この 問題は ほかに えー 別な 言い方を しています〉

(5-11-10)

「デ ワタクシノ センレキニモ カンケイノ アルヨウナ トコロヘ ナルベク ハイリタイト オモッテマス」〈で 私の 前歴にも 関係の あるような 所へ なるべく はいりたいと 思っています〉 (12-22-4)

「イマモ ヤッテルヨ」 (16-5-2)

「ダケド コドモダカラ イッシュウケンメイ『ホネガ デタ、ホネガ デタ』 ッテ タイヘンナ サワギ シタノ オボエテルモノ」〈だけど 子供だから 一生懸命『骨が 出た、骨が 出た』って 大変な 騒ぎ したの 覚えているもの〉

(22-12-10)

「…～コノ フセンヲ ツケテ ソノ ドチラニモ ワカルヨウニ ナッテオリマス」〈…～この 付箋を 付けて その どちらにも わかるようになって おります〉 (27-3-11)

○～テイク 移行

「エー ショクギョウト イウト ソレテイキマス」〈えー 職業と いうと そ

れていきます〉(5-11-24)

「イド…イドミタイニ ズーット ハイッテク」〈井戸…井戸みたいに ズーッと はいってく〉(22-9-22)

○～テクル 同上

「ダケド ホッカイドウノヤナンカハネ モウ パキッパキッデネ カンデレバカムホド アジガ デテクルノ」〈だけど 北海道のやなんかはね もう パキッパキッでね かんではれば かむほど 味が出てくるの〉(3⁹¹-17-5)

「『イヌニ ホエラレテ コマッテイル シンブソハイタツ』、ズバリ デテマイリマシタネ」〈『犬に ほえられて 困っている 新聞配達』、ズバリ 出てまいりましたね〉(5-4-23)

「ムコウノ ホウガ オソクナッテクル」(16-18-1)

「アアイウノヲ ミルトサー…～…センソウニ ハンタイスルッテ イウ キモチガ ワイテクルネ」〈ああいうのを 見るとさ…～…戦争に 反対するっていう 気持ちが わいてくるね〉(16-17-10)

「ヨク ミテクル」〈よく 見てくる〉(22-4-12)

「ソコヘ コウ シラキノ アレデ ハイッテクルノネ」〈そこへ こう 白木の あれで はいってくるのね〉(22-9-23)

○～タリスル 例示

「デモネ チョットシタネ テカゲンデネ コウ ヘンナ ハナガ デキタリスルノ」〈でもね ちょっとした 手かげんでね こう 変な 花が 出来たりするの〉(3⁹¹-6-4)

「ソンデ カマエテクト ソコヘ ハイラナクテ ウエヘ イッタリ シタヘ イッタリスンダモン」(16-7-4)

「クダケスギタリシテネ」(22-1-21)

○～(形)ナル 変化

「ダンダン ハナガ スクナクナリマスネー」〈だんだん 花が 少なくなりますねー〉(3⁹²-4-1)

「シカシ タカギサンノハ ヒジョウニ チカクナリマシタヨ」〈しかし タカギさんのは 非常に 近くなりましたよ〉(5-6-6)

「ダカラ イチオウ ショニンキェウニ ナレバネ ヤッパリ ヤスクナリマスヨ」〈だから 一応 初任給に なればね やっぱり 安くなりますよ〉(12-3-10)

「ツマンナクナルネ」〈つまんなくなるね〉(16-12-25)

「インエイテット シカシ ヤッパリ セマクナルネ、ソカイカタガネ」〈陰影でっ と けれど やっぱり 狭くなるね、使い方がね〉(22-23-20)

「ソレヲ ノメバ モウ スコシ アタマガ ヨクナッタ」〈それを 飲めば もう 少し 頭が 良くなった〉(22-11-13)

○～ダッテ 伝 聞

「オバサン マタ フシギニネー ナニ タベルッテ ユヤ ナンブセンペーッテ イウンダッテ」〈おばさん また 不思議にねー 何 食べるって 言や 南部せんべーって 言うんだって〉 (3⁹³-16-8)

「タカインダッテサー, スゴク」 (16-1-4)

「アノ ミシマクンチデ ヤッタダッテサ」〈あの ミシマ君ちで やったんだってさ〉 (16-1-3)

「アトカラ ソコヘ イレタンダッテ, ソコヘ」 (22-6-17)

「カエバ タカインダッテサ」〈買えば 高いんだってさ〉 (22-13-4)

「ソイデネ カワムラサンガ オデソワ カケルノヲ オマチシテタンデスッテ」
〈そいでね カワムラさんが お電話 かけるのを お待ちしてたんですって〉
(27-8-13)

○～ッテ, ～ッテイウンダ 同 上

「マイニチデモ イイッテヨ」 (3⁹³-19-10)

「ダカラ ソノタメニ アブラヲ ウント スッテルラシイケドサ トレナイッテ イウンダヨ」〈だから そのために 油を うんと 塗ってるらしいけどさ 取れないって 言うんだよ〉 (22-19-18)

「ダカラネ アノ ムコウヘ アメリカデモッテネー アル ヒトガ ビョウキニ ナッタッテ イウノヨ」〈だからね あの 向こうへ アメリカでもってねー ある 人が 病気に なったって 言うのよ〉 (22-23-10)

「…～ドコノ マージャンクラブヘ イッテモネー ソー アガレルッテ イウンダヨ」〈…～どこの マージャンクラブヘ 行ってもねー そー あがれるって 言うんだよ〉 (16-1-10)

「カッテクレルッテタヨ」〈買ってくれるってだよ〉 (16-2-17)

「ソウシタラネー ソンナ モノハ ゼッ…ゼッタイ ツウヨウシナイッテ イウンダ」〈そうしたらねー そんな ものは 絶対…絶対 通用しないって 言うんだ〉
(16-1-12)

○～ダソウダ, ～ソウダ 同 上

「アアイウノ ミンナ キッテシマウンダソウデスヨ」 (3⁹²-4-5)

「ウメハ アノ ウエカエシタ ソノ トシハ サカナイソウデスネ」〈梅は あの 植えかえした その 年は 咲かないそうですね〉 (3⁹²-5-2)

「ゴジュッブントカ ニジカン…～ソレ トッテ ソレデ エイガニ トッタソウダネ」〈50分とか 2時間…～それ 取って それで 映画に 取ったんだそうだね〉 (16-4-6)

「モウ ニサンブンカ ナイソウデスヨ」〈もう 2・3分か ないそうですね〉
(16-22-22)

「ソレデ ヤッバリ コレヲ ナンマイカ ムクタビニ ウスクナルンダソウヨ」
〈それで やっぱり これを 何枚か むくたびに 薄くなるんだそうよ〉
(22-20-20)

「マア タイヘンニ イイ ショウバイダソウダネ、ケッシテ ネギラナインサ」
〈まあ 大変に いい 商売だそうだね、決して 値切らないしさ〉(22-19-24)

これらの態の表現が、なお、用言の概念内容の分化に応じ切れないとき、いわゆるイディオマティックな文末の表現や、副詞による表現が、それに応じようとする。たとえば、

○～コトガアル 例示経験

「ヤッバリ ウッカリスルト フルイノニ アタッチャウッテ コト アルワネ」
〈やっぱり うっかりすると 古いのに 当たっちゃうって こと あるわね〉
(3¹¹-10-9)

「ニホンタイプ ヤッタ コト アリマス」〈日本タイプ やった こと あります〉(12-5-18)

○～テショウガナイ もてあまし

「イチジクガ タクサン ナッテ ショウガ ナイワ、ウチ」(3¹²-8-7)

○～ヨク～スル 頻 発

「アーアー カブトトカ ナンカネー ヨク アノー オッテ ツクリマスネー、
コドモサンガ」〈あーあー かぶととか なんかねー よく あのー 折って
作りますね、子供さんが〉(5-6-16)

「シンブンヲ カオニ ノセテ ネムッテイル ヒトガ ヨク アリマス」〈新聞
を 顔に のせて 眠っている 人が よく あります〉(5-5-3)

などがこれである。これらも、文型の一部に参与するものであるが、当面、意図の分担範囲でなくて、用言その他の語、およびその結合体のもつ“意義”に関するものであると解釈し、一部「構文」の分担部門で扱うほかは、省略した。

②・1・1・2 様の表現

ここに様の表現と言うのは、いわゆる受身・可能・使役の助動詞によってあらわされるものである。これらの形式は、前項、態の表現よりは辞的性質を持つが、なお、用言の接尾語的性格もあることは、しばしば説かれるとおりである。われわれの共通資料においては、文末におけるこの表現が、案外に少なく、使役の表現のごときはまったくあらわれなかった。これは、偶然のことであると思われるが、なお、受身では、いわゆる迷惑の受身がほとんどであり、また、

受身に比べれば可能の表現の数のほうがずっと多かったことも、一応注意しておいてよいと思う。可能の表現には、「……スルコトガデキル」「……デキル」の形による表現、可能動詞による表現も、用言の意義による表現として注意すべきである。以下に、実例を示す。

受身

○～レル、～ラレル

「イチンチ フラレタワ」〈1日 降られたわ〉(3⁽³⁾-11-1)

「オオ ヒッカケラレチャッタノ, アジニ」〈お湯 ひっかけられちゃったの, 足に〉(3⁽³⁾-4-8)

「ダカラ トウキョウノ ヒトダッテハ イワレナインダヨ」〈だから 東京の人だっては 言われなんだよ〉(16-19-3)

「オコラレチャッタモンナー」(16-2-6)

可能

○～レル、～ラレル

「モウ ソレイジョウ モウ タベラレナイワ」〈もう それ以上 もう 食べられないわ〉(3⁽²⁾-13-7)

「タベラレル」〈食べられる〉(5-2-16)

「アンマリ オオキキノ ツケラレナイケド」(12-17-1)

「イッパイモ タベランナイネ」〈1杯も 食べらんないね〉(3⁽³⁾-15-8)

○～デキル

「デモ ヨクー ソンナ オオキナ キ…ウメ アノ ウエカエシ デキマスネ」
〈でも よくー そんな 大きな 木…梅 あの 植えかえし 出来ますね〉

(3⁽²⁾-5-4)

②・1・1・3 時の表現

時の概念だけを純粋に表現する語形式があるかどうか、問題だが、ここでは、まず、過去の表現としての「タ」を一つの代表とし、これに対して、過去の表現ではなく、また、推定の表現でもない、いわゆる現在の表現を、対立する一つの代表とした。(時間のなかでの現在ということだけを問題とすれば、形容詞は超時間的表現であり、形容動詞は判断を含み、動詞は、状態性動詞・動作性動詞などというさまざまな意義上の分類ができよう。いわゆる未来は、推定の表現と認めた。)われわれの共通資料について見れば、現在の表現が、はるかに多く、その述語の体言・用言の意義の分化もこまかいが、それは、当面の問題

としない。なお、誤解を避けるために述べておくが、ここでいう時の表現は、判叙表現におけるものであって、たとえば、質問的表現に、時に関する表現がないと言うのではない。まず文全体として、判断既定・事実の叙述という意図表現が存在し、それについて過去であるか、そうではないかを問うものである。前記、態・様の表現についても同様であり、後に述べる断定・希求などの表現も、同様である。つまり、一般に判叙表現は、その変容によって、(言語的影響力の大小を分類の原理とする観点からは、)すべて質問的表現に含まれてしまうことのできるものであり、命令的表現にも含まれる。ただ命令表現の特異性は、判叙や質問の形式をかりずに、直接に行為を要求する点にあるから、その相手に対して向けられる動作性の述語要素を必要とする。そのために、述語用言の意義上の制限が強く、形式としても判叙表現とは、かなり、ちがう。その点で、判叙表現が要求表現に、内的に含まれるといっても、すべてが含まれるわけではないことを前提としなければならない。以下、实例を記す。

過去

「コノ アイダノネ オシルナンテ トッテモ キレイダッタワヨ」〈この間のね お昼なんて とっても きれいだったわよ〉(3⁽¹⁾-2-6)

「ソイデ アクルヒサ カインヤノ リョコウダッタノヨネ」〈そいで 明るる日さ 会社の 旅行だったのよね〉(3⁽³⁾-2-7)

「ソレカラ ダーンドン ダーンドン スクナクナッテキマシテネ キョネン オトシハ ニショウグライデシタ」〈それから だーんだん だーんだん 少なくなってきましたね 去年 おとしは 2 升ぐらいでした〉(3⁽³⁾-8-2)

「コノ シツモンハ ソンシタナ」〈この 質問は 損したな〉(5-10-1)

「ドウモ ソウダロウト サッキカラ オモッテタ」(5-11-5)

「アノー ガッコウデ ハカッタ トキ イッテンニダッタ」〈あの一 学校で 計った 時 1.2 だった〉(12-18-15)

「アノー コセキノ ホウモ スコシ ヤリマシタカラ」〈あの一 戸籍の方 も 少し やりましたから〉(12-22-22)

「イタダイテタノネー」(12-3-7)

「タイプト ジムヲ スコシ ヤリマシタ」〈タイプと 事務を 少し やりました〉(12-9-1)

「オレ イイ アルバイト シテキタヨ」〈おれ いい アルバイト して来たよ〉(16-11-21)

「ソレデ カエリニ 『チャンピオン』 ミテキタ」〈それで 帰りに 『チャンピ

オン』見て来た) (16-3-13)

「ヤマナカクンチノ ウィスキー スゴカッタネ」〈ヤマナカ君ちの ウィスキー
すごかったね) (16-12-14)

「チョウド…チョウド イイクライノ オテンキダッタヨ」 (16-9-24)

「シラナイノ バレタ」 (22-3-23)

「ナニカ エイガデ ミタヨ」〈何か 映画で 見たよ) (22-20-5)

「タトエバ ソノ マエハサ ゼッタイトカッチェ コトバガ ハヤッタワネ」〈た
とえば その 前はさ 絶対とかって ことばが はやったわね) (22-24-7)

「ダイシツキデシタ」〈台紙つきでした) (27-6-10)

「オマタセイタシマシタ」 (27-8-7)

現 在

「デネ デコレーション コシラエルヨリモネ マワリノ ドダイ スルノガ
タイヘン」〈でね デコレーション こしらえるよりもね まわりの 土台 塗る
のが 大変) (3¹¹-6-5)

「デモ チャーント ジキニ ナルト メガ デテネー エダガ ドンドン ノ
ビマスヨー」〈でも チャーんと 時期に になると 芽が 出てね 枝が どんど
んのびますよー) (3¹²-11-3)

「アタシ ソンナ コト ナイワ、チットモ」 (3¹³-13-8)

「ツマリ ニュースノ オー ミナモトニ ナリマス」〈つまり ニュースの
おー 源に なります) (5-7-19)

「シンブンニ カンケイ アリマス」〈新聞に 関係 あります) (5-4-13)

「モウ コレハ アー ドノヨウナ イイマワシデモ オンナジデ ゴザイマス
ガ」 (5-15-16)

「アッタケド アンマリ イイ トコロガ ナイ」 (12-4-11)

「ソウデスネ ヤハリ アノー トウキョウノ マンナカガ イイト オモイマ
スケド」〈そうですね やはり あのー 東京の まんなかが いいと 思いま
すけど) (12-7-5)

「ソナククライノ コトハ イタシマス」 (12-10-10)

「オレナンカデモ マケルヨ、キツ」 (16-15-2)

「ウエノトショカンター キレイダネ、ワリアイネ」〈上野図書館でー きれいだ
ね、割合ね) (16-18-11)

「ジッサイ 『ヘイボン』ナンテ アンナ ツマラナイ ホン ナイネ」〈実際
『平凡』なんて あんな つまらない 本 ないね) (16-22-1)

「トクニ アタシナンカハ モウ ソノ ケイサンハ タブンニ アルヨ」〈特に
あたしなんかは もう その 計算は 多分に あるよ) (22-2-21)

「チョット ソンナ キガ スンナ」 (22-11-15)

「タイヘンニ ムズカシイワネ」〈大変に むずかしいわね〉 (22-22-22)

「デキマシタラ コチラカラ ゴレンラク イタシマス」〈出来ましたら こちらから 御連絡 いたします〉 (27-7-6)

「ヨンジ ユウエンノ オカエシニ ナリマス」〈40円の お返しに なります〉 (27-8-7)

「ツケナクテ ケッコウデス」〈付けなくて 結構です〉 (27-9-4)

②・1・2・1 断定の表現

断定の表現は、断定辞または、これに相当する機能の表現による。形式にはあらわれないことがあるから、終助詞類は別として、体言どめまたは用言どめも、これに当たることが多いと認められる。共通資料にも例が多い。以下に実例を記す。

「アン…ツボミノ ホウガ オオインデスヨ」〈あん…つぼみの 方が 多いんですよ〉 (3^②-6-4)

「コレカラナンデス」 (3^②-6-6)

「アナタノハ ヤマヨ」〈あなたのは 山よ〉 (3^③-3-10)

「ウチノ コモ ソウ」〈うちの 子も そう〉 (3^③-19-10)

「クモノ ナマエデス」〈雲の 名前です〉 (5-1-18)

「ヨク ゴゾンジデスネー」〈よく 御存知ですネー〉 (5-12-21)

「シュルイハ ベツダン カンケイ ナインデスガネ」〈種類は 別段 関係ないんですがね〉 (5-14-23)

「エー ソレデハ イップンゲーム」〈えー それでは 1分ゲーム〉 (5-15-7)

「ジツハ モ…チャット センソクモチナンデスノ」 (12-12-6)

「アノー コトシ…コンゲツ ソツギョウ シタバカリナンデス」〈あのー 今年…今年 卒業 したばかりなんです〉 (12-5-11)

「ソレジャ キョウハ ケッコウデス」 (12-19-24)

「ショウワニジュウヨネンノ イチガツカラ シチガツノ…ニジュウシチネンノ シチガツマデ」〈昭和24年の 1月から 7月の…27年の 7月まで〉 (12-8-19)

「シジスル ヒトガ ナンワリカ イルンダヨ」〈支持する 人が 何割か いるんだよ〉 (16-21-20)

「ヨルハ アソコネー アブナインデスヨ」 (16-18-17)

「マア ハッキリスルノハ マダ ショホナンダヨ」〈まあ はっきりするのは まだ 初歩なんだよ〉 (16-9-12)

「コンドハ マジメナ ハナシ」 (16-20-16)

「ウチハ ブンケダモノ」〈うちは 分家だもの〉 (22-7-10)

「ソレモネー ヒトガ ハイレルンダ」 (22-9-20)

「ヤッパリ スマナイト ダメダネ」〈やっぱり 住まないと だめだね〉
(22-29-1)

「ジャワゴグライヨ, シッテンノ」〈ジャワ語ぐらいよ, 知ってんの〉
(22-24-4)

「…〜キノウ ワタシ キキマシタラネ ワスレチャッタッテ イウンデスヨ」
(27-3-18)

「コレ ヒトクミデゴザイマスネ」〈これ 1組でございますね〉 (27-4-18)

「エート モノラ セイトンスルノ 『セイ』 デス」〈えーと 物を 整頓するの
『整』です〉 (27-7-24)

「ダイシツキ ニマイ」〈台紙つき 2枚〉 (27-6-13)

断定の表現の述語用言の意義の分化も、また、こまかいものがあるが、なかに12、イディオマティックな表現として注意すべきものがある。いずれも、形式的な用言に近いものが用いられる。

当然・義務

「ア カナダ イレナクチャ ダメナノネ」〈あ 金具 入れなくちゃ だめなのね〉 (3⁽¹⁾-6-3)

「トラナキヤ ダメナンダヨ, カタチガ カワッテ」〈取らなきゃ だめなんだよ, 形が 変って〉 (22-19-15)

「…〜ナルベクナラ ソコラ コドモラ ツレテ デナケリヤ ナラナインデス」
〈…〜なるべくなら そこを 子供を 連れて 出なけりゃ ならないんです〉
(12-11-8)

「ナニカ キテナキヤ イケナインダネ, ヤッパリ」〈何か 着てなきゃ いけないんだね, やっぱり〉 (22-17-4)

「ヤッパリ チャント セワ シナクチャネ」〈やっぱり ちゃんと 世話 したくちゃね〉 (3⁽²⁾-10-6)

「ナニカ コウ ヤッパリ キメナキヤネ」 (22-1-12)

適当・許容

「ヤッパリ タベル モノハ ミタメモ キレイナ ホウガ イイワネ」〈やっぱり 食べる ものは 見た目も きれいな 方が いいわね〉 (3⁽¹⁾-3-8)

「ソウデスネ キョジュウチニ チカイ ホウガ イイデスヨ」〈そうですね 居住地に 近い 方が いいですよ〉 (12-21-20)

「…〜オタガイニ コウリュウ シテサ ヤッパリ コノ イイ ニホンゴロ ツクル ホウガ イイヨネ」〈…〜おたがいに 交流 してさ やっぱり この いい 日本語を つくる 方が いいよね〉 (22-27-8)

「アー ソレハ ヤメタ ホウガ イイ」 (22-17-15)

「ウメモ アレデスネ オニワノモ コノクライ オオキイト イイデスネ」
〈梅も あれですね お庭のも このくらい 大きいと いいですね〉(3⁽²⁾-3-10)
「フツウノ ミカンガ アルト イイワネ」(3⁽²⁾-12-6)
「コトサラニ コトワラナクタッテ イイヨ」(22-24-5)

②・1・2・2 希求の表現

希求の表現は、いわゆる希求の助動詞「タイ」「ホシイ」が、その文末部分に参与する。これが相手に対して「～ンテモライタイ」「～ンテホシイ」などの形で表現されるときは、積極的の行為要求の表現となる。

～シタイ

「ダケドネー ソセンノ ハカッテ ホッテミタイト オモウンダ、ボクハ」
〈だけどねー 祖先の 墓って 掘ってみたいと 思うんだ、僕は〉(22-11-15)
「ダイシ ツケテ ニマイ ヤキマシ タノミタインデス」〈台紙 つけて 2
枚 焼増 頼みたいんです〉(27-6-18)
「トラシタクハナイネ」〈取らしたくはないね〉(16-16-7)

②・1・2・3 推定の表現

推定の表現は、推定された判断として、断定の一樣相と考える。いわゆる推量の助動詞「ダロウ」「デショウ」「ラシイ」および形式名詞を含む「ハズダ」「ソウダ」は、推定の表現に参与する文末形式である。以下に実例を記す。

○～ダロウ

「ウエカラ ツルスンダロウナー」(16-14-10)
「オオキイノ アルダロウ」(22-8-22)
「チカスイダロ」〈地下水だろ〉(22-11-4)

○～デショウ

「ジャ ダンダン サクデショ」〈じゃ だんだん 咲くでしょ〉(3⁽²⁾-5-1)
「オッコチソウニ ナッタラ オモイダスデショウ」〈落っこちそうに なった
ら 思い出すでしょう〉(5-15-2)
「タンザン ヒキザングライデ ジテンジャガ ノレマストネー、テンインサン
デショウネー」〈たし算 引き算ぐらいで 自転車が 乗れますとねー、店員さ
んでしょうねー〉(12-13-21)

○～ラシイ

「アマリ ウチノ アソコジャ ヒクカッタラシインデスネ」(3⁽²⁾-1-7)
「ツルタコウジッテ アレー ニンゲンテキニハ ワリアイ アッサリシタ ヤ
ツラシイナー」〈鶴田浩二って あれー 人間的には 割合 あっさりした ヤ

つらしいな〜) (16-22-12)

「ダカラー ヤッパリ カンゼンニッテ イウ コトハ ナカナカ ムリラシイ
ネ」〈だからー やっぱり 完全にとって、いう ことは なかなか 無理らしい
ね〉 (22-21-9)

○〜ハズダ

「アンナカニネー イッカイ イクハズダッタモンネ」〈あん中にねー 1回
行くはずだったもんね〉 (3⁽³⁾-9-6)

「バーナンテ コトバダッテ ムカシハ ツカワナカッタハズデスヨ」〈バーなん
て ことばだって 昔は 使わなかったはずですよ〉 (22-25-11)

○〜ソウダ

「ナンカ チョット シナリョウリッテ イウト…〜…ソレ ソウデモナサソウ
ネ」〈なんか ちょっと 支那料理って いうと…〜…それ そうでもなさそう
ね〉 (3⁽³⁾-13-4)

「アノ ヒトハ モウ スポーツ ナンデモ デキソウネ」〈あの 人は もう
スポーツ なんでも 出来そうね〉 (3⁽³⁾-6-5)

「スキソウダネー」〈好きそうだねー〉 (16-20-6)

推定の表現にも、述語用言の意義分化がある。「(〜ト) オモワレル」「(〜カト) オモウ」「(〜ダロウト) サッスル」など。しかし、イディオマティックな表現として、注意しなければならないものは、多くはないようである。「〜カモシレナイ」は、その代表である。

「ダカラ ソノセイモ アルカモシレナイ」 (3⁽²⁾-10-9)

「アンマリ ミジカクナルト チョット ムリカモシレマセン」〈あんまり 短
かくなると ちょっと 無理かもしれません〉 (5-14-16)

②・1・2・4 意志の表現

意志の表現は、「〜ショウ」の形で、推定と同系の「ウ」による。(述語用言の意義として、動作性動詞のうちには、意志を臨時的にあらわしうることがあるが、ここには、取りあげない。)

「ソウ オコタエ シテオキマショウ」〈そう お答え しておきましょう〉
(5-12-12)

「コリャ マア フルイ シンブンデハナイト イウ コトニ シテオキマショ
ウ」〈こりゃ まあ 古い 新聞ではないと、いう ことに しておきましょう〉
(5-5-21)

「ソレカラ エー コウブツセイヒンノ バアイモ アリマスケレドモ コノ

バアイハ タケデ マイリマシヨウ〈それから えー 缶物製品の 場合も あり
 ますけれども この 場合は 竹で まいりましょー〉 (5-10-4)
 「シナモノ キメマシヨウ」〈品物 決めましょー〉 (5-10-9)
 「マア アル バアイニ オイテハ、アル メンニ オイテハト モウシアゲテ
 オキマシヨウ」〈まあ ある 場合 においては、ある 面 においてはと 申し
 あげておきましょー〉 (5-13-13)
 「ジャ ボクモ マケズニ クオウ」〈じゃ 僕も 負けずに 食おう〉 (16-6-7)
 「アンマリ シャベンナ ヨソウ」 (16-15-16)
 「ヤッテミマシヨウ、スコシ」 (27-1-9)
 「ソウイタシマシヨウ、ソイデハ」 (27-2-20)
 「モウ ヒトツ イタダイテイキマシヨウ」 (27-3-21)
 「デモ ハガキデ イタダキマシヨウ」 (27-7-12)
 「ジャ オクッテイタダキマシヨウ」 (27-9-8)

②・2・1 判断未確定の表現

判断未確定の表現は、判断未定の表現の一つとして、「カ」によって表現さ
 れる。自問的にみずから納得する表現であって、もちろん、他に対する質問で
 はなく、自分自身に対する質問に終始するものでもなくて、詠嘆に近い。形式
 上「カ」をとり、自問による反語的表現が内的に存在すると認められる。共通
 資料における事例は多くない。以下事例を記す。

「ツユヲ スウンデシヨウカ」〈露を 吸うんでしょーか〉 (3¹²-2-10)
 「デキマスカ」 (12-13-12)
 「ナンダイ スモウカト オモッタラ ソウバカ」〈なんだい 相撲かと 思っ
 たら 相場か〉 (16-16-1)
 「タカナワカ」〈高輪か〉 (16-19-9)
 「エイガノ ハナシデモ スルカー」〈映画の 話でも するか〉 (16-5-20)
 「ソレデ ヨット キレイナ ムスメサンガ デテクルカ」〈それで 酔っとき
 れいな 娘さんが 出てくるか〉 (22-13-15)
 「ゾクミョウト イウ ヤツカ」〈俗名と いう やつか〉 (22-4-7)
 「チョット アサ ハヤカッタデスケドネー クジ… クジ ジュップングライ
 デシタカ」〈ちょっと 朝 早かったですけどねー 9時… 9時 10分ぐらいで
 したか〉 (27-5-13)
 「ソウカ」 (16-7-21)
 「ソウデモナイカ」 (22-11-11)

②・2・2 判断への疑念の表現

判断への疑念の表現は、判断未定の表現の一つとして、「カナ」「カシラ」等

によって表現される。判断未確定の表現が、自問的にみずから納得する表現であるのに比べて、他に対する質問に一転しうる形式を持ちつつ、なお意味上、話し手みずからの内部での疑念にとどまると認められるものである。

○～カナ

- 「ヨンジューヨシカナ」〈44かな〉 (12-19-9)
「コレ オレノカナ」 (16-5-19)
「イマハ コマッテルンジャナイカナー」〈今は 困ってるんじゃないかなー〉
(16-10-14)
「テ イウト チョット チガッチャウンジャナイカナー」〈て 言うと ちょっと 違っちゃうんじゃないかなー〉 (22-25-4)
「ソレハ ワカンナイカナー」 (22-27-19)
「ソウジャナイカナー」 (22-18-17)
「チョット チガウカナ」 (22-25-4)
「イマゴロ アルカナ」 (5-7-15)

○～カンラ

- 「シッポガ ナガイノカシラ」〈しっぽが 長いのかしら〉 (3⁽²⁾-3-8)
「コナイダノー アレ ソウカシラ」 (3⁽²⁾-3-5)
「デモ コレカシラ、コウバイッテ カクンダケドネー」〈でも これかしら、紅梅って 書くんだけどねー〉 (3⁽²⁾-7-4)
「コンナ クダラン ハナンデ イイノカシラ」 (16-3-1)
「ナンカ マア インゴニ チカイノカシラ」〈なんか まあ 隠語に 近いのかしら〉 (22-25-1)
「シンド…シンドイトカ ナントカ ソウイッタヨウナ コトジャナイカシラ」
(22-28-20)

○～ジャナイカ

- 「オワンヤ アリヤ キジャナイカ」〈おわんや ありや 木じゃないか〉
(5-9-25)
「ヤッバリ シゴネングライ ヤッテ マ スコングライ ヤット トレルグラ
イニ ナルンジャナイカネ」〈やっぱり 4・5年ぐらい やって ま 少しぐ
らい やっと 取れるぐらいに なるんじゃないかね〉 (16-9-17)

4・2・4 以上、判叙表現の最下位分類項での実例を示したが、これによって、その上位分類で、それらがいくつかのグループにまとめられている理由も、ほぼ、明らかではあろうが、多少、説明を補足しておきたい。

判叙表現は、内的には詠嘆表現を含みつつも、その感情的要素は内に押さえ

られ、論理的意義内容の分節と結合との経過を通して、ことがらに関する話し手の判断や叙述にとどまるものであり、一方では、外的変容と相手への要求をあらわす要素の附加とによって要求表現に内的に含まれてゆくものである。おまかには、①は②に、②は③にそれぞれ、内的に含まれると言いうる。しかし、このような解釈は、理論的な体系のための仮説であるから、ここに詳論することは避けるとして、態・様・時の3表現をまとめて「事実の叙述」としたのは、これらが、いずれも、ものごとの、ある時点における様態を、客観的に言語主体が表現するものであるというところにある。それは当然、話し手の判断を含むものであり、それによって、文としてのまとまりをなしているものであるから、すべて、断定の表現の一種であると言うこともできる。しかし、断定の表現自体は、そこでは、特徴的なものではない。いわば、すべて、断定の表現が内的に附加されているから、共通の特徴として、引き去ることができるし、弁別的な特徴としては、とりあげる必要がない。断定の表現には、また、それ自体の内部の分化があって、事実の叙述と連続的に対立している。これを「断定の様相」とし、内部の分化に、断定・希求・推定・意志の4表現を認めた。語形式のうけつなぎの順としては、大きく事実の叙述のつぎに断定の様相が置かれ、事実の叙述内部では、態―様―時、または、様―態―時の順で、時の表現があとのほうにくるのが普通である。断定の様相は相互に意味上対立するから、一主体の表現としては一様相があらわれるにとどまると思われる。

事実の叙述と断定の様相との表現は、いずれも判断として既定のものであって、話し手がその判断に対してふたしかな気持を持つことを表現するものではない。(前述のように、推定の表現も推量された判断として既定のものであるとした。)これに対して、判断そのものに、ふたしかな気持を持つことを表現するのが、判断未定の表現であり、これに「判断未確定」・「判断への疑念」の2表現をわかつことができるのである。前述の実例によっても明らかのように、これらは、形式上の類似のために、一転して質問の表現となりうるものであって、意味上も、これを判断の未確定にとどまるものと認めるか、質問に属するものと認めるかは、解釈のしかたのわかれるところである。ここに「判断未定の表現」というのは、狭義の“疑問”と同じであって、狭義の“質問”とは区

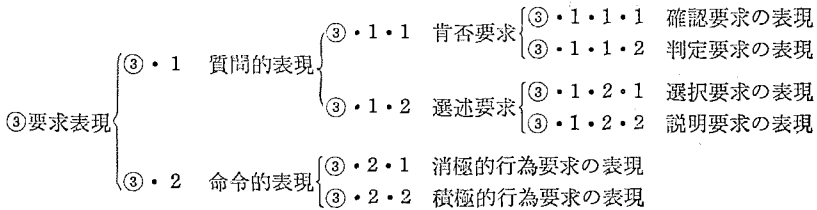
別される。疑問と質問とは言語主体に対する疑念の表明としては共通するが、そのうち、対自的なものを疑問とし、対他的なものを質問とする。ここでの分類に関しては、疑問を質問と区別し、質問は「要求表現」の一種とし、疑問を「判叙表現」の一種として、ここに「判断未定の表現」と称したのである。“疑問の表現”と呼ばなかったのは、一つには、“疑問”が、広義には“質問”を含んだり、逆に“質問”が広義には“疑問”を含んだりすることもあるという、不安定な印象を避けるためであり、一つには、判断既定と対立させることを明らかにするためである。

判断未定の表現の内部に、判断未確定と判断への疑念とをわかつのは、意味的には、その判断のふたしきさの程度であり、形式的には文末助辞類のちがいである。判断未確定は判断のふたしきさが弱く、終助詞「カ」をその特徴的形式とするものであり、判断への疑念は、判断のふたしきさが強く、終助詞「カ」を含む「カナ」「カシラ」などの文末助辞を、その特徴的形式とするものである。

4・3・1 ③要求表現は、一般に、「質問文」（または「疑問文」と言われるものと、「命令文」と言われるものとの総称である。要求するものが、相手の返答であるか、相手の行為であるかの別はあっても、“相手に対して求めるところがある”という点で、共通し一括して、他の表現と大きく区別される。（一般には「質問文」と「命令文」とを、「判断文」・「詠嘆文」と対立する2つの文表現に扱う。）質問的表現は、ことばとしての返答を求めることに重点が置かれる表現であって、肯定否定を表明することを求めたり、ことがらについての選択や説明を求めたりするものである。これに対して命令的表現は、行動としての応答を求めることに重点が置かれる表現であって、依頼・勧誘などから、強制的命令まで、各種の内容を含むから、その程度を大別して消極的行為要求と積極的行為要求とに2分することとした。質問的、命令的と不明瞭な語を用いた（「的」は連体助詞「の」の意味ではないところの、今日の慣用に従う。）のは、形式上は質問だが、内容は命令（あるいはその一種としての依頼や勧誘など）であるものがあって、一般の通念めいたものとしての質問表現・命令表現というだけでなく、それぞれの、いわゆる婉曲な表現も含み、そのわりふりについては、特定の解釈をしなければならないものがあること、また、

消極的行為要求の表現のなかには、命令表現と言わず、依頼表現とか勧誘表現とか言って、呼びわけるほうがいいと、(「命令する」という語の意義から連想して、)思われるものがあるが、分類上、これらをも一括し、適当な呼び名もないから、全体としての呼び名を命令的表現としたのである。

要求表現の分類はつぎのごとくである。



4・3・2 以下に実例を示して、多少の説明を述べる。(前記判叙表現におけると同様、下位分類における実例と説明をさきに記し、あとでそれらの上位分類の説明を述べる。)

③・1・1・1 確認要求の表現

確認要求の表現というのは、話し手が自己の判断について、相手の確認を求めることの明瞭な表現であって、その点、判叙表現の文末に「ネ」「ナ」などの終助詞をともなうものと、意味的にも形式的にも、よく似たものがあるが、そのほか、「～ダロウ?」「～デショウ?」「～ジャナイ?」「～ジャナイカ?」という文末助辭をともなう形式がある。「～ダロウ」「～デショウ」の、推定の表現を、推量という断定の一種と見たのは、この、確認要求での判断の内的存在と相関する。

○～ネ

「コンナカデハサ アナタガ イチバン アマトウネ?」〈こん中ではさ あなたが一番 甘覚ね?〉(3⁽⁹⁾-15-2)

「カケタ サイショニ ナンカ キソウダッタノネ? ニサンニチシテ」〈かけた最初に なんか 来そうだったのね? 2・3日して〉(3⁽⁹⁾-1-3)

「ソノ ヒトノ ヨビナ ヨビナデスネ?」〈その 人の 呼び名 呼び名ですネ?〉(5-13-4)

「カミクズカゴダヨネ?」(5-11-3)

「ミンカンノ ホウガ イイ ワケデスネ?」〈民間の方がいい わけですネ?〉(12-7-17)

「ヤッタ コト アリマスネ？」(12-20-11)

「ソレカラ コナイダ ブチガ モッテイタネ？ ソノ ソバカス ケス クスリ」〈それから こないだ ブチが 持っていたね？ その そばかす 消す薬〉(22-21-12)

「ジャ バックミタイナ モンナンダネ？」〈ジャ バックみたいな もんなんだね？〉(22-20-16)

「キクチサント トミナガサデスネ？」〈キクチさんと トミナガさんですね？〉(27-8-24)

「ソウシタラ イタダキニ クルデショウネ？ キット」(27-7-7)

「ダケド アレガ イチバン ウレルンダッテネ？」(16-22-8)

「マジメナ ハナシダヨナ？」(16-11-3)

○～ダロウ

「ソノ ヨビナハー モット クダケテンダロ？」〈その 呼び名は— もっと ぐだけてんだろ？〉(5-13-8)

「ザルミタイニ ナッテイル モンダロ？」(5-10-15)

「オシノ ツヨイ オトコトカネー ナンカ ソウイウフウナ コウ イウヨウナ コト イウンダロ？」〈おしの 強い 男とかねー なんか そういうふうな こう いうような こと 言うんだろ？〉(5-13-8)

「コンドハ カミセイヒンダロウ？」〈今度は 紙製品だろう？〉(5-5-10)

「アレ アレダロ ナガーイ ヤツダロ？」(22-5-4)

「ニホンゴジャナイ トウキョウゴダロ？」〈日本語じゃない 東京語だろう？〉
(22-29-19)

「デモ カオガ ミエナクテモ トミタサノ ホウハ メガネデ マチガイナイダロウ？」〈でも 顔が 見えなくても トミタさんの方は メガネで まちがいないだろう？〉(16-9-4)

「イチネンカン コウカイ シナインダロウ？」〈1年間 公開 しないんだろう？〉(16-6-14)

○～デショウ

「デモ ナル モノッテ イチネンオキナンデショ？」〈でも なる ものって 1年おきなんでしょ？〉(3⁽²⁾-8-4)

「オトトシ イッテ キョネン イッテ コトシ イッタデショウ？」〈おとし 行って 去年 行って 今年 行ったでしょう？〉(3⁽³⁾-4-5)

「イロイロ アルデショウ？ クモノ ナマエガ」〈いろいろ あるでしょう？ 雲の 名前が〉(5-1-18)

「ヘンシュウキョクト イワレタデショウ？」〈編集局と 言われたでしょう？〉
(5-11-11)

「ホケン モラッテイル アイダニ ショウカイガ アッタデショウ？」〈保険もらっている 間に 紹介が あったでしょう？〉 (12-4-10)

「アノ ソツギョウノ トキハ テストガ アリマシタデショウ？」〈あの 卒業の 時は テストが ありましたでしょう？〉 (12-15-19)

「ナイデショウ？」 (22-14-2)

「アレヲ コウ ホラ ケズッチャッタデショ？ ガケラネ、ホトンド」
(27-12-18)

「オオキイ オハカデショ？」〈大きい お墓でしょ？〉 (22-8-15)

「デ イマハ ナニモ アノー ヒキモノヤナンカ ナランデンデショウ？」
〈で 今は 何も あのー 引き物やなんか 並んでんでしょう？〉 (27-5-18)

「ソシタラ モウ カイサンデショ？」〈そしたら もう 解散でしょ？〉
(16-17-14)

「サンジュウゴネンゴロ ツクラレタンデショウ？ アレ」〈35年ごろ 作られたんでしょう？ あれ〉 (16-6-1)

○～ジャナイ

「ユガワラヘ イッタジャナイ？」〈湯河原へ 行ったじゃない？〉 (3⁽³⁾-2-9)

「アラ ソレジャー イイジャナイ？」 (3⁽²⁾-9-2)

「ケーキノ マワリニ ヌロウト…～…テデ マワシナガラ キレイニ コウ スッチャウジャナイ？」〈ケーキノ まわりに 塗ろうと…～…手で まわしながら きれいに こう 塗っちゃうじゃない？〉 (3⁽¹⁾-7-2)

「ダケレド ヨクサ ニホンジャ タトエバ…～…ヨワイト イウ コトバガ ハヤッテイルジャナイ？」〈だけれど よくさ 日本じゃ たとえば…～…弱いと いう ことばが はやっているじゃない？〉 (22-24-5)

「イハイト ソレカラ アレニ カイテアルジャナイ？ アノ セキヒニ」〈位牌と それから あれに 書いてあるじゃない？ あの 石碑に〉 (27-5-12)

「…～ミンナ トナリノ ホウヘ サガッテモラッテサー シニント フタリッ キリニ ナッチャウジャナイ？」〈…～みんな 隣の方へ さがってもらって さー 死人と 2人つきりになっちゃうじゃない？〉 (22-19-4)

「…～シンジュクノ ユウビンキョクノ ギャング…アレヲ マネシタンダッテ ハナシジャナイ？」〈…～新宿の 郵便局の ギャング…あれを まねしたんだって 話じゃない？〉 (16-6-9)

「コンド オノデラ スキナノガ クルンジャナイ？ メイジザデ」〈今度 オノデラ 好きなのが 来るんじゃない？ 明治座で〉 (16-22-1)

○～ジャナイカ

「カジノ ゲンバジャナイカ」〈火事の 現場じゃないか〉 (5-8-20)

「ダカラ ソウ イッテルジャナイカ」 (5-10-17)

「イイジャナイカ」(16-16-21)

「ジブンモ セイネン、ジブンモ セイネンジャナイカ」〈自分も 青年、自分も 青年じゃないか〉(16-20-14)

「ソノ マエニ アッタジャナイカ、ナンカ 『ワナ』ッテ イウノガ」〈その前に あったじゃないか、なんか 『畏』って いうのが〉(16-4-3)

③・1・1・2 判定要求の表現

判定要求の表現というのは、相手に yes か no かの判定を求める表現であって、話し手が、自己の判断の成立するか否かを、相手の判定にまつものである。判叙表現の形式のままの文末に、昇調をくわえるものと、文末に、終助類「カ」「ノ」をとるものなどがある。

○～カ

「アー アレデモ マダ マンカイジャナインデスカ？」〈あー あれでも まだ 満開じゃないんですか？〉(3⁽²⁾-6-3)

「ジャー シンメニ ナルデスカ？」〈ジャー 新芽に なるんですか？〉
(3⁽²⁾-11-6)

「キジャナクテ タケデスカ？」〈木じゃなくて 竹ですか？〉(5-10-1)

「ソレデ イインデスカ？」(5-4-15)

「セイホンヤ インサツカンケイハ イヤデスカ？」〈製本や 印刷関係は いやですか？〉(12-3-17)

「ナイショクモ ヤッタ コト ナインデスカ？」〈内職も やった こと ないんですか？〉(12-10-5)

「ジュンスイデスカ？」〈純粹ですか？〉(22-1-18)

「ユッタカ？ ソンナ コト、オレハ」〈言ったか？ そんな こと、おれは〉
(22-22-13)

「オダイシハ オツケシマスカ？」〈お台紙は おつけしますか？〉(27-9-3)

「ヨウシト モウシマスト モウシコミシヨデスカ？」〈用紙と 申しますと 申し込み書ですか？〉(27-1-18)

「ホッカイドウノ ヒトハ ハダソン ナッチャッタノカ？」〈北海道の 人は 破談ん なっちゃったのか？〉(16-15-23)

「オレ ズイブン クダラナイ コト ジャベッタカ？」(16-11-3)

○～ノ

「セイヨウリ ヨウリヤ ニホンリ ヨウリ センブ ヤルノ？」〈西洋料理や 日本料理 全部 やるの？〉(3⁽¹⁾-11-1)

「カターイノ？」〈堅ーいの？〉(3⁽²⁾-17-1)

「ジャー ボクタチノ ショクギョウニ カンケイ アルノ？」〈ジャー ぼく

たちの 職業に 関係 あるの？ (5-4-10)

「トニカク カゴミタイニ ナッテンノ？」 (5-11-1)

「デ ゼンゼン タイム ハカッタ コト ナイノ？」〈で ぜんぜん タイム 計った こと ないの？〉 (12-15-24)

「シツギ ヨウホケンガ アッタノ？」〈失業保険が あったの？〉 (12-4-4)

「アノ カイミョウガ カイミョウガ カイテアンノ？」〈あの 戒名が 戒名 が 書いてあんの？〉 (22-6-3)

「シラキデ ハイッテンノ？」〈白木で はいってんの？〉 (22-10-1)

「ソレハ ヤッパリ コワイッ イウ コトナノ？」 (22-28-11)

「ソレデ トミタサン フリコンダノ？」〈それで トミタさん ふりこんだの ？〉 (16-9-20)

「コッチ キタノー？」〈こっち 来たのー？〉 (16-8-13)

「スキナノ？」〈好きなの？〉 (16-16-17)

○～ンジャナイ^カ？

「タダ スレバ イインジャナイノ？」〈ただ 塗れば いいんじゃないの？〉
(3⁽¹¹⁾-6-9)

「モウ チョット スマートナンジャナイ？」〈もう ちょっと スマートなん じゃない？〉 (3⁽¹²⁾-3-8)

「ノンチャン イチパン イッテンジャナイ？」〈ノンちゃん 一番 行ってん じゃない？〉 (3⁽¹³⁾-7-10)

「ソノ シンブンハ…～…ヨムト イウ コトラ シナイデ ナニカ ホカノ コトラ スルンジャナイ？」〈その 新聞は…～…読むと いう ことを しな いで 何か ほかの ことを するんじゃない？〉 (5-5-23)

「アノ アタマニ カブセテ ヒルネ シテルンジャナイ？」〈あの 頭に かぶせて 昼寝 してるんじゃない？〉 (5-7-2)

「オサケ カケテ オクンジャナイカ？」〈お酒 かけて おくんじゃないか？〉
(22-13-11)

「ダイタイ カイミョウ オボエテナインジャナイカイ？」〈大体 戒名 覚えて ないんじゃないかい？〉 (22-3-10)

「スコシ ムイタ ホウガ イインジャナイ？」 (22-20-21)

「イマ アノ チホウモサ ドンドン ヒョウジュンゴカ サレテイルンジャナイ？」〈今 あの 地方もさ どんどん 標準語化 されているんじゃない？〉
(22-7-10)

「モウ キタンジャナイノ？ エイガハ」〈もう 来たんじゃないの？ 映画は〉
(16-5-15)

○～？ (文末昇調)

「フツウノ オウチ？」〈普通の おうち？〉 (3¹¹-2-1)

「アナタ イッシュョジヤナカッタ？」 (3¹¹-1-9)

「ソイジャ セイジニ カンケイガ アル？」〈せいじゃ 政治に 関係がある？〉 (5-7-24)

「ウツクシイ？」 (5-1-8)

「ゲンザイ イラッシュアル トコロカラ ツウキン シテ オシゴトハ デキマセン？」〈現在 いらっしゃる 所から 通勤 して お仕事は 出来ませんか？〉
(12-11-7)

「ナニナニカタト シナイデモ オテガミ トドキマス？」〈何々方と しないでも お手紙 届きます？〉 (12-1-2)

「カイミョウ カイテナイダロウ？」〈戒名 書いてないだろう？〉 (22-3-21)

「シツテモ ビョウシツ ウツサナイワケ？」〈知ってても 病室 移さないわけ？〉 (22-1-10)

「イチノセ ヨコタト ナッテル？」〈イチノセ ヨコタと なってる？〉

(27-8-7)

「ニシュウカンツツッタ？」〈2 週間つつた？〉 (27-8-4)

「オモシロイッテ？」 (16-5-5)

「ヨッパラッタ ヒ？」〈酔っぱらった 日？〉 (16-11-9)

③・1・2・1 選択要求の表現

選択要求の表現というのは、判定要求の表現が、2つ、特殊な形で連結し、そのどちらかの判断を、相手に選択することを要求するものである。典型としては、「Aか、Aでないか？」の型が基本である。あらゆるものごとはAかAでないかのいずれかにきまっでいて、あますところがないから、これ以外の選択はできず、「Aだ」または「Aでない」という答えが求められる。これに対して、「Aか、Bか？」の型がある。これは、Aの反対概念・対立概念をBに置くことによって、現実には、「Aか、Aでないか？」に準ずる内容を持つこともしばしばあるが、原理的には、「Aか？」および「Bか？」という判定要求2つを連結させたものであって、それぞれ、単独ならば、yes, no, で答えられるが、2つ連結して発せられたために、yes, no, では答えきれなくなるものである。この型は、当然、「Aか、Bか、Cか、……Nか？」という連結を許容するが、実際には、そう沢山並ぶものではない。われわれの共通資料では、3つ並ぶものさえもなく、2つまでであった。このような、文連結型を、文型のなかに入れることの可否は、解釈のわかれるところであるが、われわれは、

肯否要求表現が、2つ（以上）連結したために、変じて肯否要求表現でなく
るという事実を重視し、その一つ一つは、独立する文ではなく、合して1つの
文としてはたらくようになると考えて、文型に参与させることとした。

（「文の認定」42ページ参照。）

「カラダ ジブンデ ヒカクテキ ジョウブト オモワレマス、ソレトモ アマ
リ ジョウブデナイト オモワレマス？」〈体 自分で 比較的 丈夫と 思わ
れます、それとも あまり 丈夫でないと思われませんか？〉（12-21-11）

「ゴク カタチハ マールイデスカ、ナガイデスカ？」〈ごく 形は ^{ま-ろ}丸い
ですか、長いんですか？〉（5-3-5）

「ソレジャ シンブンシャノ ニンゲンカ、シャガイノ ニンゲンカ？」〈それ
じゃ 新聞社の 人間か、社外の 人間か？〉（5-12-6）

「コタイデスカ、エキタイ？」〈固体ですか、液体？〉（5-1-4）

「アサデスカ、バンデスカ？」〈朝ですか、晩ですか？〉（5-1-20）

「ヤッパリ シンブンニ カンケイガ アルト イッテモデスネー コノ ヘン
シュウテキナ コトカ、アルイハ ソノ シンブンノ ジギョウト イウ セン
タイノ ケイエイテキナ コトカ、ドッチデスカ？」〈やっぱり 新聞に 関係
があると いてもですねー この 編集的な ことか、あるいは その 新
聞の 事業と いう 全体の 経営的な ことか、どっちですか？〉（5-12-21）

「マエジ…ノヨウナ オシゴトラ キボウシマスカ、ソレトモ アノー コウイ
ンサンナラ ホカノ オシゴトデモ イイデスカ？」〈前に…のような お仕事
を 希望しますか、それとも あのー 工員さんなら ほかの お仕事でも い
いですか？〉（12-1-21）

「カラダノ ホウ ジブンデ ヒカクテキ ジョウブト オモワレマス、ソレト
モ ビョウキ シヤスイデスカ？」〈体の方 自分で 比較的 丈夫と 思わ
れます、それとも 病気 しやすいですか？〉（12-6-18）

「キョネンノ イマゴロカ、モット マエカ？」〈去年の 今ごろか、もっと
前か？〉（16-10-7）

③・1・2・2 説明要求の表現

説明要求の表現というのは、いわゆる「疑問詞」を含む質問の表現であ
って、その内容を説明することを相手に求めるものである。いわゆる疑問詞は、
判叙表現のなかにも用いられる。（「イツ カレガ カエッタノカ キガ ツカ
ナカッタ」「イツデモ イイ」など。）したがって、特定の時・所・人などをさ
だめえないことをあらわすのが、その意義であろうから、「不定詞」の名称が
ふさわしい。名称はとにかく、これが質問的表現の象徴であるかのように考え

ることはできないわけで、その文を質問的表現とする特徴的要素は、全体として、相手に答えを求めるという意味内容、すなわち意図自体にあると考えられる。詞的要素の不定詞は、辞的要素の終助詞「カ」とともに、それを外形にあらわすのに、最もたやすいような、意義と機能とを持つ語なのである。この説明要求の表現は、そのうちの不定詞を、特徴的要素の形式として持つものである。

〈一般不定詞〉

「ノンチャンチ ナニガ オイシイノ?」〈ノンちゃんち 何が おいしいの?〉
(3⁽²⁾-20-5)

「ハナノ トコヘ イッテ ナニヲ コウ ツツクンデショウ?」〈花の とこへ 行って 何を こう つつつくんでしょう?〉 (3⁽²⁾-2-10)

「サイキンネ イチバン ドコノ ヤマヘ イッタノ?」〈最近ね 一番 どの山へ 行ったの?〉 (3⁽²⁾-1-1)

「ナーンデスカ? トチュウデ ヤメチャッテ、カンケイ ナイッテ」〈何ですか? 途中で やめちゃって、関係ないって〉 (5-12-3)

「エー ドッチデスカ?」 (5-12-7)

「ホケンノ トキハ ナンニ タノンデオイタノ?」〈保険の 時は 何に 頼んでおいたの?〉 (12-4-12)

「イツカラ イツマデ オツトメ シテラッシャイマシタ?」 (12-8-19)

「マエ オツトメ シテタノハ ドコヘ オツトメ シテラッシャイマシタ?」〈前 お勤め してたのは どこへ お勤め してらっしゃいました?〉 (12-8-14)

「ナニ?」〈何?〉 (16-1-15)

「ダレニ マケルノ?」〈だれに 負けるの?〉 (16-15-10)

「ドコデ ヤッタノ? 『チャンピオン』」 (16-4-23)

「ボク ドレ?」 (16-2-22)

「ナニ シャベレバ イイノ?」 (22-1-10)

「ソノ ゴダイ ツブレルッテ イウノハ ダレガ ソウイッタワケ?」〈その5代 つぶれるって いうのは 誰が そういったわけ?〉 (22-14-20)

「イツゴロ デキマス?」 (27-9-10)

「ドチラノ ホウヘ オオクリ イタシマスンデゴザイマスカ?」〈どちらの方へ お送り いたしますでございますか?〉 (27-6-22)

つぎの諸例は、不定詞を含んで説明要求をあらわし、同時に、判定要求をもあらわしていると考えられるものである。したがって、これらは、一次的

には判定要求の表現であり、二次的に説明要求の表現であると解釈することもできるし、その逆の解釈もできる。また、一次的・二次的というよりは、その複合であると解釈することもできよう。ここでは、不定詞を含む質問の表現ということで一括し、この説明要求の表現のなかに入れた。

「ホカニハ ナニカ ゴキボウ アリマセンカ？」〈ほかには 何か 御希望
ありませんか？〉 (12-14-18)

「オカアサンハ ナニカ シゴトラ モッテマスカ？」〈お母さんは 何か 仕
事を 持っていますか？〉 (12-19-16)

「エトカネ ソウイッタ アノー シュミデスネ、ナニカ ゴザイマセンカ？」
〈絵とかね そういった あのー 趣味ですね、何か ございませんか？〉
(12-13-23)

「サンミニ ナニカ カンケイガ アッテ？」〈酸味に 何か 関係が あって
？〉 (22-17-20)

「ソレカラ アンナイジョウデスネ ナニカ ヒナガタ アリマスカ？」〈それ
から 案内状ですね 何か ひながた ありますか？〉 (27-3-1)

〈数に関する不定詞〉

「ナンカイグライ イッタノ？」〈何回ぐらい 行ったの？〉 (3⁽³⁾-4-4)

「ナンニングライ キテルノ？」〈何人ぐらい 来てるの？〉 (3⁽¹⁾-1-3)

「イクンチグライノ ヤマ？」〈いく日ぐらいの 山？〉 (3⁽³⁾-3-3)

「タイプハ ナンカゲツ オヤリナリマシタカ？」〈タイプは 何か月 おや
りになりましたか？〉 (12-15-9)

「ジカンハ ナンジゴロマデ ヨロシインデスカ？」〈時間は 何時ごろまで
よろしいんですか？〉 (12-14-14)

「イモウトサンハ ナンニン？」〈妹さんは 何人？〉 (12-19-4)

「ダイタイ シュウニュウ オイクラクライ アリマシタ？ コノトキニ」〈大
体 取入 おいくらぐらい ありました？ この時に〉 (12-8-20)

「オトウサン オイツツデスカ？」 (12-19-6)

「ナンブングライ ヤッテ オラレルンデス？」〈何分ぐらい やって おられ
るんです？〉 (16-1-1)

「サンゼン イクラ？ マケタノ」〈3千 いくら？ 負けたの〉 (16-10-12)

「ナニテツ？」〈何鉄？〉 (22-20-20)

「ナンマイグライ トレバ イイワケ？」〈何枚ぐらい 取れば いいわけ？〉
(22-20-20)

「キチジョウジ ナンバンチデゴザイマスカ？」〈吉祥寺 何番地でございま
すか？〉 (27-7-17)

「モシモ オクッテイタダクトスルト オイクラナンデス? オソウリ ユウハ
くもしも 送っていただくとすると おいくらなんです? お送料は」

(27-6-21)

〈副詞的不定詞〉

「オバサン ヤマナンカ ドウデスカ?」〈おばさん 山なんか どうですか?〉
(3⁽³⁾-11-4)

「ドウカシラ?」 (3⁽³⁾-3-8)

「ゴシュジンハ ドウ ナサルンデスカ?」〈御主人は どう なさるんですか?〉
(12-10-17)

「マエノ トコロハ どうシテ ヤメタノ?」〈前の 所は どうして やめた
の?〉 (12-3-7)

「ソロバンハ どうデスカ?」 (12-2-7)

「レンズガ どうカ シテタノカネー?」〈レンズが どうか してたのかねー
?〉 (16-9-18)

「ドウシテナンダロウネー? アレー」 (16-9-11)

「ナンデカシラ?」〈何でかしら?〉 (22-16-19)

「ソレニヨッテ ドウスルノ?」 (22-20-14)

「ドウシテダカ シッテルカイ?」 (22-17-17)

〈連体詞的不定詞〉

「デ ソレデ アジハ ドンナノ ツケルノ?」〈で それで 味は どの
つけるの?〉 (3⁽³⁾-12-10)

「ナンブセンベーッテ ドンナ カンジ?」〈南部せんべーって どの
感じ?〉 (3⁽³⁾-17-1)

「ドノクライ スキ」〈どのくらい 好き?〉 (3⁽³⁾-15-4)

「ドウイウ イミナンデスカネー?」〈どういう 意味なんですかねー?〉
(5-10-11)

「オキュウリ ユウノ キボウハ ドノクライデスカ?」〈お給料の 希望は
どのくらいですか?〉 (12-3-5)

「イップンカンニ ドノクライ ウテマスカ?」〈1分間に どのくらい 打
ますか?〉 (12-15-17)

「バシ ョハ ドノヘンガ イインデスカ?」〈場所は どの辺が いいんです
か?〉 (12-2-17)

「マー キボウトシテハ ダイタイ どうイウ カイシャヘ ハイリタイト オ
モッテオリマス?」〈まー 希望としては 大体 どういう 会社へ はいりた
いと 思っております?〉 (12-21-23)

「ドンナ オンゴトガ ヨロシインデスカ?」〈どんな お仕事が よろしいん

ですか〉 (12-15-17)

「ドノクライ カカッタノ? シカン」〈どのくらい かかったの? 時間〉

(16-8-9)

「ドノクライノ オオキサカツラ?」〈どのくらいの 大きさかしら?〉

(22-8-11)

「デ コレ インサツハ オネガイシテ ドノクライデ デキマス?」〈で これ 印刷は お願ひして どのくらいで 出来ます?〉 (27-5-1)

「オクッテイタダクト ドノグライ カカルデショウカネ?」〈送っていただくと どのくらい かかるでしょうか?〉 (27-9-6)

「タダシハ ドノヨウナ ジデゴザンショウカ?」〈タダシは どのような 字でござんしょうか?〉 (27-7-24)

③・2・1 消極的行為要求の表現

前述した、広義 "命令" の表現のうち、いわゆる勧誘・勧奨などの "すすめ" の表現、および、希求・依頼などの表現が、この消極的行為要求の表現である。

"すすめ" には、不定詞を含む「ドウデスカ」「イカガデスカ」なども用いられるが、主として、「～シマシヨウ」「～シヨウ」という意志の表現が、話し手ばかりでなく、相手を含む全体としての意志の表現に転用されて、相手に対する行為要求に用いられる。

○～シマシヨウ

「ソレカラ エー コウブツセイヒンノ バアイモ アリマスケレドモ コノ バアイハ タケデ マイリマシヨウ」〈それから えー 箆物製品の 場合もありますけれども この 場合は 竹で まいりましょう〉 (5-10-3)

「シナモノ キメマシヨウ」〈品物 決めましょう〉 (5-10-9)

「アトアト ノコル コトラ カンガエテ ヤッパリ スコシ オヒンノ イイ ハナシヲ イタシマシヨウ」〈あとあと 残る ことを 考えて やっぱり 少し お品の いい 話を いたしましょう〉 (22-1-23)

「サテ ツギノ ワダイハ コウ アカルク イキマシヨウヨ、コンドハ」〈さて 次の 話題は こう 明るく いきましょうよ、今度は〉 (22-18-8)

「ドウモ アンマリ クライ ハナシバツカリ シマシタカラ コノヘンデ ヒトツ ワダイヲ カエマシヨウ」〈どうも あんまり 暗い 話ばかり しましたから この辺で ひとつ 話題を 替えましょう〉 (22-16-10)

「ソウイウノハ ヤメマシヨウ」 (22-1-22)

○～シテイタダキマシヨウ

「ト イウ トコロカラ ハジマッテ ジャ ミナサンニ イロイロト オシヤ

ベリラ シテイタダキマジョウ」〈と いう ところから 始まって ジャ 皆
さんに いろいろと おしゃべりを していただきます〉 (22-1-8)

○～ドウデスカ

「スポーツノ ハナシデモ ドウデスカ」〈スポーツの 話でも どうですか〉
(22-16-12)

○～イカガデス、 ～イカガデスカ

「グット コウチャノ ハナシナド イカガデス」〈ぐっと 紅茶の 話など
いかがです〉 (22-17-11)

「イカガデスカ」 (5-15-4)

「～シトラドウデスカ」の省略で「～シトラ」の形がある。共通資料には
見えないが、「スポーツノ ハナシデモ シトラ？」〈スポーツの 話でも
したら？〉、「モウ ソロソロ デカケタラ？」〈もう そろそろ 出かけた
ら？〉のように用いる。

話しあうことを共通の場面とする共通資料には、結果として、ほとんど、強
い行為要求の表現があらわれなかったのであるが、そればかりでなく、消極的
行為要求の表現となることができると考えるところの、上記以外のいくつかの
表現も、あらわれていない。われわれは、1957 年度実施の「表現意図に応ず
る発話の実験的調査」によって、そのような場面を設定して、いくつかの消極
的・積極的行為要求の表現をえた。それで十分であるという保証はないが、典
型のいくつかはえられたと考えられる。そこでの消極的行為要求の表現には、
つぎのようなものがある。

○～スルモノダ

「イチドデ バット オキルモンヨ」〈1度で バット 起きるもんよ〉
(80-2-8)

〈質問形式による〉 () は実例のないもの。

{ ～シテイタダケマスカ。 ～シテイタダケマス？ ～シテイタダケナイデ
ショウカ。 ～シテイタダケマセンカ。 シテイタダケマセン？ ～シテ
イタダケマセンデショウカ。

{ (～シテクレマスカ。) (～シテクレマス?) ～シテクレマセンカ。
{ (～シテクレマセン?) ～シテクレナイカ。 ～シテクレナイ?

{ (～シテモラエマスカ。) (～シテモラエマス?) (～シテモラエマセンカ。)
(～シテモラエマセン?) ～シテモラエナイカ。 (～シテモラエナイ?)

「…～…また コノ ツギー ツイデノ トキニモ マワッテキテイタダケマス
カ」〈…～…また この 次 ついでの 時にも 回ってきていただけますか〉

(77-4-16)

「スミマセンケド アノー カサ モッテナイモンデスカラ チョット イレテ
ッテイタダケマスー？」〈すみませんけど あのー かさ 持ってないもんです
から ちょっと 入れてっていただけますー？〉 (77-7-10)

「スミマセンケド モウ スコシ マッテイタダケナイデショウカ」〈すみませ
んけど もう 少し 待っていただけないでしょうか〉 (77-20-1)

「アノー スミマセンケドー イマ チョット ハハガ デテ…～…アトニ シ
テイタダケマセンカ」〈あのー すみませんけどー 今 ちょっと 母が 出て
…～…あとに していただけますか〉 (80-2-16)

「イマー オカネ ナインデスケドー マタ キテイタダケマセン？」〈今ー
お金 ないんですけど また 来ていただけませんか？〉 (77-25-18)

「アノー タイヘン オソレイリマスケド カサ アノ イレテイタダケマセン
デショウカ」〈あのー 大変 恐れ入りますけど かさ あの 入れていただけ
ませんでしょうか〉 (80-5-13)

「スミマセンケド モウ スコシ マッテクレマセンカ」〈すみませんけど も
う 少し 待ってくださいませんか〉 (77-15-6)

「ソレカラネー コナイダノ ニク…～…モット イイノニ シテクンナイカ
ナ」〈それからねー こないだの 肉…～…もっと いいのに してくんないか
な〉 (77-16-6)

「アー アノネー アノー ブタニク ヒヤクメトネ、ソレカラ…～…ウチ モ
ッテッテクンナイ？」〈あー あのねー あのー 豚肉 百匁とね それから…
～…うち 持ってってくんない？〉 (77-11-14)

「ナルベク ソノ トキニ シテモラエナイカシラ」〈なるべく その 時に
してもらえないかしら〉 (77-5-3)

(～シナイカ) ～シナイ？

「オキナイッ？」〈起きないっ？〉 (77-14-14)

○～シナクチャダメジャナイカ。

「ハヤク オキナクチャ ダメジャナイカ」〈早く 起きなくちゃ だめじゃな
いか〉 (77-4-6)

希求・依頼などの表現として、共通資料には、

「コレハ モウ ダイタイ アノー アチラノ オハツホリョウトデゴザイマス
 ネー イッショニ モウ コチラヘ セイリガ シテアルンデゴザイマスガネ
 コレヲ オカキイレ ネガイマシヨウ」〈これは もう 大体 あの一 あちら
 の おはつほ料とでございませぬ一 一緒に もう こちらへ 整理が してあ
 るんでございませぬ これを お書き入れ 願ひましよう〉(27-2-4)
 「モット カガクテキニ セツメイシテイタダキタインデスノ」〈もっと 科学
 的に 説明していただきたいんです〉(22-17-23)
 「コノ バアイダケハ イワナイデモライタイネ」〈この 場合だけは 言わな
 いでもらいたいね〉(16-11-1)

があり、「オ+(運用形)+ネガイマス」,「～シテイタダキタイ」,「～シテモラ
 イタイ」の類型が見られる。この同類として、「～シテホシイ」がある。いずれ
 も、話し手の希望の気持が、相手に直接向けられたとき、希求の表現となるも
 のである。

その、語の意義による表現としては、「オネガイイタシマス」「オネガイシマ
 ス」「ネガイマス」がある。共通資料には、

「ソレジャー オソレイリマスケド オネガイ イタシマス」〈それじゃー 恐
 れ入りますけど お願ひ いたします〉(27-8-11)

がある。

これらのほか、語の意義による消極的行為要求の表現のうちには、類型的形
 式のものがあると考えられる。

「カッテニ スルガイイ」〈勝手に するがいい〉,「スキナヨウニ スル
 ガイイ」〈好きなように するがいい〉,「ジユウニ スルガイイ」〈自由
 に するがいい〉のように、放任をあらわす表現は、「～シタラ イイ」,
 「～シタハウガ イイ」という判叙表現に隣接して、消極的行為要求に使
 われることの多い類型的形式である。

否定的意義を持つ「イケナイ」「イカン」「～シテハイケナイ」「シテハイカ
 ン」「ダメ」「～シテハダメ」「～シタラダメ」は、固定して、意義上、むしろ
 積極的行為要求に入れられるが、「コマル」「～シテハコマル」「～サレテハコ
 マル」「～スルニハオヨバナイ」は、意義上、消極的行為要求に入れられる。

③・2・2 積極的行為要求の表現

いわゆる“命令”の表現は、多く、これに属し、その類型には、かなり、さ

まざまなものがある。動詞の命令形は、その単純明瞭なものであるが、前述のような共通資料の性質上、そのなかには例がなかった。「表現意図に応ずる発話の実験的調査」から、その例をあげる。

- 「ジドウシャ ヨベヨ」〈自動車 呼べよ〉(77-13-14)
- 「ハヤク オキロヨ」〈早く 起きろよ〉(77-10-15)
- 「オキロッテバー」〈起きろってばー〉(77-14-20)
- 「アンマリ アワテテー アノー キヲ ツケロヨ」(77-11-1)
- 「アンマリ ダマスナヨ」(77-11-21)

同資料には、特定の語によるものとして、

- 「キラ ツケテ イッテラッシャイ」(77-25-15)
- 「マタ イラッシャイ」(77-6-17)
- 「ソレカラ アノ コノ マエ…～…コンド スコシ イイトコ クダサイネ」
〈それから あの この 前…～…今度 少し いいとこ くださいね〉
(77-26-9)

があった。また、「すすめ」・希求・依頼の表現も、命令形または、それに準ずる形式をとるものは、この積極的行為要求の表現と認めたので、そのあらわれた範囲での類型は、共通資料ではつぎのとおりである。

○～シテクダサイ ～シテクダサイマシ ～シテクダサイマセ

- 「ドッチカ ハッキリシテクダサイ」(5-1-5)
- 「ジャ ソクジツカカリノ ホウヘ マワシマスカラネ…～…ソコデ ショウカイ シテモラッテクダサイ」〈じゃ 即日係の方へ 回しますからね…～…そこで 紹介 してもらってください〉(12-4-21)
- 「イチオウ デモ ムコウデ ソウダン シテミテクダサイ」〈一応 でも 向こうで 相談 してみてください〉(12-5-2)
- 「エート ナナバンノ ホウデネ アノー ジュンニ…～…ナナバンノ マエデ オマチニナッテクダサイ」〈えーと 7番の方でね あのー 順に…～…7番の前で お待ちになってください〉(12-12-18)
- 「ソレデハネ ナナバンノ ホウデ ゴソウダン イタシマスカラネ…～…ノ マエデ オマチニナッテクダサイ」〈それでは 7番の方で ご相談 いたしますからね…～…の前で お待ちになってください〉(12-14-22)
- 「ソウデスネ ソノ ホカニネ ナニカ ゴジブンデ…～…コトガ アッタラ オッシャッテクダサイ」〈そうですね その ほかに 何か ご自分で…～…ことが あったら おっしゃってください〉(12-17-2)
- 「ソレデハネ アノ テキトウナ トコロガ アッタラ…～…リレキシヨヲ モ

ッテ キテクダサイ」〈それではね あの 適当な 所が あったら…～…履歴
書を持って 来てください〉 (12-19-20)

「オチャラ メシアガッテクダサイ」〈お茶を めしあがってください〉
(22-16-7)

「ノドラ オシメシクダサイ」 (22-16-8)

「ドウゾ コチラへ オカケクダサイ」 (27-6-3)

「サツカエナイ テイドニ オカキイレ クダサイマシ」〈さしつかえない
程度に お書き入れ くださいまし〉 (27-2-24)

「ドウゾ オカケクダサイマシ」 (27-6-3)

「ショウショウ オマチクダサイマセ」〈少々 お待ちくださいませ〉 (27-8-6)

「チョット オシラベンナッテクダサイマセ」〈ちょっと お調べなっしてくだ
さいませ〉 (27-8-7)

「ドウゾ オハイリクダサイマセ」 (27-8-15)

「ドウゾ ココ オカケ…オカケクダサイマセ」 (27-8-17)

○～シテクレヨ

「アンマリ へ…へんな コト イワネエデクレヨ」〈あんまり へ…変な こ
と 言わねえでくれよ〉 (16-10-23)

「へんな コト イワナイデクレヨ」〈変な こと 言わないでくれよ〉 (16-20-5)

「イワナイデクレヨ, モウ」 (16-21-15)

○～シテ ～シテヨ

「ナニカ ジャベッテ」 (3^{III}-1-1)

「サー アゲテ アゲテ」〈さー 上げて 上げて〉 (22-17-6)

「チョッ…チョット マッテ, チョッ…」〈ちょっ…ちょっと 待って, ちょ
っ…〉 (5-2-17)

「ダカラ イットイデヨ」〈だから 行っといでよ〉 (16-19-6)

○～シテゴランナサイ

「トウキョウノ ヤナカ イッテゴランナサイ」〈東京の 谷中 行ってごらん
なさい〉 (22-8-12)

○～シネー

「マア ノミネー, ミズ」〈まあ 飲みねー, 水〉 (16-10-17)

このほか、「表現意図に应ずる発話の実験的調査」には、つぎのようなもの
がある。

○～シナサイ

「ハヤク オキナサイヨ」 (77-4-8)

「ミヨちゃん オキナサイヨー」〈ミヨちゃん 起きなさいよ〉 (77-19-12)
 「カーズチャーン オキナサイヨ」〈カーズチャーン 起きなさいよ〉 (80-2-8)
 「オネーサマ オキナサイ」 (77-25-9)
 「キヲ ツケテ イカナイト ジドウシャニ ブツカッチャウカラ キヲ ツケ
 テ アキ…アルキナサイヨ」〈気をつけて 行かないと 自動車に ぶつかっ
 ちゃうから 気をつけて あき…歩きなさいよ〉 (77-19-18)
 「キヲ ツケテ イキナサイ」 (80-2-12)

少々注記をくわえておきたい。前記の「ノミネー」〈飲みねー〉は、今日の東京では、一般に用いない形の、たわむれの用法であるが、「～シナ」「～シナヨ」(「ノミナ」〈飲みな〉, 「ノミナヨ」〈飲みなよ〉), または「オ～ネ」「オ～ヨ」(「オノミネ」〈お飲みね〉, 「オノミヨ」〈お飲みよ〉(ネは昇調1をとる))という類例があると思われる。ただし、いずれも、共通資料には出てこないし、このような終助詞の用法については、方言差・性差・位相差・年齢差などが強く働くものと思われる。

このほか、「～シテクダサイ」「～シテクレ」「～シテゴランナサイ」「～シナサイ」に類する末文形式に「～シタマエ」「～シテゴラン」「～シテチョウダイ」(前記, “発話の実験的調査”には、○「ブタノ ジョウ ヒヤクメト, ソレカラ ギェウノー ヒキニク ゴジェウメ アトデ トドケテチョウダイネ」〈豚の上 百匁と それから 牛の一 ひき肉 50匁 あとで 届けてちょうだいね〉 (80-3-11) がある。) などがあり、「オ～ネ」「オ～ヨ」の終助詞のない形として「オ+(動詞連用形)」「(オノミ)〈お飲み〉」がある。(否定の形式「オ+(動詞連用形)+デナイ(ヨ)」「(オノミデナイ(ヨ)〈お飲みでない(よ)〉」の表現は、今日、すでに、やや古い表現に属すると思われる。) また、「～シテ」の強い表現に「～シタ ～シタ」(「ドイタ ドイタ」〈どいた どいた〉, 「ノンダ ノンダ」〈飲んだ 飲んだ〉。多く重複型。) がある。

また、「～スルノダ」「～スルノ」「～スル」の類型で、判叙表現が、相手に向けられるときは、強い積極的行為要求をあらわす。これも共通資料には、例がないが、「ハヤク アルクンダ」〈早く 歩くんた〉, 「ハヤク アルクノ」〈早く 歩くの〉, 「ハヤク アルク」〈早く 歩く〉のように用いる。「～テイル」「～テイルノ」「～テイルノダ」の形を用いることもある。「ソコデ マッテイル」

〈そこで 待っている〉, 「ソコデ マッテイルノ」〈そこで 待っているの〉, 「ソコデ マッテイルンダ」〈そこで 待っているんだ〉のように用いる。いずれも、特定のイントネーションをとまなうことが多いようである。(前記“発話の実験的調査”には、「ジドウシャナンカ キヲ ツケルンダヨ」〈自動車なんか 気をつけるんだよ〉(77-4-13)がある。)

また、「ミズ!」〈水!〉(《水をくれ》をあらわす。)のように、名詞だけで臨時的に積極的行為要求を表現することがある。

「チョット スミマセン, ミズ」〈ちょっと すみません, 水〉(16-3-5)

その相手の行為が場面によって明瞭なとき、その行為の対象物だけをあげて、その行為をあらわす動詞などを省略してしまうものである。「ミズ!」という表現は、それだけでは、行為要求の一般的表現意図を持たず、〈水をくれ〉をあらわすこともあり、〈水がある〉をあらわすこともあり、〈水が出た〉をあらわすこともある。場面によって、さまざまな内容をあらわすから、個別的表現意図を持つばかりであって、われわれの対象とする範囲を越えるものとする。

4.4.1 ④ 応答表現は、「ハイ」「イエ」をはじめ、相手のことばに対する言語主体の態度・判断の表明であって、前述①・②・③の類が、いずれも、あらたに話し手の感情・判断・要求などを持ち出すものであったのに対して、この応答表現だけは、つねに、相手のことばの内容に対して、応じ答えるものである。品詞分類としても、普通、応答詞は感動詞として、一括して扱われるが、ここでは、分離する考えをとった。しかし、一方、詠嘆表現と応答表現とは、相通ずるところがないではない。すなわち、詠嘆表現は、自己の感情の表出であるが、その感情の対象が、一般には、ことがらである。そこで、その対象であることがらが、相手のことばの内容であるばあいには、応答表現との区別のつかないところができるのは当然である。逆に、応答表現として、相手のことばに対して発せられるものであっても、その内容に対するおどろきや感嘆などを表出するものならば、詠嘆表現との区別はない。文法論としては、その連関が、重要な問題であるけれども、当面は、語の形式として重複するものも多いから、所詮、特徴的部分について、それぞれの代表的形式を記述することになる。意味的にも、ことがらに対する話し手の感情の表出を詠嘆表現とし、

相手のことばに対する態度・判断の表明を応答表現とするという、大すじの区別を立てるにとどまる。

4・4・2 応答表現の分類はつぎのごとくである。

- | | | |
|--------------|------------------|-------------------|
| ④応答表現 | ④・1 未分化的表現 | ④・1・1 声的受け |
| | | ④・1・2 語的類型を持った応答詞 |
| ④・2 やや分化した表現 | ④・2・1 指示詞(十文末助辞) | ④・2・2 その他の類型的表現 |
| | | |

上記の最下位分類においては、それぞれに肯否の別がある。しかし、肯否が問題になるのは、“受け”のあとの、“答え”の段階においてであるから、④・1・1 声的受けにおいては、肯否の別はない。一般の分類では、肯否が応答表現の分類基準の第一に置かれるが、ここでは、別の基準に従っている。その理由は、前述①詠嘆表現における分類と対応させるためと、肯否の別は、応答表現にあっても、判叙表現や要求表現におけると同様、弁別の第一の基準とはならないと考えたためである。それは、ちょうど、ダ・デス・デゴザイマスという、一種の文体の別が、意図表現に関しては、分類の第一の基準とはならないのと同様である。したがって、逆に言えば、ダ・デス・デゴザイマスという文体の別や、肯否の表現の別も、文型の細部においては問われる必要があるばかりでなく、また別の観点からすれば、それらを分類の第一の基準にすることができるということを意味する。ただ、意図表現の当面の作業に際して、これらを、こまかく扱うことを避けたにすぎない。ただし、この応答表現に関してだけは簡単であるから、肯否の別を例示することとした。以下に実例を記して、多少の説明を述べる。

4・4・3 ④・1・1 声的受け

独立したカードの用例としては、つぎの項の、語的類型を持った応答詞の一部と区別がつきにくい、われわれのカードの採集法からすれば、独立した判叙表現や要求表現の1文のカードのなかに、斜線 / / でかこんで記されているものの多くは、これである。便宜、例示すれば、

[デモネー、 /ウン/ シオウデニシテネ、 /ウン/ ソンテ ミリントネ、 /ウン/
 タマゴノ キミネ、ソレ ツカッテネ、 /ウン/ スリバチデ スルノヨ] くで
 もねー /うん/ 塩うでにしてね /うん/ そして 味醂とね /うん/ 卵の 黄身

ね、それ 使ってね /うん/ すり鉢で するのよ | (3⁽¹⁾-3-3)

| ドヨウノ アサ イッテ /ソ- / ア、ドヨウ…キンヨウノ ヨル イッテネ、
/ン、ン/ ソレデ ドヨウ イチンチ アルイテ、ソデ ヨル カエッテキテ
サ、/ウン/ ソイデ アクルヒ ハヤークネ マタ バスデ、タイヘンダッタ |
〈土曜の 朝 行って /ん- / あ、土曜…金曜の 夜 行ってね /ん、ん/ そ
れで 土曜 いちんち 歩いて、んで 夜 帰って来てさ /うん/ そいで あ
くる日 早くね また バスで、大変だった〉 (3⁽²⁾-3-4)

| デ、ソノ ウエニネ、/ウ-ン/ オノリヲ カケタリネ、/ウ-ウン/ コウ、ナ
ンテイウノカシラ、サムイ トコヘ イクトネ、オフヲ アゲタリネ、/ウ-ウ
ン/ オモチノ アゲタノヲ ナンカ ウエニ オクラシイ | <で、その 上ね
/う-ん/ おのりを かけたりね /う-うん/ こう なんていうのかしら、寒
い とこへ 行くとね お敷を あげたりね /う-うん/ お餅の 揚げたのを
なんか 上に 置くらしい〉 (3⁽³⁾-13-2)

④・1・2 語的類型を持った応答詞

いわゆる応答詞の代表であるが、前記のように、“声的受け”と、形式として区別のつきにくいものがあるばかりでなく、意味上も、区別のはっきりしないものがある。以下、語形を示す。

(肯定) 「ア-」、 「ア-ア-」、 「ア-ア-」、 「ア-ン-」、 「アアソ-」
「エ-」、 「エ-」、 「エ-ア-」、 「エ-エ-」
「ウン-」、 「ウン-」、 「ウウン-」、 「ウ-ウン-」
「ウ-ン- ウ-ン-」、 「ソ-」
「ハ-」、 「ハ-」、 「ハ-ア-」、 「ハ-ハ-」、 「ハ-ハ-」、 「ハイ-」、
「ハッ」
「フン-」、 「フソ-」、 「フ-ン-」
「へ-」、 「へ-」、 「へ-ア-」、 「へ-へ-」、 「へ-へ-」
「ハアソ-」

(否定) 「イエ-」、 「イイエ-」、 「イイエ-」
「イヤ-」、 「イヤ-」、 「イヤ-」
「ウウン-」

④・2・1 指示詞(十文末助辞)

この種の指示詞は、先行概念内容を指し示すが、これを自己の判断内容に持ちこむことによって、相手のことばに関する肯否の応答とすることができる。もし、指示詞によらずに、相手のことばの一部を取り用いて、これを自己の判断のなかに表現するならば、ことがらの内容としては同じでも、あらたな判断

の表現と見るのである。すなわち、前項「エー」「ウン」「イヤ」の類の応答詞も、そのあらわすことからの内容としては、相手のことばの一部を取り用いて、自己のあらたな判断叙述とするのと同じであるが、それがもっぱら応答に用いられるところの語であるという形式の上で、応答表現と認められるように、指示詞（+文末助辞）をも、応答表現と認めたのである。もとより、指示詞が含まれてはいても、その文表現としての形式はさまざまであって、そのどこまでを応答表現と認めるかについては、解釈の上でも、形式の区別の上でも、判然ときめかねるところがある。ここでは、「述語文節に指示詞を含む」ということを応答表現の条件とした。しかし、談話における文脈上、応答表現ではないと認められるものについては、たとえ、指示詞を含む述語文節を持つ文でも、はじめから、応答表現から除かれる。したがって、この種の表現に関しても、表現意図が優先し、ついで形式上の特徴をとり上げるのである。

また、指示詞を含む述語文節を持つ応答表現にも、これだけでなく、主語や修飾語がいろいろについていることがある。たとえば、「ボクモ ソウナンダ」〈僕も そうなんだ〉(22-2-10)、「ダーイタイ ソウネ」〈大体 そうね〉(3⁽³⁾-12-9)のように。これらも、ここでは応答表現に加える。なぜならば、これらは、上記条件にかなうことはもちろん、文全体として応答表現であることも明らかだからである。なお、念のために述べると、しばしばあらわれる重複形「ソウ ソウ ソウ」や「ソウデス ソウデス」のたぐいは、それぞれ「ソウ」や「ソウデス」1つずつを対象とする。これについては「文の認定」の章に述べたところであり、前項に関しても「イヤ イヤ」「エー エー」など、それぞれ「イヤ」「エー」1つずつを対象とするものである。また、類型的にあらわれる「エー ソウデス」「アー ソウカ」の類についても、「文の認定」の章に述べたように、応答としては、それぞれ2つの文の表現とみなされる。

（肯定） 「ソウ」, 「ソウヨ」, 「ソウネ」, 「ソウネー」, 「ソウネー」,
「ソウナノ」, 「ソウナノヨネ」, 「ソウイウコトヨ」, 「ソウソ」,
「ソウソウ」, 「ソウソウソウ」, 「ソウソウソウソウ」, 「ソウデ
ス」, 「ソウダ」, 「ソウデスヨ」, 「ソウダヨ」, 「ソウデスネ」,
「ソウデスネー」, 「ソウダネー」, 「ソウダナー」, 「ソウダヨナ」
「ソウ ソウデス」, 「ソウデス ソウデス」, 「ソウダヨ, ソウダヨ」

「ソウデショウ」、「ソウデショウネー」、「ソウデゴザイマショウネ」、
「ソウデゴザンズネ」

「ソウオ」、「ソウカ」、「ソウカー」、「ソウカイ」、「ソウカネー」、
「ソウデスカ」、「ソウデアンスカ」、「ソウデゴザイマスカ」、
「ソウジャンイ」、「ソウカモンレナイ」、「ソウラシイヨ」、「ソウ
ラシイワネ」

「ダーイタイ ソウネ」、「アホウッテ イウノ ホントニ ソウネ」、
ソウネ、タシカニ」、「ソウヨ、カイジャンナカ」、「ソレハ ソウダ
ヨ」、「ワタンモ ソウダナ」

「ソウラシイワネ、アレハネ」、「ソウカシラ、キツ」

《否定》 「ソウジャンインデス」、「ソウジャンーインデス」、「ジャンイ」

「ソウデモナイ」、「ソウデモナイラシカッタヨ」

「ナンカ チョット ニテルヨウナ トコ アリマスガ ソウジャンイデス
ネ」、「ソウネー ダケドモ ソーンナデモナイワヨ」

④・2・2 その他の類型的表現

指示詞を含む述語文節以外に、応答をあらわすと認められながらも、あらたな判叙表現であるのかとも疑われるものがいくつかある。そして、そのなかには、ある類型が見出されるものがある。それらは、あらたな判叙表現に至る直前の、応答表現と解釈し、この項におさめた。

《肯定》 「ホントネ」

「ヨロシユウゴザイマス」、「ショウチイタシマンタ」

「ソノ トオリ」、「マサシク ソノ トオリ」

「ソウイウ バアイモ アルデショウネ」、「マア ソレノ ホウデショ
ウネ、エー ジギョウソノモノト イウコトヨリモ」

《否定》 「シラナイ」

「チガウ」、「チガウワヨ」、「チガイマス」、「チガッタ」、「チ
ガイマンタ」

「ソレモ チガイマス」

「ワタンハ ダメヨ、ゼンゼン」

5 前記以外の表現

5・1 以上、①詠嘆表現、②判叙表現、③要求表現、④応答表現の概要を、実例とともに述べたが、これらは、いずれもコミュニケーションの内容に関するものであった。これに対して、コミュニケーションの成立そのものについて、コミュニケーションの発始および終止に関する表現と解釈しうるものが

ある。すなわち、発始の表現としては、「オイ!」「ネー!」「ヤマダサン!」「コンチハ!」「ヤー!」など、普通、「呼び掛け」とか「あいさつ」とか言われているものの一部があり、終止の表現としては「ジャ!」「サヨナラ」など、普通「わかれのあいさつ」と言われているものがある。

5・2 また、①および④には、それぞれ、未分化的表現があるが、②および③にはそれがない。しかし、未分化的表現を、それぞれの表現の発始の形式とすれば、②判叙表現のそれには、語的表现としての反唱の表現が擬せられるであろう。~~（反唱の表現については、「女の認定」の章、ページに述べた。）~~ ③要求表現のそれには、疑念の表明としての疑問兆候「ハテナ?」「オヤ?」が擬せられる。

これら、各表現の発始としての未分化の表現に対して、複雑な内部論理構造を持つものがある。形式は③であつて、究極の意味は②をあらわすところの反語の表現がこれである。これには、形式上も意味上も、肯否要求または説明要求の質問的表現と区別することの困難なものもあるが、要するに、③の形式をとりながら予期されたその否定的応答として、指示詞を含む応答表現、またはあらたな判叙表現を意味するものである。一般の談話には、例の少ないものであるが、講演などの独話には、比較的多い。もとより、反語の表現は、意義的には判断の未確定あるいは質問的表現であり、臨時の意味として、その否定としての判叙表現などを内含すると言うこともできるのであるが、「臨時の意味」と言っても、これが社会習慣として固定的で、当然の結果であるために、他の「臨時の意味」とは性質がちがう。そこで、ここに一応、指摘しておく必要があると思う。

5・3 この項でとりあげた表現はつぎの3種である。

- | | | |
|---|---------------------------|--------------------------|
| { | A. コミュニケーションの成立そのものに関する表現 | (1) 発始
(2) 終止 |
| | B. 判叙・要求表現の未分化な表現…………… | ②・0 反唱の表現
③・0 疑問兆候の表現 |
| | C. 要求・判叙表現等にわたる複雑な表現…………… | 反語の表現 |

2・5・4 これらを、意図の面からの文表現の分類に参加させるとすれば、反語の表現は、一応別として、従前の①～④のほか、①を立て、②・1のまえに、②・0として反唱の表現を置き、③・1のまえに、③・0として疑問兆候

の表現を置けばよい。また、反語の表現は、広義“臨時の意味”を除外して判断未確定の表現あるいは質問的表現に、その特殊なものと解釈して、入れることができる。これらを、はじめから分類一覧に加えることをせず、あらかじめ説明することを避けたのは、①～④の分類の簡明さを乱し、論述の難解になることをおそれたからである。すなわち、これらの実例を補って、その概要を示せば、つぎのようになる。

〈実例〉

A (1)

「ネ」、「ネッ」、「ネー」、「ナッ」、「ナー」、「キミ」、「オイ」、「ハイ」、「モシモシ」、「フルヤサン」、「アリタケサン」
「ドウゾ コチラへ」、「ドウゾ」、「イラッシャイマセ」、「イラッシャイマシ」

A (2)

「ソイジャー ドウモ」、「ドウモ」
「シツレイシマシタ」、「ゴメンクダサイマセ」、「サヨウナラ」

B ②・0

（「マー ミミニ ハサンドルトカネー」〈まー 耳に はさんでるとかねー〉
「アー ミミニ ハサンドル」〈あー 耳に はさんでる〉 (5-14-19)
（ソレハ ネダンガ モンダイダナー」〈それは 値段が 問題だなー〉
「ネダンガ」 (5-10-22)
（「エー ソノクライデモ アリマスネ」 「デモアル」 (5-10-24)
（「ソツギョウハ イツデスカ？」〈卒業は いつですか？〉 ○「アノー キノウダッタンデス」 「キノウ」 (12-15-13)
（「イモウトサンハ？」〈妹さんは？〉 「エート トウデス」〈えーと 10です〉 「トウ」〈10〉 (12-19-12)
（「モウ ヤッテナイ、キノウマデダッタ」 「キノウマデダ」 (16-5-3)
（「アラ アノネ トウホクノ ホウデ コワイト イウト ツカレタッテ イウ コトナノ」〈あら あのね 東北の方で こわいと いうと 疲れたって いう ことなの〉 「ツカレタ、ウーン」〈疲れた、うーん〉 (22-28-7)
（「スポーツノ ハナシデモ ドウデスカ？」〈スポーツの話でも どうですか？〉 「スポーツ」 (22-16-13)
（「キョネンデスカラネ ジュウガツ ニジュウハチニチ」〈去年ですからね 10月 28日〉 「ニジュウハチニチ」〈28日〉 (27-8-22)
（「フタリノラ ニマイデス」〈2人のを 2枚です〉 「ニマイ」〈2枚〉 (27-8-25)

B ③・0

「エ?」, 「エッ?」, 「エー?」, 「エーッ?」, 「ン?」, 「ウン?」, 「ハ?」, 「ハッ?」

「ナニ?」, 「ナーニ?」, 「ナンダロウナー」, 「ナンデショウカ」
「ドウカナー」

C 反語の表現

5.5 反語の表現には、形式上、質問（狭く言えば疑問）の表現と区別のないものが多い。現に、われわれの“独話資料”にも、反語の表現としてのみ用いられる形式を見ることはできなかった。意味上、それかと考えられるものは、下のように、ほとんど、「～デハナイデショウカ」「～ジャンイデショウカ」の形をとっている。

その全例を示す。

「ソレニハ一 夜の 安眠が 一番 大切ではないでしょうか」(88⁽¹⁾-1-5)

「デ コノ ヤキモチハ ソウリョウノ オコサマニ トクニ アラワレルノデハナイデショウカ」〈で この やきモチは 総領の お子さまに 特に あられるのではないのでしょうか〉(88⁽²⁾-2-15)

「デ コドモガ イケナイ コトラ シタ トキニ ハジメッカラ カット ナ ッテ オコッテル オカアサンモ イマスケレド タイテイノ バイハ コドモ ニ ヨク チュウイヲ シテ エー アトデ コウイウ コトラ シナイヨウニ イッテヤラナケレバ ナラナイト イウ イミヲ タブンニ モッテ シカッテ イルンデスケレド, ソレニ タイシテ コドモタチガ ナンカ コウ イチオウ ノ リクツヲ イッタリシマスト ダンダン オヤノ ホウガ コウフン シテ キテ オコッテシマッテ オシマイニハ モウ『コレダケ イッテモ オカアサンノ イウ コトガ ワカラナイデスカ』ナンテ コウ テヲ フリアゲテシマウッテ イウヨウナ バイガ ズイブン アルンジャンイデショウカ」〈で 子供が いけない ことを した 時には はじめっから カット になって おこってる お母さんも いますけれど 大抵の 場合は 子供に よく 注意を して えー あとで こういう ことを しないように 言ってやらなければならない という 意味を 多分に 持って 叱っているんですけど、それに対して 子供達が なんか こう 一応の 理屈を 言ったりしますと だんだん 親の 方が 興奮 してきて おこってしまっ おしまいには もう『これだけ 言っても、お母さんの 言う ことが わからないですか』なんて こう 手を 振りあげてしまうって いろいろな 場合が ずい分 あるんじゃないでしょうか〉(88⁽³⁾-2-2)

「ジブンデ ジブンノ ケンイヲ ナゲダシテイルヨウナ モノジャナイデシヨウカ」〈自分で 自分の 権威を 投げ出しているような ものじゃないでしょ
うか〉 (88⁽⁹⁾-3-19)

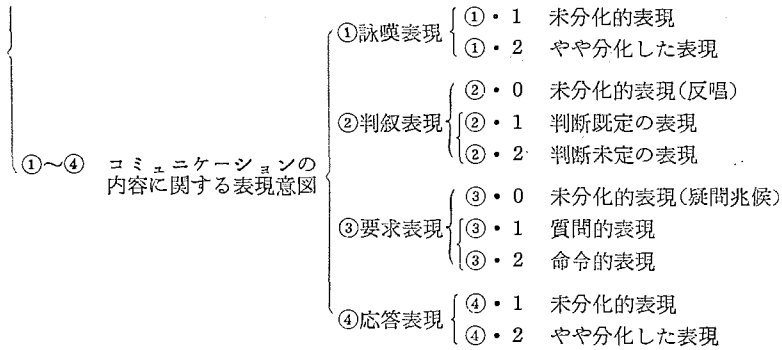
つぎの例のように「～ジャゴザイマセンカ」の形をとって、「デシヨウ」という推量をあらわす形式を含まないものは、質問の表現と考えられる可能性が強いところを見れば、「デシヨウカ」(あるいは「ダロウカ」)は、反語の表現の文末として、もっとも特徴的な要素であると言えるのではなからうか。

「ソレカラ チイサメノ オコサンハ ソノ ネンレイノ サイズデ ヨロシイノジャゴザイマセンカ」〈それから 小さな お子さんは その 年齢の サイズで よろしいのじゃございませんか〉 (88⁽¹⁾-5-5)

このほか、われわれの資料には出ないが、「～ガ～スルモノカ(イ)」「～ガ～スルモンカ(イ)」の形をとって、明瞭な反語をあらわす形式がある。「ダレガイクモノカ(イ)」〈誰が 行くものか(い)〉、「アイツガ ャツテクルモンカ(イ)」〈あいつが やって来るもんか(い)〉、「キブンガ イイモンカ(イ)」〈気分が いいもんか(い)〉などと用いる。過去の事実に関して、過去の表現を含めて、「～ガ～シタモノカ(イ)」などとは、言い難いところを見れば、この形式は詠嘆的な意味の濃い表現なのであろう。同様に、「～ガ～スルカ(イ)」の形式で、反語をあらわすことがある。特定の卓立の音調などをともなうようである。上例の「～スルモノカ(イ)」は、「～スルカ(イ)」だけでも表現できるのであるけれども、「～スルカ(イ)」だけならばそれだけ、質問(狭くは疑問)の表現と区別しがたくなるところを見れば、やはり、「モノカ(イ)」のほうに、反語の表現としての特徴的要素と言えるのであろう。これも過去の事実に関して過去の表現を含めて「～ガ～シタカ(イ)」と言い難く、この形式も詠嘆的な表現なのであろう。(これに対して「デシヨウカ」のほうに、たとえば、上例についても、「ソレニハ ヨルノ アンミンガ イチバン タイセツデ ハナカッタデシヨウカ」〈それには 夜の 安眠が 一番 大切ではなかったでしょうか〉と容易に言いうる。)

5・6 〈分類〉

- | | |
|--|---|
| { <ul style="list-style-type: none"> ① コミュニケーションの成立そのものに関する表現意図 } | { <ul style="list-style-type: none"> ①・1 コミュニケーション発始の表現 (よびかけ) ①・2 コミュニケーション終止の表現 (わかれ) } |
|--|---|



6 おわりに 以上述べたように、表現意図から見た文表現の文末部分には、いく種類かの類型が見られる。われわれの第1段階の作業としては、まず、ここまででとどめるのであるが、これだけでは、もちろん、文型を出すのに十分なものではない。文末以外の部分も、文末との相関において、とらえられ、文全体としての類型が見られて、はじめて、文型と言うにふさわしい文の類型が、とり出される。そのなかには、結局は、文末部分が特徴的形式であるにとどまると言うべきものも多いだろうと推測されるけれども、なお、文全体を見る必要がないとは言えない。いわゆる主語や連用修飾語や、ときには、連体修飾語さえも、述語の意義に相関的な制約を持っており、いわゆる係助詞・副助詞などが、これに微妙にかかわるものと思われる。また、接続助詞によって外形にあらわされる句関係の構造にも、ある種の類型が見出されるであろうことも、ある程度、予想される。なお、2文の連結においても、かなり緊密な結合関係があって、その類型と見られるものもあるようである。それは、もちろん、一般に、文型の範囲を越えるけれども、その程度までは、文型を見きわめるのに必要な考究かと思われる。

これら、多くの作業が、まだ第2・第3の段階として、残されている。それらの、かなりの部分は構文の問題であり、構文の面からするのところが、表現意図の面からすれば、その形式へのあらわれは、ほとんどすべて、文末部分に集約されるであろう。とは言っても、それだけで、文型に参加するところが十分だとは、言えないであろう。また、表現意図の分類、および、それに応ずる文表現の分類については、意味に関するところが多から、観点や、立場が

ちがえば、また別の分類も可能であろう。要するところは、意味的な面からと、形式的な面からと、両面からの考究が、目的に応じて、可能な限り適切に、ととのった秩序を示すように分類されることが望ましい。その分類の程度も、実際上の目的に応じて、かなりこまかくすることもできようし、また、ある程度大まかなところでとどめることもできる。現在の目標と段階では、前述の程度を、適当と認めたのである。 (宮地 裕)

3 構文

1・はじめに

1・1 構文における対象　ここで構文というのは、従来、文の構造とも言われてきたもので、文の構成要素の組み合わせや配列のしくみをさす。「文型」の調査において構文が重要な一つの面であることはいうまでもない。

しかし、話しことばにおいて「構文の型」を把握することは必ずしも容易ではない。そもそも、日本語表現においては、文の構成要素の配列は比較的自由であると言われる。事実、次のような文は、

木の葉が　はらはら　地上に　落ちる。

はらはら　木の葉が　地上に　落ちる。

木の葉が　地上に　はらはら　落ちる。

のように、その構成要素は比較的自由に位置することが可能である。このような日本語の構文上の特色は注目すべきであろう。さればと云って、日本語においては、文の構成要素の配列が、すべて全く自由であると言い得るものではない。この例文においても、

木の葉が　はらはら　落ちる、地上に。

などは特異な表現効果を伴って用いられないわけではないが、少なくとも、書きことばにおいては一般的であるとは言えないであろう。この種の文が「倒置」の文などとよばれるのも、それが普通でないことを認めるがゆえであると思う。また、連体修飾語も被修飾語の前に位置することが普通である。それゆえ日本語における構文について、その構成要素の配列の順序を問題にする場合には、一般の構成要素の配列の順序は自由であり、ただ、

- (1) 主語は述語の前にある。
- (2) 修飾語は被修飾語の前にある。

ということだけは構文上の制約であると認められて来たのである。

(もちろん、日本語の文すべてがこのようであるわけではない。上述の「木の葉がはらはら地上に落ちる」において、「木の葉(が)」は主語、「はらはら」「地上に」は連用修飾語と言われるが、これら相互の順序は確かに比較的自由であるといえる。しかし、「どうも　お手数を　かけました」「それには　関係が　ない」などの文において、「どうも」「お手数を」あるいは「それには」「関係が」のそれぞれの位置はか

なり固定している。したがって、日本語の構文において、主語や連用修飾語の相互の位置が自由であるというのも、厳密には限定を伴った特色であるに過ぎない。

ところが、話しことばにおいては、いわゆる倒置の文はきわめてありふれた事がらに属する。

○「モヤッテ イウノカナ、アレハ」

○「ホン モッテキテクレ、ソノ ツクエノ ウエノ」

これらはいわゆる倒置の文として、特別扱いにすべきか、それとも、普通の構文の型とすべきであろうか。さらに、話しことばでは一つの文に該当すると認められる発話断片に続いて、その補充的な文に該当すると認められる発話断片のあらわれている場合も少なくない。それゆえ、いわゆる倒置の場合をも含めて述語の後に位置するものはすべて、別の文であるとする立場も可能である。(Ⅱ1「文の認定について」を参照)

さらには次のような文において

○「カレノ タイドハ リッパデハ スコシモ ナカッタ」

○「ミンナデ ソコ アツマッタンド」

「スコシモ」の位置はどうであろうか。「スコシモ」の位置や「ニ」を伴わない「ソコ」という言い方は話しことばとして一般的であると認め得るであろうか、それとも、不整の表現として、一般の構文の型の研究対象より除外すべきであろうか。

話しことばの構文の調査においても、すでに対象の取り上げ方に問題があると言わねばならない。われわれは、既述したように(Ⅰ5・3・3、「文切りと文の選別」を参照) 資料を限定したが、さらに構文上問題になるものもある。どの程度までを調査の対象とするか、はっきりした線は引きにくい、話しことばの文の形式として一般的なものを取り扱おうと努力した。やや特殊と思われるものは区別して示すことにした。

1・2 構文観 どのような調査方法で、構文の型を把握しようとするか、ということの根底には当然、構文観がある。構造的に文がどのように成り立っていると見るかということである。たとえば、主語と述語とを持つことが構文の必要条件と考えるかどうかによって、構文の型のとらえ方も異なるであろう。どのような構文観を持っているかが問題になるのである。

橋本進吉博士が文節を中心にして文の構造を分析することを試みられたことは有名である。つまり、文節と文節との「切れ・つづき・うけ・かかり」の関係によったもので、幾つかの文節の結合したものとしての連文節の考えを導入されたことも人の知るところである。結局は、文の緊張体系の中で、それぞれの文節・連文節がどのような関係で位置しているかは文全体の結構においてとらえられるとするのである。

時枝誠記博士は、日本語の文の構造をいわゆる「入子型構造」において、とらえようとされた。当然の結果ではあるが、全体としての一つの述語より抽出されたものとして主語や客語や補語などを考える。述語より抽出されたものであり、述語に含まれるという点で、主語も客語も補語も同性質であるとされるのである。

このような構文観の違いは、当然のことながら構文の分析にも影響を及ぼす。それぞれに長短があろう。「雨が降るだろう」「雨が降らない」はそれぞれ「雨が降る」ことを主体が「だろう」と推量し、「ない」と否定していると考えるべきで、入子型形式において、そのさまがよく理解できる。しかし、「だれも来ない」「雨しか降らない」などにおいては「だれも来る」「雨しか降る」ことを「ない」と否定している、あるいは「包んでいる」と考えることは無理であろうから、「だれも」と「来ない」、「雨しか」と「降らない」とがそれぞれ相対的に張り合い、呼応していると考えた方がこの構文のさまを理解するに都合がいいと思う。

この調査においては諸説を参考し、一般的であると思われる考え方によりつつ、結局は文全体の構造を、その文の構成要素がどのように張り合っているかその相対的な関係においてとらえようと試みた。

2. 調査方法

2・1 従来の研究方法 文型のための構文研究には二つの方向があったと考えられる。

(1) 文の叙述内容の事がらに即して、あらかじめ幾つかの構成要素を基本的に定めおき、それらの要素が含まれているかどうかという観点から構文の型を見ようという方法である。英文などでも5W1Hなどということが言わ

れるが、このような観点に立っての構文の調査も不可能ではない。実用のためには手っ取り早い効果をもたらすこともあろう。加藤十久雄氏が「文型に関する一考察」(「言語研究」第29号)において述べているのは外国人に日本語を教授するためのものであるが、「なに(だれ)、いつ、どこ、なにを、どんなふうに、どうした」などのような、あるいは「なに(だれ)、いつ、どこ、どんな、なに、です」などのような6成分を基にして「ます型」「です型」の文について、27の構文の型をたてている。この方法は結局は次の(2)の方法に通じるものではあるが、文の表現形式よりは表現内容に重点がおかれる結果になりがちな点が(2)の方法に比較して難点であろう。たとい、それが「単文の文型」であるに過ぎないとしても、このような「6成分」でもって、果して、すべての「単文」の文型を明らかにすることができるであろうかという疑問も生ずるが、前述したように、外国人の日本語習得のためという実用の上では、かなり効果が期待できると思われる。

(2) 文の構成要素の相互関係に幾つかの関係方式を認め、その相互関係を持つ構成要素の組み合わせや配列の順序によって調査する方法がある。この際も、どのような構文観を持っているかが、やはり問題である。第一に文の直接的構成要素として、何を単位とするかが問題になる。(単語、文節、成分など。)第二に、それらの構成要素の相互関係をどのように把握しようとするか、また、幾つの種類の関係方式を認めるかなどが問題になる。(たとえば入子型形式において把握しようとするか、文節と文節との接続 — 成分と成分との相対的な張り合い — において把握するかなど。また関係方式として、主・述の関係、修飾・被修飾の関係、対等の関係、附属の関係、などを認めるか、述語を中心にして主語、目的語、補語、対象語、連用修飾語、連体修飾語、独立語などを認めるかなど。)以上のようなことに関して、どのような考え方をとるかは研究者によって異なるが、このような場合、いずれにしても助詞・助動詞などの注目されることが多いようである。この(2)の調査方法は理論的にも整っているので、現在まで多くの人がこの方法を採用している。

「日本語教育と日本語問題」(岡本千太郎氏)で示された方法や「日本語基本文型」(青年文化協会)の「文の構造に関する文型」の方法などはすべてこ

れであると言える。たとえば、前者では

……ガ ……デス。 (「……ガ」の「……」は主語)

……ガ 用言。 (同上)

のように示される。

戦後の「日本語基本文型試論」(静岡大学教育学部浜松分校, 研究所年報, 第5集, 松下厚氏)では文の基本成文として, 述語文節・主語文節・補語文節・連用文節・接続文節・並立文節を立て, これらの組み合わせによって, 基本文型をつくらうとしている。

いずれも, その細部においては違いがあるが, 文の構成要素の組み合わせにより, 構文の型を明らかにしようとしたものと言える。

ところで, このような構成要素の組み合わせの関係は助詞などによって示されることが多いので, その関係方式を明らかにしようとするれば, どうしても, 基礎的には助詞などの用法を検討しなければならぬ。そこで, 助詞・助動詞・接続詞, および副詞や形式名詞や補助動詞などの一部について, その用法を明らかにすることが試みられる。「日本語基本文型」における「語の用法に関する文型」は, 恐らく, このような観点に立ってのものであろう。「学校文法概説」(永野賢氏)における「文の構造に関する文型」や「教育文法論」(白石大二氏)の「助詞・助動詞の用法から考えた国語の文型」も同様である。

また, 文のそれぞれの構成要素自体がどのように構成されているかも問題になる。「新文典別記 口語篇」(橋本進吉氏), 「日本語表現文典」(湯沢幸吉郎氏)や「基本文型による読解指導」(堀川勝太郎氏)はこのような観点に着目されていると言える。

もちろん, 具体的な言表は「場」と密接な関係がある。そこで「場」と関連させて, 構文の種類を明らかにしようとする考え方もある。「国語法文章論」(三尾砂氏)や「基本文型論」(国語教育のための国語講座 5. 三上章氏)の所説はこのような観点を重視していると解される。これらの論は佐久間鼎氏の説に通じるものであり, 文の種類を分ける一つの方法として注目される。

2.2 この調査の方針 厳密に構文の型を明らかにしようとするなら, どのような構文観によるかによって, その結果にも違いが出てくるわけであるが, こ

の調査においては次のような態度をとった。たとえば前述したように「雨が降らない」「だれも来ない」は、その構文を

雨 が 降ら ない。 だれ も 来 ない
→。→ ←← →。→ ←←

などと示すことができよう。(→ ←は主・述関係などの論理的関係を示す符号とし、→。→ ←←は、→ が →。→ ←← によって統括される符号とする。)

つまり、構文がどのようなものであるかは、その文がどのような緊張体系を持っているかによるわけで、その関係のしかたは相対的にとらえられなければならないと思う。「だれも」が関係し、呼応し合っているのは「来ない」であって「来る」ではないとすべきである。「あの人しか来ない」「雨は降らない」なども同様に解すべきである。「は・も・しか」などの係り助詞は、述語の、(詞ではなく) 辞と呼応することが多い。これらの係り助詞によって統括されたものは、述語の詞と辞との結合したものと呼応している場合があるのである。係り助詞のない場合でも、たとえば「だれが来ないか」などの「だれが」は単に「来る」に呼応しているのではないし、また、「雨が降らない」においても、「雨が」における音調がどのようなものであるかによって、場合によっては「雨が」が「降らない」と呼応していると認め得ることがあろう。

このように、構文の姿は、その文における構成要素の張り合い方によって、把握すべきであるとするのがこの調査の基本的な態度である。ただし、この調査においては構文の大まかな型を示すに止まった。したがって、結果的には、文法学説の違いによる文型の異同が表面に著しく表われていることは少ないと思う。

次に日本語の文表現においては文末部は重要であると思われるので、特にこれを重視した。「この本を読むな」「この魚は食べられますか」において、話し手の決定的な態度「禁止」あるいは「質問」は最後の「な」「か」によって示されている。文末部の末尾になるにつれて、話し手の相手に対する態度が明らかに表現されると概略的には言えるであろう。ただし、文末が重要であるとは言っても、構文の立場からは文末助詞よりは文末述語(の詞の方)が注目されなければならないと思われる。文末述語(の詞)が何であるかということと

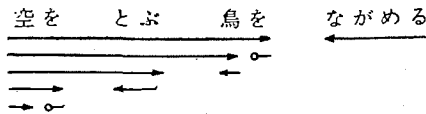
構文の型との間には、密接な関係がある。たとえば、「花が美しい」「雨が降る」の2文は、それぞれ「花が」「美しい」および「雨が」「降る」という二つの構成要素から成り、それらは主・述の関係にあると言えるが、「花が美しい」の分化した表現であると認められるものとして「花が……に美しい」（たとえば、「花が庭に美しい」）などの表現は普通ではない。これに対し、「雨が降る」の分化した表現と認められるものには「雨が庭に降る」のような表現もある。また、命令表現として、「花よ、美しかれ」のような言い方は現代口語として普通には用いられないが、「雨よ、降れ」のような言い方はある。(ただし、話しことばでは、普通ではないが)。このような違いは文末述語の「美しい」「降る」の詞性との関連において説くことができよう。また、「雨が降る」の分化した表現として「雨が……を降る」とは普通には用いられないが「子どもが歌を覚える」「先生が歌を教える」のような場合には「……が……を……」の形式がある。とは言っても、「先生が生徒に歌を教える」（「……が……に……を」）の形式はあるが（生徒）に覚える」という形式は普通ではない。これも、文末述語の「降る」「覚える」「教える」の詞性と関係があると考えてよい。「ぼくは水が飲みたい」「象は鼻が長い」などの構文も、それぞれ、「飲みたい」「長い」という述語の性質との関連を考えるべきである。

もちろん、このような態度を押しすすめると、結局は述語における一つ一つの語の違いをまで問題にせねばならなくなる。たとえば、副詞「ゆっくり」は主として動詞を修飾すると言えるが、「ゆっくり疾走する」「ゆっくり急ぐ」などという言い方は普通には用いられない。「ゆっくり」がどのような述語を修飾するか（裏返しに言えば、どのような述語が「ゆっくり」を修飾語としてとり得るか）は厳密には述語の一つ一つの語の違いを考慮せねばならないとも言える。

しかし、一つ一つの述語の語に基づいて 構文を考えることは、あまりに細かな違いを問題にすることになり非能率的である。これに対し、述語の詞性を類別し、類別された述語の詞性との関連において構文を考えることは「型」をみる上では有効である。たとえば、「ゆっくり」は「疾走する」「急ぐ」などは普通には修飾しないと見えるが、ある種の動詞を修飾することは確かであるのに、「形容詞」「形容動詞」「名詞」などを修飾することはほとんどない。とこ

ろが、副詞「やっぱり」は「動詞」「形容詞」「形容動詞」「名詞」などより成る述語を修飾し得る。それゆえ、個々の述語の語の違いを考慮すべきではあるが、「ゆっくり」「やっぱり」の修飾機能の違いを、類別された述語の詞性との関連において説明し得る。どのような構文の型をとるかという点からでも、述語の類を考えて、これと関係づけつつ、整理することができる。このようなわけで、述語の種類に注目しつつ構文の調査を行なうことにした。その方法について、次に述べよう。

2・3 調査単位、部 構文の型を調査する際に、どのような単位によって行なうべきであろうか。文の構成要素として単語を認めることができるが、単語と文との中間の単位として、「部」をたてることができる。つまり文において自立して相互に規定し合っており、素材的客体的概念が主体によって関係づけられている文構成要素を「部」と称し、述語を含む「部」を特に「句」と称することにする。ここにいう「部」は、いわゆる文節・連文節を総称したものに相当する。最小の「部」は文節に相当する。(特に必要な時には最小の「部」を「単位部」と称する。)したがって、ある文において、部をとらえる際は、その文の構造に即して、大きくも小さくもとらえられる。また、どの部とどの部とがどのように関係し合っているかも、その文によって定められることになる。たとえば「空をとぶ鳥をながめる」においては次に図示するように、



まず、「空をとぶ鳥を」と「ながめる」との二つの部の関係をとらえることができる。つぎに「空をとぶ鳥を」においては「空をとぶ」の部(句)と「鳥」との関係を見ることができ、「空をとぶ」においては「空を」と「とぶ」との関係を見ることができよう。つまり「空をとぶ鳥を」という部は「空をとぶ」という部(句)を含み、「空をとぶ」という部(句)は「空を」という部を含んでいると考えられる。

このように、一つの単位部が他の一つの単位部と直接に関係し合い、結合していることもあるし、幾つかの単位部から成っている部に直接に関係し合い、

結合していることもあるし、単位部の一部分と直接に関係し合い、結合していることもあるのである。

連部 ところで、二つ以上の単位部がきわめて緊密に結合していて、その間に他の部を挿入した形がない場合、あるいはその間に他の部を挿入した形がきわめて不自然であるような場合には、これを連部とし、単位部と同様に取り扱うことにする。多くの場合、このような連部は、それを構成しているそれぞれの単位部が独立して用いられている時の意味とは異なっている。たとえば「子どもが逃げて行った」などの「逃げて行く」は「…から逃げて、山に行く」などの場合と異なり、むしろ「逃げ行く」の意に近いと考え得る場合が多い。

もちろん、単位部が緊密に結合しているものとは言っても、そこに段階の差があることは当然である。

第一に、その結合がきわめて緊密で、その間に他の語のはいることのないものがある。たとえば、あいさつことばの「お早うございます」や「(あれは、もう)しょうがない」などがこれである。「お早う」と「ございます」、「しょうが」と「ない」との間には、一般には、いわゆる「つなぎことば」(たとえば「えー」「あー」「あのー」など)と言われるものさえもはいることがない。「しょうがない」などはつなぎことばや間投助詞のはいつている形がないわけではないが、これもまれに認められる程度である。「どういたしまして」「行くかもしれない」なども同様に考え得る。もっとも、あいさつことばでない場合の「(あの方の出勤は全く)お早うございます」などはつなぎことばや、間投助詞などのはいることがないわけではなく、さらに「係り助詞」(「は」「も」など)のはいることもある。(この場合、「お早くはございますが……」の形もあることに注意。)これは次の第二の類に属する。

第二に、つなぎことばや間投助詞のほか、係り助詞やある種の陳述副詞などのはいつている形のあり得るものがある。「お美しゅうございます」「(あれは)猫である」「逃げて行く」などがそれである。たとえば、「お美しゅうございますが……」「猫では絶対にありません」などのように。

第三に、つなぎことば・間投助詞・係り助詞・陳述副詞などはもちろん、そのほか主語など格助詞を伴っている部やあるいは句などのはいつている形もあ

り得るものがある。たとえば「(湯が) 水になる」「勉強をする」などがそれである。これらは、多くの場合、連結した形で用いられているが、場合によっては「英語の勉強をあいつがするというのは本当かね」のように用いられないことはない。

そこで、この調査においては、原則として、係り助詞や陳述副詞などのはいり得る程度のものまでを「連部」として、単位部に相当するものとして取り扱うことにした。もちろん、連部と取り扱うべきかどうかの決定は、実際には、かなりの困難を伴うものである。その表現の解釈のしかたが関係するからである。たとえば、「とうとう逃げて行った」における「逃げて行く」を「逃げ行く」の意に近いものと解釈し、「行く」を附属的な部と考える場合には連部と考える得る。しかし、もし「逃げて(向うに)行った」の意と解釈し、「行く」を実質的な独立している部と考える場合には連部にはなっていないと考える得る。実際の発話においては、場面・文脈・音調・ポーズなどによって、どちらに解すべきかほぼ理解者に一定の傾向をたどらせるであろうし、殊に「とうとう逃げて北海道に行った」のように、間に他の部のはいつている形の場合などはそれが一層まぎれないであろうが、その表現の解釈によって連部とするかどうかの問題になる場合があることを指摘したい。

○「エガ カザッテ アッタヨ」

○「アレハ ガッコウデハ ナカッタヨ」

なども同様である。前者は「絵を飾る」という事態のあったことを表現していると解される場合には連部であり、ある場所に飾って「絵が」存在したことを表現していると解される場合にはそれぞれ独立した単位部と考えられる。後者は「あれが学校か、どうか」を問題にしての発言なら、連部であるが、「何かが学校で行なわれたか、どうか」を問題にしているような場合の発言なら、連部ではない。

○「ミテ スグ ワカルッテ イウネ」

も「見てすぐわかる」らしいと解される場合には連部とするが、「見てすぐわかる」とだけかと言っていると解される場合には連部ではないと考える。

○「シカタガ ナイネ」

も、処置のしかたがこれより他にないと解されるか、慣用的に「やむなし」と解されるかで違いがある。

これは、いわゆる「融合形」の場合でも同様である。

○「シロウトデモ ヌウシュウノ セイセキヲ オサメテイルッテンデスネ」〈素人でも 優秀の 成績を 取めているってんですね〉

○「アイツガ イキタイ ッテンデス」〈あいつが 行きたい ってんです〉

において、前者の意味が『『優秀の成績を取めている』らしい』と解される時には連部である。また、後者において、『『行きたい』と、あいつが言ってる』と解されるなら、形は「融合形」であっても、それぞれを部とする。

このように、解釈によって異なるということは、つまり、これらの部は、その連結が場合によって、堅くもあり緩やかでもあるということである。それは、以上に述べた解釈の違いと、ほぼ、対応している。

本調査では、かなり明らかに解釈できる場合に限って、連部とした。どちらか不明の場合は、連部としない方針である。連部としたものの一部を次に示す。

【動詞のついているもの】

(1)……テ……

○「ツカッタアゲタインデスケド……」 ○「カイトアルヨ」〈書いてあるよ〉 ○「モッテイマセン」〈持っていません〉 ○「オドッチェイナイ」〈踊っちゃいない〉 ○「ナニ イッテヤンダイ」〈何 言ってやんだい〉 ○「オイクラグライ キボウシテイラッシャイマスカ？」 ○「セツメイシテイタダキタインデスノ」 ○「ダレカ ツイテイキマスネ」〈だれか ついて行きますね〉 ○「イッテオイデヨ」 ○「オウカガインタイト オモッテオリマスガ…」 ○「コチラノ ホウカラ チュウインテオキマス」 ○「ドコモ アケテオケマセンデシタネー」 ○「ソウコニ モッテキテモラウ」〈倉庫に 持ってきてもらう〉 ○「グット ノリダシテキタネ」 ○『『サバクハ イキテイル』 ヤッテクレナイカネ』 ○「メンアガッテクダサイ、 ミナサン」 ○「カクリシテゴザイマシタカラネ」〈隔離してございましたからね〉 ○「ミセテゴランナサイ」 ○「ソッチノ ホウヘ イッテミマジョウ」 ○「イッショウケンメイニ ナッテ ヒロツテミエマシタケド」 ○「グタイテキナコト シラセテミセマスカラ」 ○「オヤモトノラ タスケテヤルンダモノナー」〈親元のを 助けてやるんだものなあ〉 ○「オナカガ フトツチャウカラネ」 ○「モウ ヤッパリ キリカエナクチャナラナイノヨ」 ○「ソコヘシズメルッテイウンジャンイノ？」〈そこへ 沈めるっていうんじゃないの？〉 ○「トッテモ

コマルッタワヨ」〈とっても 困ったわよ〉

(2) ……バ……

○「ソコラ デナケリヤナラナインデス」〈そこを 出なけりゃならないんです〉

(3) ……ハ……

○「アト ノメヤシナイ」〈あと 飲めやしない〉 ○「ハガユイッタラ アリヤシナイノネー」

(4) 複合するもの

○「ノドラ オシメシクダサイ」 ○「ヨク ゴラシクダサイ」 ○「オマチイタシマス」 ○「ヨロシユウゴザイマス」 ○「ドウモ シツレイイタシマシタ」 ○「ドウスルノカシラネ」 ○「ドウイタシマシテ」 ○「ドウイウノ?」 ○「ホツシマシタ」

(5) ……デ……

○「ソンナニ ヨクバルンジャアリマセン」 ○「アンマリ スキデハアリマセン?」 ○「ケッコウデゴザイマス」 ○「ソウデアンスカ」〈そうであんすか〉

(6) その他

○「ノンチャン イチバン イッテンジャナイ?」〈のんちゃん 一番 行ってんじゃない?〉 ○「マチガイ オコシテシマッタラ マニアワナイ」 ○「アワククチャッタ」 ○「ナニモナラナイジャナイデスカ?」 ○「ショウガアリマセンナ」 ○「ヨウセツコウトンテ タノンデオキマス」〈溶接工として 頼んでおきます〉 ○「ビショビショニ ナッテ ナントモナインダモンネ」 ○「ソノセイモ アルカモシレナイ」

【形容詞のついているもの】

(1) ……テ (…) ナイ

○「カイミョウ カイトナイヨ」〈戒名 書いてないよ〉

(5) ……デ (…) ナイ

○「ニガワラヘ イッタジャナイ」〈湯河原へ 行ったじゃない〉 ○「ソウナンジャナイデシヨウカネー」 ○「ソウデモナイヨ」 ○「ソウデモナサソウネ」 ○「ソーンナデモナイワヨ」

(3) 形 (…) ナイ

○「ソンナニ オオキクナイ」 ○「ソウ ヤタラ デカクハナイヨ」

(4) その他

○「ナイ トキハ ショウガナイケド」 ○「シカタガナイヨ」 ○「シンバイノ
ナイ コトニハ チガイナイケド」 ○「トクニ カンケイナイ」 ○「キリガナイ
デスケドネー」

次のようなものは連部とはしない。

○「ムコウノ ヒトニ マカセタリナンカ スルヨ」 ○「ソロツテルミタイナ
キガ スル」 ○「イッテバカリ イル」 ○「バスガ イイトネ、キブンガ デチ
ャウ」 ○「ネサゲ ダンコウ」〈値下げ 断行〉 ○「ドコデ キイタカ オボエ
ナイネ」 ○「ソレヲ アキラカニ シタンデス」 ○「ザンギョウ アッテモ イ
イデスカ?」〈残業 あっても いいですか?〉 ○「ソレハ オワカリニ ナルデ
ショウ」 ○「ダンダン ツメタク ナリマスネ」 ○「ソレガ クニ ナルンデス
ヨ」〈それが 苦になるんですよ〉 ○「トテモ ダイジニ シテルンデスヨ」 ○
「アレハ キモチガ ワルイネ」 ○「オトウトノ ホウハ ハギレガ イインデ
ス」 ○「ソノ ホウガ ツゴウ イイヨ」 ○「ジブンニハ ジジンガ ナイ」
○「サイグンビハ ヒツヨウ ナイネ」〈再軍備は 必要 ないね〉 ○「ヒトラ
ハナデ アシラツテル」 ○「アレデ アイツガ ミソ ツケタンダヨ」 ○「ズイ
ブン キガ キクワネ」 ○「モチスシノ キガ カワツチャタンデス」 ○「ワ
タシモ カクコトハ カイタ」 ○「スツカリ カクニン デキマスネ」〈すっかり
確認 できますね〉 ○「ソレハ アルカモ ワカラナイヨ」 ○「ボキナンカラ
オヤリニ ナリマスカ?」〈簿記なんかを おやりに なりますか〉

(以上のうち、たとえば「ダイジニ スル」などは連部とも考えられないわけではないが、しかし「大事には しない」とか「大事には わたしも していたんです」とか言う形もないわけではない。「ソロツテルミタイナ キガ スル」も、場合によっては「そろってるみたい な 気が わたしには しましたよ」などと言う。そこで、これらは連部とはしない。以下、同様である。

ただし、なかには問題になる例もある。たとえば「ボキヲ オヤリニ ナル」は「簿記を おやりの した」などのような形式もあるゆえ、「ボキヲ オヤリニ | ナル」と考えられるし、「簿記を おやりに は やっぱり ならなかったんですか」のような形式も考えられないわけでもないの、連部とはしなかった。とは言っても

○「ボキハ ドウシテ オヤメニ ナッタノデスカ?」

などの場合には

ボキハ ドウシテ オヤメニ ナッタノデスカ?
 → ← ←

のように考え「オヤメニ ナル」を連部と考えた方が妥当であるとも思われる。しかしそれもここでは、連部とはしなかった。

また、「キズツク」「ゼツタイハンタイ」〈絶対反対〉、「デンワレンラク」などは一語として取り扱う。「クレカカル」「イキスギル」なども同様。ただし、「オマチスル」

「ゴレンラクスル」〈御連絡する〉は一語として取り扱うが、「ゴレンラク〜」「オマチ〜」などに「イタス」「モウス」「ナサル」「クダサル」などのついている場合は原則として、連部とする。また、「ネガウ」〈願う〉、「オネガイスル」のついている場合には、一般には二つの単位部とするが、ただし、「ゴレンラク ネガウ」などは場合によっては、連部とすることもある。

○「ヤスオクンニ アベセンセイヘノ ゴレンラク ネガイマシヨウカ？」〈安男君に 阿部先生への 御連絡(を) 願いますか？〉。

○「ヤスオクンニ ゴレンラク ネガイマス」

後者において「安男君に御連絡下さい」と同様な意味で用いられることがあるが、このような場合、連部とすることは妥当であると思う。

一次の部 さて、この調査において文末述語を重視する立場をとることはすでに述べたが、文末述語、およびこれと直接に関係している部を「一次の部」とし、まず、一次の部の組み合わせや配列により構文の型をとらえようと試みた。

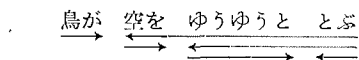
文末述語と直接に関係を結んでいる部とは次のようなものをいう。前述の「空をとぶ鳥をながめる」において、文末述語「ながめる」と直接に関係しているのは「空をとぶ鳥を」である。「ながめる」「空をとぶ鳥を」をそれぞれ一次の部とする。「空をとぶ」は「鳥」と関係しているのであって、「ながめる」に対しては間接的に関係を持つに過ぎないゆえ、これは二次の部である。同様に、「小島のいその砂浜で泣く」においては、「小島のいその砂浜で」「泣く」は一次の部であり、「小島のいその」は二次の部、「小島の」は三次の部であると認める。

ただし、「美しいけしきですね」の「けしきですね」は一次の部であるとするが「美しい」はこの文末述語のうちの「けしき」と直接関係はしていても、一次の部とは認めない。「けしき」はそれ自身だけでは述語になりえないからである。

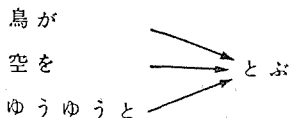
また、「しかし、私は行かなかった」の「しかし」は、前文と「私は行かなかった」とを接続しているのであり、「行かなかった」と直接関係していると認めるべきではないであろうし、「はい。そうです」「伊藤さん。いらつしゃい」における「はい」「伊藤さん」は文末述語であると認めることはできないであろうが、このような、いわば、文末述語とは孤立的関係にあるもの、論理関係未

分化なままに文を形成しているものも、一次の部として取り扱っている。

ところで、「鳥が空をゆうゆうととぶ」は大ざっぱに



のようにとらえることもできるが、文末述語「とぶ」を中心として



のように解することもできよう。つまり「鳥が」「空を」「ゆうゆうと」などは、ともに「とぶ」によって統一されていると考えることができる。これらはいずれも一次の部であると認める。もちろん、

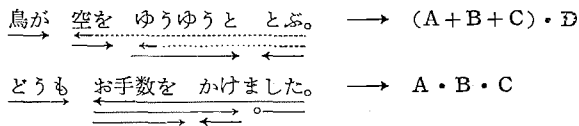
鳥が 空を ゆうゆうと とぶ。

空を ゆうゆうと 鳥が とぶ。

などの間に意味の違いが全く見られないわけではない。部の順序が異なっていることは、それなりに文意の違いがあると認めるべきであろう。けれども、それは、述べられている事態そのものはほとんど同じで、どの部が強調されているかの違いに過ぎないと言える。それは「私の兄は洋服を着ている」と「兄は私の洋服を着ている」とが意味を異にする場合と同一に論ずるわけにはいかない。それゆえ、ここでは、部の交換された形の構文を持つ幾つかの文が、ニュアンスの違いの見られる程度にしか文意が異なっていない場合には、同一構文を持つ文として取り扱おうと思う。「鳥が」「空を」「ゆうゆうと」はいずれも「とぶ」と一次的な関係を結んでいる部（一次の部）と認めるのである。（これに対し、「私の兄は洋服を着ている」と「兄は私の洋服を着ている」とは、それぞれの部の意味関係にも、大きな違いがある。こういう場合は構文が異なるを考える。）

それでは、「どうもお手数をかけました」の文の場合はどうであろうか。この場合「お手数をどうもかけました」とは普通には言わない。社会習慣として「どうもお手数をかけました」における部の順序は固定しているとも言えるものである。ただし、あいさつ言葉の「お早うございます」あるいは「道草をくう」などの慣用語が部の順序も結合も固定した表現形式であって「お遅うございます」「お早うあります」などの言い方が普通は認められないのとは違う。

「どうも御心配を（御迷惑を）かけました」「そんなにお手数はかけません」「お手数がかかって御迷惑でしょうが」などのような種々の言い方ができる。つまり、部の順序は固定化しているが、その結合そのものは固定しているという性質のものではない。とは言っても「彼が先生になった」（この文も「先生に」と「なる」との結びつきはかなり緊密である。）と比較すると、かなり慣用的である事がわかる。（「先生に彼がなったとは驚いたね」「先生には彼はならないだろう」、また「だれが先生になったんだい？」の答として「彼がなったよ」がある。「どうもお手数をかけました」には一般にはそういうことがない。）「どうも」は「お手数をかけました」全体と結合関係を結んでいるとも言える。このような場合にも、一応「どうも」「お手数を」「かけました」をそれぞれ、一次の部と考えることにし、ただ、これらの部の順序が固定していることを指摘し、その構文の型を、部の交換された形のあり得るものと区別することにした。概略的に図示すれば次のようになる。



（ $A+B+C$ はそれぞれが順序の自由であることを示し、 $A \cdot B \cdot C$ は順序の固定していることを示す。）

このようにして、一次の部を定めたのであるが、一次の部の認定のしかたにも、また、問題がある。解釈によって、認定のしかたが異なるからである。

○「ベツニ ヤッテイラッジャル コト ゴザイマセンカ？」

において、「別にやっている」のか「別にないか」であるかは、解釈の相違である。「別に」が、何と関係し合っていると解するかによって、一次の部ともされ二次の部ともされる。

○「ボクハ ナツハ ビール フェハ サケダ」

も「夏はビール冬は酒」の全体を一つの事がらとして把握し、「僕は(A)だ」の(A)にあたるものと考え得る場合もあり、音調・ポーズによっては「夏はビールであり、冬は酒だ」と把握し、「僕はAであり、Bである」の型として考え得る場合もあろう。その解釈が、一次の部を決定し、構文の型の認定を決定す

る。多くの場合、どのように解釈するかの大体の傾向はほぼ共通しているであろうが、どちらにも解釈できる例もかなりある。この調査では、どちらにも解釈できる場合には、一次の部と認めることにした。問題になったものの一部を次に示す。

(部と部との間は一字あけ。連部はあけない。|は一次の部と一次の部との切れ目を示す。)

- (1)○「チョット|オシラベン|ナツテクダサイマセ」〈ちょっと お調べん なって 下さいませ〉
 ○「タンザン ヒキザンモ|オヤリニ ナッタ コト|ナイ?」
- (2)○「ニホンタイプ|ヤッタ コト|アリマス?」〈日本タイプ やった こと あります?〉
 ○「ケッキョク|フチンノ スクナイ トコロトイウ ワケニ|ナリマスネ」〈結局 浮沈の 少ない 所という わけに なりますね〉
 ○「ホトケサマツテ イウノハ|ナニカ アル キハ|スルワ」
- (3)○「ナンドカ|クサイロガ ニゴッタミタイナ ヘンナ イロジャナイ、|ウグイ ステ」〈何だか 草色が 濁ったみたいな 変な 色じゃない、うぐいすって〉
 ○「ソレハネ|ナンカ|コウゴウシイ ヨウナ ミズダッタ」
 ○「チカテツ コウジ スル トキハ|モチロン|オハカジャナカッタ ワケダヨ ネ」〈地下鉄工事 する ときは もちろん お墓じゃ なかった わけだよ〉
 ○「ゲンザイノ トコロ|オトウサン オカアサンカラ イモウトサンガ イラッ シャル ワケデスネ」〈現在のところ お父さん お母さんから 妹さんが いらっしやる わけですね〉
- (4)○「ヤッパリ ニュアンスガ アルト|オモウワ|キョウトアタリネ」
 ○「ワタジモ|ソウ ヤタラニ アマイモノ タベタイト|オモワナイネ」
- (5)○「ナツテモ|チョット アカク ナルト|モウ|ナカヘネー アリガ ハイッテ シマツテ|タベラレナレデショウ」
 ○「ウチーモ|モト ウラニ アツタンデスケドネー|キョネン|ウエキヤサン ガ|アノ オニワニ|モツテキタンデスヨネ」〈家いも もと 裏に あったん ですけどねえ 去年 植木屋さんが あの お庭に 持って来たんですよ〉
 ○「ナンデモ|ジブンデ ヤレバネ|キモチ ヨク|タベラレルデショウ」
 ○「カラダガネ|コガラデ|バリバリ シテイルモノ」
 ○「サムイ トコヘ イクトネ|オフラ アゲタリネ|オモチノ アゲタノヲ|ナンカ|ウエニ|オクラシイ」
- (6)○「オコサン ツレテイラッシャルト|チョットネ|ムズカシク|ナリマスケドモ ネ」〈お子さん 連れていらっしやると ちょっとね 難しく なりますけどもね〉

- 「ダンドン | ハナガ | スクナク | ナリマスネー」〈だんだん 花が 少なくな
りますねえ〉
- 「ゼンブ | カゾクノ カタ | イッシュニ | スンデ イラッシャイマスカ?」
- 「チョットシタネ テカゲンデネ | ヘンナ ハナガ デキタリ | スルノ」〈ち
ょっとしたね 手加減でね へんな 花が できたり するの〉
- (7)○「ヤッパリ | ニュアンストイウ コトバガ | イチバン | ビタット | クルワネ」
- (8)○「ダイタイ (| ミンカンノ カイシャトシテ |) ドンナ トコロノ カイシャ
ヲ | キボウシテ イラッシャイマスカ?」〈だいたい 民間の 会社として ど
んな ところの 会社を 希望して いらっシャイマスか?〉
- 「ダイタイ | ソノ クライデスカ?」
- 「ジカンハ | ダイタイ | ナンジゴロマデノ トコロガ | ヨロシユウゴザイマス
カ?」〈時間は だいたい 何時ごろまでの ところが よろしゅうございます
か?〉
- (9)○「ゲッシュウハ | サイテイ | ドノクライ | ゴキボウデスカ?」〈月収は 最低ど
のくらい 御希望ですか?〉
- 「ヒトツキ | ゴセンエンハ | ホシイ?」〈一月 五千円は ほしい?〉
- (10)○「オフタリサンノヲ ヨソマイデスカ?」〈お二人さんのを 四枚ですか?〉
- 「アン トキハ | イッパクモ | ナンニモ | シナイモンネ」〈あん 時は 一泊も
何にも しないもんね〉
- (11)○「ナラッタコトハ ナラッタデスネ」〈習ったことは 習ったんですね〉
- 「ウエキヤサンガ | テイレ シテルコトハネ シテルノ」

2・4 格 次にどのような関係において、一次の部が組み合わせられ配列されて
いるかが問題になるわけであるが、この関係方式に幾つの型を認めるかは定
説がない。この調査では、まず、一次の部を取り扱うので、その関係だけを直
接の問題にすればいいわけであるが、しかし、全体の文の構成要素間の関係方
式をどう認めるかが、その基盤となっていることは言うまでもない。そこで、
一般的に、この調査で、部と部（またはその一部）との関係の方式をどう認め
ているかを述べようと思う。このような相互関係における資格を「格」と名づ
けるが、「述語」を中心にして、格の種類を次のようにまとめることにした。

部の格	{ (1)主・述の関係 (2)対述修飾・述の関係 (3)並立対等の関係	{ 体言的・述 副詞的・述	私が 行く。
			本を 読む。
			ゆっくり 読む。
			私が、彼が、先生が 読む。

句の格	(1)対述修飾・述の関係 (2)並立対等の関係	対等 (並立)	読めば <u>わかる</u> 。
			<u>勉強も</u> <u>し</u> 、 <u>運動も</u> <u>する</u> 。 <u>読まないから</u> 、 <u>関心を</u> <u>持たない</u> <u>から</u> <u>わからない</u> 。
部内格	(1)連体修飾・被修飾 (2)連用修飾・被修飾の関係	体言的・体 用言的・体 連体詞的・体 の関係	<u>私の</u> <u>本</u> <u>読む</u> <u>人</u> <u>あの</u> <u>人</u>
			<u>非常に</u> <u>ゆっくり</u> <u>歩く</u> 。
	(3)並立対等の関係	対等 (並立)	体言的 用言的
孤立格	(1)論理的关系分化 表現内にあるもの (2)論理的关系未分化表現	文内成分(提示) 部内連結 部連結 句連結 文連結	<u>再軍備</u> <u>これが</u> <u>また</u> <u>問題だ</u> 。 <u>山</u> <u>または</u> <u>川</u> です。 <u>私に</u> <u>そして</u> <u>彼に</u> <u>こう</u> <u>話した</u> 。 <u>学校に</u> <u>行き</u> 、 <u>そして</u> <u>本を</u> <u>よむ</u> 。 <u>道を</u> <u>曲った</u> 。 <u>と</u> 、 <u>犬が</u> <u>いた</u> 。 <u>あの一</u> 、 <u>私が</u> <u>行きました</u> 。

(注) 並立対等の関係にあるものうち、カッコを施したものは、構文調査の便宜上とり上げたものである。

ここで、「部の格」というのは次のようなものを言う。文には「あら!」「伊藤さん!」「火事!」などのように論理関係が未分化なままに成立しているものもあるが、多くは、「(ずいぶんひどい雨が) 降るね」「(この花は) 美しいね」などのように論理関係が分化している姿をとっている。単に「降るね」という文にしても、現実の形式には明瞭に表現されてはいなくとも、「何かが、どこかに……」のような関係をすでにふまえた上での発言である。このような構文において、動作・作用あるいは性質・状態などを表わしている「降る」「美しい」などを述語と名づける。いわゆる「陳述」をなして文を完結させている述語を文末述語と名づける。述語および述語と直接関係を持つ部の格を「部の格」とする。特に、このうち、それ自身もまた述語としての性質を持っているものの格は「句の格」として区別する。(述語は主語と対立する。すべて、述語は主語を予想し得るものである。このような述語と修飾・被修飾の関係にあるもの一つつまり、述語を修飾するもの一を「対述修飾語」とする。述語は主語や対述修飾語を統一するものと考えられる。このようにして統一されているものが句である。句は述語だけしかないものもあり、主語や多くの対述修飾語のあるものもある。句の格というのは、このような句と句との相互関係における格である。)

述語と直接関係を持たない部もある。常に述語の一部にのみ関係する部や、述語に直接関係する部の一部にすぎないような部の格を「部内格」とし、述語に対して孤立的な部の格を「孤立格」とする。

このようにして、四つの格を立て、さらにこれを表示したように細分した。これらのうち、二三のものについて、少しく説明を加える。

第一に句であるかどうかは、それが主語を予想する部によって統一されているかどうかによって定める。したがって

- 「アソオトモ シズカニ アルク」〈足音も 静かに 歩く〉
- 「ウツクシク サク」〈美しく 咲く〉

などの「シズカニ」「ウツクシク」などは、あるいは現に主語があり、あるいは主語のあり得るものであるから、(「色も 美しく」のように)、「アソオトモシズカニ」「ウツクシク」は句と認める。句の格を帯びているとする。

- 「ベツニ ナニモ カンジマセンデシタ」

の「ベツニ」などは主語をとらないゆえ、句ではない。もちろん「ベツニ」はこの場合は副詞であって形容動詞ではない。ただし、

- 「ソレトハ ベツニ ワタシモ ツクッテミタ」

などの「ベツニ」は「方法も 別に」などの形式があり得るものであるから、この場合は句であるとする。

次に、主格は「風が 吹く」「それは 時計だ」「水が 飲みたい」の「風が」「それは」「水が」のようなものの格をいう。一般に「～が」に相当するようなものである。(このうち「それは」のようなものを主題とし、「水が」のようなものを「対象語」として、一般の主語と区別する。)

- 「ソコニハ ヒトリモ イナイ」
- 「スコシノ ジカンシカ ナイ」

における下線の部の格は「～が」に相当すると認め得るから主格である。

- 「アノヒトツタラ イタズラバッカリ スル」

も、形は句とまぎれやすいが、「アノヒトツタラ」は述語ではなく(主語をとらない)、それ自身「が」に相当するから主格である。

体言的対述修飾格はいわゆる格助詞の「に、を、へ、と、より、から……」などによって、述語と関係づけられているもの、または、それに相当するもの

の格をいう。

- 「マエノ ホウシカ セキ アイテナイ」〈前の 方しか 席 あいてない〉
- 「サクラハ コチラニ ウエマシヨウ」

の「マエノホウシカ」「サクラハ」などは主格とまぎれやすいが、これらは、それぞれ「前の方にしか」「さくら（を）は」（実際には「ヲハ」という形は表われないが、意味的に「(を)ハ」に相当する）に相当するものとして、体言的対述修飾格（以下、体修格と略記する）とする。（これらは「主題」と考えていい。しかし、格は体修格と考えるべきものである。体修語にも主題とすべきものがあるのである。作業の上で、一応区別して分析を行なったが、まとめに際しては体修語として一括し、必要な際に注記するにとどめた。）

副詞的対述修飾格は前述の格とは違って、多く述語の属性を限定修飾するものについていうので、格助詞がついていることはない。「ウツクシク サイタ」などの「ウツクシク」は副詞的修飾格（以下、副修格と略記する）とも考えられるが、これは句の格とすることはすでに述べた。

- 「ボウシ フタツヲ Aサンニ アゲタ」
- 「リンゴヲ フタツ モラッタ」

のうち、前者は体修格、後者は副修格とする。前者は格助詞がついているのに後者の場合は「りんごを ふたつを……」という形式が普通であるとはなし得ないからである。「～を～を～する」のような型は特別な場合を除き、普通には認められないことが多いと思う。「フタツグライ トシガ オオキイ」においても同様である。格助詞がついておらず、また、格助詞のついているものに相当すると考えることも無理である。前述の「ベツニ ナニモ カンジマセン デシタ」の「ベツニ」もやはり副修格とする。

ところで、具体的な個々の文において、それぞれの部が、どのような格を帯びていると認めるかは必ずしも容易ではない。それ自身として格の認定が困難なものもあり、解釈のしかたによって異なるものもある。

- 「エイガカン ハイッタ トキ「ミンナ」ドノ ヘンデ「ミル？」〈映画館 は いった 時 みんな どの 辺で 見る？〉

における「ハイッタ トキ」は副修格に立っていると考えることもできるが、一面「はいったときに」のような形式を考えると、日本語としては体修格と考えることができる。

○「ミッツ | モラッタ」

における「ミッツ」も副修格とも、また「みつつを」という形式があり得ることを考えると体修格とも考え得るものである。

○「カク コトハ | カキマシタ」〈書く ことは 書きました〉

における「カクコトハ」にいたっては、主格であるか、体修格であるか、それとも「かくことはかく」という慣用句としての特殊な関係方式とするか、問題が残るのである。

○「ウチナラ | フタリトモ | セイカクガ | ハンタイダネ」〈うちなら、二人とも
性格が 反対だね〉

における「ウチナラ」などは形式上、句の格である。と考え得ると同時に意味関係から主格に立っているとも考え得る。

このように、格の認定の困難なものはかなり見出される。そのほかに、解釈のしかたが関係して来る。

○「オタクノ ハウデハ | イタ | ハッテアル」

の「イタ」は「板がはってある」のか、「板をはってある」のか、この形からは不明である。「～が」または「～を」のどちらの格に相当すると認めるかは解釈によって異なる。

○「リンゴハ タベラレ チャッタヨ」

の「リンゴハ」は「りんごを食べる」ということを「された」と解する時は「りんごを食べられちゃった」と考えられ、体修格と認定される。「りんごが食べられる」と解する時は主格と認定される。

この調査においては、判定が困難である場合には次のような順序で優先させた。句格、主格、体修格、副修格。

たとえば、前例の「エイガカン ハイッタ トキ | ミンナ ドノ ヘンデ | ミル」の「～トキ」は体修格とする。同様に「ミッツ タダサイ」の「ミッツ」も体修格とする。それぞれ「はいつたときに」「みつつを」と考え得るからである。しかし

○「ジカンハ ドレグライ | カカッタカネ」

における「ドレグライ」は副修格とする。「じかんは どれぐらいが かかったかね」などという形式を一般的であると認めることが無理だからである。

とは言っても、そのような言い方が一般的であるかどうかの認定は、結局は人々の語感にたよることになり、主観的になりやすい。そこで幾つかの問題について、人々がどのように認めるかについて、簡単な構文の調査を試みた。これは研究所内の人々に、次のような言い方について、どう感ずるかを答えてもらったものである。次に、問題とその結果とを示す。大部分の人が判定の対象にした箇所を線を引き示すことにする。結果もまた、この箇所についてだけの集計である。（昭和34年2月実施）

調 査 項 目

- 1 ソンナ カッコウデ 千メートルグライヲ アルイタヨ。
- 2 時間ハ ドノクライガ カカッタノカネ。
- 3 時間 ドレグライヲ カケタノカネ。
- 4 アソコマデグライガ 歩ケナイナンテ オカシイヨ。
- 5 コノ 仕事ニ 五人グライヲ 使イ、ソノ 仕事ニ 三人グライヲ 使ッたらイダロウ。
- 6 リンゴ 十グライヲ 持ッテ デカケタンダ。
- 7 バケツニ イッパイグライヲ 百円デ ウッタ。
- 8 ヒトツ 百円デ バケツニ イッパイグライヲ ウッタ。
- 9 リンゴヲ 三ツヲ 買ッた。
- 10 リンゴ 三ツヲ 買ッた。
- 11 リンゴノ 木ダッテ ゼンブガ 枯レチャッタデショウ。
- 12 コレ ゼンブヲ ヤルノ？

結 果

判 定 問 題	自 然 だ	少しへんだ	非常にへんだ	不 明
1	7 (12.5%)	32 (57.1%)	17 (30.4%)	
2	4 (7.1)	11 (19.6)	40 (71.4)	1 (1.8%)
3	14 (25.0)	28 (50.0)	14 (25.0)	
4	26 (46.4)	16 (28.6)	14 (25.0)	
5	25 (44.6)	28 (50.0)	3 (5.4)	
6	19 (33.9)	30 (53.6)	7 (12.5)	
7	44 (78.6)	10 (17.9)		2 (3.6)

8	10 (17.9)	33 (58.9)	11 (19.6)	2 (3.6)
9	2 (3.6)	10 (17.9)	44 (78.6)	
10	29 (51.8)	22 (39.3)	4 (7.1)	1 (1.8)
11	31 (55.4)	20 (35.7)	4 (7.1)	1 (1.8)
12	38 (67.9)	13 (23.2)	4 (7.1)	1 (1.8)

注 被調査者数56名。結果の数は実数、()は%

以上の所内の小調査によれば、個人によって違いはあるが、全体としては、一つの傾向は認められる。この傾向は穏当なものであろう。しかし、どこまでを一般的な言い方とするか、はっきりした線はひきにくいようである。なお、性別、年齢別、居住経歴による積極的な違いは見られなかった。

また、次のような場合もある。

- 「ワタシハ リンゴハ スキデス」
- 「ワタシハ アナタハ スキデス」

において、「リンゴハ」「アナタハ」の格は何であろうか。「わたしは りんごが すきです」というのが一般的で「わたしは りんごを すきです」は一般的ではないと認めていいであろうか。しかし、「A君が Bさんを すきなんですか」の方が「A君が Bさんが すきなんですか」の言い方より、むしろ論理関係がはっきりしている点もあって、かなり用いられていることを考慮しなければなるまい。「アナタハ」の場合も「あなた(を)は」に対応すると考えることもできる。

そこで、このようなことについての人々の意見を知るために、所内で第二回の構文の小調査を行なった。その調査項目と結果は次のようである。(昭和34年9月実施)

調 査 項 目

- 1 ワタシハ 水ヲ 飲ミタイネ。
- 2 ワタシガ 水ガ 飲ミタインデス。
- 3 ワタシガ 水ヲ 飲ミタインデス。
- 4 ワタシハ リンゴヲ スキデス。
- 5 ワタシガ リンゴガ スキデス。
- 6 ワタシハ アナタヲ スキデス。

- 7 ワタシガ アナタガ スキナンデス。
 8 A君ガ Bサンガ スキナンデスカ。
 9 A君ガ Bサンヲ スキナンデスカ。
 10 A君ハ 英語ヲ 話セマスカ。
 11 A君ガ 英語ガ 話セルナンデスヨ。

結 果 A

結 果 B

判 問 題	結 果 A				結 果 B	
	自然だ	まあゆる せる	少 し へんだ	非常に へんだ	へんで ない	へんだ
1	36	11	6	1	47	7
2	17	12	15	10	29	25
3*	41	9	1	2	50	3
4	7	12	18	17	19	35
5	20	13	10	11	33	21
6	10	11	17	16	21	33
7	18	8	15	13	26	28
8	14	12	10	18	26	28
9*	36	9	6	2	45	8
10	41	9	4		50	4
11	22	15	10	7	37	17

* 無解答 1あり

注 1. 被調査者数 54名

2. BはAをまとめたもの。 数字は実数を示す。

これによれば「ワタシハ リンゴヲ スキデス」「ワタシハ アナタヲ ス
 キデス」「ワタシガ アナタガ スキナンデス」「A君ガ Bサンガ スキナン
 デスカ」には「へんだ」とする人が多いわけである。「～は」がある時は「～
 が すきだ」が普通で、「～を すきだ」は「へんだ」と感じられるが、「～
 が」がある時は「～を すきだ」が普通で、「～が すきだ」は「へんだ」と
 感じられるというのは「～が～が」という表現では主格と対象語格との区別が
 困難であるからであるというような理由を考える必要がある。

もっとも、具体的な話しことばにおいては文脈や場面や音調の関係があるの

で「A君が Bサンが スキナンデス」という言い方も、さして不自然とは考えられない場合も多い。

この二つの小調査によって、日本語では格の認定にかなり困難を伴うものがあり、大体の傾向はあるが、はっきりした線がひきにくい事がわかる。この調査では、以上の小調査や諸説を参考にしつつ、我々の一般的と認める所にしたがって、既述したような優先順位によりつつ、格を認定した。次のようなものが問題になった。

(1) 時や数に関するものには格の認定に困難を感じるものが多い。

○「コトシハ | ニギヤカデシタネ」

において、「コトシハ」は副修格と考へ得る。「ことし」自身が「にぎやかである」ということはない。しかし「きみは、去年はお祭りがにぎやかだったと言うが、去年は、そんなでもなかった。にぎやかなのはことしの方だ。ことしがにぎやかだった」というような言い方は場合によって、ないわけではない。こういう場合に、これをどのように取り扱うべきであろうか。日本語の表現としては主格と考へることもできよう。

○「ナツハ イデスネ」

において「ナツハ」は「夏」という季節そのものをよしとしているのか、「夏にはどこかの景色がいい」などのような意味か、解釈によっては主格とも体修格ともあるいは副修格とも考へられる。

このような例には次のようなものがある。

主語 (次の例における傍線部をこの調査では主語とした。以下同じ。〔 〕はこのようにも解し得ることを示す)

○「コトシナシカ | トクベツ | ニンズガ | スクナインジャナイ」〈今年なんか 特別 人数が 少ないんじゃない〉〔副修語〕

○「コウモリガサ モッテ デタ ヒト | ヒトリモ | イナインデス」〔副修語〕

○「サイショ | ナナセンモ | ウイタモンネ」〈最初 七千も ういたもんね〉

〔副修語〕

○「イマ | ヨンマングライシカ | ウレテナイデシヨウ」〈今 四万ぐらいしか 売れてないでしょう〉〔副修語〕

○「アレ | ミンナ | インチキダッタ。」〔副修語〕

○「オクバ | イッポンキリッカ | ナイ」〈奥歯 一本きりっか ない〉〔副修語〕

体修語

- 「ジカンハ | ナンジゴロマデ | ヨロシインデスカ？」〈時間は 何時ごろまで よろしいんですか？〉〔主語〕
- 「イママデ | ゴセンサンビャクエン | イタダイテタ」〈今まで 5千3百円 いただいていた〉〔副修語〕
- 「ヨル | トウキョウヘ | ツイタデショ」〔副修語〕
- 「ハルナンカ | イイワネ」〈春なんか いいわね〉〔主語, 副修語〕
- 「ハカヘサ | ハイタンダケドネ | ヒトツツネ | トビラガ | アツテネー | ノウコ | ツシテアル | ゼンブ」〈墓へさ 入ったんだけどね 一つつね 扉が あってね 納骨してある, 全部〉〔副修語〕
- 「アノ | トキハ | ナンカ | イイッタデショウ?」〈あの 時は 何か いいった でしょう?〉〔副修語〕
- 「コノゴロハ | モウ | キリカエガ | パット | ツク | ヨウニ | ナッタ」〈このころ は もう 切り換えが ぱっと つく ように なった〉〔副修語〕
- 「コーヒーダッテ | センソウゴ | インチキナ | モノハ | マメデ | ツクッタリ | シテネ」〈コーヒーだって 戦争後 インチキな ものは 豆で 作ったりして ね〉〔副修語〕
- 「チンタイジャクノ | バアイハ」チンリョウラ | カク | ヒツヨウハ | アリマセン」〈賃貸借の 場合は 賃料を 書く 必要は ありません〉〔主語, 副修語〕
- 「ヨルハ | チョット | ムリデスヨ」〈夜は ちょっと 無理ですよ〉〔副修語〕
- 「ミッツ | クダサイ」〔副修語〕

副修語

- 「ヤッパシ | ムカシハ | ブンキョウナンテイウノハ | オヤシキガ | オオカッタデショ」〈やっぱし 昔は 文京なんていうのは お屋敷が 多かったでしょ〉〔体修語〕
- 「マイニチデスカ, | ヨソカゲツ?」〈毎日ですか, 四か月?〉〔体修語〕
- 「ナツ | センジョウヘ | イク | マエニ | イッタジャナイ?」〈夏 仙丈(山名)へ 行く 前に 行ったじゃない?〉〔体修語〕
- 「キレイナンダネー, | アレガ | ミンナ」〔主語〕
- 「ソノ | アト | オトウサン | オフタリデスネ?」〔主語〕
- 「コナイダ | タバタ」〔体修語〕
- 「ソレ | ミンナ | キリタオシタ」〈それ みんな 切り倒した〉〔体修語〕
- 「テキトウナ | トコロガ | ハイリシダイ | レンラクシマス」〈適当な 所が 入り次第 連絡します〉〔体修語〕
- 「ボウシハ | フタツグライ | ウッタカシラ」〈帽子は 二つぐらい 売ったかしら〉〔体修語〕
- 「ドノクライ | カカッタノ, | ジカン?」〔主語〕

- 「イモウトガ | ホンノ スヨシグライ | タベルンデス」〈妹が ほんの 少しぐらい 食べるんです〉〔体修語〕
- 「ジカンガ | ミンナ | オソインデス」〔主語〕
- 「リンゴヲ | ミツツ | クダサイ」〔体修語〕

(2) 述語が感情を表わす形容詞・形容動詞や「他動詞＋タイ」の形や可能の動詞などを含んでいる場合にも格の認定に困難を感じる場合がある。

主 語

- 「ジュップンカンニ | ドノクライ | ウテマスカ？」〈十分間に どのくらい 打てますか？〉〔体修語, 副修語〕
- 「エイゴノ カイワ | デキマスカ？」〈英語の 会話 できますか？〉〔体修語〕
- 「オシユウジ | ヘタナンデス, | ジガ」〈お習字 下手なんです 字が〉〔体修語〕
- 「ソレハ | ワカンナイカネー」〔体修語〕
- 「ソレモネー | ヒトガ | ハイレルンダ」〈それもねえ 人が 入れるんだ〉〔体修語〕
- 「ミシンハ | フメマスカ？」〔体修語〕
- 「ドノクライ | ゴキボウデスカ？」〔体修語〕
- 「コマカイ コトハ | スキ？」〔体修語〕
- 「アイスクリームガ | タベタイ」〔体修語〕

体修語

- 「トウシャパンデスネ | ゲンシカラ センブ スリアゲルマデ デキマスカ？」〈勝写版ですね 原紙から 全部 刷りあげるまで できますか？〉〔文内提示語〕
- 「クダモノハ | ナニガ | スキ？」〔主語〕

(3) 述語が「他動詞＋テアル」の形を含んでる場合にも問題となる例が多い。

主 語

- 「ソレヲ アゲタ ヒトノ ナマエカナンカ | カイテアル」〈それを あげた 人の 名前かなんか 書いてある〉〔体修語〕
- 「ナカ | ナンデ | カタメテアンノ？」〈中 何で 固めてあんの？〉〔体修語〕

体修語

- 「コレハ | カンヌシサンガ ノリトニ ヨミアゲルダケノ コトラ | コレ | ゴキニ ヌエガウデゴザイマス」〈これは 神主さんが のりにと 読みあげるだけの ことを これ 御記入ねがうんでございます〉〔主語〕

(4) 主題的な表現にも、格の認定に困難なものが多い。

主 語

- 「アバタモ | エクボ」〔体修語〕
- 「ナンネンキトカネー ナントカッテ ホトケサマノ ハウジ | イロンナノ | ア

ルデショウ」〈何年忌とかねえ なんとかって 仏様の 法事 いろんなの あるでしょう〉〔体修語〕

- 「スモウッテイウノハ | ドウイウ ワケカ | ワタシハ | キョウミガ | ナインダワ」〈すもうってというのは どういう わけか わたしは 興味が ないんだわ〉〔体修語〕
- 「アノ センガクジ | アソコ | ホネガ | デテイルネ」〈あの 泉岳寺 あそこ 骨が 出ているね〉〔体修語〕
- 「ソレコソ | ニュアンスガ | ナイヨネ」〔体修語〕
- 「オオタニサンハ | コノ カタハ | ガッコウヘ | イッテル?」〈大谷さんは この 方は 学校へ 行ってる?〉〔体修語〕
- 「ヒトリモ | カサヲ モツテ デタ ヒト イナイ」〈一人も かさを 持って 出た 人 いない〉〔副修語〕
- 「ムコウデモ | オコッチャウ」〈向こうでも 怒っちゃう〉〔体修語〕
- 「アサトカ バントカネ | ソノ ジカンドケシカ | ナイラシイ」〈朝とか 晩とかね その 時間だけしか ないらしい〉〔副修語〕

体修語

- 「マエハ | ケオリカイシャデスネ」〈前は 毛織会社ですね〉〔主語〕
- 「ムコウハ | イヤラシイッテイウノハネー | ソナ タイヘンナ コトジャン | イダヨ」〈向こうは 嫌らしいってというのは そんな たいへんな ことじゃないんだよ〉〔主語〕
- 「ツギノ ワダイハ | アカルク | イキマシヨウヨ, | コンドハ」〈次の 話題は 明るく いきましょうよ、今度は〉〔主語〕
- 「カンチョウハ | キボウシテイラッシュアイマセンカ?」〈官庁は 希望していらっしゃいませんか?〉〔主語〕
- 「ナニハ | ゴシンプサマノ ホウハ | ゴミョウジダケ | オワカリデゴザイマシタカ?」〈なには 御新婦様の方は 御みよう字だけ おわかりでございましたか?〉〔主語, 文内提示語〕
- 「シズオカアタリハ | ズイブン | ヤマニ | アリマスネー」〈静岡あたりは ずいぶん 山に ありますねえ〉〔主語〕
- 「マエノ トコロハ | ドウシテ | ヤメタノ?」〔主語〕
- 「アレネー | カナグラ | イレルノヨ」〈あれねえ 金具を 入れるのよ〉〔主語〕
- 「カイシャハ | ドンナ カイシャヲ | キボウシテイラッシュアイマスカ?」〈会社は どんな 会社を 希望していらっしゃいますか?〉〔主語〕
- 「ワレワレ | イヤラシイッテ コトハ | タイヘンナ コトデショ」〔主語〕
- 「シュミハ | ドンナ モノニ | シュミヲ | モツテラッシュアイマス?」〈趣味は どんな 物に 趣味を 持っていらっしゃいます?〉〔主語〕
- 「アジハ | ドンナノ | ツケルノ?」〈味は どんなの つけるの?〉〔主語〕

- 「トウキョウハ | ニッキョウソガ | サワイデイルンデスネ」〈東京は 日教組が 騒いでいるんですね〉〔主語〕
- 「バカモ | ヤスマヤスマ | イエ」〔主語〕
- 「ケイサツヨビタイハ | ナニヲ | ヤッテイタ?
- 」〈警察予備隊は 何を やって いた?〉〔主語〕
- 「サクラハ | コチラニ | ウエマシヨウ」〈桜は こちらに 植えましょう〉〔主語〕
- 「エイガハ | ミマセン」〈映画は みません〉〔主語〕

(5) 提示格にすべきかどうかと迷うものもある。

文内提示語

- 「アレ | ヤハリ | ウメノ キツテ | ウグイス | スキデスネ」〈あれ やはり 梅 の 木って うぐいす 好きですね〉〔主語〕

主 語

- 「ソリヤ | ハカニヨツテ | チガウヨ, | オオキサハ」〈そりゃ 墓によって 違 うよ, 大きさは〉〔文内提示語〕
- 「オバサン | ヤマナカ | ドウデスカ?」〈おばさん 山なんか どうですか?〉〔文内提示語〕

体修語

- 「ソレカラ | アンナイジュウデスネ | ナニカ | ヒナガタ | アリマスカ?」〈それ から 案内状ですね 何か ひな形 ありますか?〉〔文内提示語〕

(6) 句の格かどうか問題になるものがある。

句

- 「ホカノ ヒトモ | イッショニ | ハイッテイルワヨ」〔副修語〕
- 「バインジュースガ | ノミタク | ナル」〔副修語〕
- 「ウラノハネ | トツテモ | ヨク | ナルノ」〈裏のはね とっても よく なるの〉〔副修語〕
- 「マッシロツテ | ソンナニ | キレイジャナイヨ」〔主語〕
- 「ウチデモネ | サンニン | サンヨウデネ | ワラッテンノ」〈うちでもね, 三人 三様でね 笑ってるの〉〔体修語〕

副修語

- 「アイスクリームガ | タバタク | ナルノネ, | スゴク」〔句〕
- 「ベツニ | ナイデス」〔句〕
- 「タツカニネ | ソウイウ | コトバ | ムズカシイワネ」〔句〕
- 「フシギニネー | ナンブセンペーツテ | イウンダツテ」〈不思議にねえ 南部煎 餅って いうんだって〉〔句〕
- 「ウチナラネ | フタリトモ | ホントニ | セイカクガ | ハンタイダネ」〈うちなら ね 二人とも ほんとに 性格が 反対だね〉〔句〕

- 「カイシャデモ | イチパン | イッテルワネ, | ヤマ」〈会社でも 一番 行っているわね, 山〉〔句〕
- 「ナツナンカ | ソソナニ | ツクラナイネ」〔句〕

主 語

- 「オモイダスノツッタラサ | ソレコソ アリフレタ タベモノナノネ」〈思い出すのってたらさ それこそ ありふれた 食べ物なのね〉〔句〕
- 「ワタシトイタシマシテハ | キョジノ ファンデゴザイマス」〈わたしといたしましては 巨人の ファンでございます〉〔句, 体修語〕

体修語

- 「デンコウノ ホウトシテ | オネゲーシマス」〈電工の 方として おねげえします〉〔句〕
- 「タクチヘンコウノ コトニツイテ | オウカガイシタインデスガネ」〈宅地変更の 事について おうかがいしたいんですがね〉〔句〕

文連結語

- 「テイウト | チョット | チガッチャウンジャナイカナ」〈て言うと ちょっと 違っちゃうんじゃないかなあ〉〔句〕

(7) その他, 次のようなものがある。

主 語

- 「ナニカ | シカク モッテル モノ | アリマセン?」〈何か 資格 持っているもの ありません?〉〔副修語〕

体修語

- 「ナニカ | エイガデ | ミタ」〈何か 映画で 見た〉〔副修語〕

副修語

- 「オカアサンハ | ナニカ | シゴトラ | モッテイマスカ?」〔体修語〕
- 「オレナンカ | センソウノ カンジハ | ナンニモ | ナカッタ」〔主語〕
- 「シゴトガ デキルト ドウジニ | ハジメチャッタ」〈仕事が できると同時に 始めちゃったんだ〉〔体修語〕
- 「ナンマイカ ムク タンビニ | ウスク | ナルンダソウヨ」〈何枚か むく 度に 薄く なるんだそうよ〉〔体修語〕
- 「ズガイコツナンデスヨ, | ソノマンマ」〈頭がい骨なんですよ, そのまんま〉〔体修語〕

ところで, 次の例はどうであろうか。

- 「ナイッテ イウヨリモネ | ムシロ | ギノウガ | モンダイナンデス」〈無いって いうよりもね むしろ 技能が 問題なんです〉
- 「『ヨツヤ ヤッタロウ』 ナンテ | ナンダカ | ヤッテクレンダカ | タヨリナイン」

ダッテサ」

これらも、体修格とも認定できるが、句とみられないこともない。(前者は「ナイッテ イウノデハナクテ」などの意に近く、この「ヨリモ」を「接続助詞」に準じて扱うことができよう。後者は挿入文とも考え得る。)

そのほか、述語が「自動詞+セル・サセル」の場合は他動詞的性格を示しているものが多いが、「他動詞+レル・ラレル」の際は、その前後の文脈によらなければ、主格あるいは体修格の認定ができないものがあることは既述した通りである。(この場合認定の全く困難なものは、他動詞としての性格を優先させた。)

2・5 整理のしかた 以上のように、文末述語を中心にして、一次の部を単位とし、(相互の格を認定し、)それらの部がどのような格関係を持って組み合わせられ配列されていると考えられるかという観点から、構文の型を調査した。この際、これらの部の順序が自由であるか、固定しているかを考慮したので

○「センセイモ | スミニ | オケナイネ」

○「コノ エモ | コノ ヘヤニ | カザレナイネ」〈この 絵も この 部屋に 飾れないね〉

は、どちらも「～モ ～ニ 可能動詞+ナイネ」の形式ではあるが、構文の型は区別されることになる。

次に、この調査においては文末述語を重視したので、文末述語と直接関係しない部(一文内の孤立格である部)は、たとい一次の部であっても当面の調査研究の対象から省いた。また、句と句との関係についても、詳しい分析は今後にまつことにした。したがって、この調査では、まず文末述語を中心に、「部の格」を帯びている一次の部についての構文の型が調査対象とされた。もちろん、それ自身が一文であると認められる孤立格の部も対象とされた。

ところで、とり上げられた一次の部がどのような主語であり体修語であるかなどという事が問われる事になる。この調査においては、主語・体修語……を構成している中心の詞の性質がどうであるか(つまり、品詞は何であるか)および、その主語・体修語……の特徴を表わしている辞が何であるかを区別した。たとえば、以下の文はそれぞれ、次のように、とらえられる。

④・名詞[ナンカ] 体修・名詞ヲ 述・他動[ノ]
○「ワダクジナンカ シロバターラ ヅカウノ」

- ⊙「[㊤]エンゲキザツンテイウノハ ^{副修・副3} サッパリ ^{述・他動[ナイラシイ]} ハラワナイラシイ。」〈演劇雑誌っていうのは さっぱり 払わないらしい〉
- ⊙「[㊤]ケイヒモ ^{述・形[ワヨ]} ヤスイワヨ」
- ⊙「^{主・名詞ガ} アメガ ^{述・自動[ネ]} フルネ」
- ⊙「[㊤]ワタンハ ^{主・名詞ガ} ソウカヤキガ ^{述・形動} スキダ」〈わたしは 草加焼が 好きだ〉

注 ㊤・主・主はそれぞれ、主題たる主語・一般の主語・対象語たる主語を表わし、体修・副修・述などはそれぞれ体修語・副修語・述語を表わす。詞の品詞名は普通一般の文法用語である。名詞的などというのは、「ノ」などが名詞的であり、これがこの部の詞性を表わしていることを示す。副3は部の格として副修たることを得る詞性を四つに分けた中の第三番目（ここでは陳述副詞）であることを示す。（副修語の分類については後述）「ナンカ」などのように〔 〕内のものは、その部たる特徴を表わしてはいないこと、つまり、構文上の基礎的な格の問題として取りあげなくてよいと考えられるが、具体的文表現においては場合により、構文上考慮しなければならないものを示す。

これについて問題になったのは次のようなことである。

第一に、形容動詞と名詞とは次の五つの基準により、どちらの性質が多いかで決定した。(1)格助詞「が、を、に、へ、と……」などがつくか。(2)接尾辞「さ」がついて体言を構成するか。(3)「な」を伴って連体修飾語となるか、「の」を伴って連体修飾語となるか。(4)被連体修飾語となるか。(5)被連用修飾語となるか。そのほかに、副修語になるかどうかも参照した。

第二に動詞は自動詞・他動詞を区別した。これは、述語の詞性の自・他の別により、構文の型のかかなりの違いが類型的に把握できるからである。厳密には、さらに細分すべきであるが、今は大まかに類別するにとどめた。もっとも、この自・他の別も日本語においては弁別が困難である。この調査においては「を格」をとるかどうかを第一の基準とした。したがって「そのみちを いく」における「行く」なども他動詞ということになる。ただし、このようなものは「ほんを やぶる」などの場合とはかなり性質が違ふ。そこで前者のような動作・作用の行なわれる場所や起点を示す場合の動詞を「他動詞1」、後者のような動作・作用の目的を示す場合の動詞を「他動詞2」として区別した。

つまり、この調査では、詞を分類して、名詞・動詞（自動詞、他動詞）・形

容詞・形容動詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞の別をたて、それぞれの部の詞性を必要に応じて、問題にしたのである。もっとも、この調査では、その部の詞性が問題なのであって、現実の詞が問題なのではない。

○「コレハ カレノ モツテキタノデス」

○「カレハ イヤダ ッテッタ」

において、前者は「これは～です」の型に属するが、「～」（「カレノ モツテキタノ」）の名詞的たる詞性を示しているのは「ノ」である。また、後者は、「これは ～と 言った」の型に属し「ッテッタ」は、この「と いった」に相当する。つまり、「ッテッ」は動詞的にとらえられるのである。（「ワタシハ ミズガノミタイ」においては「ノミタイ」の形容詞性を問題にせねばならぬ。）

助詞・助動詞の類は構文に関係があるものだけに限り、取り上げることにした。したがって、いわゆる「副助詞」の類などは、一般には取り上げない。

この調査でどのように取り扱ったか、問題の例を含めて、一部を次に示す。

【名詞と形容動詞との問題】

(1) 名詞にしたもの

○「アナタガ イチバン アマトウネ」〈あなたが 一番 甘党ね〉 ○「ケンショウヒンノ イッシュダ」〈化粧品の種類だ〉 ○「ウソヨ」 ○「オッポリバナシナンデスモノネー」 ○「オトウサン オイカツ デスカ？」 ○「ツウキンノ キボウデスカ？」〈通勤の 希望ですか？〉 ○「ゴビョウキデスカ？」 ○「カライホウ サキダネー」〈辛い 方 先だねえ〉 ○「タダ シオアジネ チョット」〈ただ 塩味ね ちょっと〉 ○「イワユル シロジャナイヨ」〈いわゆる 白じゃないよ〉 ○「シンセツダワヨ」 ○「エダカラ ナニカラ ゼンブ」〈枝から なにから 全部〉 ○「ソレデ セイイッパイダヨ」 ○「ヨソカゲツデ ソツギョウナノ」 ○「ソノ テイドデスカ？」 ○「ノザラシダネ」 ○「セイカクガ ハンタイダネ」〈性格が 反対だね〉 ○「ツカワナカッタ ハズデスヨ」 ○「ナンダカ ヘッピーゴシネー」 ○「マチガイデナインダヨ」 ○「ドヒョウノ マンナカ」 ○「マダ マンカイジャナインデスカ？」 ○「ヤッパリ ミリョクダネ」〈やっぱり 魅力だね〉 ○「イッシュノ ミエナノヨネ」〈一種の 見栄なのよね〉 ○「オウタイナンカ ムリデスカ？」〈対応なんか 無理ですか？〉 ○「トシガ ウエダトネ メウエナンダ」 ○「ヤパンカシラ」〈野蛮かしら〉 ○「イッパンノ ジムトイウ コトニ ナル ワケデスネ」

(2) 形容動詞語幹にしたもの

○「トッテモ インチキ」 ○「ソノ モヤガ イッバイデショウ」 ○「ヨゴレルノハ イヤ」 ○「イッショ ジャナイネ」 ○「オソマツダヨ」 ○「イヤラシイト オナジヨネ」 ○「オタク オスキデスカ?」 ○「コンドハ カンタンデスヨ」 ○「ナンドカ キノドクネ」 ○「ドコデモ ケッコウデスケド」 ○「ジュンスイデスカ?」〈純粹ですか?〉 ○「オカラダハ ジョウブデスネ」 ○「ジョウズデスカ?」 ○「ワリニ ジミデスヨ」〈割りに 地味ですよ〉 ○「ジュウヨウダヨ」〈重要だよ〉 ○「アツクナイ ホウガ ジョウトウデショウ」 ○「モウ チョット スマートナンジャナイ?」 ○「スキデスネ」〈好きですね〉 ○「ヤッパリ ゼイタクヨ」 ○「シロートジャ ダメデショウ」 ○「アメガフルト テキメンデスネ」 ○「ヤッパリ デブショウナンダネ」〈やっぱり 出不精なんだね〉 ○「ゲンダイジンハ フクザツナンジャナイ?」 ○「ゲンザイガ フマンデ ショウガナインデスネ」〈現在が 不満で しょうがないんですね〉 ○「デモ アレ ブショウネ」〈でも あれ 不精ね〉 ○「アタマ ヘンダッタワヨ」 ○「ツウキンハ ベンリデスネ」 ○「オッシュー ジ ヘタナンデス」 ○「オーキクッテネ マッシロナノネ」〈大きくなってね まっ白なのね〉 ○「アメガフルト ヌウウツダワ」 ○「スミッコノ ボックスダケ ヨケイデスヨ」

【その他、問題になった名詞（名詞的）】

(1) 名詞的としたもの

○「ヤッタダケダモノ」 ○「トチュウカラネ」〈途中からね〉 ○「ミタリ カッター アソンドリデスカ?」 ○「ヨク ワカラナイ グライ」 ○「キボウハ ドノトライデスカ?」 ○「ナニカニ カブセテアルカ カブッテイルカ | シテルンダロウ」 ○「ドッチガ ドッチダカ | ワカンナイ」 ○「ワタシノ ヤルヨウニ | ヤリナサイ」 ○「ソレハ | ワタクシノ モッテキタノデス」 ○「コトニ ヨリケリダケドサー」

(2) 副詞 助動詞などとの区別で問題のあるもの

○「アルンダ | イッカイ」〈あるんだ, 一回〉 ○「ハイッタ コト | アルヨ, | イッペン」〈入った こと あるよ, 一遍〉 ○「…ヒトツヒトツ…」 ○「…コンド…」 ○「サイシヨネー | タヨリナカッタソウダネ」 ○「サイキン | イッテキタンダヨ」 ○「コナイダ | ホッタデショ」 ○「ソレダケ | フクザツナンジャナイ」 ○「ヒトツ | ワダイラ | カエマショウ」〈ひとつ 話題を 変えましょう〉 ○「ナニニモ | ミナイモノネ」 ○「ナンデモ | イケガ | ツク」〈なんでも 池が つく〉 ○「ミナサン | イズレモ | トウキョウニ | イラッシュアツタンデスカ?」 ○「ミンナ | ヨカッタデショウ」 ○「ゼンブ | ドゾウニ | ナッテルンダヨネ」 ○「イロソナモン | ソノママ | ハイッテマスヨ」 ○「…ムク タンビニ…」 ○「…ヤルトウリニ…」 ○「イキテイル ヒトノ タメニ | ヤルラシイヨ」 ○「コウイウ」

「フウニ | イワレルンデス」 「アマリ ナイ ヨウデス」

* 1 ただし、次のような場合は副詞とする。

○「ゼンブ | ソコハ | ツブレチャウンダッテ、 | ウチガ」

名詞は(1)活用がない。(2)格助詞がつく。(3)連体修飾語をとり得る。などの機能を持つ詞である。同じ形であっても、機能的に名詞としてはたらいっていない場合には名詞とは認めない。これは他の語についても同様である。

【問題になった用言（動詞）】

(1) 助詞との区別で問題のあるもの

○「ソレハ | ゲンジツノ スガタラ タテナオス コトニ ヨッテノミ | グンシユクヘノ ミチガ | ヒラカレルノデゴザイマス」* <それは 現実の 姿を 建て直す ことによつてのみ 軍縮への 道が 開かれるのでございます> ○「カレヲ キャプテント シテ | シュッパツシタ」

(2) 自動詞、他動詞の区別で問題のあるもの

i 自動詞（自動詞的）としたもの。

○「ワカル」 ○「デキル」 ○「オナカ | スイチャッタ」 ○「アタマカラ | ミラレチャッタ」<頭から 見られちゃった> ○「ベンキョウ シヨウト | シテイル」 ○「イカナクチャ | イケナイ」 ○「オレイ シナイ ワケニ | イカナイデシヨウ」<お礼 しない わけに いかないでしょう>

ii 他動詞 1

○「マズソウダト | ヨナインデシヨウ」<まずそうだと 来ないでしょう> ○「マチヲ | マワツテクル」 ○「チカズイテクル」 ○「モンヲ | デル」 ○「ソノ ミチヲ | ハイル」 ○「ニチニチヲ | クラス」<日日を 暮らす>

iii 他動詞 2

○「ツクッタリ | スル」 ○「ソウイウ コトニ | シマシヨウ」 ○「ワスレル」 ○「オネガイスル」 ○「ボウスイスル」<防水する> ○「カマウ」 ○「イッショニ シマシヨウナンテッタノヨ」 ○「アイサツヲ | オワリマス」 ○「タベラレル」

* 「ヨル」「スル」などが動詞としての機能を失っている場合には「ニヨッテ」などを助詞相当とする。

○「ヤッテイル コトニヨッテ | ソノ ヨビナガ | オコル」

○「コレニヨッテ | カエテイタダキマシヨウ」

【問題になった副詞】

(1) 名詞、形容動詞との区別で問題のあるもの

- 「…イツモ…」 ○「…ナンデ…」*1
 ○「…タイヘン…」 ○「…イロイロ…」 ○「…フツウ…」 ○「…ヨケイ…」
 ○「ヒカクテキ|ハイリマスヨ」 ○「ジュウブン|アルヨ」

(2) 感動詞との区別で問題のあるもの

- 「ナルホド」 ○「マア|イイヨ」 ○「…モウ…」 ○「ソウ」*2

- *1 「イツモ」「ナンデ」などは場合により「体言十辞」と考えるべきこともあるが全体として副詞と認めるべき場合もある。「タイヘン」などは形容動詞の語幹と考えることもできるが、それだけで副詞と考える。「タイヘンダ」は「副詞+ダ」とする。
- *2 「ナルホド」「ソウ」などは応答表現に用いられる場合は「ハイ」「エー」などと同じく応答の感動詞と考え得る場合があるが、ここでは副詞とする。「マア」「モウ」などは感動を表わしていると認められる場合は感動詞とする。

【問題になった助動詞】

(1) 接尾語とまぎれやすいもの

- 「チョット|モモミタイヨ、|コウバイッテ イッテモ」 ○「ナカナカ|チョット|タイヘンミタイデスケドモネー」

つまり、主語、体修語、……などは、具体的には次のように細分された。

(1)主語は、さらに細かくは、主題、主語、対象語に分類され、そのおのおのも、詞性が何であるか（実際には名詞または名詞的なものであり、どういうものが名詞的となるかは問題にしない）、また、そのおのおのはどのような辞によって、特徴づけられているかが区別される。名詞（名詞的）を～で示せば、たとえば、次のようになる。～ハ、～モ、～コソ(ハ)、～ガ、……

これに対し、～ナンカ、～バカリ、～ダケ……などは～ナンカガ、～バカリガ、……などと言うことが一般的には可能であるゆえに、～ナンカ、～バカリ……など全体が名詞的なものであると認定する。同様に～ハネ、～ハサ、……などの「ネ」「サ」など（間投助詞といわれているもの）も、主語たることを特徴づけている辞とは認めない。

(2)体修語も主題的なものと、その他のものとを区別し、さらに、そのおのおのを特徴づけている辞が何であるかによって、細分する。具体的には次のようになる。～ヲ、～ニ、～ヘ、～ニツイテ、～ハ、～モ、～ニハ、～ヲコソ、……

(この場合の～ハ、～モ、などは、～(を)ハ、～(に)ハ、などと相当する機能を示していると思えるものである。こういう場合は～(ヲ)ハ、～(ニ)ハなどと記号化した。～ハ以下は主題たることを示していることが多い。)

つまり、体修格をさらに細分して、を格、に格、へ格などをたてたのである。「アイツハ ミズバカリ ノンダ」の「ミズバカリ」は名詞的であり、を格たることを特徴づける辞は表われていない形と認定する。

さて、主語の場合も、体修語の場合も、たとえば、～ガ、～ニの言い方にしても、その機能は常に全く等質であるわけではない。

- 「ワタンガ ナカムラデス」(「中村さんはどなたですか」の答え)
- 「ワタンガ ウナギデス」(「うなぎを注文したのはだれで、てんぶらを注文したのはだれか」の答え)
- 「オトコガ オンナデス」(「女に関心を示すのは男か女か」の答え)

はすべて「～ガ ～デス」の形式であるが、「～ガ」の機能は違いがあろう。

- 「ミカンヲ コドモニ ヤル」
- 「トウキョウニ イク」
- 「ケンブツニ イク」

における「～ニ」の機能もかなり違いがある。それゆえ、これらの「～ガ」「～ニ」のそれぞれをさらに細分類することも必要になるわけである。しかし、この調査においては、「～ガ ～デス」の型をさらに細かく分けることはしなかった。(この報告書ではいくつかの代表的な例をあげるにとどめた。また、体修語も主題的なものと、その他のものを一応区別はしたが、この報告書では一括して取り扱い、区別せずにまとめた。つまり～ニと～ニハとの区別はせず、必要な場合は注記することにした。)

(3) 副修語は4類にわけた。まず、副修語の詞性によって、i 副詞によるもの、ii 名詞によるもの、とにわける。次に「副詞によるもの」は、その副詞の性質によって、さらに3類にわける。副詞は構文上、何を修飾するかによって、3類にわけ得るからである。次のようになる。

第一に、一般に動詞を修飾するもの。これは普通に「情態副詞」と言われているものに該当するが必ずしも一致しない。副詞の第1類とする。たとえば、

- 「イキナリ メーターガ ヒャクエンニ ナッテルンデスヨ」

次のようなものがそれである。

イキナリ、イッパイ、サッソク、スグ、タクサン、チャクチャクト、ボツボツ、カネテ、スッカリ、ソックリ、タチマチ、トツゼン、ワザワザ、ドンドシ、ヤガテ、フト、ツイニ、トウトウ、マク、サット、ジット、ユックリ、パット

第二に、一般に動詞を修飾するのみならず、形容詞、形容動詞、一部の名詞（多く情態性のもの）をも修飾するもの。多くは「程度副詞」と言われているものに該当するが、必ずしも一致しない。副詞の第2類とする。たとえば、

○「アンガイ グアイガ ワルイヨ」

次のようなものがそれである。

ジツニ、モウ、マダ、オオムネ、ゴク、ヤヤ、カナリ、イクブン、スコシ、ズット、ズイブン、タイヘン、チョット、ワリニ、ヒジョウニ、モットモ、ヨホド、トテモ、ジッサイ、ダイブ、マスマス

第三に、陳述にかかる副詞がある。一定の陳述を要求するものであり、述語の詞の品詞にかかわらない。一般に陳述副詞と言われているものである。副詞の第3類とする。たとえば、

○「チットモ イイ エイガトハ オモロナイネ」

次のようなものがそれである。

ドウゾ、カナラズ、キツ、イクラモ、ゼツタイ、ゼンゼン、モチロン、ヤッパリ ナニシロ、ドウンテ、ケッシテ、オソラク、タブン、マサカ、マルデ、ドウカ、トニカク、タトエバ、ケッキョク、ヨウスルニ

このような副詞の3分類は従来の「情態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」の3分類と違って、それを構文の調査に直接関係づけ得る点で有利である。結果的には、それに所属する語彙のそれぞれは従来の3分類の場合に比して大きな異同はないが積極的にどのような述語を修飾するかという観点を取り入れたわけである。述語の詞性がどうであるかによって、それに統一される構文における体修語の性質や組み合わせり方には違いがある、と考へ得る。それゆえ、副修語も、このような観点から分類し得るなら構文の型の調査に便利であることはいうまでもない。こうして、従来「情態副詞」とされていた「ヤッパリ」は副詞第3類とされるし、「オオムネ」「マスマス」は副詞第2類にされる。また「ユックリト」「スラリト」「ドウドウト」などは主語をとり得る。これらは副詞から除外され「形容動詞」にされることになる。（活用は連用形一形だけである。同様に「ゴラン」は動詞とされる。）

このような副詞の3類に応じて副修語も第1類から第3類までに分ける。
副修語にはこのほか名詞がいわゆる「副詞的用法」として用いられる。

○「ワタンハ キノウ ガッコウニ イキマシタ」

多く「時」「数」に関するものが多い。こういうものを副修語第4類とする。

副修語を以上のように第1類から第4類まで分けた。

(4)述語は、その詞性の何であるかが構文の違いと密接な関係があると考えられることは既述した通りである。この調査では次のように細分した。a—自動詞、b—他動詞1、c—他動詞2、d—形容詞・形容動詞、e—名詞、f—副詞。

それぞれ、これらを述語の詞性とする文を、自動詞文、他動詞文1、他動詞文2、などと称することにする。それらが、どのように構文の型を異にするかは、以下の構文の型の表によって、明らかであるゆえ、ここでは省略する。

もちろん、構文の型をこのような大ざっぱなとらえ方によって、すべてを説明しつくすことはできない。たとえば、○「アメンカ フラナイ」は否定の言い方であることも構文上問題にされるであろう。この調査においては、必要に応じて注記することにした。

(5)孤立語は一般に孤立語たる事を示す辞が表われない。したがって、どのような詞が孤立語となっているかを問題にした。慣用的に述語省略の行なわれていると認められる文は多く個別的であるから、その一つ一つを問題にした。

以上のようなわけで、この調査はあまり細かな構文の型は取り扱わなかった。(助詞の一つ一つの用法の違いを明らかにすることも必要である。)大きな型にまとめられることを考えつつ、次のように構文の型を整理した。

3 結果

このようにして、話しことばの文約1万例について調査した結果、次のような構文の型が得られた。次の表がそれである。いわゆる倒置の文は普通の文に換元した形で取り扱う。話しことばでは、部の順序が固定しているものを除き、一般にほとんどの一次の部が倒置し得るから特別に取り扱う必要はないと思う。

(1) 構文の型の類型は、まとめ方によってさまざまに整理され得るが、この報告書では次のように取り扱った。

- 1, 2, 3 などの記号——主語があるか、ないか、いくつの主語があるか。
 (1), (2), (3) などの記号——体修語があるか、ないか、いくつの体修語があるか。
 i, ii, iii などの記号——副修語があるか、ないか、いくつの副修語があるか。
 (i), (ii), (iii) などの記号——(i) は部の配列が自由であることを示し、(ii) 以下はそれぞれ、傾向として、部の配列にある種の制約が認められることを示す。ただし、一について具体的にどのような制約が認められるかは示さない。次の「部の配列」を参照されたい。
 a, b, c, などの記号——主語、体修語、副修語などの性質の違いを示す。

(2) その他の記号

主題を表わすには ～ハ、～モ、～ッテ、～ダッテ、～ナンテ、～〈ハ〉、
 ～(ハ) など。

(～は名詞または名詞的であることを示す。〈ハ〉は現実には表われていないが、文脈上「ハ」相当と認められることを示す。たとえば「ボク イカナイ」など。また～(ハ) などは～ハ、～〈ハ〉の両形があることを示す。以下同様。)

主語を表わすには ～ガ、～〈ガ〉 など。

対象語を表わすには ～ガ、～〈ガ〉 など。

(〈ハ〉、〈ガ〉、〈ガ〉のいずれとも解される場合は、原則としてこの順に優先させた。)

体修語を表わすには ～ヲ、～ニ、～カラ、～デ……

～〈ヲ〉、～〈ニ〉、～〈カラ〉、～〈デ〉……

～(ヲ)、～(ニ)、～(カラ)、～(デ)……

～〈ニ〉ハ、～ニハ、ニ(ハ)……

(一般に体修語においては、係り助詞を取り上げないが、特に必要と認める場合に限り、これを問題にした。)

～ヲ—述 →「ホンヲ ヨム」

～〈ヲ〉—述 →「ホン ヨンダ」

～ニ(ハ)—述 →「ガッコウニ イッタ」および「ガッコウニハ イカナイ」

～〈ヲ〉ハ—述 →「ホンハ ヨンダ」

副修語を表わすには 副₁、副₂、副₃、副₄、副。

(それぞれ副修語第1類より第4類まで、および一括して取り扱うことを示す。)

副₁—述 →「ソロソロ アルイタ」

述語を表わすには 述、他₁、他₂、自、形、……

(一般には「述」と略記するが、必要に応じて、「他動詞₁」「他動詞₂」「自動詞」

……などを詞性としていることを示して、「他₁」「他₂」「自」……などと記す。場合によっては「他₁+助動詞」などと記し、必要に応じて「述〔ナイ〕」などと記すこともある。「ナイ」は述語たることを特徴づけていなくても、その構文においては問題となることを示すためである。一般に、このような場合は注記を施す。

一は部と部とが連結していることを示す。

～ガー～ニ―述 →「ワタシガ ガッコウニ イク」など。

○「ソノ トキニ コエガ アガッタネ」 →○印、または無印の文例は資料に現実に表われていたもの。

△「ヤマンナカ スンデル」 →△印のものは話しことばとして使われな
いこともないが、一般的表現として、取り上げるべきかどうか問題のあ
るもの。

・「ヤマニ ノボッタヨ」 →・印のものは実際には資料に表われていな
かったが、当然あり得る文例を示す。

—— 主語に該当する部に施す。

~~~~ 体修語に該当する部に施す。

----- 副修語に該当する部に施す。

===== 文末述語に該当する部に施す。

**3・1 部の配列** 既述したように、日本語においては一般に文内における部の配列は極めて自由であると言われているが、なかには、部の順序がかなり固定的なものもある。次に示す「3・2 構文の型(表)」においては、——これを詳細に区別して示さないのここで概括的な説明を試みる。

- ①「ドウシテ | ソンナニ | イソグ？」
- ②「ダイタイ | ニシュウカン | カカル」
- ③「サホド | ソウ | カンジナイ」
- ④「トニカク | センセン | ダメダ」

はいずれも、副修語の二つある文である。これらの副修語の順序は、交換が全く不可能というわけではないが、一般的には、一定の順序において表われていることが多いようである。①は「ドウシテ」が疑問の副詞の場合である。②は「ダイタイ」が「ニシュウカン」を修飾しているとも考え得る場合である。③は「ソウ」の方が「カンジナイ」との結びつきが密接であると考え得る。④は

「トニカク」が接続詞的である。このような場合、先行する副修語は第3類あるいは第2類である場合が多いが、係り助詞を伴っていたり、時を表わす副詞が先行していることもある。

- ⑤ 「サイグンビモンダイデ | ミソ | ツケタンダヨ」
  - ・ 「コドモノ トキニ | ヒドイ メニ | アッタンジャナイカナ」
  - 「ソレカラ | フタリッキリニ | ナッチャッタ」
- ⑥ 「ミヤギケンハ | ドコニ | イマンタカ？」
  - 「センセイモ | スミニ | オケナイ」
- ⑦ 「コノ バアイハ | タケデ | マイリマンヨウ」 〈この場合は 竹で まいりましょう〉
- ⑧ 「ニサンネンマエマデハ | シバイ | カイテタデスヨ」 〈2,3年前までは 芝居書いてたですよ〉
- ⑨ 「ソノ カエリニ | チャンピオン | ミテキタ」 〈その 帰りに『チャンピオン』見てきた〉
  - ・ 「ソレガ オワッテカラ | ソウコニ | モッテキテモラウ」 〈それが 終わってから 倉庫に 持ってきてもらう〉

はいずれも、体修語の二つあるものである。これらも一定の順序で表われていることが多い。⑤は後行の体修語が述語と密接に結びついていると考え得る場合である。⑥は慣用的な表現である。⑦は先行の体修語が主題的であると認められる。⑧は先行の体修語が時を表わしている。(また同時に主題的である)。⑨は表現内容に先後関係があり、文脈の流れがそれに沿っている場合である。

- ⑩ 「アレハ | ドウ | スルノ？」
  - 「ツライ トキニハ | ソウ | スルンダッテ」
- ⑪ 「フユナンカ | トッテモ | アッタマル」
  - 「クモニモ | イロイロ | アルト」 〈雲にも いろいろ あると〉
- ⑫ 「セイヨウリョウリヤ ニホンリョウリ | ゼンブ | ヤルノ？」 〈西洋料理や 日本料理 全部 やるの？〉

はいずれも、体修語が副修語に先行して表われることの多い例である。⑩は副修語の方が述語と密接に結びついていると考え得る。⑪は体修語が主題的である。⑫は体修語が副修語「ゼンブ」を修飾しているとも考え得る場合である。

- ⑬ 「ヨウスルニ | フドウカブラ | サラッチャウンデスヨ」 〈要するに 浮動株をさらっちゃうんですよ〉
- ⑭ 「モウ | ヒトノ コト カンガエナイ コトニ | シテイル」 〈もう 人の こと 考えない ことに している〉

○「ホントニ | イイ キモチニ | ナッチャウンダ」

⑬「ドウモ | オテスウ | カケマシタ」

はいずれも副修語が体修語に先行して表われていることの多い例である。⑬は副修語が接続詞的である。⑭は体修語と述語との結びつきが密接なものである。⑮は慣用的な表現である。

⑯「ニンゲンテ | コトバデ | ジャマサレル」

○「ショクンダッテ | リョウリヤニモ | イクダロウ」〈諸君だって 料理屋にも行くだろう〉

⑰「ジュウトウガ | テンカ | トルンデスカ？」

○「ホッカイドウノ ヒトハ | ハダンニ | ナッチャッタノカ？」〈北海道の人は 破談に なっちゃったのか？〉

⑱・「ソウイウ トコロニハ | ビョウニンガ | オオイ」

○「ソココニ | チガイガ | アル」〈そこに 違いが ある〉

○「モノヲ カタノト | カンケイ | アリ」〈物を 書くのと 関係 あり〉

⑲・「トウショ ニオキマシテモ | キュウジンノ モウシコミヲ | ウケテオリマセン」〈当所におきましても 求人 の 申し込みを 受けておりません〉

において、⑯⑰は主語が体修語に先行し、⑱⑲は体修語が主語に先行して表われる傾向のあるものである。⑯の主語は主題であり、⑰の体修語は述語に密接に結びついている。⑱の主語は述語と密接に結びついているとも言えるが、この場合、述語が形容詞あるいは自動詞「ある」であることは注目すべきであろう。⑲は体修語が主題となっている。

⑳「ソコダッテネ | バス オリテカラ | ミズウミマデ | ダイブ | アルノネ」〈そこ だってね バス 降りてから 湖まで だいぶ あるのね〉

においては「ソコダッテ」は文頭に、「ダイブ」は述語に近く位置していることが多いと認め得よう。

㉑・「ホントウニネー | クシロツテイウ マチハ | ナンカ | キョウシュウヲ | サノウネ」〈本当にねえ 釧路っていう 町は なんか 郷愁を さそうね〉

においては「～マチハ」は「キョウシュウヲ」に先行する傾向がみられるばかりでなく「ナンカ」は述語に密着しては表われない傾向があると言えるであろう。さらに、

㉒「ソレハ | ヤメタ ホウガ | イイ」

・「エッチラインテ イウノハ | マンナカガ | ツマツテイルンジャナイ？」〈Hラインで いうのは 真中が しまっているんじゃない？〉

- ・「エイガッテサ | ショウバイガ | ウマク | イカナインダッテ」〈映画ってさ  
商売が うまく いかないんだって〉

などのように主語が二つ以上ある場合は、どちらか一方が主題となっていて、その順序もかなり固定しているのが普通である(多い)とも言える。

(このように部の配列が固定的であるものは、倒置の場合にもある種の制約がある。たとえば「ソレハ | イイ、 | ヤメタホウガ」という言い方は普通ではない。)

このほか、一一の具体例については、さまざまなものがある。この調査においては、このような、部の配列の自由、不自由についても調査したが、以下に示す「構文の型(表)」では大まかな注記を施すにとどめた。(注 は全体に関する注記, あるいはその「類」に関する注記を示す。(注)は個別的な注記である)

### 3.2 構文の型(表)

#### 自動詞文

##### 1 主語なし

##### (1) 体修語なし

##### i 副修語なし——述語

- ( a 自, b 自+文末助詞, c 自+助動詞(十文末助詞),  
d 自+形式用言(十助動詞+文末助詞), e 自+ノダ・ノデスなど )

- a 「チガウ」〈違う〉 ○「ミエル?」 ○「アル」
- b 「コマルナ」〈困るな〉 ○「アルワヨ」 ○「コムネ」〈混むね〉 ○「サクヨ」〈咲くよ〉 ○「アルノカシラ」
- c 「ツカレタ」 ○「アルデショウ」 ○「ツカレルダロウ」 ○「ワカラナイヨ」 ○「デキマス」 ○「ウツルラシイ」〈写るらしい〉
- d 「イバッテイルネ」 ○「ノンビリシテナイヨ」 ○「フェテキタネ」 ○「コマッチャウ」 ○「シンジャッタラシイケド」〈死んじゃったらしいけど〉 ○「オイバリナサイ」 ○「アリヤツナイ」
- e 「ウレルデス」〈完れるんです〉 ○「チガウダ」 ○「コマルンジャナイカナ」

注 例は主に実例によった。したがってすべての種類を尽くしているのではない。

##### ii 副修語1——副修語, 述語

- ( a 副<sub>1</sub>—述, b 副<sub>1</sub>—述, c 副<sub>2</sub>—述, d 副<sub>1</sub>—述 )
- a 「イチンチ | フラレタワ」〈1日 降られたわ〉

○「ソノマンマン | ナッテイルンデス」

b 「ブンブン | オコッテノ」

c 「チヨット | テガウカナ」

d 「モチロン | アルワヨ」

iii 副修語 2——副修語, 副修語, 述語

( a 副<sub>1</sub>—副<sub>1</sub>—述, b 副<sub>1</sub>—副<sub>3</sub>—述, c 副<sub>1</sub>—副<sub>1</sub>—述, d 副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—述, )  
( e 副<sub>2</sub>—副<sub>2</sub>—述, f 副<sub>2</sub>—副<sub>4</sub>—述, g 副<sub>2</sub>—副<sub>3</sub>—述, h 副<sub>3</sub>—副<sub>3</sub>—述 )

(i) a 「サイキン | ドンドン | ヒラケチャウデショウ」

b 「ヤッパリ | ナンマイカ ムクタンビニ | ウスク | ナルンダソウヨ」

○「キノウナンカ | テンデ | マイッチャッタ」

c 「マタ | トツゼン | オジャマスルカモシレマセン」

d 「ズイブン | イロイロ | アルネ」

e 「モウ | ダイブ | ジョウズニ | ナッタ」

(ii) f 「ダイタイ | ニシュウカン | カカルンデス」〈大体 2週間 かかるんです〉

g 「モウ | ドウニモ | ナンナイデショウ」

h 「トニカクネー | ゼンゼン | キョウザメシチャッテ」〈とにかくねえ ぜんぜん 興ざめしちゃって〉

註 (i) e 「ダイブ」は「ジョウズニ」を, (ii) f 「ダイタイ」は「ニシュウカン」を修飾しているとも考え得る。(ii) g 「ドウニモ ナランナイ」はかなり固定した表現である。(ii) h 「トニカク」は接続詞的である。

iv 副修語 3——副修語, 副修語, 副修語, 述語

( a 副<sub>1</sub>—副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—述, b 副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—副<sub>2</sub>—述, c 副<sub>3</sub>—副<sub>2</sub>—副<sub>2</sub>—述 )

(i) a 「イマ | ヨンマンガライシカ | ウレテナイデンショウ, | マダ」〈今 4万ぐらいしか 売れてないでしょう, まだ〉

(ii) b 「ダイタイ | ゴジュンチグライ | タッテルンデスネー, | モウ」〈大体 50日ぐらい たってるんですね, もう〉

c 「ホントウニ | コウ | ボサットシテルワヨ, | ヤッパリ」

註 (ii) の「モウ」「ヤッパリ」の位置は比較的自由であり, 「ダイタイ」は「ゴジュンチグライ」に, 「ホントウニ」は「コウ」に先行する傾向を認め得よう。

(2) 体修語 1

i 副修語なし——体修語, 述語

( a ~ニ—述, b ~へ—述, c ~ト—述, d ~ッテ—述, )  
( e ~カラ—述, f ~デ—述, g ~マデ—述, h ~ニヨッテ—述, )  
( i ~(ニ)—述, j ~(カラ)—述, k ~(デ)—述 )

a 「トウキョウニモ | アリマス」〈東京にも あります〉 ○「ダレニ | マケルノ」

?」 ○「オワカリニ | ナリマスカ?」 ○「ナナジュウサンニヤ | ミエマセ  
ンネー」 〈73にゃ みえませんねえ〉

・「オヒルト ヨルニ | アルデショウ」〈お昼と 夜に あるでしょう〉

b 「カケダシテサ | ムコウヘ | ツイチャウヨ」

c 「ビガンジュツトハ | チガウノ」〈美顔術とは 違うの〉 ○「ヨコタト | ナツ  
テル」 ○「イヤナ ヒトバツカリト | ツキアッテイルデスヨ」

d 「ホッカイドウヘ イコウッテ | ハリキッテンノヨ」〈北海道へ 行こうって  
はりきってんのよ〉

e 「オトウサンカラ | ヨツチャウンダモンネー」〈お父さんから 酔っちゃうん  
だもんねえ〉 ○「コチラカラ | ゴヘンジーイタシマス」

f 「ミツカカングライデ | デキマス」〈3日間ぐらいで できます〉 ○「ヒトツ  
ノモノ タンイツノ モノデ | デキテイルデス」〈一つの もの 単一の  
もので できているんです〉 ○「ムコウデモネ | オコッチャウ」〈向こうでも  
ね 怒っちゃう〉

g 「アタマノ シンマデ | ヒビクンデスヨ」

h 「ツキニヨッテ | チガウノ」〈月によって 違うの〉

i 「ヒヤクエン | ナリマスネ」

j 「ヨンカイデモ ゴカイデモ | ミエルモン」〈4階でも 5階でも 見えるもん〉

k 「サラトガホンセンハ | シナナイデスヨ」〈『サラトガ本線』は 死なないですよ〉

注 このほかに「～ヨリ―述」(ワタシヨリ ハリキッテルヨ)「～(へ)―述」(エキ  
ツクダロウ)の型もある。それぞれの格助詞に係り助詞のついていることも多い。  
「～(に)―述」は、係り助詞のついている場合や時を表わす場合などに多い  
が、そのほかには「～」が「イ列音」「ン音」で終わっているか、述語が「イ音」  
で始まる場合が多いようである。また「～(へ)―述」は一般に「～(に)―述」と  
も考えられる。以下～(へ)と記した場合は～(に)とも～(へ)とも解されることを  
示す。j 「ヨンカイデモ ゴカイデモ」は句とも考え得る。

## ii 副修語1——体修語, 副修語, 述語

( a ~ ニ ― 副一述, b ~ へ ― 副一述, c ~ ト ― 副一述,  
d ~ カラ ― 副一述, e ~ デ ― 副一述, f ~ ニヨッテ ― 副一述,  
g ~ (に) ― 副一述, h ~ (で) ― 副一述, i ~ マデ ― 副一述 )

(i) a 「イマ | チバニ | イマス」 〈今 千葉に います〉 ○「マダ | ホンニ | デナ  
イ?」〈まだ 本に 出ない?〉

b ・「アス | トウキョウヘ | ツクダロウ」

c 「ゲイジツガッコウ ヤッテタ トキニ シッテタ ヒトト | チヨット | ニテ  
ルンダヨ」

d 「アレカラ | フタツキグライハ | カカッテイルヨ」

- e 「コンド | ロッカーン トコデ | シンジャウンダヨ」  
 f 「チャント | ジカンニヨッテ | デキテルノ」〈ちゃんと 時間によって できてるの〉  
 g 「アン トキ | マイッタモンナ、| ジッサイ」  
 h 「バスン ナカ | ズーット | ネムッテタ」  
 (ii) a 「クモニモ | イロイロ | アルト」〈雲にも いろいろ あると〉 ○ 「センタクノ タライネ | アレニ | イッパイ | トレマシタ」  
 i 「イママデ | モウ ハントシイジョウ | アソन्दルデシヨウ」〈今まで もう 半年以上 遊んでるでしょう〉  
 g 「フナナカ | トッテモ | アッタマル」〈冬なんか とっても 暖まる〉  
 (iii) a 「ホントニ | イイ キモチニ | ナッチャウンダ」 ○ 「マア | テイドニ | ヨリ マスネ」  
 c・「ダイタイ | カレガ イッタト | オモイマス」 ○ 「イヤナ ヒトバッカリ ト | ツキアッテイルンデスヨ、| シヨウジキナ ハナシ」  
 f 「ツマリ | ツキニヨッテ | チガウノ」

- 注 (ii) 体修語が副修語に先行する傾向のあるもの。体修語が主語的であったり、体修語と副修語とが一まとまりになる傾向があったり（「タライネ イッパイ」）する場合が多い。  
 (iii) 副修語が体修語に先行する傾向のあるもの。副修語が接続詞的であったり体修語と述語とが密接に結合する（「～ニ ナル」）場合が多い。

iii 副修語2——体修語，副修語，副修語，述語

- ( a ～ニ—副—副—述, b ～マデ—副—副—述, )  
 ( c ～カラ—副—副—述, d ～(ニ)—副—副—述 )  
 (i) a 「モウ | センサイッテイウ モンダイニヤ | ゼンゼン | フレナインデス」  
 〈もう 戦災っていう 問題にゃあ ぜんぜん ふれないんです〉  
 ○ 「シウセンニ ナッテ | スコシ | イタンデス、| マダ | ムコウニ」〈終戦 になって 少し いたんです、まだ 向こうに〉  
 b 「ダイタイ | コウコウマデハ | ドウシテモ | ススミマスネ」〈大体 高校までは どうしても すすみませぬ〉  
 (ii) a 「マエニナンテサ | トウキョウヘ カエッテクルト | ナンダカ | ポーットシチ ャッテンノネ、| シバラクネ」  
 c 「ハジマッテカラモ | マダ | ホントニ | デキテイナカッタнда」  
 (iii) d 「キョウハ | スゴク | ヨル | サムク | ナルンダゾ」  
 (iv) a 「コノアイダハ | ドウモ | オセワニ | ナリマシテ」

- 注 (ii)の体修語は文頭に近く位置する傾向がある。主語的である。「ナンダカ」 「マダ」はそれぞれ位置が自由である。



(iii)(iv) 体修語が述語に近く位置する傾向のあるもの。(iii)の「キョウヘ」は主題的であるが「スゴク」の位置は自由である。

(iv)の体修語と述語とは結びつきが密接である。(「～ニナル」の形)

### (3) 体修語 2

#### i 副修語なし——体修語, 体修語, 述語

( a ~<ニ>~へー述, b ~ニ~カラー述, c ~ニ~ッテー述,  
 ( d ~ニ~デー述, e ~ニ~マデー述, f ~へ~カラー述,  
 g ~へ~デー述, h ~ニ~<ニ>ー述, i ~<ニ>~デー述,  
 j ~ト~デー述 )

(i) a 「ヨル | トウキョウへ | ツイタデショウ」

b ・「ジョウタイシテカラ | オバサン トコニ | イラレルンデスカ?」

c 「シタノ カベ ミタラ | コクバンニサ | オバアサンッテ | ツイテイルノヨ」

〈下の 壁 見たら 黒板にさ おばあさんって ついてのよ〉

d 「アル イミデハ | ソノ ウツクンサニ | ミトレテタネ」

e 「シンサイマデハ | カナザワニ | イタンデス」 〈震災までは 金沢に いたんです〉

f △ 「ソレカラ | キタグチイ | コシタンデス」 〈それから 北口い 越したんです〉

g 「バスデ | ニガワラへ | イッタノネ」 〈バスで 湯河原へ 行ったのね〉

(ii) h ・「コドモン トキ | ソウイウ メニ | アッタンジャンイカ?」

a 「カモツショウ | コウシャホウハ | ナンテッタッテ | ソバへ | ヨレナカッタヨ」  
 〈貨物しょうの 高射砲は なんてったって そばへ よれなかったよ〉

b 「アイサツラ シテカラ | シニント フタリッキリニ | ナッチャウンジャンイ」  
 〈あいさつを してから 死人と 2人きりに なっちゃうんじゃない〉

i 「コノ バアイハ | タケデ | マイリマショウ」 〈この 場合は 竹で まいりましょう〉

○ 「イッショニ | イク トキハネ | イチマイノ ガクワリデ | スムデショウ」

〈一緒に 行く 時はね 1枚の 学割で すむでしょう〉

d 「コノ トケイデ | ジュウイチジ | ジュウゴフソニ | ナッタノ」 〈この 時計で 11時 15分になったの〉

○ 「ミヤギハ | ドノ ヘンニ | イタ?」 〈宮城は どの 辺に いた?〉

j 「ムコウノ ダンタイト | イイ カンケイデ | オリマス」

注 (ii) 先行の体修語が主題的であったり, 時を表わしていたり, 後行の体修語と述語との関係が密接であったりする場合が多い。(「ヒドイメニ アウ」

「～ニナル」「イイカンケイデ オル」など)

以下同様な場合には特別なものを除いて、注記しない。

(i) f 「コス」は他<sub>1</sub>とも考えられる。

ii 副修語 1 —— 体修語, 体修語, 副修語, 述語

( a ~ニ~~<ニ>—副—述, b ~(ニ)~~ト—副—述, )  
( c ~ニ~~カラ—副—述 )

(ii) a 「シズオカアタリハ | ズイブン | ヤマニ | アリマスネ」 <静岡あたりは ずいぶん 山に ありますね>

○ 「イマ | イッカゲツ | ドノクライニ | ナリマス?」

b 「ガイジンガ キエタ バアイ | ヤッパリ | キョウトベンラ イチバン ウツクシイト | カンジルカシラ」 <外人が 聞いた 場合 ヤッパリ 京都弁を 一番 美しいと 感じるかしら>

△ 「ソノ ヨコニ | ナニナニノ ハカ ナニナニ | チイサク | イッパイ | ハイ ッテイル」

(iii) c △ 「ジョタイ シテカラ | オバサン トコニハ | ズット | イラレルンデスカ?」

(iv) a 「ナンカ | コドモン トキ | ソウイウ メニ | アツタンジャンイカナ」

(v) a 「サイショハネー | アレニ | イッパイ | トレマシタ」

b 「クダラナイ ハナシバカリ シテイル ウチニ | ツイニ | ジカント | ナリマシタ」

注 いずれも体修語相互の順序は比較的不自由である。副修語の位置の自由さはそれぞれ異なる。

iii 副修語 2 —— 体修語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語

( ~ニ~~マデ—副—副—述 )

(ii) ○ 「イママデハネー | ダイタイ | ソナナ | クン | ナラナカッタノヨ」

注 「ダイタイ」は「ソナニ」の前にあるのが普通。

(4) 体修語 3

i 副修語なし —— 体修語, 体修語, 体修語, 述語

( ~ニ~~<ニ>~~シテ—述 )

(ii) ○ 「ソツギョウスル トキサ | ミンナシテネー | フクロダタキニ | アッチャッタ」 <卒業する とき みんなしてねえ 袋だたきに あっちゃった>

注 後行の体修語は述語に近く位置している傾向がある。

(5) 体修語 4

i 副修語なし —— 体修語, 体修語, 体修語, 体修語, 述語

( ~ニ~~ニ~~テ~~カラ—述 )

(i) ○ 「ボウクウゴウヘ ハイロウト オモッテル ウチニ | ウマガ イルッテ | ヘイ」

タイサンニ | アタマカラ | オドカサレタワ」 <防空ごうへ はいろうと 思っ  
 てる うちに 馬が いるって 兵隊さんに 頭から 驚かされたわ>  
 注 文頭の体修語は文脈上先行している傾向があるとも言える。

## 2 主語 1

### (1) 体修語なし

#### i 副修語なし——主語, 述語

( a ~ハ一述, b ~モ一述, c ~ナンテ一述,  
 d ~ッテ一述, e ~ダッテ一述, f ~<ハ>一述,  
 g ~ガ一述, h ~<ガ>一述, i ~<ガ>一述 )

a 「ヒマッテ ヤツァー | コリャー | ショウガアリマセンナ」

○「ソレダケノ ドキョウハ | ゴザイマセン」 <それだけの 度胸は ござい  
 せん> ○「アリャ | ワリアイヨク | トレテル」 ○「ソレハ | ワカンナイカ  
 ナー」

b 「ソウイウノモ | アルヨ」 ○「ソレモ | チガイマス」

c 「オツトメノ カタナンテ | ヨルジャナキャ | イラッシャラナイシネー」

d 「ソウイウ コトッテ | アルカシラ」

e 「アノ トキダッテ | ハッキリシテルモン」

f 「シュミ | アリマセン?」 ○「マケルヨ, | トミタサン」

g 「ジンコウガ | オオスギマショウ」 <人口が 多すぎましよう> ○「モウヒト  
 ツノ チイサイノガ | アリマシタネ」

h 「ミンーナ | ハッキリ(ト)シテイルヨ」 ○「イイ トコ | アリマセンデシタ」  
 ○「シラナイノ | バレタ」

i 「ソロバン | デキマスカ?」 ○「ワリザンノ ヤリカタ | ワカリマスカ?」

○「ドコ イッタカ | ワカラナイノ」

注 f までは主題のあるもの。i は対象語のあるもの。

#### ii 副修語 1——主語, 副修語, 述語

( a ~ハ 一副一述, b ~モ 一副一述, c ~ナンテ一副一述,  
 d ~ッテ一副一述, e ~<ハ>一副一述, f ~ガ一副一述,  
 g ~<ガ>一副一述, h ~<ガ>一副一述 )

(i) a 「ソレハ | モチロン | アルデショウネー」 ○「ソノ ショウタイハネ | ミテ |  
スグ | ワカリマスカ?」 <その 状態はね 見て すぐ わかりますか?>

b 「ソノ テンモ | アルネ, | タシカニ」

c 「ヤッパリ | クサルンダヨ, | キナンテ」 <やっぱり 腐るんだよ, 木なんて>

d 「アタシッテネ | ドウモネ | コウ イウト | シラケチャッテネ」

e 「キイテル ヒト | イナイヨ, | ホントニ」

- f 「サイキン | シッテイル ヒトガ | シンダデシヨ」 〈最近 知っている 人が死んだでしよ〉 ○ 「シジスル ヒトガ | ナンワリカ | イルンダヨ」 〈支持者 人が 何割か いるんだよ〉 ○ 「チョット | コフウナ カンジガ | スルワネ」 〈ちょっと 古風な 感じが するわね〉
- g 「ハイッタ コト | アルヨ、 | イッペン」
- h 「イマ | バンチ | ワカラナインデス」 〈今 番地 わからないんです〉
- (ii) a 「アレハ | ドウ | ナッタンドロウ?」
- f 「レンズガ | ドウカ | シテタノカネー」
- g 「イヌニ ホエラレテ コマッテイル シンブンハイタツ | ズバリ | デテマイリマシタネ」 〈犬に 吠えられて 困っている 新聞配達 ずばり 出てまいりましたね〉
- h 「ソウシマセント | イッサイノ コト | イロイロ | ワカリマセンカラ」
- (iii) f 「アンガイ | キガ | ツカナイワヨネ」
- g 「ナンカ | モンダイ | オキテタジャナイノ?」
- 注 (ii) 主語が先行する傾向があるもの。副修語が述語と密接な関係を持っていたり、主語と副修語とがひとまとまりになっていると考え得る場合が多い。
- (iii) 副修語が先行する傾向があるもの。主語が述語と密接な関係を持っていたり、副修語が述語の近くに位置しない性質のものと考え得る場合が多い。
- 「トニカク | ヒトダカリガ | シテイタ」などもその例にはいる。
- ii 副修語 2 —— 主語, 副修語, 副修語, 述語
- ( a ~ モー副一副一述, b ~ ガ 一副一副一述, c ~ <ガ> 一副一副一述, )  
( d ~ ハー副一副一述, e ~ <ガ> 一副一副一述, f ~ <ハ> 一副一副一述 )
- a 「イマ | チホウモサ | ドンドン | ヒョウジュンゴカサレテイルンジャナイ?」  
〈今 地方もさ どんどん 標準語化されているんじゃない?〉
- b 「ナンダイモ | カメラガ | バアット | デルンダ」 ○ 「ツボミガ | ダイブ | アリマスネ、 | マダ」
- c 「ズイブン | コトバノ ヘンセンテイウノ | ヤッパリ | アリマスネ」 〈ずいぶん 言葉の 変遷っていうの やっぱり ありますね〉
- (ii) d 「ダイタイ | コレハ | タイガイ | コノ ヨウシハ | アルンデスネ」 〈大体 これは たいがい この 用紙は あるんですね〉
- b 「ソウイウ モノガ | ドウモ | ハッキリ | ワカラナインデス」
- e 「ナンダカネー | チャットモネー | ヒキウケテクレンダカ クレナインダカネー | ワカラナインダッテ」
- (iii) b 「ヤッパリ | アンマリ | タイシタ ハナシガ | デソウデモナイカラ」
- (iv) d 「マダ | モノハ | デテナイデスヨ、 | ダイタイ」
- (v) f 「ゴンド | ワタシノ トケイ | ニフン | ススンダワ」 〈今度 わたしの 時計

2分 進んだわ)

(vi) b 「トリアエズ | イマ | イソイデイルノガ | アルンダッテサ」

(vii) b 「イツモネ | ナンドカ | スマナイヨウナ | キガ | シチャウ」

(viii) b 「ヤッパリ | ヨク | キガ | キクワネ」

注 (ii) 副修語相互の順序は比較的不自由である。dの「ダイタイ」は「そもそも」の意に近い。

(iii) 二つの副修語の連結している際の順序は比較的不自由である。「アンマリ ヤッパリ」の順に連結していることは少ないようである。

(iv) 先行の副修語「ダイタイ」は「そもそも」の意に近く述語に近く位置することは少ない。

(v) 後行の副修語「ニフン」は述語と密接に結びつきやすい。

(vi) 先行の副修語「トリアエズ」は文頭に近く位置していることが多い。

(vii) 主語は述語に近く位置する。

(viii) この「ヨク」は主語をとらないから副詞である。「ヨク キガ キク」は慣用句的である。

#### iv 副修語3——主語、副修語、副修語、副修語、述語

(～ガ—副—副—副—述)

(i) ○ 「ヤメタラ | コンドハ | カタガ | モウ | イクブン | ツカレキッテルンダモンネ  
—〈やめたら 今度は 肩が もう いくぶん 疲れきってるんだもんねえ〉

(ii) ○ 「ヤッパリ | ニュアンストイウ | コトバガ | イチバン | ビタット | クルワネ」

(註) (ii)後行の副修語「ビタット」と述語「クル」の結びつきは密接である。

#### (2) 体修語1

##### i 副修語なし——主語、体修語、述語

a ～(ハ)・ッテ・(ガ)—～ニ—述, b ～ハ・モ・(ガ)—～(ニ)—述,

c ～(ハ)・ガ—～ヘ—述, d ～ハ・(ガ)—～ト—述,

e ～ガ—～カラ—述, f ～ガ—～ヨリ—述,

g ～(ハ)・モ・ガ—～デ—述, h ～ガ—～(デ)—述,

i ～ハ—～ニヨッテ—述, j ～(ハ)—～マデ—述,

k ～(ガ)—～ニツイテ—述, l ～ガ—～ニオキマシテ—述

(i) a 「ソノ オンナノ ヒトハ | コノ ナカニ | イマスカ?」 ○ 「オチャニサ | テツブンガ | フクマレテイル」 〈お茶にさ 鉄分が 含まれている〉 ○ 「ソウ | イウ | コトッテ | ホカノ | クニニモ | アルカシラ」 ○ 「ソレ | アリマスカ?」  
| ソノ | ナカニ」

b 「ソノ | トキモ | ボクハ | ナイチャッター—」 ○ 「ソツギョウノ | トキハ | テストガ | アリマシタデショウ?」 〈卒業の 時は テストが ありましたで しょう?〉

- c 「ソコへ | ネテルンダ、| ビョウニンガ」 <そこへ 寝てるんだ、病人が>
- d 「クウキガネ | チガウノ、| ダンシグミト | ジョシグミト」 <空気がね 違うの、男子組と 女子組と>
- e 「アナボコカラ | ホネガ | デテンノ」 <穴ほこから 骨が 出てんの>
- f 「ヨコスカヨリ | クリハマノ | ホウガ | デキテイタネ」 <横須賀より 久里浜の方が できていたね>
- g 「ピアアンジュリー | テイウノハ | “アスデハ | オソスギル” | カナンカデ | デビユーシタンダネ」 ○ 「ダンシクラスデ | オモシロイ | コトガ | アル」
- h 「マエノ | トコハ | ケイケンガ | アルデショウ」 <前の とこは 経験があるでしょう>
- i 「ソリヤ | ハカニヨッテ | チガウヨ」 <そりゃ 墓によって 違うよ>
- (ii) a 「“ダレガタメニ” ッテイウ | ヤツハ | ホンニ | アルンダロウ?」 <『だれがために』っていう やつは 本に あるんだろう?> ○ 「オニイサンガ | コウチュウサンニ | アウノ」 <お兄さんが 校長さんに 会うの> ○ 「サケノ | サカナニ | ナルノ | ネ、| ナンブセンベアッテ」 <酒の さかなに なるのね、南部せんべいって>
- b 「ホッカイドウノ | ヒトハ | ハダン | ナッチャッタノカ?」 <北海道の 人は 破談 なっちゃったのか?>
- d 「ソレハ | ダレガ | ナッタッテ | イイッテ | イウノト | チガウカラネ」
- g 「アレ | リングノ | ウエデ | シヌンジャンインダモンネ」
- i 「アレハネー | ジュウシニヨッテ | チガウノ」 <あれはねえ 宗旨によって 違うの>
- j 「トウシャバンデスネ | ゲンシカラ | ゼンブ | スリアゲルマデ | デキマス?」 <謄写版ですネ 原紙から 全部 刷りあげるまで できます?>
- (iii) a 「ソコニ | チガイガ | アルデショ」 ○ 「セントクニ | カンケイ | アリ」  
△ 「ナカニハネー | イイ | オジョウサンナンカハ | チャントシテイラッシャイマス」 ○ 「マンナカゴロニデスネ | エトカ | アトカ | ツキマスデス」
- b 「ウンテンシュノ | タイドガ | ワルイヨウナ | トキハネ | ショウニンニ | ナツテイタダク | コトモ | ゴザイマスケレドモ」 <運転手の 態度が わるいような 時はね 証人になっただけ ことも ございますけれども> ○ 「マエハ | オンゴト | シタ | コト | アリマセンカ?」
- d 「モノヲ | カクノト | カンケイ | アリ」 <ものを 書くのと 関係 あり>
- g 「アル | イミジャアネー | ヘンナ | アレガ | オキテキチャッテンジャンイカナ」 △ 「ソバカスッテノ | ソノ | ハナシ | キエタ | コト | アルンデスヨネ」
- k 「ナイヨウトウニツイテ | キボウナンカ | アリマスカ?」 <内容等について 希望なんか ありますか?>

1. 「トウシユニオキマシテモ | エイギョウ ウブヒン カンケイノ キョウジンガ | ハイッテオリマセン」 <当所におきましても 営業部品 関係の 求人が は  
いっておりません>

注 (ii) 主語の先行する傾向のあるもの。

(iii) 体修語の先行する傾向のあるもの。

ii. 副修語 1 —— 主語, 体修語, 副修語, 述語

( a ~ (ハ)・モ・(ガ)・ッテ ~ ニ 副一述, b ~ ハ・ガー ~ (ニ) 副一述,  
c ~ (ハ) ~ ト 副一述, d ~ ガー ~ カラー 副一述,  
e ~ (ガ) ~ デー 副一述, f ~ (ハ) ~ (デ) 副一述,  
g ~ ガー ~ ニ オイテ 副一述

(i) a 「ソノ ナカニ | チイサナ シマガネ | イッパイ | アンノ」 <その 中に 小  
さな 鳥がね いっぱい あんの> ○「チャント | イケサノ ウシロニ |  
ボクハ | タツテルンダヨ」 ○「シッカリシタ ヒトモ | タジカニ | ナカニハ  
| ゴザイマス」

b 「ソレガ | ヒトリモ | イマセンカラ, | ワタクシドモハネー」

c 「アレ | フツウニ イッテル コトバトモ | マタ | チガウデシヨウネー」  
<あれ 普通に 言ってる ことばとも また 違うんでしょね>

d 「ナニカ | ソチラカラ | ゴシツモンガ | アルンデスカ?」 <なにか そちらか  
ら ご質問が あるんですか?>

e 「ソウイウノ | アルラシイネ, | ムコウデモ | ヤッパリネ」 △「ザンネンナガ  
ラ | コノ セキデハ | アンマリ | イナイナ, | ソウイウ ヒトガ」 <残念なが  
ら この 席では あんまり いないな, そういふ 人が>

f 「ヤッパリ | マセテンダナ, | ソウイウ コトハ | イナカナンカナー」

(ii) b 「ソレハ | チャント コンクリートデ デキテイル バアイネ | ソノマンマ |  
ハイッテルンダ」

(iii) e 「ムシロサ | コッチデモサー | バカダナッテ イウヨウナ コト | アルデシヨ  
ウ」

(iv) a 「ホトケサマッテ | ウチニ | イッパイ | アルンデスヨネ」

(v) a 「ソウイウネ タチノ ヒトハネ | マタ | ソバカスニ | ナッテキチャウンダッ  
テ」

○「アノ スマイン トコロネ | チョウド | オカッテノ ウラッテ コトニ |  
ナリマスネ」 <あの 住まいん 所ね ちょうど お勝手の 裏って ことに  
なりますね>

(vi) e 「ハイセンデハ | ケイケン | ドノクライ | アリマスカ?」 <配線では 経験  
どのくらい ありますか?>

- a 「ヤッパリ | オヨメサンヲ トルニハ | ニンゲンノ シッカリシタ ヒトヲ  
エラブ ヒツヨウガ | アリマスネ」 <やっぱり お嫁さんをとるには 人間の しっかりした 人を選ぶ 必要が ありますね>
- (vii) a 「ホカニモ | オデシサンガ | タクサン | イルノ?」 <ほかに も お弟子さんが 沢山 いるの?>
- e 「ホトケサマノ ホウジ | イロンナノ | アルデショウ, | ゴチャゴチャトサ」  
 <仏さまの 法事 いろんなの あるでしょう, ごちゃごちゃとさ>
- g 「トウショニオキマシテモ | アンガイ | エイギョウブヒンカンケイノ キュウ  
ジンガ | ハイッテオリマセン」
- (viii) a 「サンミニ | ナニカ | カンケイガ | アツテ?」 <酸味に 何か 関係が あって?>
- b 「ココニ イマシタ トキヤナンカ | ナニセ | コノ ガラスヲ サン ジュウ  
ロクマイ タタキワッタ ヒトガ | アルンデスヨ」 <ここに いました 時や なんか なにせ この ガラスを 36枚 たたき割った 人があるんですよ>  
 ○ 「モウヒトツ | ソレハネー | シズンデユク オハカ | アルデショウ」 <もう 一つ それはねえ 沈んでゆく お墓 あるでしょう>

注 (i)(ii)(iii) 主語と体修語との相互の順序は比較的自由であるが、副修語の自由さはそれぞれ異なる。

(iv)(v) 主語が体修語に先行する傾向のあるもの。

(vi)(vii)(viii) 体修語が主語に先行する傾向のあるもの。

### iii 副修語 2 —— 主語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語

- |   |                 |                   |
|---|-----------------|-------------------|
| ( | a ~ガ~デ~副~副~述,   | b ~ハ~<ニ>~副~副~述,   |
|   | c ~ガ~<ニ>~副~副~述, | d ~ガ~<ヨリ>~副~副~述,  |
|   | e ~ハ~<ニ>~副~副~述, | f ~ガ~<ニ>ツイテ~副~副~述 |

- (i) a 「ムカシノ ギリジャジャ | ドクシダト バッセラレル ホウリツガ | アツ  
タンデスネ, | ナンカ | ムカシハ」 <昔の ギリジャジャ 独身だと 罰せられる 法律が あったんですね, なんか 昔は>
- (ii) b 「トクニ | アタシナンカハ | ソノ ケイサンハ | タブニ | アルヨ」
- (iii) c 「ソウタイセイゲンリニ アルトオリ | コッチニ ソノ キモチガ アレバ |  
ムコウニ | カナラズ | ソノ ウケイレガ | アルンデス」 <相対性原理に ある 通り こっちに その 気持が あれば 向こうに 必ず その 受入れがあるんです>
- (iv) c 「タダ | ソノ キュウジンノ ナイヨウデスケド | ミナ | キュウシヨクシャノ  
イウ (ゴキボウチ) ガ | テキトウナ トコロニ | アルンデス」
- (v) d △ 「ヨコスカヨリ | クリハマノ ホウガ | ヨケイ | ジュウブン | デキテイタネ」



(vi) e 「ナゴヤへハ | ホトンド | モウ | ヒョウジュンゴニ | ナッテルノヨネ」 〈名古屋は ほとんど もう 標準語に なるのよね〉

(vii) c 「ジツハ | コレガ | チョウド | ギケイニ | アタルンデゴザイマスガネー」 〈実は これが ちょうど 義兄に あたるんでございますがねえ〉

(viii) a 「ヤッパリ | アル イミジャ | チョットネ | ヘンナ アレガ | オキテタノカネ」  
f 「ナンカ | トクニ | ジギョウノ セイカクナンカニツイテ | キボウ | ゴザイマス?」 〈なんか 特に 事業の 性格なんかについて 希望 ございます?〉

注 (i)(ii)(iii)(iv)(v) 主語と体修語の位置が比較的自由なもの。副修語の位置の自由さはそれぞれ異なる。

(vi)(vii) 主語が体修語に先行するもの。

(viii) 体修語が主語に先行するもの。

#### iv 副修語 3——主語, 体修語, 副修語, 副修語, 副修語, 述語

(a) ~ガ~へ~副~副~副~述, b ~<ガ>~<ニ>~副~副~副~述

(ii) a 「ジツハ | ソノ ジュルイガ | ノウチカノ ホウへ | モウ | ダイブ | タマッテ オロンデスヨ」 〈実は そのお 書類が 農地課の 方へ もう だいぶ たまっておるんですよ〉

(iii) b △ 「ソレ イガイハ | アンマリ | チョット | セイシン | コモラナイ, | ヤッパリ」

(iv) b 「ナنداカ | ヨク | オンナノ ヒトハ | ウリニ | イヌノ スキナ ヒト | イマスネ」 〈なんだか よく 女の 人は わりに 犬の 好きな 人 いますね〉

注 (ii) 主語と体修語との位置が比較的自由であるもの。

(iii)(iv) 体修語が主語に先行するもの。副詞の位置の自由さは異なる。

#### (3) 体修語 2

##### i 副修語なし——主語, 体修語, 体修語, 述語

( a ~<ガ>~<ニ>~<ニ>~述, b ~ハ~<ニ>~<デ>~述,  
c ~ガ~<ニ>~<ニ>~<ニ>~述, d ~ガ~ト~<ニ>~述,  
e ~ガ~<ニ>~<ニ>~<デ>~述, f ~ガ~<ニ>~<ニ>~<デ>~述 )

(i) a 「ミシマサン ブラジルへ イッテラッシャル ルスニサー | ナニカノ ザッシニ | デマシタネ, | オヨメサンノ チュウモンノ カジョウガキガ」 〈三島さん ブラジルへ 行ってらっしゃる 留守にさあ なにかの 雑誌に 出ましたね, お嫁さんの 注文の 簡条書が〉

○ 「イロイロ ゴタゴタ アッタ スエニ | ゴネンノ トキカナンカ | ソノ センセイガ | ナッタノヨ」

b 「ジュジンハ | イナカノ ホウニ | ヒトリデ | オリマシデスノ」

- (ii) a 「ヨルノ カワノ トキニサー | ヤマモトフジコガサー | トモダチニ | アウデ  
ショウ」〈『夜の 河』ん 時にさあ 山本富士子がさあ 友だちに 会うでし  
よう〉
- (iii) a 「コメノ カワリニ | サトウガ | ハイキュウニ | ナッタンデスヨ」  
○「ワダサノ トキモ | ナナジュウニングライ | オイデニ | ナリマシタデシ  
ヨ」〈和田さんの 時も 70人ぐらい おいでに なりましたでしょ〉
- (iv) d 「ムコウカラ | カイシャニ ホカシテアルトカ | レンラクガ | アルンデスガ  
ネ」〈向こうから 会社に 保管してあるとか 連絡が あるんですがね〉  
c 「マエ | オツトメンテタノハ | ドコヘ | オツトメシテラッシュイマシタ?」
- (v) e 「フランスミタイナ クニジャ | ホジョキソクガ | デルデシヨ | セイフカラ」  
〈フランスみたいな 国じゃ 補助金が出るでしょ、政府から〉
- (vi) f 「カイサンモ | セイキョクノ キスウノ ワカラナイ カイサンハ | ショウ  
ケンノ ゲキドウガ | オコル」〈解散も 政局の きすうの わからない 解  
散は 証券の 激動が 起こる〉

注 (ii) 二つの体修語の相互の順序は比較的に固定している。

(iii) 後行の体修語は述語に近く位置している。

(iv) 体修語「……ホカシテアルトカ」は主語「レンラク(ガ)」を修飾して  
いるとも考えられる。

(v) 先行の体修語は文頭にある傾向がある。

(vi) 相互の位置はかなり不自由である。「格」の識別は解釈によって異なる。

## ii 副修語 1——主語, 体修語, 体修語, 副修語, 述語

- ( a ~ハ~ニ~デ一副一述,    b ~ダッテ~カラ~マデ一副一述, )  
( c ~ガ~カラ~デ一副一述,    d ~ガ~ニ~ニ一副一述, )  
( e ~ガ~(ニ)~(デ)一副一述 )

- (ii) a 「ワタシハ | ニホンジンイジョウニ | ガイコクシヨウコウアタリト イッシヨ  
ノ セキデ | ケッテ | マケナカッタデス」
- (iii) b 「ソコダッテネ | バス オリテカラ | ミズウミマデ | ダイブ | アルノネ」〈そ  
こだってね バス 降りてから 湖まで だいぶ あるのね〉
- (iv) c 「フランス ミタイナ クニジャ | コドモガ タクサン イルト | ナンカ | ホ  
ジョキソクガ | デルデシヨ | セイフカラ」
- (v) d △ 「アノ ヘン トコニハ | ウマノ ボウクウゴウガ | ドッサリ | アッタデシ  
ヨ | ヨヨギレンタイカラ デテクルマデニネ」〈あの 辺 ところには 馬の  
防空ごうが どっさり あったでしょ、代々木連隊から 出てくるまでにね〉
- (vi) e 「カイサンモ | ヨウスルニ | セイキョクノ キスウノ ワカラナイ カイサン

ハ | ショウケンノ ゲキドウガ | オコル」

注 (ii) この副修語は、このように長い部の連るときにはあまり述語から遠くには位置しないことがある。

(iii) 主語は文頭にある。副修語は実質的に述語と密接に結びつき、述語に近く位置する。

(iv) 先行の体修語は文頭にあり、副修語は述語に密着して位置しない傾向がある。

(v) 主語と副修語とは述語に近く位置する傾向がある。

(vi) 相互の位置はかなり不自由である。

### iii 副修語 2——主語、体修語、体修語、副修語、副修語、述語

(a ~ガ~ニ~ニ~副一副一述, b ~ハ~ニ~ニ~デ~副一副一述)

(ii) a 「ウチニモ | イチデクノ キガ | フタツグライ | アッタデスヨ, | モト | ニ  
ソノ ハウニネ」

(iii) b 「イシイセンセイ イワクネ | コレデ | モウ | アレハ | カンゼンニ | ユデダコ  
ン | ナッタッテ」

注 (ii) 先行の体修語は比較的句頭に近く位置している傾向がある。

(iii) 後行の体修語は述語に近く位置する。先行の副修語は特殊な場合である。

### iv 副修語 3——主語、体修語、体修語、副修語、副修語、副修語、述語

(~ガ~デ~デ~副一副一副一述)

(i) △ 「ヨクサ | ニホンジャ | タトエバ | イマ | ホウソウカイナドデ | ヨワイトイウ  
コトバガ | ハヤッテイルンジャナイ?」 〈よくさ 日本じゃ たとえば 今  
放送界などで『よわい』という言葉が はやっているんじゃない?〉

注 「ヨク」の用い方はやや不自然であろう。述語には密着しない。「タトエバ」は述語には密着しない。どこに位置するかで文意がかなり異なる。「イマ」は位置が自由である。先行の体修語は主題である。

## (4) 体修語 3

### i 副修語なし——主語、体修語、体修語、体修語、述語

(a ~ガ~ニ~ニ~ニ~ニ~一述, b ~ガ~ニ~ニ~ニ~ニ~一述)

(ii) a ・ 「ワタシガ | ソノ トシニ クレニ | コチラヘ | ゴヤツカイニ | ナリマン  
テ」 〈わたしが その 年に 暮に こちらへ ごやっ介に なりまして〉

(iii) b ・ 「ソノ マチヲ チュウシンニネ | ホウボウニネ | ベソソウガネ | ヤマノ  
チュウフクニ | ヒロガッテンノ」 〈その 町を 中心にね ほうほうにね 別  
荘がね 山の 中腹に 広がってんの〉

注 (ii) 後行の体修語は述語に近く位置する。

(ii) 先行の体修語（句とも解し得る）は文頭にある傾向が強い。

ii 副修語1——主語，体修語，体修語，体修語，副修語，述語

(a ~ガ~ニ~ニ~へ~副一述， b ~ガ~ニ~ニ~ニ~副一述)

(ii) a 「シユウセンゴ | ワタシガ | ソノ トシニ クレニ | コチラへ | ゴヤッカイニ  
| ナリマシテ」

(iii) b 「ソノ マチヲ チュウシンニネ | ホウボウニネ | ベッソウガネ | ヤマノ チ  
ユウフクニ | パーツト | ヒロガッテンノ」

注 (ii) 副修語は文脈上文頭に近く位置する。後行の体修語は述語に密着している。

(iii) 副修語の位置は比較的自由である。

### 3 主語2

(1) 体修語なし

i 副修語なし——主語，主語，述語

( a ~ (ハ) ~ ~ (ハ) ~ 述， b ~ (ハ) ~ ~ (ガ) ~ 述， c ~ (ハ) ~ ~ (ガ) ~ 述，  
( d ~ ガ ~ ~ (ガ) ~ 述， e ~ モ ~ ~ (ガ) ~ 述， f ~ ッテ ~ ~ (ガ) ~ 述，  
g ~ ガ ~ ~ ガ ~ 述 )

(i) a 「カイミョウ | カイテナイダロウ， | アレ」 <戒名 書いてないだろう，あれ>

b 「ナニカ | オスキデ ヤッテラッシャル コトハ | ゴザイマセン?」

○ 「ナニカ | シカク モッテル モノ | アリマセン?」 <なにか 資格 持っているもの ありません?>

c 「ナンダカ | ワカンナイネ， | コノ ザダンカイ」 <なんだか わかんないね，この 座談会>

d 「オキヤクサマガ | ミチノリヤナンカ | ヨク | ワカルンデゴザイマス」 <お客さまが 道のりやなんか よく わかるんでございます>

(ii) a 「コレ | スガヌマタイプノ ホウハ | デキマセン?」

b 「ホトケサマナラ | テラ アワス キガ | スルノ， | アタシハ」 <仏さまなら手を あわす 気が するの，あたしは>

○ 「エッチラインテ イウノハ | マンナカ | シマッテイルンジャナイ」

○ 「アノ センガクジ | アソコ | ホネガ | デテイルネ」 <あの 泉岳寺 あそこ 骨が 出ているね>

○ 「アンナイジョウデスネ | ナンカ | ヒナガタ | アリマスカ?」 <案内状です ね なんか ひな形 ありますか?>

e 「ボクモ | トリニ イッタ コト | アルヨ」

c 「アノ ヒトハ | スポーツ | デキソウネ」

- f 「エイガッテサ | カンユウシナイト | シュウバイ | ウマク | イカナインダッテ」  
 c 「アレネ | ドッチガ | ドッチダカ | ワカンナイ」  
 g 「モチヌシガ | キガ | カワッチャッタ」 〈持主が 気が 変わっちゃった〉  
 d △ 「イミガ | ナニ | イッテルノカ | ワカラナイ」 〈意味が 何 言ってるのかわからない〉

注 主語が二つある時、どちらか一方が主題であることが多い。

- (i) 二つの主語が自由に交換し得るという場合は少ない。ともに主題的であるとか、ともに主題的でない場合とか、特殊な表現の場合が多い。  
 (ii) 主語の一方が主題であることが多い。また特殊な表現もある。

## ii 副修語 1 —— 主語, 主語, 副修語, 述語

- ( a ~ (ハ) ~ (ガ) 副一述, b ~ モー ~ ガー 副一述,  
 ( c ~ ッテ ~ ガー 副一述, d ~ ハー ~ (ハ) 副一述,  
 e ~ ガー ~ (ガ) 副一述 )

(i) a 「アスコラヘンハ | オオキナ | タテモノガ | イッバイ | アルネ」

(ii) a 「ゼンブ | ソコハ | ツブレチャウンダッテ, | ウチガ」

○ 「ミンナ | オンナジ | コト | カイテアンナ, | アレ | タシカ」

b 「ニジュウノ | トビラモ | ソウトウ | チョウシュリツガ | アルンドロウ?」  
 『二十のとびら』も 相当 聴取率があるんだろう?」

c 「ズイブン | センキョウテ | オカネガ | イルンデスネ」 〈ずい分 選挙って お金が いるんですね〉

d 「アレ | ニンゲンノ | カオハ | ゼンゼン | ハッキリシテナインダ」 〈あれ 人間の 顔は 全然 はっきりしてないんだ〉

e 「ユンド | スモウナンカ | アノ | ハシラガ | ナクナルンダネ」 〈今度 相撲なんか あの 柱が なくなるんだね〉

(iii) d 「ジャンソン | トクニ | カンケイ | アリマセン」

a △ 「ケッコウ | オキョクサマネー | キガ | ツカナイノヨ」

(iv) a 「ハンナンカサー | アレ | ハンゲタガ | ミエテ | コウ | タッテイル | カゲガ | ウツテンノネ」 〈橋なんかさあ あれ 橋げたが 見えて こう 立っている 影が うつつてんのね〉

○ 「セイセキノ | イイ | ヤツァーネ | ジュウク | タマゴラ | ウンデ | ジュウゴ | スッカリ | セイチョウンチャッタ」 〈成績の いい やつあね 19 卵を生んで 15 すっかり 成長しちゃった〉

注 (ii) 以下、二つの主語の位置はかなり不自由である。

(ii) 副修語の位置は比較的自由である。副<sub>2</sub>, 副<sub>1</sub>が多い。

(iii) 副修語は文頭に近く位置する。

(iv) 副修語は述語に近く位置する。副が多い。

## ii 副修語2——主語, 主語, 副修語, 副修語, 述語

( a ~ハ~ガ~副~副~述,      b ~ッテ~<ガ>~副~副~述, )  
( c ~ハ~ガ~副~副~述 )

(i) a 「コレハ | マダ | シナモノガ | ゼンゼン | デテナイデスネ」 <これは まだ品物が 全然 出てないですね>

(ii) a 「トクニネー | アンナ デケー トコロハ | ショトクガ | サンジユウマンモ | スルソウダナ」 <特にねえ あんな でけえ 所は 所得が 30万も するそ  
うだな>

(iii) a 「モットモ | サケトイウノハ | ドウニモ | ホキユウガ | ツカナイノカナ」 <も  
っとも 酒というのは どうにも 補給が つかないのかなあ>

(iv) b 「オンナノ ヒトッテ | コウ | チョット | グンシユウシンリッテノ | アルンジ | ャナイカ?」 <女の 人って こう ちょっと 群集心理っての あるんじゃ  
ないか?>

(v) c 「ソノー コトバハデスネ | ソウイウ モノガ | ドウモ | ハッキリ | ワカラナ | インデス」

注 (ii) 以下, 二つの主語の順序はかなり不自由である。

(ii) 先行の副修語は位置や音調により, 何を修飾するかにかかなり違いが出る。後行の副修語と述語とは密接に接続している。

(iii) 先行の副修語は文頭に近く位置する。

(iv) 二つの副修語はひとまとまりになっていることが多い。

(v) 二つの副修語は順序が固定的である。

## 2 体修語1

### i 副修語なし——主語, 主語, 体修語, 述語

( a ~ガ~<ガ>~ニ~述,      b ~ハ~ガ~デ~述, )  
( c ~ダッテ~<ガ>~<ニ>~述,      d ~<ハ>~<ガ>~ニ~述, )  
( e ~<ハ>~<ガ>~<ニ>~述,      f ~<ハ>~<ハ>~ニ~述 )

(i) a 「トノ ノウチカニネ | トモダチガ | ダレカ | イルラシインデスヨ」 <都の  
農地課にね 友だちが だれか いるらしいんですよ>

b 「ボクハ | ハイデンノ ハウ ヤッタ コトガ | アルンデス, | ヘイタイデ」  
<僕は 配電の方 やった ことがあるんです, 兵隊で>

c 「コウクウボカಂಡアッテ | コノアイダ イル トキダッテ | ミツダカ ヨ | ツダカ | アッタデスヨ」

(ii) d 「ソレハ | デルマデニ | オカネガ | イリマスネ」

○「ソレハ | ゲイノウニ | カンケイ | アリマスカ？」〈それは 芸能に 関係  
ありますか？〉

e 「モライタイ トキネ | タバコヲ ヤルカラッテ イエバネ | コウカン | デキ  
ルンダ, |アレ」

(iii) f 「コレ | バシヨ | ドコン | ナリマスカ？」

d 「サバクガ | ウミニ | ナッチャウンダモノネ, |アレネ」〈砂ばくが 海にな  
っちゃうんだものね, あれね〉

a 「タオシタラ | ナナジュウエンノ クルマ | メーターガ | キュウジュウニ  
ン | ナッテルンデスヨネ」〈倒したら 70円の 車 メーターが 90円にな  
てるんですよね〉

注 (ii)以下, 二つの主語の順序はかなり不自由である。体修語の位置の自由さは  
それぞれ異なる。

### ii 副修語1——主語, 主語, 体修語, 副修語, 述語

( a ~〈ガ〉~〈ガ〉~ニ—副—述, b ~ダッテ~〈ガ〉~〈ニ〉—副—述, )  
( c ~ハ~〈ガ〉~ニ—副—述, d ~〈ハ〉~ガ~ハ—副—述 )

(i) a 「アトネ | ワタンガ オキキンタイガイニネ | ナニカ | オデキニナル コト |  
アリマセンカ？」

(ii) b 「イマハ | コウクウボカンダッテ | コノアイダ イル トキダッテ | ミツダ  
カ ヨツダカ | アッタンデスヨ」

(iii) c 「アレハ | ボクノ ホウニモ | チェント | イチリ | アルンデスネ」〈あれは  
僕の方にも ちゃんと 一理 あるんですよね〉

(iv) d 「アレ | ジキニ | アリガ | ツクデショウ, | ナカヘネ」

注 (i)(ii) 主語, 主語, 体修語の位置は自由である。副修語の位置の自由さは  
それぞれ異なる。

(iii)(iv) 二つの主語の順序はかなり不自由である。体修語, 副修語の位置の  
自由さはそれぞれ異なる。

### iii 副修語2——主語, 主語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語

(~モ~ガ~〈ニ〉—副—副—述)

(ii) ○ 「ヨコスカモノ | ムカシハ | ココン トコロ | ズット | ヘイガ | アッタロウ」

注 (ii) 二つの主語の順序はかなり不自由である。

### (3) 体修語2

#### i 副修語なし——主語, 主語, 体修語, 体修語, 述語

( a ~〈ハ〉~モ~ニ~〈ニ〉—述, b ~〈ハ〉~ガ~ニ~ニ—述 )

(i) a 「シンサイノ コロハ | ミナサン | イズレモ | トウキョウニ | イラッジャッタ  
ンデスカ?」 <震災のころは 皆さん いずれも 東京に いらっシャった  
んですか?>

(ii) b 「アレ | バクダング オチタ トキニ | ヒコウキガ | ウニニ | イルンダッテ  
ナ」 <あれ 爆弾が 落ちた 時に 飛行機が 上に いるんだってな>

注 (ii) 二つの主語の順序はかなり不自由であり、二つの体修語の順序もかなり不自由である。

#### 4. 主語 3

##### (1) 体修語なし

###### i 副修語 1——主語, 主語, 主語, 副修語, 述語

(a) ~ (ハ) — ~ (ガ) — ~ (ガ) — 副—述,    b ~ ハー — ~ ハー — ガー — 副—述

(ii) a 「ジッサイ | アノ エイガ | ハクリョク | アッタネ, 「アノ ボクシングノ  
トコロ」 <実際 あの 映画 迫力 あったね, あの ボクシングの ところ>

(iii) b 「キュウジンジョウケンハ | オコサン ツレテイクッテノハ | チョット | ジョウケンガ | ワルク | ナルンダソウデス」 <求人条件は お子さん つれてい  
くつのは ちょっと 条件が 悪く なるんだそうです>

(iv) a △ 「ソナ キガ スルッテイウ コトハ | ホッカイドウテイウ トコロガサ  
| チョット | エキゾチックナ カンジガ | スルデショウ」

注 (ii) 後行の主語は述語に近く位置する。

(iii)(iv)の三つの主語は順序が不自由である。

(iii)の場合「キュウジンジョウケンハ」と「ジョウケンガ」とは繰り返しも  
考えられるゆえ、「主語, 主語, 副修語, 述語」の型に準じて考えてよい。

(iv)の文は文脈が整っていないと考え得る。

###### ii 副修語 3——主語, 主語, 主語, 副修語, 副修語, 副修語, 述語

(~ハー~ハー~ハー副—副—副—述)

(i) ○ 「コレハ | トニカク | ニホンハ | タイコウスルダケノ グンビハ | セッター |  
セイシンテキニ | デキナイ」 <これは とにかく 日本は 対抗するだけの  
軍備は 絶対 精神的に できない>

(註) 先行の主語「コレハ」と「グンビハ」とは繰り返しも考え得る。したがっ  
て主語, 主語, 副修語, 副修語, 副修語, 述語の型に準ずる。「トニカク」は  
述語に密着しては位置していないことが多い。

◆ 自動詞文は体修語の種類は他動詞文よりやや少ないようであるが、主語は  
さまざまなものがあり、主語を重ね用いることも多いので、かなり複雑な構文  
を持っているものがある。



他動詞文 (1)

1 主語なし

(1) 体修語なし

i 副修語なし——述語

( a 他<sub>1</sub>, b 他<sub>1</sub>+文末助詞, c 他<sub>1</sub>+助動詞+文末助詞, )  
( d 他<sub>1</sub>+形式用言(+助動詞+文末助詞), e 他<sub>1</sub>+ノダ, ノデス )

- a 「イク」〈行く〉 ○ 「カエル」〈帰る〉 ○ 「コイ」〈来い〉 ○ 「オハイリ」
- b 「イクゾ」 ○ 「カエルカ」 ○ 「コイヨ」 ○ 「オテルネ」 ○ 「イクサ」  
○ 「イクナ」 ○ 「クルトモ」
- c 「イラッシャイマス」 ○ 「ハイッタ」 ○ 「ハイルデショウ」 ○ 「イカナ  
イ」 ○ 「ハイラレマス」 ○ 「イケナイ」 ○ 「イケナイノヨ」 ○ 「ハイ  
ッタデショウヨ」 ○ 「イカナカッタノヨ」
- d 「ハイッテルヨ」 ○ 「ハイッテマス」 ○ 「ハイッテナイ」 ○ 「イットイ  
デヨ」 ○ 「アルイテッタダ」 ○ 「ハイッテクルデショウ」 ○ 「キテク  
ダサイ」 ○ 「ハイッチャウ」
- e 「ハイルンダ」 ○ 「クルノダ」 ○ 「イクンデスヨ」

ii 副修語1——副修語, 述語

( a 副<sub>1</sub>-一述, b 副<sub>1</sub>-一述, c 副<sub>2</sub>-一述, d 副<sub>3</sub>-一述 )

- a 「サイキン | イッテキタダヨ」 ○ 「ソノママ | オリチャッタデスケドネ  
エ」
- b 「イドミタイニ | ズウツ | ハイッテク」 〈井戸みたいに ずうっと はいっ  
てく〉 ・ 「ソツ | カエッタ」
- c 「ナカナカ | デテコナインダヨ」
- d 「ゼンゼン | ヨメナイヨ」

iii 副修語2——副修語, 副修語, 述語

( a 副<sub>1</sub>-副<sub>1</sub>-一述, b 副<sub>1</sub>-副<sub>2</sub>-一述, c 副<sub>1</sub>-副<sub>1</sub>-一述, d 副<sub>1</sub>-副<sub>1</sub>-一述, )  
( e 副<sub>2</sub>-副<sub>3</sub>-一述, f 副<sub>1</sub>-副<sub>1</sub>-一述 )

- (i) a 「コナイダ | ニカイバカリ | イッチャッタ」 〈こないだ 2回ばかり 行っ  
ちゃった〉
- b 「イマハ | チョウド | デチャッタ」 〈今は ちょうど 出ちゃった〉
- c 「デテイッタンジャナイ? | チャント | キノウダッテ」
- (ii) d 「モウ | ソロソロ | イケルンダケドネ」
- e 「ドウシテ | ソナニ | イソダ?」

f 「キョネンナンテ | カナラズ | ヨッテキタモノ」

注 このほかに g 副<sub>1</sub>—副<sub>1</sub>—述・「イキナリ サット デテイッタ」などがある。

(ii) 一般に副<sub>3</sub>, 副<sub>2</sub>, 副<sub>1</sub>の順に先行する傾向がみられるようである。(ii)の a の「ソロソロ」は「ユックリ」「ソロリソロリ」などの意の場合である。

## (2) 体修語 1

### i 副修語なし——体修語, 述語

( a ~ヲ—述, b ~ニ—述, c ~へ—述, d ~ト—述, e ~カラ—述, )  
( f ~デ—述, g ~マデ—述, h ~〈ヲ〉—述, i ~〈ニ〉—述

a 「アノ ハシヲ | ワタリマスネ」〈あの 橋を 渡りますね〉

b 「ニッポンニ | キテルンデスヨ」 ○「ソレヲ ウツシニ | イッチャッタ」  
○「オクレテキマスヨ, | オソイ トキニハ」

c 「トウキョウへ | デテクル」 ○「ガッコウへ | イッテタノ」

d △「オンナノ ヒトト | アルッテイタロウ」・「シナジヘン ダイトウアト  
| イッタ」〈支那事变 大東亜と 行った〉

e 「コチラカラ | イッタンダソウデス」

f 「ヤコウデ | タッタノ」〈夜行で たったの〉

g 「アカンコマデ | イケルカシラ」〈阿寒湖まで 行けるかしら〉

h 「イイ カラダ | シテルヨ」

i 「オリル トキハ | スベリオリチャッタンダソウデス」

注 格助詞には係り助詞のついている事が多い。もっとも「~ヲハ」「~ヲモ」の形はほとんど表われず、~〈ヲ〉ハ、~〈ヲ〉モの形が多い。

### ii 副修語 1——体修語, 副修語, 述語

( a ~ヲ—副—述, b ~ニ—副—述, c ~へ—副—述, )  
( d ~カラ—副—述, e ~デ—副—述, f ~〈へ〉—副—述, )  
( g ~ト—副—述

(i) a 「ナルベクナラ | ソコヲ | デナケリヤナラナインデス」

b 「イタダキニ | クルデシヨウネ, | キツト」

c 「コナイダ | ナゴヤへ | イッタデシヨウ」〈こないだ 名古屋へ 行ったでしよう〉

d 「ジッサイニ | イッタンダソウデス, | コチラカラネ」

e 「ヒトツキカ フタツキ | ナツヤスマヤナンカデ | イクケドサ」〈1月か 2月 夏休みやなんかで 行くけどさ〉

f 「マタ | リョウテイ | イクノ」〈また 料亭 行くの〉

(ii) g 「シナジヘン ダイトウアト | ゼンブ | イッタ」

f 「ウエノノ ヤマモ | ウマレテ ハジメテ | イッタ」 <上野の 山も 生まれ  
て 始めて 行った>

(iii) b 「マタ | キンムヒョウテイ ヤリニ | イクノ?」 <また 勤務評定 やりに  
行くの?>

c 「イマノトコロ | ガッコウヘ | イッテイラッシュイマセン?」

注 このほか、h ~<ラ>-副<sub>1</sub>-述、・「ソノ ミチ サット ノボッテイッタ」

i ~<ニ>-副<sub>1</sub>-述、(fの場合と同様)などがある。

(i)の場合には副<sub>1</sub>から副<sub>4</sub>までがあり得る。

(ii)(iii) 特殊な場合である。(ii)は体修語が先行し、(iii)は副修語が先行する傾向のあるもの。(ii)gにおける「ゼンブ」は前の表現をうけていると解し得る。fの「ウエノノ ヤマモ」は対比しているのではない。

### iii 副修語 2——体修語, 副修語, 副修語, 述語

(a ~ニ-副<sub>1</sub>-副<sub>2</sub>-述, b ~<へ>-副<sub>1</sub>-副<sub>2</sub>-述)

(i) a 「アト イッカイ | ヨルナンカニネ | ヤッパリ | オチタネ」 <あと 1回 夜  
なんかにね やっぱり 落ちたね>

b 「ニジュウバシノ ヘンハー | ヤッパリ | イッカイカ ニカイカ | イカナイ」  
<二重橋の 辺は やっぱり 1回か 2回か 行かない>

### (3) 体修語 2

#### i 副修語なし——体修語, 体修語, 述語

( a ~<ラ>-~マデ-述, b ~ニ-~<へ>-述, c ~ニ-~ナンテ-述,  
d ~へ-~デ-述, e ~デ-~デモッテ-述, f ~デ-~マデ-述,  
g ~ニ-~カラ-述, h ~ニ-~デ-述, i ~<ラ>-~<ラ>-述,  
j ~ニ-~<ニ>-述, k ~<ニ>-~<へ>-述 )

(i) a 「シロキヤマデ | デンシャドオリ | イッタンデスガネ」 <白木屋まで 電車通  
り 行ったんですがね>

b ・「ココノ ウチ | キップ カッテモライニ | キタンデスヨネ」

c 「シンブンニハ | アオシマノ ムコウダナンテ | デタワネ」 <新聞には 青島  
の 向こうだなんて 出たわね>

d 「ソコヘ | シラキノ アレデ | ハイッテクルノネ」

e 「ハダカデ」 ハダシデモッテ | トビデチャッタノネ」

f 「ウチマデ | ヒャクハチジュウエンデ | ノッタンデス」 <うちまで 180円  
で 乗ったんです>

(ii) g 「ドウキュウセイニモ | アソコカラモ | キテタ」 <同級生にも あそこからも  
来てた>

h 「ミンナデ | ミニ | イク」

i 「ガッコウハ | ドコ | デラレタデスカ?」

j 「アン トキハネー | フウキリ ミニ | イッタンダヨ」 〈あん 時はねえ 封切り 見に行っただよ〉

k 「アラシ トキ | ミナミ | イッタンデンショウ」 〈あらしん とき 南 行っただしょう〉

注 (i) 二つの体修語の順序は自由である。

(ii) 二つの体修語の順序は比較的不自由である。

ii 副修語 1 —— 体修語, 体修語, 副修語, 述語

( a ~〈へ〉〜〈デ〉一副一述, b ~ニ〜〈へ〉一副一述, )  
( c ~〈ニ〉〜〈へ〉一副一述, d ~へ〜カラ一副一述 )

(i) a △ 「イロンナ トコ | イクカラネ, | ショウチュウネ | ジュンギョウダノ ナ  
ンダノ」 〈いるんな とこ 行くからね, しょうちゅうね 巡業だの なんだの〉

(ii) b 「トウジ | ココノ ウチー | キップ カッテ モライニ | キタンデスヨ」

(iii) c 「コノ マエン トキ | ヤッパリ | スズキサ ン トコ | イッタンダヨ」 〈この 前ん 時 やっぱり 鈴木さん とこ 行っただよ〉

(iv) d 「クロガネカラ | ズット | ケントクへ | イッタデショ」 〈黒金(山名)から ずっと 乾徳(山名)へ 行っただよ〉

注 (iii) 以下二つの体修語の順序は比較的不自由である。副修語の位置の自由さはそれぞれ異なる。

(4) 体修語 3

i 副修語なし —— 体修語, 体修語, 体修語, 述語

( ~ニ〜へ〜〈デ〉一述 )

(ii) ○ 「ダイトウアハ | サイゴニ | ニューギニアへ | マワッタンデスヨ」

ii 副修語 1 —— 体修語, 体修語, 体修語, 副修語, 述語

( ~〈ニ〉〜〈ニ〉〜へ〜一副一述 )

(ii) ○ 「キョネンハ | ハル | イチバン サイショ | タンザワへ | イッタデショウ」  
〈去年は 春 一番 最初 丹沢(山名)へ 行っただしょう〉

注 i 先行の体修語は文頭に位置する傾向がある。

ii 副修語は文頭に位置する傾向がある。「ハル」「サイショ」は副修語とも考え得るが、「〜ニ」の形が普通に認められるゆえ、体修語とする。

(1) 体修語なし

i 副修語なし——主語、述語

(a ~ハ一述, b ~〈ハ〉一述, c ~ガ一述, d ~〈ガ〉一述)

a 「イケナインジャナイ? | スケートジョウウツテノハ」

b 「ヘイタイナンカネ | ミズサカズキシテ | デテキタンダッテ」 ○「オバサン  
| イカナイモン」

c 「ムシガ | コナイヤネ, | アー ヤットケバ」 〈虫が 来ないやね, ああ や  
っとけば〉

d 「ジャ | ナンカ モーターカナンカ | ハイッテマスカ?」 ○「オオセイノ  
ヒト | デハイリシマスネ」

注 型としては(e)~モ一述, (f)~ッテ一述, (g)~ダッテ一述, (h)~ナンテ  
一述, などがあり得る。

ii 副修語1——主語、副修語、述語

( a ~ハ一副一述, b ~〈ハ〉一副一述, c ~ガ一副一述, )  
( d ~〈ガ〉一副一述, e ~モ一副一述 )

(i) a 「マルフツカ | スベッタンデショウ, | アノ ヒトタチハネ」 〈まる2日 す  
べったんでしょ, あの 人たちはね〉

b 「トナカサン | コトシモ | イッタノ?」

c 「カブトムシガ | イッパイ | デテクソノ」

d 「ノンチャン | イチバン | イッテンジャナイ?」

(ii) e 「ボクモ | ハジメテ | イッタ」

(iii) c 「キノウハ | アナタガ | イッタノカ?」

注 (ii)は主語が先行し, (iii)は副修語が先行する傾向がある。

iii 副修語2——主語、副修語、副修語、述語

( a ~ガ一副一副一述, b ~〈ハ〉一副一副一述)

(i) a 「ダンダン | ジビキガ | コウ | チカヅイテクンダヨナ」

(ii) b 「コトシハ | アタシタチ | ヤコウデ イッテ | スグ | スベッタデショウ」 〈こ  
としは あたしたち 夜行で 行って すぐ すべったでしょ〉

(iii) b 「ゼンゼン | イケナイナ, | アレ | ホントニネ」

注 (ii)(iii) 二つの副修語の順序はかなり不自由である。主語の位置の自由さは  
それぞれ異なる。

(iii)の「ゼンゼン」は「全く」「本当に」などの意に近く、強調した言い方で  
「ゼンゼン オカシイヨ」などの場合と類似している。

(2) 体修語 1

i 副修語なし——主語, 体修語, 述語

- ( a ~〈ガ〉—ワ—述, b ~〈ハ〉・ダッテ—ニ—述,  
c ~ハ・ガ—ヘ—述, d ~ハ・モ—〈ヘ〉—述, e ~ハ—デ—述 )

(i) a 「ソコラネ | ミンナネ | アルイテクルンダナ」

b 「ヤマザキサン | ダイブ マエニ | イッタデシヨ

c 「ドコヘモ | アタシハ | デマセンデシタカラネー」

△ 「ココヘ | カンゴフサンガ | キテイマシヨウ」 〈ここへ 看護婦さんが来ていましょう〉

d 「ボクハネ | ドコモ | マワラナインダモノ」

(ii) b 「トコチャン | オクリニ | キタモンネ」

○ 「ショクンダッテ | リョウリヤニモ | イクダロウ」 〈諸君だって 料理屋にも行くだろう〉

c 「マサルチャンハ | ココヘ | イラッシャイ」

d 「ボクモ | アソコバカリ | イッテルヨ」

e 「ソレハ | ショウバイデ | イッタンダヨ」 〈それは 商売で 行ったんだよ〉

注 (ii) 主語が先行するもの。

ii 副修語 1——主語, 体修語, 副修語, 述語

- ( a ~〈ハ〉—ニ—副—述, b ~〈ハ〉・モ—ヘ—副—述,  
c ~〈ハ〉—カラ—副—述, d ~ガ—〈ヘ〉—副—述,  
e ~〈ガ〉—デ—副—述 )

(i) a 「ボクハ | スグ | キタゼ, | トウキョウニ」

b 「ボク | ソトヘ | イッカイモ | イカナカッタ」

c 「ボクナシカ | トウキョウカラ | イッボモ | デナイゼ」 ○ 「ジブンハ | ズウ ット | ヒザカラ | オリテイッチャウデシヨウ」

(ii) b 「ボクモ | タイテイ | マエヘ | イッチャウダ」

(iii) a 「オンナト | ネコハネ | ヨブ トキニ | コナイデ | ヨバナイ トキニ | クル, | ゼッタイニ」

b 「ナンカネー | アレ | オグノ | アタリヘ | キタンデスヨネ」

(iv) d 「アソコ | モウ | コナインダネー, | ヒトガネ」

(v) e 「セントウバメンノ | サツエイナンテ | カメラ | ナンダイモ | マワッテンダ」

〈戦闘場面の 撮影なんて カメラ 何台も まわってた〉

注 (ii)(iii)は主語が体修語に先行し, (iv)(v)は体修語が主語に先行している。

副詞の位置の自由さが異なる。

(i) b, cにおいて副<sub>1</sub>に係助詞「モ」がついて述語の否定と呼応している。

iii 副修語2——主語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語

( a ~ガ~ヲ~副一<sub>1</sub>副一<sub>1</sub>述, b ~ハ~へ~副一<sub>1</sub>副一<sub>1</sub>述, )  
( c ~ハ~へ~ニ~副一<sub>1</sub>副一<sub>1</sub>述 )

(ii) a 「ソコヲ | ズウツト | ナンダカ | バスガ | トオッチャウノヨ」

b 「ノンチャンハ | キヨネン | ヨク | ヤマへ | イッタネ」

(iii) c △ 「マダ | キョウラ | クノハ | ミンナ | ヒラ | キメニ | クルンデスガネ」

注 (ii) a 「ナンダカ」は副<sub>2</sub>であるが、多くの部がある場合に述語に密着しては位置しないことが多いようである。

(iii) この場合体修語は述語に密着して位置する傾向がある。

(3) 体修語2

i 副修語なし——主語, 体修語, 体修語, 述語

( a ~ガ~へ~ニ~へ~述, b ~ハ~へ<ニ>~へ<へ>述, )  
( c ~ガ~へ~ニ~へシテ~述, d ~ガ~へ~ニ~へ~述, )  
( e ~ガ~へ~ニ~へ<デ>~述 )

(i) a ・「ヒコウキガサー | トウキョウへ | キタンデン | ヨウ | イチバン | サイシ | ニ」  
〈飛行機がさあ 東京へ 来たんでしょ、一番 最初に〉

b 「ボクハ | ヨル | イクナ | ニジュウバン」  
〈僕は 夜 行くな、二重橋〉

(ii) c 「ソウイウノガネ | ミンナンテ | ヤツケニ | クルンダナ」

d ・「コノ | マエニ | ソコニ | イタ | ヤツガ | チョウセンニ | デテ | イッタ」  
〈この 前に そこに いた やつが 朝鮮に 出て行った〉

(iii) e 「ニホンハ | ソウイウ | フウニ | ソトへ | デテ | アルカナイデン | ショウ | トシ | トッタ | ヒトガ」

(iv) d △ 「カミカナンカ | マカレタ | トキナンカ | アサハ | コウコクガ | オチマシタ | ンデスケドネ」  
〈紙かなんか まかれた 時なんか 朝は 広告が 落ちましたんですけどね〉

注 (ii)の後行の体修語は述語に密着している傾向があり、(iii)の先行の体修語は文頭に近く位置することが多い。(iv)は相互の位置がかなり不自由である。

(iii) 「デ」格は格助詞の表われていないことはまれであるが、「へハ」の場合は「へ<デ>ハ」と解されることがある。

(iv) 格助詞「ニ」は、たとえば「中村さんに 十時に 東京に 調査に 来ていただいた」のように重ね用いられる。しかし、同種の「ニ」は並列の場合以外重ね用いられることはあまりない。

ただ、この例のように「ナンカ」「ハ」などがあり、主題となっている時には重ね用いられることがあるようである。

ii 副修語1——主語, 体修語, 体修語, 副修語, 述語

( a ~ガ~ニ~へ~副一述, b ~ガ~ニ~ニ~副一述, )  
c ~ガ~<ラ>~デ~副一述 )

(i) a 「ヒコウキガサー | トウキョウへ | イッカイ | キタデシヨウ, | イチバン サ  
イショニ」

(ii) b 「コノ マエニ | ソコニ イタ ヤツガ | ゼンブ | チョウセンニ | デテイッタ」

c 「オバアサンガネー | ジドウシャノ トオル ミチ | ヒトリデネ | ヨタヨタヨ  
タ | ヨコギツテイクノヨ」 <お婆さんがねえ 自動車の 通る 道 1人でね  
よたよたよた 横切っていくのよ>

(註) (ii) b 時を表わす「コノマエニ」などは目標地点を示す「チョウセンニ」  
より先行していることが多い。「コノマエニ」は「イタ」を修飾しているとも  
考え得る。

### 3 主語2

(1) 体修語なし

i 副修語なし——主語, 主語, 述語

(~ハ~ガ~述)

(ii) ○ 「コレハ | アノ ブタイガ | ハイッテキタンジャンインデスカ?」 <これは  
あの 部隊が はいってきたんじゃないんですか?>

(2) 体修語1

i 副修語なし——主語, 主語, 体修語, 述語

(~モ~ガ~へ~述)

(ii) ○ 「ソレモネー | ヒトガ | ソコへ | ハイレルンダ」

(3) 体修語2

i 副修語なし——主語, 主語, 体修語, 体修語, 述語

(~<ハ>~ガ~へ~デ~述)

(ii) ○ 「ソレガネ | イチネンセイノ カセイカノ ヒトサ | マツシマへ | サンバク  
ヨッカデ | イクッテイウノヨネ」 <それがね 1年生の 家政科の 人さ 松  
島へ 3泊4日で 行っくっていうのよ>

(註) この場合の「ソレガ」は接続詞とも解される。

☒ 他動詞文(1)は自動詞文に近い性質を持つ。体修語の種類や体修語の組み合わせの種類も他動詞文(2)よりは少ない。主語はさまざまなものがあり、重ね用いられていることも多い。



他動詞文(2)

1 主語なし

(1) 体修語なし

i 副修語なし——述語

( a 他<sub>2</sub>, b 他<sub>2</sub>+文末助詞, c 他<sub>2</sub>+助動詞(+文末助詞),  
d 他<sub>2</sub>+形式用言(+助動詞+文末助詞), e 他<sub>2</sub>+ノダ・ノデス, f その他 )

a 「ツツム?」 ○ 「ワケル」 ○ 「タベロ」 ○ 「ゴラン」 ○ 「オタバ」  
〈お食べ〉

b 「オドルノ」 ○ 「オモイダスネ」 ○ 「ヨムカナ」 ○ 「ナグルゾ」  
○ 「ステルナ」 ○ 「ヤルナー」〈(よく)やるなあ〉 ○ 「タベルサ」 ○ 「カクワヨ」 ○ 「ヤルノカシラ」

c 「キイタ」 ○ 「シラナイ」 ○ 「オネガイシマス」 ○ 「タバタイ」  
○ 「オドロウ」 ○ 「タバレル」 ○ 「カクダロウ」 ○ 「オモイダスデシ  
ョウ」 ○ 「オモイダシマセンデシ ヲカシラ」 ○ 「トラセタクナイダロウ  
ヨ」 ○ 「タバセサレナカッタデシ ヲウネ」 ○ 「キコエサセル」

d 「ツカッテアゲル」 ○ 「ヤッテイルネ」 ○ 「カリテキタヨ」 ○ 「カンガ  
エテゴラン」 ○ 「ハラッテモライタイ」 ○ 「ヤリハシナイヨ」 ○ 「カキ  
ヤシナイ」〈書きゃしない〉 ○ 「ミモシナイ」〈見もしない〉 ○ 「アイシハシ  
マンタ」〈愛しはしました〉 ○ 「オヨミナサイ」 ○ 「オツカイクダサイ」  
○ 「ヨミナ」 ○ 「タベルカモシレナイ」

e 「ダスンダヨ」 ○ 「スリカエルンデハアリマセン」 ○ 「オクルンデスカ?」

f 「アゲテ, アゲテ」 ○ 「トッタラ」〈取ったら〉

(注) 自動詞でも「セル・サセル」がつけば他動詞性の述語となる。(f)の慣用形式の「トッタラ」(取ればいいでしょう)などは慣用省略文と考えられる。

ii 副修語1——副修語, 述語

(a 副<sub>1</sub>—述, b 副<sub>1</sub>—述, c 副<sub>2</sub>—述, d 副<sub>3</sub>—述)

a ・ 「イチネンカン | ベンキョウシタ」 ○ 「サンネングライ | ヤリマシタ」  
○ 「イマハ | ヤッテルヨ」 ○ 「キノウモ | タバトラシイ」

b 「サツソク | ユウソウシマス」〈さっそく 郵送します〉 ○ 「グット | ノミコ  
ンダ」 ○ 「ヨク | シッテマスヨ」〈よく 知ってますよ〉 ○ 「イッショウケ  
ンメイ | ナゲタンダゼ」

c 「モット | ノミマシタヨ」〈もっと 飲みましたよ〉 ○ 「スロシ | ヤッテミ  
マシヨウ」 ○ 「カナリ | スウネ」

d 「アンマリ | ヨマナイ」 ○ 「ゼンゼン | ウテナインダ」 ○ 「ドウソ | オカ

ケクダサイ」 ○「ケッキョク | シナナイワヨ」〈結局 死なないわよ〉

iii 副修語 2——副修語, 副修語, 述語

( a 副<sub>1</sub>—副<sub>1</sub>—述, b 副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—述, c 副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—述, d 副<sub>1</sub>—副<sub>1</sub>—述, )  
( e 副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—述, f 副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—述, g 副<sub>2</sub>—副<sub>2</sub>—述 )

(i) a 「アシタモ | イッショウケンメイ | ヤッテチョウダイナ」

b 「ダイタイ | テッパンノ アルカギリ | ヤリマスカラ」

c 「イマハ | ダンジテ | ヤリマセン」

d 「アト | イッカイモ | ダサナイ」

e 「チョイチョイッテ | スコン | ツツイテルネ」

f 「ゼンゼン | アタマカラ | ウケツケネーチュウダ」

(ii) b 「シゴトガ オワル | トタンニネ | モウ | ハジメチャッテルデス」

e 「ホントニ | シゼンニ | オボエマスネ」

f ・「ドウシテ | ジツト | ミテイタノカ?」

g 「サホド | ソウ | カンジナイ」

(注) 二つの副修語の位置が自由であるものと、かなり固定しているものとはそれぞれその副修語の性質による傾向がある。「ヤッバリ」などは比較的、位置は自由である。固定している場合は副<sub>2</sub>, 副<sub>2</sub>, 副<sub>1</sub>の順に位置している傾向がある。

(2) 体修語 1

i 副修語なし——体修語, 述語

( a ~ヲ—述, b ~ニ—述, c ~へ—述, d ~ト・ッテ・ッ・ナンテ—述, )  
( e ~カラ—述, f ~デ—述, g ~マデ—述, h ~デモッテ—述, )  
( i ~トシテ—述, j ~ニツイテ—述, k ~〈ヲ〉—述, l ~〈ニ〉—述, )  
( m ~〈へ〉—述, n ~〈デ〉—述 )

a 「ヘンナ コトラ | イワナイデクレヨ」 ○「オコメヲ | イレチャウノヨ」

○「ソレヲネ | イタメルノヨ」 ○「ソウ ナラザラ | エナイネ」 ○「ラクガキヲ | カカレチャッタヨ」

b 「ムコウノ ヒトニ | マカシタンデショウ」〈向こうの 人に 任したんでし

ょう〉 ○「イハイト ソレカラ アレニ | カイテアルンジヤナイノ? | アノセキヒニ」〈位はいと それから あれに 書いてあるんじゃないの? あの石碑に〉 ○「マイシュウノ ドヨウニ | ローラーシテルンデスケドネ」

○「サンツカエナイ テイドニ | オカキイレクダサイ」 ○「サカズキノ カワリニ | スル」 ○「チカヨラナイ ヨウニ | スルンダネ」

c 「コッチへ | ヒキトリマシンドゴザイマスガ」 ・「ノウカへ | トメテモラウノヨ」〈農家へ 泊めてもらうのよ〉

d 「ニュアンスガ アルト | オモウワ, | キョウトアタリネ」〈ニュアンスがあ

- ると 思うわ、京都あたりね) ○「リョカンノ ヒトト | ケンカシテンダモ  
ノ」〈旅館の 人と けんかしてんだもの〉 ○「ワレワレニ オシツケヨウト  
| シテルジャンイカ」 ○「アンナニ キツチャッテ イイノカシラッテ |  
オモウデショ」 ○「ニガツカラトカッテ | キイタケド」 〈2月からとあって  
聞いたけど〉 ○「ニシユウカンッ | ツッタ」 ○「ヤメロッ | ツタンジャン  
インダヨネ」 ○「イサオチャント マワロウッ | テタンダヨ」 ○「トッテ  
モ コマルッ | タワヨ」 ○「ウソ ツイテルナンテ | オモウノヨ」
- e 「チュウガクン トキカラ | ナゲテル」 〈中学ん 時から 投げてる〉 ○「ウ  
チヘ カエツテカラ | スウネ」 ○「コチラカラ | ゴレンラクシマス」  
○「ショウバイデモツテイウ ヨウナ コトカラ | ヤメタンデス」
- f 「ガッコウデ | ヤッタタンデス」 ○「デンキメスデ | ソグンダッテ」 ○「ウ  
チデ | ツレテツテクレルデショウ」
- g 「マックロニ ナルマデ | オイトクデショウ」
- h 「セイコウシャデモツテ | クミタテルノ」 〈精工舎でもって 組み立てるの〉
- i 「デンコウトシテ | モウシコンデミマスカラ」 〈電工として 申し込んでみま  
すから〉
- j 「タクチヘンコウノ コトニツイテ | オウカガイシタインデスガネ」 〈宅地変  
更の ことについて おうかがいたいんですけどね〉
- k 「ナニ | シャベロウカナ」 ○「ヒンケツナド | オコンチャウ」 〈貧血など  
おこしちゃう〉 ○「サクラノ ハツパカナンカ | スツタタヨ」 〈桜の 葉っぱ  
かなんか 吸ってたよ〉 ○「タバコハ | スワナイ」 ○「キンニウメンモ |  
ヤッテオリマシタンデスネ」 〈金融面も やっておいりましたんですね〉 ○「エ  
イガノ ハナシデモ | スルカー」 ○「ソウイウ オモシロイ エイガッテ |  
ミタ?」 ○「アレダッテ | エイガカラ アタマニオイテ | カイテルヨ」 〈あ  
れだって 映画化を 頭において 書いてるよ〉 ○「ラーメンシカ | イワナ  
イデシヨウ」 ○「ドウシテダカ | シッテルカイ」
- l 「コノ バアイハ | イワナイデモライタイ」
- m 「イソベサンチ | モツテクンダヨ」 〈磯部さんち 持ってきたよ〉
- n 「コノ シツモンハ | ソンシタナ」 〈この 質問は 損したな〉 ○「ゴジユ  
ウエンナンテ | ウツテナイヨ」 〈50円なんて 売ってないよ〉

注 k 以下において、格助詞が表われていない形は限られた場合に多い。ヲ格、ニ格、へ格、デ格などの場合が多い。

i 副修語1——体修語、副修語、述語

- ( a ~ (ヲ) 一副一述, b ~ (ニ) 一副一述, c ~ (へ) 一副一述, )  
 ( d ~ ト・ツテ・ッ・ナンテ 一副一述, e ~ カラー 一副一述, )  
 ( f ~ (デ) 一副一述, g ~ マデ 一副一述 )

- (i) a 「セイネンノ キタンノ ナイ ココロヲ | ヒトツ | キキタイモンデス」  
 ○「ヤッパリ | オヒンノ イイ ハナシヲ | イタシマシヨウ」 ○「タイプト  
ジムヲ | スコシ | ヤリマンタ」 ○「ワザト | アンナ コト | スルノ」 ○  
 「マエノ トコロハ | ドウシテ | ヤメタノ」 ○「オシヨウユモ | ホンノ ス  
コシ | イレルノヨ」 ○「アレダッテ | ヤッパリ | エイガカラ カンガエテ |  
カイトルヨ」〈あれだって やっぱり 映画化を 考えて 書いてるよ〉
- b 「ヤッパリ | ツチノ ナカニ | ウメテアッタンドロ」 ○「ソレニ | コウ | カ  
イテアルノ」
- c 「ノウカへ | イチンチグライ | トメテモラウノヨ」 ○「ドウゾ | コチヲへ |  
オカケダサイ」 ○「ドウゾ | ココ | オカケダサイマセ」
- d 「トキドキ | カワイソウダナート | オモウヨ」 ○「ヤッパリ | オヨイデイル  
トハ | オモエナイヨ」 ○「マア | アルメンニオイテハト | モウシアゲテオキ  
マシヨウ」 ○「カツダノ マケルダノッテ | アンマリ | カンガエナカッタネ  
ー」 ○「ナンボッテ | チヨット | イエナイデスネ」 ○「ヤット | クレバ ワ  
カルッテ | イワレタンデス」 ○「イクスカナイナンテ | イマ | イワナイネ」
- e 「ハジマッテカラ | サンゼンニヒヤクエングライ | ツカッテイルノ」〈始まっ  
 てから 3千2百円ぐらい 使っているの〉 ○「コウ | ウエカラ | トルデシヨ  
ウ」 ○「オレノ ホウカラモ | キチット | ハラッテダカラネ」
- f 「ヒトツ | ハガキデ | ゴレンラクイタシマシス」 ○「アンマリ | ニホンジヤ  
ヤラナイデスモノ」 ○「カノジョノ ホウデ | ソウ | イッタノ」
- g 「イツモ | ジュウニジマデ | ヤルノヨ」〈いつも 12時まで やるのよ〉  
 ○「ゼンブ | リョカンノ ゴアッセンマデ | イタシテオリマス」〈全部 旅館の  
 ごあつ旋まで いたしております〉
- (ii) a 「アレハ | ドウ | スルノ?」 ○「セイヨウリョウリヤ ニホンリョウリ | ゼ  
ンブ | ヤルノ」〈西洋料理や 日本料理 全部 やるの〉 ○「バカモ | ヤスミ  
ヤスミ | イエッ」
- b 「ツライ トキニハ | ソウ | スルンダッテ」
- d 「キガツカレズニ ヤロウト | コウ | イウンダヨ」
- f 「セキヤサンノ オウチハ | ドウ | スルノカシラ?」
- g 「プラス マイナス カケル ワルマデ | ゼンブ | ヤッテママスネ」
- (iii) a 「ヨウスルニ | フドウカブラ | サラッチャウンデスヨ」 ○「タンカニ | ソウ

ナラザルヲ エナイネ」 ○「ドウモ | オテスウ | カケマシタ」 ○「ネンジ  
ユウ | アガッタリサガッタリ | シテル」

b 「モウネ | ヒトノ コト カンガエナイ コトニ | シテイル」 ○「イマネ |  
ワタシガ クル チョット マエ | ヤッテタ」

d 「ヨケイ | ホッカイドウへ イキタイト | オモウ」〈よけい 北海道へ 行き  
たいと 思う〉 ○「タトエバサ | イヤラシイッテ | イウンダヨ」 ○「ヨウ  
スルニ | イレロツ | ツタンダ」 ○「イマハ | ベイグント イッショニ ヤロ  
ウツ | テンダ」〈今は 米軍と 一緒に やろうっ てんだ〉

注 (ii)は体修語が副修語に先行し、(iii)は副修語が体修語に先行する傾向のある  
もの。

### iii 副修語 2——体修語、副修語、副修語、述語

( a ~ (ヲ) 一副一副一述,      b ~デ一副一副一述, )  
( c ~ト・ツテ一副一副一述,    d ~ (ニ) 一副一副一述 )

(i) a 「イツモ | スイススイスイツ | カラダヲ | ウゴカシテイル デスネ」

○「ゲイジツシン チョウダケハ | チャント | マイツキ | ミテルヨ」〈芸術新潮だ  
けは ちゃんと 毎月 みるよ〉

b 「アジタノ ヨル | サツソク | ケンキュウジョデ | テストンテ ミマス」〈あし  
たの 夜 さっそく 研究所で テストしてみます〉 ○「コンド | マタ | ア  
サクサデ | ヤルンダヨ」〈今度 また 浅草で やるんだよ〉

(ii) a 「イマハ | フリゲート カントカ ナントカ イウノサ アレ | イッショウケン  
メイ | コサエテタヨ」

c 「トニカク | ダメダ モウ ダメダツテ | イッテル, | イッポウテ キニ」

(iii) a 「ホントウニ | シュウカン シッテイウノ | ヨク | ヨンデルネ」〈ほんとうに 週  
刊誌っていうの よく 読んでるね〉

d 「ヤッパリ | ナツナンカ | ソナンニ | ツクラナイネ」

(iv) a 「ドウモ | イッテナイト イウ フウナ インショウ | ドウシテ モ | ウケルンデ  
ス」 ○「ジツハネ | チョット | カンニン グラ | シタイ デスヨ」

(v) a 「モウ | ホントニ | ツライ オモイ | シタ デスヨ」

c 「ゼッター バカダト | オモウ, | ホントニ | モウ」

注 (ii) 先行の副修語はあまり述語に近く位置していない傾向がある。

(iii) 二つの副修語の順序はかなり不自由である。

(iv) 先行の副修語は文頭にあることが多い。

(v) 体修語は述語に近く位置している。

### iv 副修語 3——体修語、副修語、副修語、副修語、述語

(～ヲ一副一副一述)

(i) ○「トシヨリノ アタマヲ | モウ | ヤッパリ | キリカエナクチャナラナイノヨ,  
| アル テイドネ」

(3) 体修語 2

i 副修語なし——体修語, 体修語, 述語

|   |             |   |             |   |              |
|---|-------------|---|-------------|---|--------------|
| a | ～(ヲ)～(ニ)一述, | b | ～(ヲ)～(ハ)一述, | c | ～(ヲ)～ト・ッテ一述, |
| d | ～(ヲ)～カラ一述,  | e | ～(ヲ)～(デ)一述, | f | ～ヲ～トシテ一述,    |
| g | ～(ヲ)～マデ一述,  | h | ～(ニ)～ニ一述,   | i | ～ニ～ト・ッテ一述,   |
| j | ～ハ～カラ一述,    | k | ～ト～カラ一述,    | l | ～ト・ッテ～デ一述,   |
| m | ～ッテ～デモッテ一述, | n | ～デ～マデ一述,    | o | ～(ヲ)～デモッテ一述, |
| p | ～ニ～カラ一述,    | q | ～(ニ)～デ一述,   | r | ～ニオイテモ～ト一述,  |

(i) a 「カラダヲ | コウイウ フウニ | ウゴカスノネ」 ○「センセイニ | テガミ |  
ダシタンダヨネ」 ○「オユ | ヒツカケラレチャッタノ, | アシニ」 △「オ  
リタ トキモ | タバコナンカ | スッテイヤシネー」

b 「イチバン ツメタイ トコロヘネ | ビールビンヲ | オイトクンダヨ」  
○「ノリトニ ヨミアゲルダケノ コトヲ | コレ | ゴキニウネガウデゴザ  
イマス」〈のりとに 読みあげるだけの ことを これ ご記入ねがうんでご  
ざいます〉 ○「シタヘ | イレチャウノ, | ゼンブ」

c 「ヤサシイ ヒトダト | オモイマスカ? | ジブンノ コト」 ○「アッチハ |  
ニクラシトハ | オモワナカッタヨ」

d 「ヒャクエン | ダレカラ | モラッタノ?」〈百円 だれから もらったの?〉

e 「リングデ | アイテヲ | ノックアウトスルンダヨ」 ○「ジブンタチノ ゲッ  
キュー | ジブンタチデ | キメルンダモンネ」〈自分たちの 月給 自分たちで  
決めるんだもんね〉 ○「ケイサツヨビタイハ | ナニ | ヤッテオラレタンデス  
カ?」〈警察予備隊は 何 やっておられたんですか?〉

f 「ミンカンノ カイシャトシテ | ドンナ トコロノ カイシャヲ | キボウシテ  
イラッジャイマスカ?」〈民間の 会社として どんな ところの 会社を  
希望していらっしゃいますか?〉

g 「シタマデ | カラダヲ | ノバシテヤガル」

h 「フウキリ ミニ | イッタンダ, | ユウラクザニ」〈封切り 見に行っ  
た, 有楽座に〉・「ショウガツニ | トモダチニ | サンワレチャッタ」〈正月  
に 友だちに 誘われちゃった〉

i 「カナイガ イッタ トキニハネ | ショルイガ モドッテキテイルト | イウン  
デス」〈家内が 行った 時にはね 書類が もどってきていると 言うんで

- す) ○「ウンテンシユサニ | シロキヤマデッテ | イッタンデス」〈運転手さんに 白木屋までって 言ったんです〉 ○「コウチュウサニ | ノド | アウシテクレナンテ | イッテンノヨ」
- j 「アトカラ | ソコヘ | イレタンダッテ」
- k 「ソウダロウト | サッキカラ | オモッタタ」
- l 「デンワグチデ | カイシャメイダト | オモッタネ」〈電話口で 会社名だと 思ったね〉 ○「ムコウジャ | ベコガ | ナクッテ | イウンダネ」
- m△「デンワデモッテ | ソウチンテヤガル, | ジャカンヤガ | イッタッテ」
- n 「イママデ | ヨウセツ | イッポンデ | トオンテキタ」
- (ii) a 「ソノ | カニリニ | チャンピオン | ミテキタ」 ○「オデキ | デキタ | トキ | クスリ | ツケタデショウ」
- b 「ホッカイドウ | シュッシンシャノ | トコロヘ | テガミ | ダシチャウノ」〈北海道出身者の ところへ 手紙 出しちゃうの〉
- e 「ケイサツヨビタイデハ | ムセンツウシン | ヤッテオリマシタ」〈警察予備隊では 無線通信 やっておいりました〉 ○「サイグンビモンダイデ | ミノ | ソ | ケタンダヨ」
- g 「ニサンネンマエマデハネ | シバイ | カイトタデスヨ」〈2, 3年前まではね 芝居 書いてたですよ〉
- o 「ソレデモッテ | アブラ | トッタンダッテサ」
- a・「センセイモ | スミニ | オケナイネ」
- c 「イヤラシイッテイウ | ヨウナ | イミノ | コトハ | キタナイッテ | イウンダヨ」
- h 「ホケンノ | トキハ | ナンニ | タノデオイタノ?」 ○「イチンチ | フツカ | ウチニ | オネガイスル | ヨウニ | イタシマショウ」
- i 「トウキョウトノ | ホウヘ | ダスカラト | コウイウ | フウニ | イワレルンデス」  
〈東京都の 方へ 出すからと こういう ふうに 言われるんです〉
- p 「ゼンブ | オワッテカラ | ソウコニ | イレル | トキニ | モッテキテモラウ」  
〈全部 終わってから 倉庫に 入れる 時に 持ってきてもらう〉
- q 「ソレデ | エイガニ | トッタンダッテ」  
○「ツカウ | トキハ | ダイドコロデ | ヤリマスカ?」
- r 「ソノ | テンニオイトモ | シノビナイト | オモイマス」
- ii 副修語 1——体修語, 体修語, 副修語, 述語
- ( a ~ (ヲ) — ~ (ニ) — 副一述, b ~ (ヲ) — ~ デー 副一述, )  
 ( c ~ (ヲ) — ~ カラ — 副一述, d ~ ッテ — ~ デー 副一述, )  
 ( e ~ トツテ — ~ デー 副一述, f ~ ニ — ~ ト — 副一述, )  
 ( g ~ (ヲ) — ~ ッテ — 副一述 )

- (i) a 「ミナサンニ | イロイロト | オシャベリヲ | シテイタダキマシヨウ」 ○ 「イッショウノ ウチニ | コワイ オモイ | ニド | シタワネ」〈一生のうちに  
こわい 思い 二度 したわね〉
- b 「コノ ヘンデ | ヒトツ | ワダイヲ | カエマシヨウ」 △ 「ヤッパシ | ソウイ  
ウ コト | ヤッテタヨ, | ショウガッコウデ」
- c 「コナイダ | イチジハンカラ | ヤッテンダ, | アメリカラジオガイド」
- d 「ムコウジャ | スグ | アホウツテ | イウノネ」
- e 「イチオウ | ヨウセツコウトシテ | ワタシノ ホウデ | タノンデオキマス」
- (ii) a 「オモチノ アゲタノヲ | ナンカ | ウエニ | オクラシイ」
- c 「ウエカラ | ナンカ | ヤネヲ | ツルスンダヨ」
- b 「ソレデ | モウ | ユウレツヲ | キメラレルンダヨ」〈それで もう 優劣を  
きめられるんだよ〉
- (iii) f 「ヨウスルニ | ケンボウニ | ウタッテアルデショウ, | サインピンシナイト」  
〈要するに 憲法に うたってあるでしょう、再軍備しないと〉
- (iv) a 「アレ | ナツナンテ | ドウ | スルノカシラ」〈あれ 夏なんて どう するの  
かしら〉
- (v) g 「トニカク | マチガイ ナインダカラッテ | イロンナ ジショウ | ハナシテク  
レタデス」
- a 「キョネンハ | マダ | コノアイダノ ヨウニ | オモイマスケドネ」 ○ 「セン  
セイモ | ナカナカ | スミニ | オケナイネ」
- (vi) a 「オリル トキニ | ヨンヒヤクエン | オツリ | モラッタデスヨ」〈降りる  
時に 4百円 おつり もらったんですよ〉
- (vii) f 「ウチノ カナイガ イッタ トキニハ | ショルイガ モドッテキテイルト  
| コウ | イウンデス」〈うちの 家内が 行った 時には 書類が もどって  
きていると こう 言うんです〉

注 (i)(ii)(iii)(iv) いずれも二つの体修語の相互の位置は自由であるもの。  
(i)はさらに副修語が自由に位置し得るものであり、(ii)(iii)は副修語が文頭に  
近く位置しているものである。副<sub>1</sub>あるいは副<sub>2</sub>に属するものが多い。(iv)は副修  
語が述語に近く位置するもので副<sub>1</sub>、副<sub>2</sub>に属するものが多い。  
(v)(vi)(vii) 二つの体修語の順序が固定化しているもの。(v)は副修語の位  
置が自由なもので、(vi)(vii)は副修語の位置が述語に近く位置する傾向のあるも  
のである。

### iii 副修語 2——体修語，体修語，副修語，副修語，述語

- (a ~ (ヲ) ~ ニ ~ 副 ~ 副 ~ 述, b ~ (ヲ) ~ カラ ~ 副 ~ 副 ~ 述, )  
(c ~ ニ ~ ニ ~ 副 ~ 副 ~ 述



(i) a 「イママデ・スマイダケデアッタノガネ | コンダ | コノ シタラ | ゼンブ | コウバニ | カイゾウシタンデスヨ」〈今まで 住まいだけであったのがね こんだ この下を 全部 工場に 改造したんですよ〉

(ii) a 「ナンカ | イタドリトカッテ イウノ | ヨク | イレタラシイナ, | タバコニ」  
○「ヤッパリ | ナツハ | デコレーションハ | アマリ | コジラエナインジャン  
イ?」

b 「トニカク | サンドモ | デンワ | カケテイル, | ケサカラ」〈とにかく 3度も 電話 かけている, けさから〉

(iii) c 「サイキン | ショウガツニ | イッカイ | トモダチニ | サソワレテネ」〈最近 正月に 1回 友だちに 誘われてね〉

注 いずれも、二つの体修語の順序は自由である。

(ii)は先行の副修語「ナンカ」などが述語に密着して位置しない傾向がある。

(iii)は先行の副修語「サイキン」が文頭に近く位置する。

#### (4) 体修語 3

i 副修語なし——体修語, 体修語, 体修語, 述語

a ~ヲ~ニ~へ~述, b ~〈ヲ〉~ニ~トシテ~述,  
c ~〈ヲ〉~(ニ)~デ~述, d ~(ニ)~ニ~ッテ・テ・ト~述,  
e ~ニ~カラ~〈デ〉~述, f ~ニ~ッテ~カラ~述,  
g ~ヲ~ニ~トシテ~述, h ~〈ヲ〉~ニ~ト~述,  
i ~〈ヲ〉~ッテ~デ~述, j ~ニ~ト~デ~述  
k ~〈ニ〉~ニ~デ~述, l ~ヲ~ニ~〈デ〉~述

(i) a 「ソノ トキニ | イッショニデスネ | ソコへ | コウイウ ワスレモノ ナイカ  
トイウ コトヲ | ショウカイスルンデス」

b 「ソノ ホカニ | ナニ | ミタ, | エイガトシテ」

c △ 「イロンナ ボウシネ | ムコウデ | カブッテミタノネ, | コウ フウニ」

d 「アン トキネー | ミンナニ | ソウダンシタンダネ, | ナニガ イイカッテ」

e △ 「イタバシ ドコデモダネ | マエカラ | イッテル, | キミタチニハ」

f 「ヤケテカラ | ハンショウサンニ | カサ モタナイデ デチャッテ コマリマ  
シタヨッテ | イッタンデス」

(ii) g ・ 「フタクシノ ホウトイタシマシテハ | キュウシヨクシヨウト オナジ ヨウ  
ウニ | キュウジンノ モウシコミニ ツキマシテモネ | キュウジンヒョウトイ  
ウ モノヲ | カイテモラウンデス」〈私の 方といたしましては 求職票と  
同じように 求人 の 申し込みにつきましてもね 求人票 という ものを 書  
いてもらうんです〉

h ・ 「フツウノ オンナノコダッタラ | イセイッテイウ モノニ | ユメ | モッテ

ルヨ, |オトコハ ドウイウ イイ トコ アルダロウトカネ」〈普通の 女の子だったら 異性っていう ものに 夢 持ってるよ, 男は どういう いとこ あるだろうとかね〉

i 「ソレ | オダイミョウノ マエデハ | ナントカッテ | イウノ?」

(iii) j △ 「トウホクノ ホウデハ | ツカレタ トイウ コトニ | コワイト | ツカウワネ」

(iv) c 「キョネンノ クリスマスナンカ | ジブンノ ウチデ | ケーキ | ツクッタデシ  
ユ」

d 「ソレヲ ウケル トキニ | イウノヨ, | ナカ ミナイ トキニ | セイコウナ  
ルダンテ」

k △ 「イタパシノ バアイハダネ | カカリチョウニ | ワリカンデ | ハラワサレル  
ンダゾー」〈板橋の 場合はだね 係長に 割勘で 払わされるんだぞお〉

d 「カザリマツリサンノ イウニハネ | ショルイガ フビダカラ マダ ダシテ  
ナカッタダト | コウイウ フウニ | イワレルデス」

l 「シュミハ | ドンナ モノニ | シュミヲ | モッテラッシャイマスカ?」 〈趣味は どんな ものに 趣味を 持ってらっしゃいますか?〉

注 (ii)は二つの体修語の順序が比較的不自由であるもの。

(iii)は後行の体修語が述語に近く位置する傾向のあるもの。

(iv)は先行の体修語が文頭にある傾向があるもの。

## ii 副修語 1——体修語, 体修語, 体修語, 副修語, 述語

(a ~<ヲ>~<ニ>~<へ>—副一述, b ~<ヲ>~<ニ>~<デ>—副一述,  
c ~<ヲ>~<ニ>~<ト>—副一述, d ~ヲ~<ニ>~<ト>イタシマシテ—副一述)

(i) a 「ドッテノ オツキアイモ スルケレドモネ | サート イウト | ヤッパリ | カ  
ライ ホウ | サキニ | テ | ダスネ」

b 「ソノ ジブンハ | ココデ | イロイロ | オハナシヲ | ナサルンデシヨウ」

○ 「モウ | アレ | サイゴノ トキナンカ | ヒトノ ステタ パイナンカ | ミ  
テナイナ」

(ii) c • 「ヤッパリ | イセイツテイウ モノニ | ユメ | モッテルヨ, | オトコハ ド  
ウイウ イイ トコ アルダロウトカネ」

d • 「ワタシノ ホウトイタシマシテハネ | コノ キュウシヨクヒョウト オナジ  
ヨウニ | ヤハリ | キュウジンヒョウトイウ モノヲ | カイトモラウデス」

注 (ii)は二つの体修語の順序が比較的不自由であるもの。

## iii 副修語 2——体修語, 体修語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語

(~ヲ~<へ>~<デ>モッテ—副一副一述)

(i) △ 「ムカシ | アソコへ | オオバヤシノ シゴトデモッテネ | ヤマノ ウエノ シ  
ゴトへ フタムネ | ヘイジャヲ | タテタンデス」〈昔 あそこへ 大林の 仕

事でもってね 山の 上の 仕事へ 2むね 兵舎を 建てたんです>

(5) 体修語 4

i 副修語なし——体修語, 体修語, 体修語, 体修語, 述語

(〜ヲ〜ニ〜へ〜カラ述)

- (i) ○「ソノ ハカヘネー | アトカラネー | イレルンダッテサ, | コツラサ | ソノ  
カンケイシタ ヒトガ シンダ トキニ」<その 墓へねえ あとからねえ  
入れるんだってさ、骨をさ その 関係した 人が 死んだ 時に>

ii 副修語 1——体修語, 体修語, 体修語, 体修語, 副修語, 述語

(〜<ヲ>〜ニ〜トシテ〜ニタインテ副一述)

- (ii) ○「セツクサレタ ヨウナ コウドウヲ トッタ バアイニハ | クミアイトシ  
テハ | ナニモ | ソレニタイシテ | イギノ モウシタテナンカ | シンアイジャナイ  
カー」<説得されたような 行動を とった 場合には 組合としては 何も  
それにたいして 異議の 申し立てなんか しないじゃないかあ>

注 文頭に近く位置する体修語と述語に近く位置する体修語とがある。

2 主語 1

(1) 体修語 1

i 副修語なし——主語, 述語

( a ~ハ一述, b ~モ一述, c ~ダッテ一述, d ~<ハ>一述, )  
( e ~ガ一述, f ~<ガ>一述 )

- a 「エンゲキザツシテイウノハ | ハラワナイデシヨウネ」 ○「ユーハ | ミタ」  
△「アンタノ ヤリカタハナー | イッカシヨヘ ツレテッテダナー | カンキン  
ンテンジャネーカ?」<あんたの やり方はなあ 1か所へ 連れてってだなあ  
監禁してんじゃねえか?> ○「モラッタ ホウハ | ワスレテイル」 ○「ノメ  
ナイネ, | ビールダケハ」
- b 「ジャ | ボクモ | マケズニ | クウカナ」
- c 「シラナイ, | ボクダッテ」
- d 「アレ | シテガツン ナッテモ | カエルモン」 ○「マツミヤクン | ノメルダ  
ロウ」 ○「アッチノ ヘイタイ | イワナイモンネ」
- e 「オヤジガ | ノムデシヨウ」 ○「ナレバ | ミナサンガネー | ウエルデシヨウ  
ケドモ」 ○「ボクガ | スイセンスルヨ」
- f 「オヤジナンカ | イッテタ」 ○「ジユウトウ | トルヨ」<自由党 とるよ>

ii 副修語 1——主語, 副修語, 述語

- ( a ~ハ一副一述, b ~モ一副一述, c ~〈ハ〉一副一述, )  
 ( d ~ガ一副一述 )

(i) a 「ワタシハ | スッカリ | ツカイマシタ」

b 「ボクモ | ゼンゼン | シラナイゼ」

c 「ヤッパリ | イナカノ オジョウサンナンカ | キイテルカモシレナイヨ」

d 「ケサ | オヤジガ | モッテタケドネ」 ○「ヨルノ カワノ ヤマモトフジコ  
ガ | ズイブン | ツカッタ」〈『夜の河』の 山本富士子が ずいぶん 使った〉

(ii) a 「ゴジュジンハ | ドウ | ナサルデスカ?」〈ご主人は どう なさるんですか?〉

b 「オレモ | コウ | ヤッテタヨ」

c 「ワタシタチ | ドウ | スル?」

注 (ii)は主語が副修語に先行する傾向のあるもの。

### iii 副修語 2 — 主語, 副修語, 副修語, 述語

( a ~〈ハ〉一副一副一述, b ~ガ一副一副一述 )

(i) a 「オンナノ ヒトガ ヒトリデ イルトネ シュウイデ イロンナ コト イ  
ワレルデスカド | タカミネサンナンカ | モウ | ソロソロ | イワレマス?」

〈女の人が 1人で いるとね 周囲で いろんな こと 言われるんですけ  
 ど 高峰さんなんか もう そろそろ 言われます?〉

○「アレハ | ヤッパリネー | チャットネー | トッテオキタイラシイネ」

b 「ソレジャー | ヒトツ | ミナサンガ | コンド | オハナシシテクダサイ」

(ii) a 「キョウハ | ドウ | シマスノ? | ミナサン」

b 「ソウ | イッテンデスッテ, | ナンカ | ウラナイカナンカガ」

注 (ii)は後行の副修語が述語に密着していることが多い。

### iv 副修語 3 — 主語, 副修語, 副修語, 副修語, 述語

( ~〈ハ〉一副一副一副一述 )

(i) ○「ワタシ | コトシ | マダ | イチドモ | キカナカッタ」

## (2) 体修語 1

### i 副修語なし — 主語, 体修語, 述語

- ( a ~〈ハ〉・モ・ガ—ヲ一述, b ~〈ハ〉・〈ガ〉—〈ヲ〉一述,  
 c ~〈ハ〉・モ・ナンテ・〈ガ〉・〈ガ〉—ニ一述, d ~ガ—〈ニ〉一述,  
 e ~ハ—一述, f ~〈ハ〉・モ・ガ—ト・ッテ・テ一述,  
 g ~〈ハ〉・ガ—カラ一述, h ~ハ・テ・ガ・ガ—デ一述,  
 i ~ッテ—ナンテ一述 )

(i) a 「ワタシハ | ソレヲ | オモッテイル」 ○「ソレヲ ネー | ウチノ ヒトガ | ミ  
テルデシヨ」

- b 「タイシユウニ ウレチャッタ ショウセツツテイウノハ | シンゲキノ ヒト  
ツテイウノハ | トリアゲナインジャンイ」 <大衆に うれちゃった 小説って  
いうのは 新劇の 人っていうのは とりあげないんじゃない>  
○「アナタガ | オトモダチノ ガクセイショウ | モッテイルデシヨウ?」
- c 「ボクモ | サイシヨニ | ヤラレタ」 ○「カントクガネー | ディーノネ ソ  
ウイウ モノニネ | タヨリスギチャッテンジャンイカナ」 ○「オコメノ ナ  
イ トキニサ | ギインタチ | ソシヨクシタンデスッテ」 ○「ジュッポンカン  
ニ | ドノグライ | ウテマスカ?」 <10分間に どのぐらい 打てますか?>
- d 「アノ トキモ | ダンシクラスガ | ヤクコト ヤクコト」
- e 「ワタシハ | ココン トコロヘ | ネコロバシテイタダキマス」
- f 「オレ | ウエノカンエイジツテ アノ ヤマニ アルノトハ | オモワナカッ  
タ」 <おれ 上野寛永寺って あの 山に あるのとは 思わなかった>  
○「ワタシモ | ソウ ヤタラニ アマイ モノ タバタイト | オモワナイネ」  
○「ダカラネー | ワタシ | ネタラネ イチバン カンタンダッテ | イウノヨ」  
○「ニシムラクンガ | イッテタゾ, | オノデラ マダ ダメダッテ」 △「ノ  
ビナイ コハ ドンドン オチテッテ チュウツテイウノガ ナクナルッテ |  
センセイモ | オッシャッテラシッタワ」
- g • 「ウチノ ミノリナンカ | イウワヨ, | イマカラデモ」 ○「アトカラ | ヒ  
コウキガ | オッカケテクンダヨナ」
- h 「ボクハ | トウホウデ | ヤリマスカラネ」 ○「ソonna コッテ | リョウリヤ  
ガ | ウケツケナイヨ」 ○「ニ サンビヤクエンデ | ウチガ | カエタモノネ」
- (ii) a • 「クンロツテイウ マチハ | キョウシユウラ | サソウネ」 <釧路っていう 町  
は郷愁を さそうね> ○「ムコウノ ヒトモ | コッチラ | シラナカッタジサ」  
○「ワタシナンカ コシラエタ デコレーションネ | シロバターネ アレラネ  
| ツカウノ」
- b 「ソウイウ キヨウノ ヒトハ | テレビ | カイチャッテルデシヨウ」 ○「キ  
ユウガ | ウイタリ シズンダリ | シテルンダッテサ」 ○「ジュウトウガ | テ  
ンカ | トルンデスカ?」 <自由党が 天下 取るんですか?>
- c 「アソコハネ | ジブンタチノ スマイニ | スルノ」 ○「オカシイグライニ |  
スウネ, | アニキナンテサー」 ○「ワタシナンカ | ソonnaニ イイ トコロ  
ニ | オモエナイワ」
- f 「ドテマチハ | ナリタサント | イウノ」 ○「ミギツカワハ | ケイセンテ | イ  
ウノ」 <右っ側は 惠泉(地名)て いうの>
- i 「ネツイタラ ドウダロウナンテ | オモウノネ, | トシヨリッテ」
- h • 「ニンゲンテ | コトバデ キズツイタリ | コトバデ | ジャマサレル」 ○「ソ

リヤ | オメーノ ホウデ | ヤッテル ッター」

注 (ii)は主語が副修語に先行する傾向のあるもの。

ii 副修語1——主語, 体修語, 副修語, 述語

- ( a ~ハ~ヲ副一述, b ~ハ・モ・(ガ)~<ヲ>副一述,  
c ~<ハ>~ト・ッテ・ナンテ副一述, d ~<ハ>・ガ~カラ副一述,  
e ~<ハ>・テ~デ副一述, f ~ハ~ニ副一述 )

(i) a 「ワタシハ | ツネニ | ソレヲ | オモッテイル」

b 「ボクモ | ソウイウ コトハ | ゼンゼン | シラナインダ」 ○「トリアエズ | カミハ | ワタクシ | オアズカリンテ」

c 「ボク | シュウガクリョコウデ ミルベキ トコロ ジャナイト | オモウナ, | ホントニネ」 <ぼく 修学旅行で 見るべき 所じゃないと 思うな, ほんとにね>

d 「ウチノ ミノ リナンカ | ハッキリ | イウワヨ, | イマ カラ デモ」

e 「アレ | マダ | ピカ デ リーデ | ヤッ テル?」

(ii) f 「ソラ | ナニカ | ヒユニ | ツカイ マスカ?」

(iii) c 「アタシ | モウ | セワシ テ ク レ ナ ク ッ テ モ イイ カ ラ ッ テ | ソウ | イウ ノ」

(iv) d 「ト モ カ ク | ソノ ア ト カ ラ | ヒ コ ウ キ ガ | オ ウ カ ケ テ ク ン ダ ヨ ネ」

(v) e 「イ チ バ ン ニ ネー | ニ ン ゲ ン テ | コ ト バ デ キ ズ ツ イ タ リ | コ ト バ デ | ジャ マ サ レ ル」

b 「ボク ノー ア ニ キ ナ ン テ ノ ハ | ヤ ッ バ リ | タ バ コ | ス ワ ナ カ ッ タ ラ シ イ ヨ」

(vi) c △ 「ソ レ カ ラ ネ | イ ヤ ナ ノ ネー | リ ソ ウ ノ ダ ン セ イ ハ ダ ナ ン テ | マ ズ | キ カ レ ル」 <それからね いやなのねえ 理想の 男性はだなんて まず 聞かれる>

(vii) b 「ヤ ハ リ | ジ ユ ウ ト ウ ガ | テ ン カ | ト ル ン デ ス カ ?」

(viii) b 「タ ダ ネ | イ テ ネ ン セ イ ノ ホ ウ ハ | タ ン イ | ト ッ テ ル デ シ ョ ウ」

(ix) b 「オ ン ナ ガ モ ッ テ イル ワ ル イ コ ト モ | オ ト コ ガ | ズ ツ ト | モ ッ テ ル ン ダ ヨ」

注 (i)(ii)(iii)(iv) 主語と体修語との順序が比較的自由なもの。

(v)(vi)(vii)(viii) 主語が体修語に先行する傾向のあるもの。

(ix) 体修語が主語に先行する傾向のあるもの。

副修語の位置の自由さは異なる。

iii 副修語2——主語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語

(a ~<ハ>~<ヲ>副一副一述, b ~テ~ヲ副一副一述)

(ii) a 「オ レ | コ ノ ア イ ダ | カ ッ テ ミ テ | ジ ョ ウ サ イ | ツ マ ラ ナ イ コ ト | シ タ ヨ」

<おれ このあいだ 買って来て 実際 つまらない こと したよ>

(iii) b 「ナ ン カ | ム コ ウ ノ オ ク ニ ノ ヒ ト ッ テ | ヒ ジ ョ ウ ニ | コ ト バ ラ | タイ セ ツ」

ニ | スルラシイネ」

- (ii) 主語と体修語との順序が比較的自由であるもの。副修語「ジッサイ」は「ツマラナイ」を修飾するとも考えられる。事実「ジッサイ」は「ツマラナイ コト」に先行する傾向が認められる。
- (iii) 主語が体修語に先行する傾向のあるもの。  
副修語の位置の自由さは異なる。

iv 副修語 3——主語, 体修語, 副修語, 副修語, 副修語, 述語

(～ハ～ヲ～副～副～副～述)

- (ii) △「ヒジヨウニ | ホントウニネー | クシロツテイウ マチハ | ナンカ | キョウシユウ  
ユウヲ | サソウネ」

注 主語が体修語に先行する傾向が認められる。

副修語「ヒジヨウニ」「ホントウニ」は一種の繰り返しと考え得るものである。「主語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語」に準ずるものを取り扱っていい。「ナンカ」は述語に密着しては位置しない。

(3) 体修語 2

i 副修語なし——主語, 体修語, 体修語, 述語

- a ～(ハ)・ナンテ・(ガ)～(ヲ)～ニ～述,  
b ～ハ・モ・ナンテ～(ヲ)～(ニ)～述, c ～ハ～(ヲ)～(ニ)～述,  
d ～ツテ・ガ～(ヲ)～(デ)～述, e ～ガ～ニ～(ハ)～述,  
f ～ハ・ガ～(ニ)～ト～述, g ～(ハ)・ガ～(ニ)～(デ)～述,  
h ～ガ～(ニ)～(デ)～述, i ～ハ～ツテ～(ニ)～述,  
j ～ハ・ツテ～(ヲ)～ト～述, k ～(ハ)～(ニ)～(ニ)～述

- (i) a 「アナタハネ | ダイタイ ドノクライ | キボウスルカ? | セイカツンテ イク  
ノニネ」 ○「ワタシ | カルイザワニ | ベッソウデモ | タテルワ」

b 「サラデモ ナンデモサ | タバコ ノム ヤツァー | イレルデショウ, | スイ  
ガララネ」〈皿でも なんでもさ タバコ 飲む やつあ 入れるでしょう,  
吸いがらをね〉

○「オンナノ ヒトモネ | ケンカ シタ トキ | ズバット ソノ シンゾウラ  
キズツケル コト | イイマスネ」 ○「サクキノ ジョシダイセイナンテサー  
| フツウノ トキデモ | アンナ コトバ | ツカッテンノ」〈さっきの 女子大  
生なんてさあ 普通の 時でも あんな 言葉 使ってるの〉

c 「キョウカラ | ボクハネー | ジャツノ ウスイノ | キテキタンダ」

d 「ヨボヨボノ オバアサンガネ | ジドウシャノ トオル ミチ | ヒトリデネ |  
ヨコギツテイクノヨ」

e 「バリヘ イッテイル ウチニネ | ハハガ | ドッカヘ | ヤッチャッタノ」

f 「ボカーネ | ソノ トキニネー | アノ ホッカイタンコウネ アレナンカ イト | オモッタ ンデスネ」

○ 「ハジメテ イッタ トキハ | コウチュウセンセイガネ | オンナジ ヨウニ イタシマスカラト | オッジャッテイタノ」

g 「ワタシ | ココデ | カカリチュウサンノ イラッシタ トキニ | オハナシ シマ シタネ」

h 「ウチハネ | アニガ | アレ | イッテンダ ヨネ」

i 「サクキカラ | ハナシヲ スルケド | ソウムブチュウハ | ダメダッテ | イウデ ショウ」 <さっきから 話を するけど 総務部長は だめだって 言うでしょう>

(ii) d 「トウホクッテ | ヘンナ コトバ | ツカウワネー | ナンブホウゲントカ ツガルホウゲントカ」 <東北って へんな 言葉 使うわねえ、 南方方言とか 津軽方言とか>

j 「アノ エイガハ | ボクハ | イイ エイガト | オモワナイナ」

g 「エイガカン ハイッタ トキ | ミンナ | ドノ ヘンデ | ミル?」 <映画館 はいった 時 みんな どの 辺で 見る?>

a 「ソレンガ サンセンシタ トキニハ | ミンナガ | ハナシ | キイタヨ」

(iii) k 「キミ | リョウシンニ | ハジルヨ | ヤメル トキニ」 <君 良心に 恥じるよ、 やめる ときに>

a 「イマノ ジムシツニ | ヒトリカ フタリネ | ネトマリグライ | ナサイマシタ デスネー」 <今の 事務室に 1人か 2人ね 寝泊まりぐらい なさいましたですね>

(iv) a 「グンビッテ モンダイハ | ショウケンカイニ | コウエイキョウラ | アタエテ イルンデス」 <軍備って 問題は 証券界に 好影響を 与えているんです>

○ 「コダヌキハネー | ショチュウニ | セキニン | テンカシテルンダネー」

○ 「ムカシノ ヒトナンテサ | ソノ ヨコニネー | ミンナ | イレチュウンダ ナ | オカネガ ナイト ミエテ」

(v) a 「ヤッタノハ | ガッコウラ | カイジョウニ | シテ?」

(vi) d 「トウキョウデサー | チュウオウセンガ……ナー | ドアガ コワレテ | イタラ ワタンテネー | クギ | ウチツケテアッタリネ」 <東京でさあ 中央線が…なあ ドアが こわれて 板を わたしてねえ 釘 打ちつけて あったりね>

注 (ii)(iii) 二つの体修語の順序が比較的不自由であるもの。主語の位置の自由さは異なる。

(iv)(v) 主語が文頭にある傾向のあるもの。体修語の順序の自由さはそれぞれ異なる。



(vi) 相互の位置が比較的固定している傾向のあるもの。

ii 副修語 1 ——主語, 体修語, 体修語, 副修語, 述語

- ( a ~ハ・〈ガ〉—〜〈ヲ〉—〜ニ—副—述,  
 b ~〈ハ〉・ガ—〜〈ヲ〉—〜〈ニ〉—副—述, c ~ハ—〜ヲ—〜カラ—副—述,  
 d ~ハ—〜〈ニ〉—〜ト・ッテ—副—述, e ~ガ—〜〈ニ〉—〜〈デ〉—副—述,  
 f ~ハ—〜〈ヲ〉—〜デ—副—述, g ~ハ・ガ—〜〈ヲ〉—〜ト・ッテ—副—述,  
 h ~ガ—〜ニ—〜〈デ〉—副—述

(i) a 「ユンドハ | ソノ ヒトハネー | イトウサンノ アレニ ナッテイル トキニ  
ネ | アレ | ヤッテタンダッテ」

b 「ヤマカラ カエッテキテ | アタシ | カナラズ | オシルコ | タベル, | アクル  
ヒグライ」 ○ 「オレガネー | ホンイチ トイトイーデネ | マンガン | ヤッ  
ンダヨ, | タシカ | アノ トキ」

c 「アトカラ | セイネンシヤハネ | アンナ タバコヲ | イチンチニ ジュッポン  
カ ジュウゴホン | モラッテタヨ」

d 「ワタシハ | アナタニ | イツモ | ウッテ | イウノ」

e 「ウチハネ | アニキガ | ヤッパシ | アレ | イッテタンダヨ」

(ii) d 「ワタシハ | ハジメハネー | オオクノ ヒトガデスネー オナコウドラ シタ  
インダロウト | コウ | オモッタデス」

(iii) a 「コダスキハネー | ミンナ | ショチョウニ | セキニン | テンカシテルンダネー」

(iv) f 「アレハ | サンドペーパーカナンカデ | ブツ | ムイチャウンデショウ, | カ  
ワ」

(v) g 「アノ エイガハ | ボクハ | モウ イイ エイガト | オモワナイナ, | 「チツト  
モ」

h 「ウチーモ | キョネン | ウエキヤサンガ | アノ オニワニ | モッテキタンダ  
ヨ」

g 「アノ ヒトガ | ヨクネ | セトナイカイ スバラシイ スバラシイッテ | オテ  
ガミ | クレタワヨ」 〈あの 人が よくね 瀬戸内海 すばらしい すばらし  
 いて お手紙 くれたわよ〉

a 「ヤッパシ | イマノ ジムツニ | ヒトリカ フタリネ | ネトマリグライ | ナ  
サイマンタデスネー」

注 (ii) 主語, 体修語, 体修語の位置は自由であるが最後の体修語と副修語とは一まとまりになる傾向がある。

(iii)(iv) 主語は文頭に近く表われる。副修語の位置の自由さは異なる。

(v) 二つの体修語の順序は比較的不自由である。主語は文頭に近く表われていることが多い。

iii 副修語 2 ——主語, 体修語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語

(a ~ハ~(ヲ)~ニ~副一副一述, b ~ハ~ヲ~(ニ)~副一副一述)

(i) a 「アナタハネ | ダイタイ | サイテイ | ドノグライ | キボウスルカ? | セイカウシテイクノニネ」

(ii) b 「エイガノ ザッシテノハ | ジッサイ | ヨクモ コンナニト オモウクライネ | ムコウノ シリョウヲ | ヨク | アツメテルヨネ」 <映画の雑誌では実際よくもこんなにと 思うくらいねえ 向こうの資料をよく集めてるよね>

(iii) a 「イマハネ | グンビツテ モンダイハ | ショウケンカイニ | ヒジヨウニ | コウエイキョウヲ | アタエテイルンデス」

注 (i)(ii) 主語, 体修語, 体修語の位置は自由である。

(ii) 先行の副修語「ジッサイ」は述語に密着しては位置しない。

(iii) 主語が体修語に先行する傾向のあるもの。

(4) 体修語 3

i 副修語なし——主語, 体修語, 体修語, 体修語, 述語

(a ~ガ~(ヲ)~(ニ)~(ニ)~述,  
b ~ハ~(ヲ)~(ヲ)~ニ~述, c ~ハ~(ヲ)~(ヲ)~ニ~ニ~述)

(i) a 「サイシヨ | ウグイスガネ | ス | ツクッタデシヨ, | ハラノ ナカニ」 <最初うぐいすがね 巣作ったでしょ、葉らんの中に>

(ii) a 「タバコガサー | センソウノ トキナンカネ | カヘイノ ヤクメ | スندگان, | モノヲ コウカンスル トキニナ」 <タバコがさぁ 戦争の時なんかね 貨幣の役目 すんだな、物を交換する時にな>

(iii) b 「コーヒーダッテ | センソウゴ | インチキナ モノハ | コーヒーニ チカイネ マメデ ツクッタリ | シテネ」

(iv) c 「ボクガ イッテタ アノ カントクネ | コドモノ ムネニネ | サンダンニ | クツケテタヨ, | クンショウ」

注 (ii)(iii) 後行の体修語が述語に近く位置する傾向のあるもの。

(iv) 主語が文頭にある傾向が認められる。主語は提示的である。

(5) 体修語 4

i 副修語 2 ——主語, 体修語, 体修語, 体修語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語

(~ハ~ヲ~ニ~ヨリ~ニタイシテ一副一副一述)

(i) ○ 「トニカク | シキシヤカンカラ ヨク イワレルトオリニ | シュウダクンセイカ ツアタリニタイシテハ | タシカニ | ニッポンジンハ | ヨーロッパジンナンカヨ リモネ | ヒケヲ | トリマナ」 <とにかく 識者間から よく 言われるとお

りに 集団生活あたりにたいしては 確かに 日本人は ヨーロッパ人なんか  
よりもね ひげを とりますな>

(注) 先行の体修語「イワレルトオリニ」は副修語とも考え得るものである。

㊦ 他動詞文(2)は多くの種類の体修語を持ち得る。したがって、体修語の組み  
合わせの種類も多く、また多くの体修語が連なって複雑な構文を持っているも  
のが多い。しかし主語を重ね用いていることはあまりない。

## 形容詞・形容動詞文

### 1 主語なし

#### (1) 体修語なし

##### i 副修語なし——述語

( a 形・形動, b 形・形動+文末助詞, c 形・形動+助動詞(+文末助詞)  
d 形・形動+形式用言(+助動詞+文末助詞)

a 「オイソイ」 ○ 「バカバカシイ」 ○ 「ショウガナイ」 ○ 「スキダ」  
○ 「ダイジョウブデス」 ○ 「ホント」 ○ 「キレイ?」

b 「ヒドイナ」 ○ 「オモシロイゾ」 ○ 「イイヨ」 ○ 「イイノカンラ」  
○ 「イイワ」 ○ 「ホントウダヨ」 ○ 「ダイジョウブカナ」

c 「オモシロカッタヨ」 ○ 「ハヤイダロウ」 ○ 「ヨロシイデスカ?」 ○ 「イ  
ヤダロウ」 ○ 「キレイダッタネ」 ○ 「オモシロイラソイ」

d 「ヨロシウゴザイマスカ?」 ○ 「アリガトウゾンジマス」 △ 「ヨゴザンス  
カ?」 ○ 「ケッコウデゴザイマス」 ○ 「ダメジャンイネ」 ○ 「オモシロク  
ナイヨ」

##### ii 副修語 1——副修語, 述語

( a 副<sub>1</sub>-述, b 副<sub>2</sub>-述, c 副<sub>3</sub>-述)

a 「キノウ | ネムタクテ | ショウガナカッタ」 ○ 「トワダダッタラ | キレイネ,  
| イマ」 <十和田だったら きれいな、今>

b 「スゴク | ヤスイノ」 ○ 「トツテモ | イイネ」 ○ 「チョット | スマートナ  
ンジャンイ?」

c 「アンマリ | ナイナー」 ○ 「カエツクレバ | イインデショウ, | ヨウスル  
ニ」 ○ 「オオドオリヤナンカ デルト | ゼンゼン | ダメデスカ?」 <大通り  
やなんか 出ると 全然 だめですか?>

##### iii 副修語 2——副修語, 副修語, 述語

(a 副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—述, b 副<sub>1</sub>—副<sub>3</sub>—述, c 副<sub>2</sub>—副<sub>3</sub>—述, d 副<sub>1</sub>—副<sub>3</sub>—述)

(i) a 「コンドハ | チョット | ムズカシイデスカネー」 ○ 「トッテモ | テイネイナ  
ノ, | コンドハネ」

b 「ドウモ | アリガトウゴザイマシタ, | オイソガシイ トコロ」

c 「ワルクッテモ | ヤッパリ | スコシハ | タカイダロウ」 ○ 「ドウセ | モウ |  
ゲンシバクダンガ アルンダカラ | ダメデショウ」 〈どうせ もう 原子爆弾  
が あるんだから だめでしょう〉

(ii) a 「イマハ | タバコラ スオウガ | ナニガ | ヘイキ」

b 「モットモネー | ショウガッコウジャナ | ヤッパリ | ダメダナ」

(注) (ii) a 「ナニガ」は副詞と認められる。

b 「モットモ」は接続詞的である。

#### iv 副修語 3——副修語, 副修語, 副修語, 述語

(副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—副<sub>3</sub>—述)

(ii) ○ 「ヤッパリネー | ワカヤギクント バッテリーダッタラ | スコジャー | イイン  
ダヨ, | マダ」

(注) この「ヤッパリ」は「ワカヤギクント バッテリー ダッタラ」を修飾する  
とも解し得る。

#### v 副修語 4——副修語, 副修語, 副修語, 副修語, 述語

(副<sub>1</sub>—副<sub>2</sub>—副<sub>3</sub>—副<sub>4</sub>—述)

(ii) △ 「イマハ | モウ | ソナ | ナイデショウ, | オソラク」

(注) 副修語「ソナ」は述語に近く位置する。

## (2) 体修語 2

### i 副修語なし——体修語, 述語

(a ~ニ—述, b ~ト—述, c ~ヨリ—述, d ~デ—述)  
(e ~トシテ—述, f ~マデ—述, g ~〈ニ〉—述)

a △ 「コワーゴザンシタ, | アノ トキニヤ」 ○ 「オモチ タバタリ ナンカ  
スルノニ | アブナイ」

b 「コドモト | オンナジヨネ」 ○ 「カワイサント | イッショナノネ」

c 「フルホンヨリカ | ヤスイヨ」 〈古本よりか 安いよ〉 ○ 「トウホクベンヨ  
リハ | イイデショウネ」 〈東北弁よりは いいでしょうね〉

d 「テンビダケデ | イイノ」 〈天火だけで いいの〉 ○ 「カイジャデ | イソガン  
インダッテ」 〈会社で 忙しいんだって〉

e 「ニホンタイプノ ケイセントシテハ | ナイデスカ?」 〈日本タイプの 経験

としては ないですか?>

f 「ソコマデ | シンセツジャナイソウデスネ」

g 「アナタノ トキ | スゴカッタラシイネ」 ○ 「ワタシン トコハ | ナインデ  
ゴザイマスガ」

注 一般に体修語の表われていることは少ない。

比較を表わす「ヨリ」や「デ」などはかなり用いられている。「ニ」は時を表わす場合や特殊な場合である。～「ト」「～マデ」などの場合も述語の種類に限定がある。

### ii 副修語 1——体修語, 副修語, 述語

( a ～ニ—副—述, b ～ヨリ—副—述 c ～トシテ—副—述 )  
( d ～(ニ)—副—述,

(i) a 「ドクシンジャニハ | ヒジョウニ | オモイデスナ」 <独身者には 非常に 重  
いすな> ○ 「ナンダカ | センセイニ | キノドクネ」

b 「モウ | ソレヨリ | ショウガナイデスモンネ」

c 「ジッカントシテハ | ヤッパリ | カナシカッタノカナ」 <実感としては やっ  
ぱり 悲しかったのかな>

d 「クリスマスノ トキハネ | ズイブン | コワーゴザイマシタヨ」

### iii 副修語 2——体修語, 副修語, 副修語, 述語

( a ～ニ—副—副—述, b ～カラ—副—副—述 )

(ii) a 「ナンカ | マア | インゴニ | チカイノカシラ」 <なんか まあ 隠語に 近い  
のかしら>

(iii) b △ 「ドウヤッテ ジュジュツシテ ダシタカ ソレハ シラナイケドネ | ソレ  
カラ | イマ | モウ | ピンピンナノ」

注 (ii) 体修語が述語に近く位置している。

(iii) 体修語が副修語に先行している傾向がある。「ソレカラ」と「イマ」と  
の文脈上の結びつきには問題があろう。

### (3) 体修語 2

#### i 副修語なし——体修語, 体修語, 述語

( a ～ニ—～ヨリ—述, b ～ニ—～カラ—述 )

(i) a 「ゲンザイト ショウライヨリ | ナインダモノ, | ニンゲンニハ」 <現在と  
将来より ないんだもの, 人間には>

b 「コレカラ | カウニ | イイデスヨネー」 <これから 飼うのに いいですよ  
ねえ>

(出) 述語が「ナイ」「イイ」であることを注目したい。aの「～ヨリ」は比較の「～ヨリ」ではない。

## 2 主語1

### (1) 体修語なし

#### i 副修語なし——主語, 述語

( a ~ハ—述, b ~モ—述, c ~ナンテ—述, d ~ッテ—述 )  
( e ~ダッテ—述, f ~シカ—述, g ~〈ハ〉—述, h ~ガ—述 )  
( i ~トモ—述, j ~〈ガ〉—述, k ~ガ—述, l ~〈ガ〉—述 )

a 「ニホンゴト イウノハ | ムズカシイワネ」 ○「アー イウヨウナ クルシ  
ミハ | ナカッタデスネ」 ○「イマノ ヒトハ | ワラワレタッテ | ヘイキデス  
ヨ」 ○「インサツカンケイハ | イヤデスカ?」 〈印刷関係は いやです  
か?〉 ○「カワイソウハ | カワイソウダヨネー」 ○「ワルイコトハ | タン  
カダネ」

b 「チヨノヤマモ | イサマシイナ」 〈千代の山も 勇ましいな〉

○「ケイヒモ | ヤスイワヨ」 〈経費も 安いわよ〉

○「イズコモ | オナジダヨ」

c 「パスデ アタミノ ホウニ オリテクル コースナンテ | イイワネー」 〈バ  
スで 熱海の 方におりてくる コースなんて いいわねえ〉

○「ジュウトウヤ カイシントウナンテ | ダイキライ」 〈自由党や 改進黨  
なんて だいっきらい〉

d 「ヒトノ シンリッテ | オモシロイネ」 〈人の 心理って おもしろいね〉

○「ナンボウノ ハウジャ コメ サンカイグライ トレルッテ | ホントデス  
カ?」 〈南方の 方じゃ 米 3回ぐらい 取れるって ほんとですか?〉

e 「アノ ヒトダッテ | ツヨイヨ」

f 「ゴロクマイシカ | ナイッテ」 〈5, 6枚しか ないって〉

g 「ミカンガリッテ イウノ | オモシロイワネ」 〈みかん狩りって いうの お  
もしろいわね〉 ○「アンナ ヘンナノ | ダメヨ」

h 「シッボガ | ナガイカシラ」 ○「スコシ ムイタ ハウガ | イインジャナ  
イ?」 ○「ニモツ モッテ デタ ハウガ | リコウダッタデスヨ」 〈荷物  
持って 出た 方が 利口だったんですよ〉

i 「サンニントモネ | スゴインデスモノ」 〈3人ともね すごいんですもの〉

j 「キモチ | ワライ」 ○「テキトウナ トコ | ナカッタデス」

k 「ハイダカツヒコナンカガ | スキダッテ」 〈灰田勝彦なんか 好きだって〉

1 「ナンデモ ヤル ヒト | ウラヤマシイ」

(註) a 「カワイソウハ カワイソウダヨネー」は慣用句として特殊な表現と考え得るものである。

ii 副修語1——主語, 副修語, 述語

( a ~ (ハ) 一 副一 述, b ~ モー 一 副一 述, c ~ テー 一 副一 述 )  
( d ~ (ガ) 一 副一 述, e ~ ナンテー 一 副一 述, f ~ デモ一 副一 述 )

(i) a 「マダ | ウチアワセニ クル ヒトハ | スクナインデスガネ」 ○ 「イイナ  
ー, | アノ エイガハ | ジッサイ」 ○ 「ヤッパリ | キヤクショクナンテイウ  
ノハ | アルテイド キョウデナイト | ダメダモノネ」 <やっぱり 脚色なんて  
いうのは ある程度 器用でないと だめだものね>

○ 「チドリジマダトカネ キョウゲンジマダトカ | ナニシロ | ステキダッタワ  
ヨ」 ○ 「コノゴロ | ムコウノ ショウカイッテイウノ | スクナイヨネ」 <こ  
のころ 向こうの 紹介っていうの 少ないよね>

○ 「ニホンナンカ | モット | ヒドインジャンナイ?」 ○ 「ボクタチノ クラス |  
チョット | トクベツダヨ」 ○ 「ピッチャー | ダメダ, | モウ」

b 「アノ クラスモ | イマダニ | サワガシイッテサ」

c 「ウエノ トショカンター | キレイダネ, | ワリアイネ」 <上野図書館でえ  
きれいだね, 割合ね>

d 「テンデ | チョウシガ | ヨカッタダ」 ○ 「アンマリ | イイ トコロガ |  
ナイ」 ○ 「キレイナダネー, | アレガ | ミンナ」 ○ 「ゼンゼン | タイム  
ハカッタ ユト | ナイノ?」

(ii) e 「アカンコナンテネ | モノスゴク | イインデスッテ」 <阿寒潮なんてね もの  
すごく いいんですって>

f 「ヒナガシナンカデモノネ | トッテモ | オイシイワヨ, | コシラエルト」 <ひな  
葉子なんかでもね とっても おいしいわよ, こしらえると>

a 「ムコウノ ツバイノ ショウカイトカネー | トッテモ | インチキ」 ○ 「ウ  
チノ ホウナンカ | イチバン, | ツマンナイワ」 ○ 「ホッカイドウネ | トテモ  
| スバラシインデスッテ」

(iii) a 「ダイタイ | グンタイガ ナイッテイウノハ | イイモン」 <だいたい 軍隊が  
ないっていうのは いいもん> △ 「ソナ ソレホド | ジュミ | ナイワ」 <そ  
んな それほど 趣味 ないわ>

○ 「ジッサイ | アンナ ツマラナイ ホン | ナイネ」

b 「ベツニ | ナニモ | ナインデス」

d 「タトエバ | アサ ハチジハンカラ ハジマッテ ゴジゴロ オワル トコロ

ガ | ヨロシイデスカ?」〈たとえば 朝 8時半から 始まって 5時頃 終わる 所が よろしいですか?〉

○「コノゴロハネ | クダモノノ ホウガ | イイワネ」 ○「ドウモ | モノオボ  
エガ | ワルイナ」 ○「ナニシロ | トウキョウノ マンナカニ スンダ コト | ナイカラ」

注 (ii)は主語が副修語に先行し、(iii)は副修語が主語に先行する傾向のあるもの。

### iii 副修語 2——主語、副修語、副修語、述語

(a ~ (ハ)一副一副一述, b ~ モー一副一副一述)  
(c ~ (ガ)一副一副一述)

(i) a 「ムカシハ | アベックナンテノハ | アマリ | ナカッタンデスネ」 ○「ホント  
ウニ | モウ | センソウハ | イヤデスネ」 ○「ソソナニ | イク ヒト | マダ |  
ナインジャナイカネ」

b 「ダイキョウジョウモ | トテモ | コトシハネ | ニギヤカデゴザイマシタ」〈大  
球場も とても ことしはね にぎやかでございました〉

c 「イマントコロ | イカナイ ホウガ | マダ | イイカナ」 ○「マダ | イッペン  
モ | ミタ コト | ナイヤ」

(ii) a 「ホントニ | ヒトツモ | ソノ ミスハ | ナイネ」

(iii) b 「コトシハネ | ドコモカモ | ホンマツリデ | タイヘン | ニギヤカデゴザイマシ  
タ」

(iv) a △「ケッキョク | ボクラミテナ ミジクモノハ | ゼンゼン | ダメデスネ」

(v) a △「ゲンカコストハ | ソソナ | タイシテ | カワリナイッテ」

(vi) c 「タイヘンニ | ナンカ | シキサイガ | キレイダッタネ」〈たいへんに なんか  
色彩が きれいだったね〉

(vii) a 「ベツニ | アマリ | イシャニ カカッタッテイウ コト | ナイラシイデスヨネ」

(viii) c 「ソレニ | ヤッパリ | エガ | キレイダ | コノゴロハ」〈それに やっぱり  
絵が きれいだ、このごろは〉

注 (i) c 「マダ イッペンモ……」はその順序が全く自由であるというのでは  
ない。少なくとも「イッペンモ ミタ コト マダ ナイ」という言い方  
は少ないと思われる。

(ii) 二つの副修語の順序が比較的不自由であるもの。

(iii) (iv) 少なくとも一つの副修語が述語に近く位置する傾向のあるもの。

(v) むしろ、これは主語+(副修語+副修語)と図示すべきか。つまり、(副修  
語+副修語)をBとすれば、「主語+B」の関係にある。「ソソナニ タイ  
シテ」「タイシテ ソソナニ」と「ゲンカコストハ」は交換し得るが、「ソ  
ソナニ ゲンカコストハ タイシテ」というのは不自然であろう。



- (vi) 「ナンカ」はあまり述語の近くに位置しない。  
 (vii) (viii) 副修語が文頭に近く位置している傾向のあるもの。

iv 副修語3——主語, 副修語, 副修語, 副修語, 述語

(a) ~ハ一副一副一述, (b) ~ガ一副一副一述

(ii) a 「ドウモ | シンセイッテノハ | イチバン | マズイモノ, | ヤッパリ」 <どうも『新生』ってのは一番まずいもの、やっぱり> ○「ソレダケ | ヤッパリ | ゲンダイジンハ | フクザツナンジャナイ, | イロイロト」 <それだけ やっぱり 現代人は 複雑なんじゃない、いろいろと>

b 「サイショネー | ヤッパリ | ボクノ シリアイデモネー ムコウニ ウツタ ヒトガ | タイヘン | タヨリナカッタソウダネー」

(iii) a 「ナンカネ | イズハントウノ ニラヤマネ アソコノ アタリハ | ナンダカ | イマ | ズイブン | イトカッテネ」 <なんかね 伊豆半島の 韭山ね あそこ の あたりは なんだか 今 ずいぶん いいとかってね>

(iv) a 「トクニ | マタネー | クシロツテ イウノハネ | ヒジョウニ | エキゾチック ナンドヨ」 <特に またねえ 鋼路って いうのはね 非常にねえ エキゾチックなんだよ>

注 いずれも主語の位置は比較的自由である。

- (ii) 先行の副修語は文頭に近く位置する傾向がある。  
 (iii) 副修語「ナンカ」は述語に密着しては位置しない傾向がある。  
 (iv) 副修語「ヒジョウニ」は述語に近く位置する傾向がある。

(2) 体修語1

i 副修語なし——主語, 体修語, 述語

(a) ~<ハ>・ガ一~ニ一述, (b) ~ッテ・ガ一~<ニ>一述, (c) ~ハ一~ト一述,  
 (d) ~ダッテ・ガ一~ヨリ一述, (e) ~ハ一~デ一述, (f) ~ハ一~マデ一述,  
 (g) ~ハ一~<ト>一述, (h) ~ガ一~ヨリ一述,

(i) a 「チュウカリョウリ | アソコニハ | ナイノネ」 <中華料理 あそこには ないのね> ○「コウイウ ヒト | イイワネ, | ツレテイクノニネ」

○「ソレニハ | ソレナリノ リュウガ | ヒツヨウデス」 <それには それなりの理由が 必要です>

b 「イチネンノ トキ | イチクミッテ | ウルサカッタワネー」

・「ヨーロッパハ | ドクシンノ ヒトガ | オオゴザイマスネ」

c 「モツト | オナジダヨ, | ソリャネ」 <もつ(臍物)と 同じだよ, そりゃね>

d 「コウツウヒダッテ | コッチへ イクヨリハ | スクナイデショウ」

○「オオサカヨリ | キョウトノ ハウガ | イイ」 <大阪より 京都の 方が>

いい)

e△「トミタサノ ホウハ | メガネデ | マチガイナイデショウ」

(ii) f 「ジカンハ | ナンジゴロマデ | ヨロシイデスカ?」

g 「コウバノ ジュウシヨハ | コレ | オンナジナンデス」 〈工場の 住所は どれ 同じなんです〉

(iii) h 「マケタッテイウ コトヨリモ | オワッタ コトガ | ウレシカッタヨ」

b 「ソウイウ ヒトガ イル トコロハネ | ビョウニンガ | オオイッテ」

a 「ジブンニ | ジシंगा | ナイ」 〈自分に 自信が ない〉

注 (ii)は主語が体修語に先行し, (iii)は体修語が主語に先行する傾向がある。

(iii)のhは「～ヨリ」を「～ではなく」などの意と解し, 接続助詞的にも考え得る。

## ii 副修語1——主語, 体修語, 副修語, 述語

|   |       |      |     |   |      |     |      |
|---|-------|------|-----|---|------|-----|------|
| a | ～ハ・ガ～ | ～ニ   | 副一述 | b | ～ガ～  | ～ヨリ | 副一述  |
| c | ～ハ    | ～マデ  | 副一述 | d | ～(ハ) | ～   | ニオイテ |
| e | ～(ガ)  | ～(ニ) | 副一述 | f | ～(ガ) | ～   | カラー  |

(i) a 「ヨノナカニネー | アクニンナンテ モノハネー | ホントニ | ナインデス」

○「サケデ イキオイヲ カッチ ヒトヲ ホウモンスル ヒトガ | ズイブン | ニッポンジシニハ | オオイ」 〈酒で 勢いを かって 人を 訪問する 人が ずいぶん 日本人には 多い〉

b 「インエイノ ホウガ | マダ | チカイワネ, | アジヨリモ」 〈陰影の 方が まだ 近いわね, 味よりも〉

c 「イママデネ | ゼンコクゼイガ トウキョウヘ キタ コトハ | アマリ | ナカ ッタダ」 〈今までね 全国税が 東京へ 来た ことは あまり なかったんだ〉

(ii) d 「ケッキョクネー | タノシク アソベル コトニオイテモネー | アンナ トコ | ナイデショウ」

e 「シロウマノ トキダッテ | アナタ | イッカゲツグライ | アタマ | ヘンダッタ ワヨ」 〈白馬の 時だって あなた 1か月ぐらい 頭 変だったわよ〉

(iii) e 「シュウセンノ トキハ | ホントウニ | イキタソラ | ナカッタデスモンネ」 〈終戦の 時は ほんとうに 生きたそら なかったですもんね〉

○「イマノ ロウジンネ | ズイブン | ソレガ | オオインデネ」

(iv) f△「キュウジンノ ジョウタイカラ | ヒジョウニ | キュウジン | スクノウゴザ イマシテネー」 〈求人 の 状態から 非常に 求人 少のうございましてねえ〉

注 (ii)(iii)(iv) 体修語が主語に先行する傾向がある。副修語の位置の自由さは

異なる。

iii 副修語 2——主語, 体修語, 副修語, 副修語, 述語

(a ~<ガ>~<ニ>—副—副—述, b ~<ガ>—~ニ—副—副—述)

(i) a 「ドコトナク | ヤッパリ | ヨーロッパ | ドクシンノ ヒトガ | オオゴザイマ  
スネ」 ○ 「モウ | オシイレッテイウ オシイレ | トガ | ヒトツモ | ナイノ」  
〈もう 押し入れっていう 押し入れ 戸が 一つも ないの〉

(ii) b 「コンドハ | モウ | シンブソニハ | カンケイ | ナイ」

注 (ii)は主語が述語に近く位置する。

3 主語 2

(1) 体修語なし

i 副修語なし——主語, 主語, 述語

(a ~ハ~ハ—述, b ~ハ~モ—述, c ~モ~(ガ)—述)  
(d ~<ハ>~<ガ>—述, e ~ハ~<ガ>—述, f ~ハ~(ガ)—述)  
(g ~ッテ~<ガ>—述, h ~<ガ>~(ガ)—述)

(i) a 「キョクチョウハ | カンガエハ | ベツデスカ?」

b 「シンセイハ | マズイナ, | ボクモ」 ○ 「クツダイハ | オトナモノモ ガク  
セイモ | オンナジナンデス」 〈靴代は おとなのものも 学生も 同じなんで  
す〉

c 「ソレモ | チョウシガ | ヘンダネ」 ○ 「ダレモ | カサ モッテ デタ モン  
| ナインデスヨ」 〈だれも 傘 持って 出た もん ないんですよ〉

d 「ミナサンネ | オハナシガ | ウマインダカラ」

e 「ワタシハ | ソーカヤキガ | スキダ」 〈わたしは 草加焼が 好きだ〉

(ii) a 「ソレハ | カンケイハ | ナイ」

f 「ソレハ | ヤメタ ホウガ | イイ」 ○ 「コノ ヘンノハ | アジガ | ナイノ  
ヨ」 ○ 「チュウトハンパナ グンビハネ | ヒツヨウ | ナイデス」 〈中途半ば  
な 軍備はね 必要 ないです〉 ○ 「ソレノ ジョウタイノ ヒトハ | ソノ  
ヒト ジン | ユカイナンデスカ?」 〈その 状態の 人は その 人 自  
身 愉快なんでしょう?〉

g 「ソウイウノッテ | キモチガ | ワルイヨネ」 ○ 「ハイダ カツヒコッテ | キ  
ヤスインダヨ, | アレ | ニンゲンガ」

h 「ソノ ホウガ | ツゴウ | イイデス」 ○ 「シンバイ | ナイデショウ, | アッ  
チノ ホウヘ ヤル ホウガ」

ii 副修語 1——主語, 主語, 副修語, 述語

- ( a ~<ハ>—~ッテ—副—述, b ~ハ—~(ガ)—副—述 )  
 ( c ~<ハ>—~(ガ)—副—述, d ~モ—~ガ—副—述 )  
 ( e ~<ハ>—~ハ—副—述 )

- (i) a 「アタシ | アンマリ | ネコッテ | スキジャナイ」  
 b △ 「ワタクシハ | アレガ | イチバン | オッカナカッタネ」  
 ○ 「パチンコハ | ホント | ミンナ | スキダネ」  
 c 「タカインダモノネ, | アレネ | チョットネ | ネダノ ホウガ」  
 d 「ワタシモ | ヤッパシ | オンナノ コノ ホウガ | イイワネ」  
 (ii) e 「ワタクシネ | ワカイ カタノネ メイロウカッタツセイガ フエタッテイウ  
コトダケハネー | ジツニ | ウレンイデス」 <わたくしね 若い 方のね 明朗  
 かつた性質が ふえたっていう ことだけはねえ 実に うれしいです>  
 (iii) c 「ソンナノ | ゼンゼン | ミタ コト | ナイデスネ」  
 (iv) b 「ジカンハ | ダイタイ | ナンジカラ ナンジマデノ トコロガ | ヨロシユウゴ  
ザイマスカ?」  
 (v) b 「ソレハ | ケツボウシタ セイジャナクッテネ | チョット | ハイキユウガ | ナ  
カッタダ」 <それは 欠乏した せいじゃなくてね ちょっと 配給が  
 なかったんだ>

注 (ii) 二つの主語の順序が比較的自由であるもの。

(iii)(iv)(v) 主語の順序が比較的不自由であるもの。副修語の位置の自由さは異なる。

### iii 副修語 2——主語, 主語, 副修語, 副修語, 述語

( a ~ハ—~ガ—副—副—述, b ~ガ—~ガ—副—副—述 )

- (i) a 「ソウイウ オッコチグミガ タクサン アッテネ | ワリアイニネ | ソウイウ  
ノハ | イイ トコ ネラウダケニネ | セイセキガ | イイノネ」  
 ○ 「ヤッパシ | ムカシハ | アノ ヘンネ | ブンキョウナンテイウノハ | オヤシキ  
ガ | オオカッタデシヨ, | イワユル ダイミョウヤシキ」 <やっぱし 昔は  
 あの 辺ね 文京なんていうのは お屋敷が 多かったでしょ、いわゆる 大名屋敷>  
 (ii) b △ 「オナジ チームノ ヒトガダヨ | ケッキョク | ナジミガ | ウスイデシヨ  
ウ, | マダネ」  
 (iii) a 「ソノ ハナシハ | ジッサイ | チョット | キモチガ | ワライネ」

注 (ii)以下, 二つの主語の順序は比較的不自由である。

### (2) 体修語 1

#### i 副修語なし——主語, 主語, 体修語, 述語

- ( a ~モ〜ガ〜〈ニ〉—述,      b ~ハ〜ガ〜カラ—述 )  
 ( c ~〈ハ〉〜モ〜トシテ—述,    d ~ハ〜ガ〜ヨリ—述 )  
 e ~モ〜〈ガ〉〜〈ニ〉—述

- (i) a 「シタモ | コウイウ バアイハ | ミギト ヒダリノ センガ | オンナジデシヨウ」  
 b 「ボクハ | チイサイ ジブンカラ | スモウガ | スキナンド」 〈ぼくは 小さい  
時分から 相撲が 好きなんだ〉  
 c 「オレナンカ | ジッカントシテ | ナニモ | ナカッタネ」 〈おれなんか 実感と  
して 何も なかったね〉  
 (ii) d 「ワタシヤ | ニンゲンヨリハ | ネコノ ホウガ | スキデス」  
 (iii) e 「ワタシモ | フタリメノ トキハ | オトコノコ | ホシカッターワ」 〈わたしも  
2人目の 時は 男の子 ほしかったわ〉

ii 副修語1——主語, 主語, 体修語, 副修語, 述語

- ( a ~モ〜〈ガ〉〜〈ニ〉—副—述,    b ~ハ〜〈ガ〉〜ニ—副—述 )  
 c ~〈ハ〉〜ガ〜ニ—副—述

- (ii) a 「ナンニモ | トニカク | スルコト | ナイデシヨ, | タベルコト イガイハサ」  
 (iii) b 「ソレハ | トクベツ | ニュースニ | カンケイ | ナイ」  
 (iv) c 「アレ | ジッサイ | ダンセイノ ホウニ | ドクシャガ | オオインジャンイノカ  
 ナ」〈あれ 実際 男性の 方に 読者が 多いんじゃないのかな〉

注 (ii) 二つの主語と体修語との順序が比較的自由であるもの。

(iii) (iv) 二つの主語の順序が比較的不自由である。

4 主語3

(1) 体修語なし

i 副修語なし——主語, 主語, 主語, 述語

- ( a ~〈ハ〉〜〈ハ〉〜カ—述,    b ~モ〜ニシテモ〜ガ—述 )  
 c ~ッテ〜ガ〜ガ—述

- (i) a △ 「ワタシタチ | オクバ | イッボンキリッカ | ナイ」 〈わたしたち 奥歯 1  
本きりっか ない〉  
 (ii) b 「ワタシタチニシテモ | ムカシノ ホウガ | オクユカシクモアリ | レイギモ  
 | タダシユウゴザイマシタネー」 〈私たちにしても 昔の 方が 奥ゆかしく  
もあり 礼儀も 正しゅうございましたねえ〉  
 (iii) c 「ダンシクラスッテ | キョウシツノ クウキガサー | ウルオイガ | ナイナ」  
 〈男子クラスって 教室の 空気がさあ うるおいが ないな〉

ii 副修語1——主語, 主語, 主語, 副修語, 述語

- ( ~ハ〜ハ〜〈ガ〉—副—述 )

(ii)○「モー | ダイダイテキナ グンビハ | ヒツヨウ | ナイデス, | ニホンハ」 くも  
う 大々的な 軍備は 必要 ないです、日本は)

○「ムカシノ コター | ポカー | ゼンゼン | カンガエタ コト | ナイヨネ」

◆ 形容詞・形容動詞文は一般に体修語の表われていることは少ない。ただし、「～ヨリ」はかなり用いられる。(比較を示す場合)。その他、述語の語によって、たとえば「チカイ」「ナイ」などの場合に「～ニ チカイ」「～ニ～ガ ナイ」などのような型が表われる。また「オナジダ」の場合には「～トオナジダ」の型が表われる。一般的には時を表わす「～ニ」や「～トシテ」などは表われる。

主語はさまざまなものが表われている。主語が三つ重なっていると認められるものもある。

## 名詞文

### 1 主語なし

#### (1) 体修語なし

##### i 副修語なし——述語

( a 名, b 名+文末助詞, c 名+助動詞(+文末助詞),  
d 名+助動詞+形式用言(+助動詞+文末助詞) )

a 「コレ?」 △「ショクブツ」〈植物〉 △「ジョセイビヘノ ミチトカ ナン  
トカッテ イウノ」〈女性美への 道とか なんとかって いうの〉 △「ソウ  
ヤッテルダケ」 △「コウイウ ワケ」 ○「ソノトオリ」

b 「カントウチホウカ」 ○「スゴイ ミリョクネ」 ○「アガッタリヨ」  
○「ソウイウ ワケサ」 ○「オモチャカシラ」

c 「ガッコウダロウ」 ○「オウヘンマイダヨネ」〈黄変米だよね〉 ○「タイシ  
タ モンダッタンデス」 ○「ジンインセイリナノヨ」〈人員整理なのよ〉  
○「ガッコウラシイワ」 ○「ザルミタイデスネ」 ○「テンインサンデス」  
〈店員さんです〉

d 「エイゴジャナイデショウ」〈英語じゃないでしょう〉 ○「マチガイデモナイ  
ワヨ」 ○「ヒモデハアリマセン」 ○「トケイデゴザイマスカ?」 ○「オ  
モウシコミデ イラッジャイマスカ?」

注 a 名詞だけで文末述語となっている場合は省略文と考えられる。一般的な表現とは認めないが、文脈や音調の助けにより、しばしば用いられるので一応掲げ

ておく。

ii 副修語1——副修語, 述語

(a 副<sub>1</sub>—述, b 副<sub>2</sub>—述, c 副<sub>3</sub>—述)

a 「イマ | キュウカチュウデス」 <今 休暇中です> ○ 「ユンドハ | ショクブツ  
デゴザイマス」

b 「モウ | ウンドウカイノ シーズンデス」 ○ 「チュウド | アノ ヘン ダッ  
タノ」

c 「ツマリ | シンブンデハナイ ワケデス」 ○ 「タトエバ | ニンゲンノ ハミ  
タイ」 ○ 「マサシク | ソノトオリ」

(注) a 「ヤク ヨンジュウメイデス」はこの型にいれない。「ヤク」は「ヨンジュウメイ」を修飾する連体詞とする。

b 「マタ ライシュウノ オタノシミ」などは省略文とする。

iii 副修語2——副修語, 副修語, 述語

(a 副<sub>2</sub>—副<sub>3</sub>—述, b 副<sub>3</sub>—副<sub>3</sub>—述)

(i) a 「ジツハ | チョット | ゼンソクモチナンデスノ」 <実は ちょっと ぜんそく  
もちなんですの>

b 「ナンカ | ヤッパリ | ショウセツナンカ ウマレル トコロダ」 <なんか や  
っぱり 小説なんか 生まれる 所だ>

(ii) a 「タダ | シオアジネ, | チョット」 <ただ 塩味ね, ちょっと>

注 (ii) 二つの副修語の順序はかなり不自由である。

(2) 体修語1

i 副修語なし——体修語, 述語

(a ~ニ—述, b ~カラ—述, c ~ヨリ—述, d ~デ—述)  
(e ~トシテハ—述, f ~(ニ)—述)

a ・ 「ジュウガツノ ムイカニ | ジョタイデショウ」 <10月の 6日に 除隊で  
しょう>

○ 「コメノ カワリニ | ハイキュウダヨ」 <米の 代りに 配給だよ>

b 「ゴジカラ | ケイコダヨ」

c ・ 「アマイ モノヨリ | カライ モノダナ」

d 「コレデ | ヒャクエン」 ○ 「ショウガッコウカ ナニカノ アレデ | ガイト  
ウロクオンデスカ?」 <小学校か なにかの あれで 街頭録音ですか?>

e 「シンブン ソレジタイトシテハ | メイワクカ」 <新聞 それ自体としては  
迷惑か>

f 「コンド ダンジョ クラスラ ヤリコメル トキハ | ソノテダネ」

○「イチニチ | サンビヤクエン」〈1日 300円〉

注 一般に名詞文においては、体修格は表われない。体修格のある場合は漢語動詞的なもの（たとえば「ジョタイ」の場合を除いて、多くは用言が略されている（それが慣用的になっている）という意識を感じさせるものが多い。

ii 副修語1——体修語，副修語，述語

(a ~ニ—副—述, b ~<ニ>—副—述, c ~カラ—副—述)  
(d ~デ—副—述)

(i) a 「ジュウガツノ ムイカニ | ケツキョク | ジョタイデショウ」

b 「チカテツコウジスル トキハ | モチロン | オハカジャナカッタ ワケダヨ  
ネ」〈地下鉄工事する時はもちろんお墓じゃなかったわけだよね〉

c 「ヤキュウシーズンデショウ, | コレカラ | モウ」

d 「フツウ | オスイジフサンデ | サンゼンエンクライネ」〈普通 お炊事婦さん  
で 3千円くらいね〉

iii 副修語2——体修語，副修語，副修語，述語

(~<ニ>—副—副—述)

(ii) ○「ツマリネ | チュウガツコウソツギョウグライデ ジムインサン ナル バア  
イネ | ダイタイ | ミナライノ ジムデスネ」〈つまりね 中学校卒業ぐらいで  
事務員さんなる場合ね だいたい 見習の事務ですね〉

㊦ 先行している副修語は文頭にあることが多い。

## 2 主語1

(1) 体修語なし

i 副修語なし——主語，述語

(a ~ハ—述, b ~モ—述, c ~ナンテ—述, d ~ッテ—述)  
(e ~ダッテ—述, f ~トシテハ—述, g ~ナラ—述, h ~<ハ>—述)  
(i ~ガ—述, j ~<ガ>—述)

a 「アレハ | キデスヨ」〈あれは 木ですよ〉 ○「ソノ アル トコハ | モンダ  
イデスカ?」 ○「メイジジングウハ | イッペンカ ニヘンダナ」〈明治神宮  
は 1べんか 2へんだな〉 ○「カイシャハ | ナンジカラナンデスカ?」

○「オタクハ | コイワデスネ」〈お宅は 小岩ですね〉

b 「コレモ | ドウブツデス」 △「ボクモ | ショウガッコウ ロクネンノ トキ  
〈ぼくも 小学校 6年の時〉 △「アバタモ | エクボ」

c 「ホッカイドウラシイワネ, | ホクトナンテネ」



- d 「マコチャンテ | ダレ?」 ○ 「ナンブセンベーッテ | ドンナ カンジ?」  
 <南部せんべいって どんな 感じ?>  
 ○ 「ナル モノッテ | イチネンオキナンデシヨウ」
- e 「バアナンテ ユトバダッテ | ムカシハ ツカワナカッタ ハズデスヨ」
- f 「ワタントイタシマンテハ | キョジノ フアンデゴザイマス」 <わたしとい  
 たしましては 巨人の ファンでございます>
- g 「ムコウガオカナラ | トリツデスヨネ」
- h 「アレ | ナニ?」 ○ 「アレ | コメノ カワリナンデスヨ」 ○ 「アナタ | シ  
 カハマノ チュウガク?」 ○ 「アクルヒサ | カイシヤノ リョウコウダッタ  
 ノヨネ」 ○ 「カイセツ | オワリカ」 <解説 終りか> △ 「ホッカイドウ | ノ  
ボリベツ」 <北海道 登別>
- i 「キュウシヨクジャガ | ジュウニメイデス」 <求職者が 12名です> ○ 「サン  
ビャクエンノガ | サンガイダロウ」 <3百円のが 3階だろう> ○ 「カワイ  
 ノ ホウガ | ウエダヨ」 ○ 「ゼンタイガ | ドウシツデスカ?」 <全体が 同  
 質ですか?> ○ 「ナニガ | アバイタダ」 ○ 「ソコガ | ミソナング」
- j 「コレ | ヒトクミデゴザイマスネ」 ○ 「ミンナ | ブタイノ ヤクシャラシイ  
 ネ」 △ 「イチヂカン | ヒャクハチジュウエン?」 <1時間 百80円?>

i 副修語1——主語, 副修語, 述語

- ( a ~ハ—副—述, b ~ッテ—副—述, c ~ナンテ—副—述 )  
 ( d ~<ハ>—副—述, e ~ガ—副—述, f ~<ガ>—副—述 )  
 ( g ~モ—副—述 )

- (i) a 「アレハ | ナマエラ カク モンジャナイノ, | ホントハ」  
 ○ 「ヤッバリ | ゲンザイノ ヒトトイウノハ | アノ テイドナノネ」
- b 「アアイウノッテ | ヤッバリ | ミリョクネ」
- c 「ニホンナンテ | ヤッバリ | アメリカカラ ミレバ | ジュウヨウナ シンジョウ  
ナングドウナ」 <日本なんて やっぱり アメリカから みれば 重要な 市  
 場なんだろうな>
- d 「コンド | サンボンダテ | キンシデシヨウ」 <今度 3本立 禁止でしょう>  
 ○ 「ナントナク | アレ | ダイジェストバンドナ」
- e 「ダイタイネ | ジュウバイネ, | オミズガ」 <大体ね 10倍ね, お水>  
 ○ 「ジブンチガネー | ヤッバリ | ソウイウ ヨウナ ケイトウナングネ」 <自  
 分ちがねえ やっぱり そういふ ような 系統なんだね>
- f • 「マタ | ソレ | モンダイナング」
- (ii) a 「ハッキリスルノハ | マダ | シヨホナングヨ」 <はっきりするのは まだ 初

歩なんだよ

g 「コンゴ ハッセイスル イカナル ジタイモ | イッサイ | キミノ セキニン  
ダヨ」 <今後 発生する いかなる 事態も いっさい 君の 責任だよ>

b 「シズカナ トコロotte | ミンナ | ガリガリ バツカリダ」

d 「ワリカン モンダイ | マタ | ベツノ モンダイ ダヨ」 <割り勘問題 また 別の 問題だよ>

(iii) d 「ダイタイ | ソレ | ナンノ ケイコ?」

注 (ii)は主語が副修語に先行し、(iii)は副修語が主語に先行している傾向のあるもの。

### iii 副修語 2——主語, 副修語, 副修語, 述語

(~(ハ)一副一副一述)

(ii) o 「ヤッパリ | カンゼン ニッテイウ コトハ | ナカナカ | ムリラシ イネ」

o 「アレハ | トニカク | ナンカ | ザッシヨリ オモシロイ モンダネ」 <あれは とにかく なんか 雑誌より おもしろい もんだね>

(iii) o 「オレナンカ | マイバン | オヤジノ オショウバン ダヨ, | コレニ イッパイ  
ダケ」 <おれなんか 毎晩 おやじの お相伴だよ, これに 1杯だけ>

注 (ii) 二つの副修語が副<sub>1</sub>副<sub>2</sub>の順序で表われていることが多い。

(iii) 主語は先行する傾向があるが「マイバン」の位置は自由である。

## (2) 体修語 1

### i 副修語なし——主語, 体修語, 述語

( a ~ハ~ニ一述, b ~(ハ)~<(ニ)一述, c ~ハ~カラ一述 )  
( d ~<(ハ)・ガ~デ一述, e ~ハ~<(デ)一述, f ~ハ~<(カラ)一述 )  
( g ~<(ハ)~ト一述 )

(i) a 「コジン デ ハイル バアイ ニハ | イリグチ ハ | ムコウ ナン デス」

b 「ボク ハ | アン トキ ネ | ウサギ ノ トウ バン ダツ タ」

o 「ワレ ワレ | イヤ ラン シ ッテ コト ハ | タイ ヘン ナ コト デ シ ョ」

c 「キミ タチ ハ ネ | サイ シ ョ カラ | ゼツ タイ ハ ン タイ ダ」 <君たちはね 最初から 絶対反対だ>

d 「アレ | カッソ ウリ ョ ウト クツ ト デ | キュウ ジュウ エン デ シ ョウ」 <あれ 滑走料と 靴とで 90円でしよう>

o 「ドキョウ ノ ホウ ジャ | カワイ ノ ホウ ガ | ウエ カ モシ レ ナイ」

e 「ムコウ ハ | イヤ ラン シ ッテ イウ ノ ハ ネ | ソナ タイ ヘン ナ コト ジャ  
ナイ ン ダ ヨ」

(ii) f 「アレ ハ | マニラ デ テ | フツ カ メ ダ ヨ」 <あれは マニラ 出て 二日目だ>

よ)

- (iii) g △ 「ヤクシジト | モウ ヒトツ | ドコダツケ」 <薬師寺と もう 一つ どころ だけ>

注 (ii)は主語が体修語に先行し、(iii)は体修語が主語に先行する傾向のあるもの。

(ii)の〜<カラ>は「フツカメ」だけへの連体修飾語とも解し得る。

(iii)の「ヤクシジト」は「モウ ヒトツ」と対等の関係にあるとも解し得る。

## ii 副修語 1 ——主語, 体修語, 副修語, 述語

(〜ガ—〜デー副—述)

- (ii)○ 「コン ナカデサ | アナタガ | イチバン | アマトウネ」

(註) この場合の述語は状態を表わす名詞であることに注目すべきである。

## (3) 体修語 2

### i 副修語なし ——主語, 体修語, 体修語, 述語

( a ~ガ—〜カラ—〜デー述, b ~ハ—〜マデ—〜ニタイシテ—述 )  
( c ~ハ—〜<ヲ>—〜<ニ>—述, d ~ハ—〜<ニ>—〜ニツイテ—述 )

- (i) a ・ 「ニホンジャー | コレカラ | コクサクダナー, | ドクシンガ」 <日本じゃあ これから 国策だなあ, 独身が>

b 「ジドウシャ シュウリコウハデスネ | ツイタテカラ ジュウゴニチマデ | イッケンノ キュウジンニタイシテ | ヒヤクサンジュウニンノ キボウナンデスネー」 <自動車 修理工はですね 1日から 15日まで 1件の 求人にたいして 百30人の 希望なんですええ>

- (ii) c 「ゲッシュウハ | サイショ | ドノクライ | ゴキボウデスカ?」 <月収は 最初の くらい ご希望ですか?>

- (iii) d 「ヨウセツカンケイノ ハウニツキマシテハデスネ | ソノ カン | キュウジンノ モウシコミハ | ワズカニ ニケントイウ ホドデス」 <溶接関係の 方につきましたはですね その 間 求人の 申し込みは わずかに 2件という ほどです>

注 (ii)の主語(体修語とも解し得る)は文頭に近く、(iii)の主語は比較的述語に 近く位置している。

### ii 副修語 1 ——主語, 体修語, 体修語, 副修語, 述語

(〜ガ—〜カラ—〜デー副—述)

- (ii)○ 「ニホンジャー | モウ | コレカラ | コクサクダナー, | ドクシンガ」

## 3 主語 2

### (1) 体修語なし

#### i 副修語なし ——主語, 主語, 述語

( a ~ハ一~ガ一述, b ~ハ一~ハ一述, c ~ッテ一~〈ガ〉一述 )  
( d ~ガ一~ガ一述 )

- (i) a 「ソレハ | ネダシガ | モンダイダナー」〈それは 値段が 問題だなあ〉  
(ii) b 「ソノ カミシテルトイウ コトハネ | モウ ヒトツハ | シヨクギョウデスカ?」〈その 加味してるといふ ことはね もう 1つは 職業ですか?〉  
a 「オツトメトイウノハ | トナイ ドノ ヘシガ | ゴキボウデスカ?」〈お勤め  
というのは 都内 どの 辺が ご希望ですか?〉  
c 「サンクミッテ | アルバム | サンサツ?」  
d 「ウチノ オヘヤノ イチネンセイガサ | トワダコノ ソバナノヨネ, | オウ  
チガネ」〈うちの お部屋の 1年生がさ 十和田湖の そばなのよね, おう  
ちがね〉

注 (ii)の先行の主語には体修語と解し得るものもある。

i 副修語 1——主語, 主語, 副修語, 述語

( a ~ガ一~トモ一副一述, b ~〈ハ〉一~モ一副一述 )

- (i) a 「フタリトモ | ホントニ | セイカクガ | ハンタイダネ」〈2人とも ほんとに  
性格が 反対だね〉  
(ii) b 「ワタシタチモ | スゴク | ヘイキヨ, | ソナノ」〈わたしたちも すごく  
平気よ, そんなの〉

注 いずれも二つの主語の順序はかなり自由であるが副修語の位置の自由さは異なる。

(2) 体修語 1

i 副修語 1——主語, 主語, 体修語, 副修語, 述語

( ~ガ一~〈ガ〉一~デ一副一述 )

- (ii) ○ 「ヨツヤライオンザッテ | トコデネ | ソレガ | マタ | ガクセイ | ゴジウエン  
ナンドモノ」〈四谷ライオン座って ところでね それが また 学生 50円な  
んだもの〉

注 かなり相互の位置は不自由である。

4 主語 3

(1) 体修語なし

i 副修語 2——主語, 主語, 主語, 副修語, 副修語, 述語

( ~ハ一~ガ一~ガ一副一述 )

- (ii) ○ 「マズ | ヘイキンネ | ヒナッコガネ | メスハ | ゴヒャクエンナンドス, | ソウ  
バガネ」〈まず 平均ね ひなっ子がね 雌は 500円なんです, 相場がね〉

◆ 名詞文においては一般に体修語の表われることはまれである。用言省略と解し得るような場合や状態を表わす名詞あるいは漢語動詞的な名詞が述語の詞性となっているような場合に表われていることが多い。主語はいろいろな形のもの表われている。

## 副詞文

### 1 主語なし

#### (1) 体修語なし

##### i 副修語なし——述語

(a 副, b 副+文末助詞, c 副+助動詞(+文末助詞),  
d 副詞+助動詞助+形式用言(+助動詞+文末詞語))

a 「ソウ」 ○「ソウオ」 ○「モチロン」 ○「ハジメテ？」

b 「ソウカ」 ○「ドウカナ」 ○「ソウネ」 ○「ソウヨ」 ○「ソウカシラ」

c 「ソウダロウ」 ○「ソウダッタ」 ○「ソウダネ」 ○「ドウナノヨ」 ○

「ソウデショウ」 ○「ソウランシヨ」

d 「ソウジャナイ」 ○「ソウデモナイ」

注 副詞で述語になる語は限られている。「ソウ」「コウ」「アア」「ドウ」「タイヘン」「マダ」「シバシバ」「スベテ」「ユックリ」など。特に副詞だけで文を形成するのは「ソウ」「ナルホド」「モチロン」などで応答表現などに多い。

##### ii 副修語 1——副修語, 述語

(a 副<sub>1</sub>—述, b 副<sub>2</sub>—述, c 副<sub>3</sub>—述)

a 「イマハ | ドウナノカシラ」

b 「チュウド | ピッタリデス」 ○「モウ | スグデショウ」

c 「ケツキョク | ウレナキヤ | ソウデスヨ」 ○「ドウシテ | フツウジャナイノ？」

注 係り助詞のついていることがあるが、係り助詞のつくものは限られている。

##### iii 副修語 2——副修語, 副修語, 述語

(副<sub>2</sub>—副<sub>1</sub>—述)

(i) △「ナカナカ | チュット | タイヘンミタイダケドモネー」

#### (2) 体修語 1

##### i 副修語なし——体修語, 述語

(a ~ニ一述, b ~カラ一述, c ~デ一述, d ~〈ニ〉一述)

- a 「ソウダロウ, | ミシマサンニハ」  
b 「コッチへ カエツテキテカラモ | ソウダッタモン」  
c 「イナカジャ | ソウダロウネ」  
d 「アン トキハ | タイヘンダッタヨ」

注 体修語は限られている。

ii 副修語 1——体修語, 副修語, 述語

(~デ一述)

- (i) ○ 「イナカジャ | マシテ | ソウダロウネ」

2 主語 1

(1) 体修語なし

i 副修語なし——主語, 述語

(a ~ハ一述, b ~モ一述, c ~ダッテ一述, d ~〈ハ〉一述)  
(e ~ガ一述)

- a 「ソロバンハ | ドウデスカ?」 ○ 「ムコウノ ヒトハ | ソウジャナインダヨ」  
b 「ボクモ | ソウナンダ」  
c 「ゴジラダッテ | ソウジャナイ?」  
d 「オレノ | ドウダッタ?」  
e 「コレガ | ソウナンデス」

ii 副修語 1——主語, 副修語, 述語

(a ~〈ハ〉一述, b ~ガ一述, c ~ダッテ一述)

- (i) a 「コナイダ | ドウダッタ? | ジャイアンツ」  
b 「ヌルッタラ | ズイブン | ヒョウメンセキガ | タイヘンネ」 〈塗るったら ずいぶん 表面積が たいへんね〉  
(ii) a 「チカゴロノ ザッソ | タイテイ | ソウダナ」 〈近ごろの 雑誌 大抵 そうだな〉  
c 「トウキョウノ オハカダッテ | ホトンド | ソウジャナイノ?」 〈東京の お墓だって ほとんど そうじゃないの?〉

注 (ii) 主語が副修語に先行する傾向のあるもの。

(2) 体修語 1

i 副修語なし——主語, 体修語, 述語

(~ガ一述)

- (i) △「デコレーション コシラエルヨリモ | マワリノ ドダイ ヌルノガ | タイヘン」  
 <デコレーション こしらえるよりも 回りの 土台 塗るのが たいへん>

### 3 主語2

#### (1) 体修語なし

##### i 副修語なし——主語, 主語, 述語

(a ~ ハー ~ ハー 述, b ~ <ハ> ~ <ハ> 述)

- (i) a 「ゲンジュ ウミンナンテイウナー | タバコッテイウノハ | ドウナンデス?」  
 <原住民なんていうなあ タバコっていうのは どうなんです?>

b 「オバサン | ヤマナンカ | ドウデスカ?」 <おばさん 山なんか どうですか?>

注 用言が省略されているとも考え得るものである。

◆ 副詞文は形容動詞文に準じて考え得るようである。形容動詞文よりさらに体修語の種類や数が少ない。単純な構文のことが多い。

#### 感動詞文

- a 「ア」 ○「アー」 ○「アー」 ○「アーン」 ○「アーン」 ○「アヤー」  
 b 「イエ」 ○「イーエ」 ○「イーエー」 ○「イヤ」 ○「イヤー」  
 ○「イヤイヤ」  
 c 「ウン」 ○「ウン」 ○「ウン」 ○「ウンウン」 ○「ウンーン」  
 ○「ウンント」 ○「ウン」  
 d 「エ」 ○「エー」 ○「エー」 ○「エート」 ○「エツ」 ○「エーツ」  
 e 「オイ」  
 f 「サーサー」  
 g 「ナー」  
 h 「ネ」 ○「ネー」 ○「ネッ」  
 i 「ハ」 ○「ハー」 ○「ハー」 ○「ハーン」 ○「ハーハ」 ○「ハッ」 ○「ハイ」  
 j 「フン」 ○「フーン」 ○「フーンフーン」 ○「フーンフン」 ○「フフン」 ○「フナー」  
 k 「へ」 ○「へー」 ○「へー」 ○「へーエ」 ○「へーへ」  
 l 「ホー」  
 m 「モシモシ」

n 「ワー」

## 2 その他

a 「ゴキゲンヨウ」

b 「サヨウナラ」 ○「オハヨウ」 ○「オハヨウゴザイマス」

c 「カワムラサン」

d 「シメタ」 ○「シマッタ」

注「2 その他」は慣用句と考え得るものが多い。

☞ 感動詞文は論理未分化の表現であり、格の関係がない。構文はきわめて単純である。

以上、主として、文末述語を中心に、これと直接関係を結ぶ一次の部について構文の型を考えた。それぞれに特徴が見出されるが、大ざっぱに

- (1) 自動詞文，他動詞文(1)
- (2) 他動詞文(2)
- (3) 形容詞・形容動詞文，副詞文
- (4) 名詞文
- (5) 感動詞文

のように、構文の上から分類することができるであろう。

(飯豊毅一)



#### 4. イントネーション

1 はじめに 「文型」を、表現意図・構文・イントネーションの三者のからみ合いで、まとめようとするとき、イントネーションとしては、およそ次のような問題が考えられる。

(イ) イントネーションを、どのようにつかまえるか。(形式観や種類分けについて)

(ロ) イントネーションは、「文型」とどのような関係があるか。

もちろん、細かい問題はたくさんあるが、中心的には、この二つの問題に集約されると考えられる。

これらの問題を考えるために、次のような順序・方法で研究を進めた。

- (1) 従来の諸研究にみられるイントネーション論を文献によって学び、形式観などについての参考資料とした。
- (2) 内省法や、演劇資料の観察によって、形式観・種類分けについての考えを検討する一方、ピッチレコーダー等の音声分析機によって材料を分析し、客観的な観察を行い、イントネーションのつかまえ方の参考とした。
- (3) イントネーションとしてのつかまえ方を固めつつ、いわゆる共通資料の録音テープ6巻について、聞き取りを行なって資料の分析を進め、具体例について問題を考えた。具体例の分析に当たっては、一定の表記法に従って、資料台帳およびパンチカードに、イントネーションとしての記号づけを行なった。また、共通資料6巻以外にも、参考となると考えられた録音資料について聞き取りを随時行ない、全般的に、形式観・種類分けが適当であるかどうかについて反省検討を加えた。
- (4) パンチカードの資料に、イントネーションとしてのコードづけを行ない、表現意図・構文との関係を考察・分析しつつ、内省法によって補いながら、「文型」とイントネーションとの関係について考えた。そしてこの結果を、総合的文型をまとめる際に、導入・参画させた。

#### 2 イントネーションのつかまえ方

##### 2・1 イントネーションを、どのように考えたか イントネーションというこ

とばの使い方は、人によって一定していないのが現状である。“intonation”は、外国の学者たちは「文全体の高低関係」という意味に用いているようであり、強弱という要素である“emphasis”“prominence”または“intensity”と並べて使われている。

わが国では、「文音調」と訳されて使われたり(注1)、強弱を含めた概念として使っている人もある(2)。また、文全体の調子でなく、文末・句末・文頭など一部分にみられる高低関係をさして、言う人もみられる。それぞれ、文末のイントネーション、句末のイントネーション、文頭のイントネーションなどと呼ばれているのがそれである(3)。

文全体の高低関係とみるのは、いわば広義の使い方であり、部分的な高低関係とみるのは、いわば狭義の使い方であるということができよう。

われわれは、この狭義的な使い方に従った見方をとり、なお、文末・句末・文頭の全部を「文型」の仕事に取り入れるのではなく、文末のイントネーションだけに限定して仕事を進めた。

句末や文頭のイントネーションも、イントネーション独自の問題としては、興味ある問題ではあるが、いわゆる「文」の陳述の違いをあらわすと考えられる文末部分にあらわれるイントネーションは、句末や文頭に比べて、「文」に対する重みがきわめて大きいと考えられる。そこで、さし当たっては、文末部分だけに限って、みてゆきたいと思う。

われわれは、「文末のイントネーション」、すなわち、「文」の終りに該当する「発話段落」にみられる高低変化は、同一言語形式の「文」が「発話」としてあらわれる際、種々の高低変化の相対的対立としてあらわれ、意味の違いをあらわすという働きをもっている——と考えることから出発した(4)。

文末部分だけに限定したこと、他の音声的要素とのふり分けなどについては以下、順に説明する。

なお、とくに断らない限り、東京方言音調による例についての立論である。これは、共通語を研究対象とする立場にもとづくものである。

注) (1)服部四郎「音声学」。(2)たとえば、石黒魯平「音声学通論」。(3)たとえば、国立国語研究所報告8「談話語の実態」や、川上葵「文頭のイントネーション」(「国

語学」第25輯)など。(4)ここで、「文」「発話」「発話段落」というのは、服部四郎「具体的言語単位と抽象的言語単位」(「コトバ」復刊第2巻の12号)による。

2・2 イントネーション研究の立場について ところで、イントネーションを研究するということは、言語の研究の研究の中で、どういう立場に立つものであろうか。

服部四郎博士は、言語研究における三つの平面として、次の三つを区別されている<sup>(1)</sup>。

- 1) 発話 <utterance> (現実的できごと)
- 2) 文 <sentence> (第1段階の抽象)
- 3) 形式 <form> (第2段階の抽象)

そして、「発話」においては、同一個人においてさえ無限の変種があるが、それらを第1次的に抽象した「文」においては、伝承的に多少固定した音調の型及び強調の型を認める、音素・強め・韻素・高さアクセントなどを取り扱う音韻論的分析は、第2次的に抽象された「形式」の平面に関するものである——とされている。

われわれも、基本的には、この立場に立って考察を進めようとするものである。

すなわち、「発話」を観察すると、確かに同一個人においてさえ、無限に近い変種があることがわかる。

服部博士が「はっきりした、あいまいな、早い、のろい、音調、悲しい、うれしい、怒った、やさしい、大きな、低い声、または強くあるいは弱くさやかれた発話」と指摘されるように、多くの発話がみられる。

しかしながら、“怒った”声で言われた「ホンガ アル」でも、“やさしい”声で言われた「ホンガ アル」でも、あるいはまた、“悲しい”声と“うれしい”声とで言われた「ホンガ アル」であっても、われわれはそれぞれの発話を、同一の「文」と認めており、音調の面に限ってみても、そこに社会的習慣的に固定したある種の型があると認めている。また、「本があるかどうか」を相手にたずねようとして、いわゆるしり上がりの音調で言われた発話においてもそれが、大きな声であろうと小さな声であろうと、または、早い口調であろうとのろい口調であろうと、音調としては、同じ型と認めている。

ここでは、個人的な声の質・緩急・強弱（大きい小さい）・高低（声域の幅またはその中における変動）などは、すべて捨象される。つまり、服部博士のいわれる第1次の抽象を経て「文」が認識されるわけである。この「文」に固定していると考えられる社会的習慣の音調について、われわれは考察を進めようというわけである。

上述のごとき、声の諸要素が、われわれの感情・情緒と密接に結びついていることは確かに間違いがないが、その結びつきは、いわば、本能的・超言語的なものであって、言語研究の立場に立つものとしては、これらのものにこだわっている限りは、それこそ“無限の変種”の前に屈せざるを得ないであろう。

現実には、「アツイナ $\square$  $\square$  $\square$  $\square$ 」と、後に長く伸ばして上下する音調があるとしても、後の $\square$  $\square$  $\square$  $\square$ の部分は、ここで扱うイントネーションの問題とはならない。この種のものが、社会的習慣的に固定した型とは考えられないからである。

ただし、「発話」という現実から、感情・情緒を捨象して、イントネーションを考えるといても、後にふれるように、文末部に間投性終助詞をふくむ形式の「文」のイントネーションについては、その終助詞自体の持つ機能とからみ合った立場での感情・情緒といった要素を導入して考えざるを得ない問題も登場してくる。

注) (1)「メンタリズムかメカニズムか？」(『言語研究』第19・20号)。

2・3 イントネーションを、どのようにつかまえるか それでは、文末部分にあらわれる高低度変化は、どのようにつかまえたらいいであろうか。

われわれは、文末のイントネーションを、次の5種に分けて考えた。

|     |               |
|-----|---------------|
| 平調  | 降調            |
| 昇調1 | ◎型類(特殊なものとして) |
| 昇調2 |               |

以下、これらについて説明する。

[1] 平調について

「本がある」「机がある」という文が、発話としてあらわれる場合を考えてみよう。話し手が、本なり机なりの存在を認めているという事実を、相手に知

らせようとして、ふつうの態度で述べると、次のような高低関係をとるのが認められる。

- (1) ホンガ アル。 (2) ツクエガ アル。

(この場合、高低の段階は、アクセントに準じた高低二段観をとった。イントネーションとして、4段観を設定してつかまえる立場もあるが<sup>1)</sup>、実際的には4段観としての把握は相当困難であり、かつ、後に述べるような昇調・降調という考え方を導入した、相対的な2段観で、充分把握ができると考えられる。そこで、高低2段観によって分析を進めた。ただし、～ガ アルのところのいわゆるポーズの有無については一定した関係は認められないが、ここでは一応ポーズの有る場合を例として考えた。)

この(1)・(2)の文の「文末」は、ともに「ある」であり、その高低形式は、[アル]という音調をとっている。この音調は、いわゆるアクセント形式に従った形式である。ここに挙げた例ばかりでなく、発話を観察すると、終りがしり上りの音調をとる以外のものは、ほとんどこのアクセント形式そのままを反映している音調形式であると言える。

そして、ふつう上述のような判叙表現の場合の発話にあっては、文末に該当する部分の音調形式は、東京アクセントの体系から考えて、次の三つしかない。

- …○ (頭高型)  
○○…○ (中高型)  
○○…○ (平板型)

そして、とくに最終音節自体の音調を考えてみると、高く平らである音節・低く平らである音節の二つのうち、いずれかのものであり、どちらであるにせよ、音節それ自体は平らであるという特徴をもっている。この「平らである」という終末音節の特徴は、後に述べる「昇調1および2」が上昇的傾向をもつ音節であり、「降調」が下降的傾向をもつ音節であるのに対立するものである。

そこで、(1)・(2)のごとき文末音調をもつものを、イントネーションとしては「平調」と名付ける。

この場合、文末部に該当する部分(多くは「文節」または「連文節」と呼ばれる言語形式である)の全体の音調形式が、頭高型をとるか中高型をとるか平

板型をとるとかいうことは、そこに用いられた語（ないしは語連結）がどうい  
うアクセントをもつ語であるかによって決まるだけのことで、どの型をとって  
いようとも、いわゆる「文」の陳述には、なんら関与していない。すなわち

～アル。      ～シロイ。      ～ハタラク。

などの場合を考えてみても、アル（頭高型）・シロイ（中高型）・ハタラク（平  
板型）という型の違いはあっても、いずれも判叙表現を成立させているもので  
あり、それは上述のごとく「平調」という特徴をもつものである。

なお、この種の音調を「しり下がり音調」または「降調」と呼ぶ人もあるが、  
確かに、陳述の言い収めの気分の認められる場合など、そういう呼び方が当り  
そうにも思うが文末部分が平板型音調をとるとき、たとえば〔ボクハ イク〕  
といった発話にみられる文末音調は〔〇〇〕であって、これをしり下がりとか  
降調といった呼び方をするのは適当でないと考えられるし、また、「降調」の  
名称は、「平調」「昇調」と対立する別の意味の術語として用いたから、ここ  
では使わない。

また、文がそこで完結するという言い収めの気分の働くことによって、いわ  
ゆる「自然下降」が文末部分にあらわれることがあり、「平調」の認定を困難  
にすることが多いが、この場合には、後述する「昇調」「降調」との対立によっ  
て、非昇調・非降調と認められれば、これを平調と認めるという態度をとった。

なおまた、文末部に長音を伴った終助詞類をもつ形式のものや、長音を附  
加した形式のもので、音調形式として注意すべきものがある。それは、次のよ  
うな例である。

～ハタラクネー。      ～イクサー。  
～ハタラクナー。      ～イクヨー。  
～ハタラクー。      ～イクー。

これらのものは、文末全体の音調としては、いずれも中高型であり、「平調」  
と、同じイントネーションということになるが、終りの部分の音調上の特殊性  
（〔〇〇〕という形式であること）からは、これらの音調は「平調」とするより  
も、後に述べる「@型類」に属するものと考えらるべきである。

ただし、同じ形式のものでも、次のような音調の場合は、「平調」と考える。

～ハタラクネー。

～カクヨー。

～ハタラクター。

～イクター。

これらの音調形式は、それぞれ、「ハタラクネ」「カクヨ」「ハタラク」「イク」(いずれも「平調」とは別語である形式が、平調としてあらわれているに過ぎず、問題の部分の形式が【○○】という音調形式をとっていないからである。

(註) 1) K.L. Pike “English Intonation” (1949年), または国立国語研究所報告8「談話語の実態」(1953年)のイントネーションの項。 2) これら, 平調・昇調 1. 2・降調のイントネーションは, 文末部の「発話段落」の最終音節の相をつかまえるだけで, 互いの区別が可能である。そういう意味では, 最終音節を「アクセント素」(金田一春彦「日本語アクセント卑見」(「国語研究」第7号))になぞらえて, 「イントネーション素」(または, イントネーム)と呼ぶこともできよう。この点でも, 後述する「@型類」は例外で特殊なものである。

## 〔Ⅱ〕 昇調1について

次に, 同じく「本がある」「机がある」という文を, 話し手が, 相手が本なり机なりの存在を認めているかどうかをたずねようとして発するときには, 次のような音調形式をとるのがふつうである。

(3) ホンガ アル (4) ツクエガ アル

(○という「/」印は, その音節が上昇的音調をとることを示す。)

この発話の文末部の音調形式【○○】について考えてみると, アからルへいったん下がり, そこからまた上昇している音調で, ふつうにいわれるしり上がりの音調である。この場合, アからルへの下降は, そのまま保存されている。この点について, 他のアクセント形式の語が文末部にきた場合を考えてみよう

(5) カラス (6) ココロ (7) イワシ

(5), (6), (7)いずれの場合においても, アクセントとしての弁別の特徴は保存されており, 共通した特徴は最終音節の上昇的傾向である。

そこで, このようなものを「昇調1」のイントネーションと呼ぶ。

ところで, 「昇調1」のイントネーションは, 上に例示したような, いわゆる質問の場合だけには限らない。たとえば, 次のような例がみられる。

ワタシ ヤルワネ。  
コレヲ クダサイナ。

ハヤク コイヨ

このような場合の上昇の傾向は、質問の場合に比べると、どちらかといえばそう際立っておらず、ゆるやかな上昇であることがあるが、両者の区別はむずかしく、一括して上昇の傾向としてつかまえ、「昇調1」とした。

(いわゆる「反問」の表現の場合は、細かに観察すると、最終音節の上昇の幅がふつうの質問に比べて大きいことが多いとか、上昇がふつうの質問に比べてやや遅くはじまる(これは、相手の発話にあらわれた語形式を一度全面的に再現した後、質問をあらわす上昇調を付け加えることによって“反問”が成立するという条件のためと考えられる)ことが多いとか、違いが認められないこともないが、音調形式としては「昇調1」と同じ種類のものとする。)と考える。

なお、上記(3)~(7)の例でみたように、昇調1のイントネーションをとることによって、文末形式のアクセントの核が消失することは一般にはないが、ある特定の語形式が文末に位置している場合には、例外的に下り核が消失することがある。(これについては、すでに川上泰「アクセントとイントネーションの交渉」(国語学第18輯)がある)

たとえば、[イクデシヨウ、クダサイ、イラッシャイ]などがその例で、語としては、この他、「オッシャイ・ナサイ・クダサイ・チョウダイ・マス・マセン・マンヨウ・ダロウ・ウ・ヨウ・タイ・マイ」である。しかし、これらの語形式は、「反問」の場合には、下り核が消失せず、「質問」の場合と同じくその核は保存されることは注意されてよい。

### 〔Ⅲ〕 昇調2について

次に、話し手が自分の述べようとするところを強調して、文末部をとくに卓立させることがある。

コレハ シャジンキ。  
アナタハ ホントニ シリマセンネ。

(〇の「ハ」印は、その音節全体が強く、高められていることを示す。)

この音調形式は、文末部をみると、昇調としてつかまえられるけれども、上に述べた「昇調1」とは異質の昇調である。昇調1は、終りの音節が上昇の姿勢のまま、プツンと切られている感じであるに対して、この昇調2は、終り



の音節全体が強勢に発音され、全体として高まっている。

すなわち、ここで昇調2とする音調形式は、いわゆるプロミネンスが文末部の最終音節だけに加えられた発話の音調をさすものである。ふつう、プロミネンスは、文全体、または文の一部に加えられる強勢の要素と考えられるが、この昇調2は、文末の最終音節に加えられたプロミネンスであるがために、文末のイントネーションとしての意味を持ってくるものである。(注)

注) 大石初太郎 プロミネンスについて (国立国語研究所論集1「ことばの研究」)。

#### 〔Ⅳ〕 降調について

次に、降調と呼ぶ音調形式について説明する。

たとえば、

ソナコト アリマセンヨ (終りが急激に下降しているもの)

のように、終りが単なる言い収めの調子(自然下降)よりも一層際立って下降している文末音調が認められる。これを「降調」と呼ぶことにする。

降調は、聞き手に対して不満の態度・感情を表わすときや、軽蔑の気持を表わすときに、用いられるようである。

この降調は、文末部に「ヨ・カ」など、終助詞を含む形式のばあい用いられることが多く、たとえば体言で終わっている形式などのものは、降調をとりにくいようである。

すなわち、[コレガ イワシ] は出現しにくいので、[コレガ イワシー] のように附加的長音をとった形式で代用させる傾向がある。

#### 〔Ⅴ〕 「◎型類」について

次に、「◎型」と仮に名付けた音調形式について説明しよう。

(イ) この音調は、文末部が「ナ・ネ・ヨ・サ」など主として間投性終助詞をもつ語句形式である場合にあらわれるもので、たとえば、次のような例である。

(A)  $\left\{ \begin{array}{ll} \text{オドロイタナー。} & \text{ヒドイナー。} \\ \text{ソウダヨー。} & \text{クルサー。} \end{array} \right.$

すなわち、終りの助詞が、附加的長音を伴って [○○] という音調としてあらわれ、前要素のアクセント形式としての高い山の部分のほかに、もう一つの高い山の形を示している音調形式であり、いままで述べてきた平調・昇調・

降調といった文末音調とはやや異質のものである。

また、上の(A)の例は、前要素が頭高型または中高型のアクセント形式である語に終助詞が接続している例であるが、次の例は、前要素が平板型のアクセント形式である語に終助詞が接続した例である。

(B)  $\left\{ \begin{array}{ll} \overline{\text{ハタラクナ}}\text{ー。} & \overline{\text{イクネ}}\text{ー。} \\ \overline{\text{ハタラクヨ}}\text{ー。} & \overline{\text{イクサ}}\text{ー。} \end{array} \right.$

以上のうち、(A)の例は、文末全体の音調としては高い山の部分が二か所にある、(B)の例は一か所しかない、という違いはあるが、終助詞が附加的長音とともに〔〇〇〕という音調形式をとっているという共通点がみられる。

すなわち、(A)(B)いずれの場合にも、〔〇〇〕という音調形式で独立して用いられることのある「ナー・ネー・ヨー・サー」が、ポーズをとって独立することなく、密接に前部要素の形式に結びついてでき上った音調形式であると考えられるものである。

(B) この(A)の例(高い山の部分が二か所にあるもの)のごときものを「@型」のA類とし、(B)の例(高い山が一か所のもの)のごときものを「@型」のB類として、もう少し観察してみるといろいろなことがわかる。

(i) A・B類ともに、さらに昇調1をとることがある。

A.  $\overline{\text{オド}}\overline{\text{ロイタ}}\overline{\text{ナー}}\text{ー}$   
 B.  $\overline{\text{ハタラク}}\overline{\text{ナー}}\text{ー}$

これらは、「@型」の昇調1とでもいうべき音調といえよう。また、終りの音節が昇調2の形式をとることもできるわけである。この音調形式をとることができるものは、「ナー・ネー」に限られ、「ヨー・サー」ははずない。「ナー $\overline{\text{ア}}$ ・ネ $\overline{\text{エ}}$ 」がありえても、「ヨ $\overline{\text{オ}}$ ・サ $\overline{\text{ア}}$ 」がないこと、これはすなわち、同じ終助詞でも「ナ・ネ」「ヨ・サ」の間に意味的な機能の対立があることと軌を一にしていよう。

(ii) A類はまた、次のような音調形式をとることがある。

$\overline{\text{オド}}\overline{\text{ロイタ}}\overline{\text{ナー}}\text{ー}$   
 $\overline{\text{オド}}\overline{\text{ロイタ}}\overline{\text{ナー}}\text{ー}$

これらの形式は、「ナ $\overline{\text{ア}}$ ・ネ $\overline{\text{エ}}$ 」「ナ $\overline{\text{ー}}$ ・ネ $\overline{\text{ー}}$ 」など、間投詞としての音調

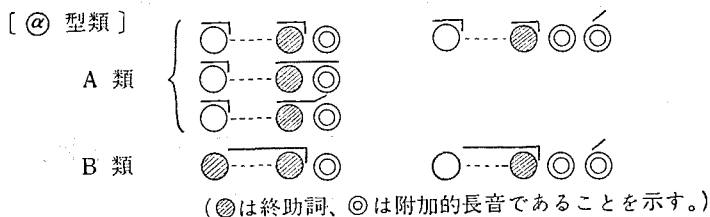
形式が附加されているとみることもできる。

〔「ナエ」「ナー」などが、B類についての場合を考えると、

ハタラクナエ。      ハタラクネエ。  
 ハタラクナー。      ハタラクネー。

のようになるが、音調形式としては、昇調1または平調に吸収されてしまうことになる。）

(v) 以上観察したように、「@型類」はいろいろなヴァリエーションをもつ。これをまとめると次のようである。



(vi) 「@型」の音調形式をとりうる終助詞は、上記の「ナ・ネ・ヨ・サ」のほかにも、次のようなものが考えられる。

～ホントカー。      ～ヤルゼー。  
 ～ヤルゾー。      ～イヤダワー。

これらのものは、@型の音調形式を構成することがあるといっても、「ナ・ネ」などに比べれば、そう活発ではない。これはそれぞれの終助詞の意味的機能の違いに依拠しているようである。

(vii) 平板型のアクセント形式の語が、文末にあらわれる場合、末尾を長音化することによって、次のような音調をとることがある。

～イター。      ～ハタラクター。

文末全体としてみれば「平調」ではあるが、これも〔◎◎〕という音調形式をとっていることによって、ある特種な感情を示している。つまり、〔イター〕という平調と対立した音調〔イター〕と考え、かつは、〔◎◎〕という特徴とにらみ合わせて、この種のものも、@型に準じて考えられるので、この種のことを、@型のC類と呼ぶ。

なお、いわゆる感動詞や応答詞の類については、アクセント形式に、従った「平調」といっても、その形式についてはどれを「平調」と決めることもむずかしいという事情があるから、音調そのままの形式をつかまえることとし、型の分類はあえて行わないで考察を進める方針をとった。つまり、

ネ      アー      ヘエ      ヘエエ      ハイ      ハイ

などのように、他に準じて表記する方針をとった。（「ネ」の類は、一応昇調1と同じ音調形式とみることができる。）

#### 2・4 イントネーション5種のまとめ

以上述べた文末のイントネーションの各種の形式をまとめてみると、次のようになる。

| 〈名称〉           | 〈音調形式〉 | 〈具体例〉                                       |
|----------------|--------|---------------------------------------------|
| 1. 平調          |        | ガク      ガクヨ      ヒドイ<br>イク      ハタラク        |
| 2. 昇調1         |        | ガク      ガクネ      ヒドイ<br>イク      ハタラク        |
| 3. 昇調2         |        | ガクネ      ガクサ      シャジンキ<br>ハタラクネ      ハタラクヨ |
| 4. 降調          |        | ガク      アリマセンヨ<br>イレル      ハタラク             |
| 5. @型類 (特殊なもの) |        |                                             |
| A類             |        | ソウネー      オドロイタナー                           |
|                |        | ソウネーエ      オドロイタナーア                         |
|                |        | ソウネー      オドロイタネー                           |
|                |        | ソウネー      オドロイタナー                           |
| B類             |        | イクネー      ハタラクナー                            |
|                |        | イクネーエ      ハタラクナーア                          |
| C類             |        | イク      ハタラク                                |

(注) 斜線は終助詞、◎は附加的長音であることを示す。

〔付記〕 (1)感動詞・応答詞の音調については、別に音調そのままをつかまえることとし、上記の種類別には入れない。(2)上記イントネーションの5種は、文末以外の「発話段落」にも適用されるものである。

2・5 イントネーションについての実験的調査 イントネーションについての形式観や種類分けを進める過程において、参考資料を得るために、2回にわたって次のような実験的調査を行った。

A) 用意した実験テキストを俳優に実演してもらい、たれを録音したり、音声分析機による機械的分析を行なう。(32年3月)

B) 演劇の脚本を俳優に実演してもらい、これを録音したり、同じく機械的分析を行なう。(33年11月)

なお、2回とも、テキストや脚本による以外に、俳優同志の会話を録音させてもらい、参考資料としたが、そのうちのテープ1巻(30分)は、われわれの共通資料(No.22“葦”雑談)となった。

“実験”を行なった理由は、音声訓練を受けている俳優に実演してもらうことによって、“演じられた”資料、すなわち、よりはっきりしたイントネーション資料を得るためであるとともに、周囲の雑音にさまたげられない防音室で収録するとによって、聴取能率のよい資料を得るばかりでなく、音声分析機—一ピッチレコーダーによって分析が可能であるような良好な録音状態のテープ資料を得るためである。

以下、実験方法・結果などについて、概略を述べる。

〔A〕 1回目の実験的調査

実演) 劇団「葦」に依頼して、東京生まれ、東京育ちという条件で次の男女各3名計6氏を選んでもらった。

小池明義 千葉順二 桶口 功 杉田郁子 翠 潤子  
水原佳代子 (年齢30歳前後で、劇団の幹部級の方)

この6氏に、順次、用意した「実験テキスト」を実演してもらい、録音したいま、テキストの一部を示せば次のようである。

〔I〕 「イワシ(鰯)」というコトバを、次に書いたような気持で、それぞれ言ってみてください。

a) コレガ イワシダ。

- b) イイカ、コレガ イワシダゾ。
- c) コレハ イワシカ。
- d) ナニナニ コレガ イワシダッテ (バカナ ヤツダ)
- e) エ、ナニナニ「イワシ」ッテイッタカ。 (以下略す)

【V】 次の文は、そのときのそれぞれの気持や場合によって、調子がいろいろに違います。どんな調子があるでしょうか、ひとつひとつについて、できるだけ多くの調子で言ってください。

- 1) 書イテハ イケマセン
- 2) 川ニ チガイアリマセン
- 3) 書イタラ ミセテ
- 4) 聞イタノニ チットモ 教エナイヨ
- 5) 見セレバ スグ アゲヨウ
- 6) 食ベナガラ 書クナヨ
- 7) ソンナコト デキルモノデスカ
- 8) 売ッタリカッタリシチャ、イケナインダゾ
- 9) 水が無カッタラ、ドンナニ困ルデショウ (以下略す)

【VI】 「こっちへ いらっしゃい」

上の文を、次に書いたような条件で言ってみてください。

- ① 子供が通りで遊んでいます。自動車が通るんで危なくて見ていられません。で、母(父)親は心配のあまり、思わず……
- ② その子供が、こんどは自分の子供でない場合……

【VII】 次の文を、①ムツとした調子、②やわらかい調子の順で、言ってみてください  
そりゃ 困る。

- ” 困るな(困るわ)。
- ” 困るね(困るわね)。
- ” 困るよ(困るわよ)。
- ” 困るぞ。
- ” 困るさ。
- ” 困るとも。
- ” 困るともさ。

分析) このテキストの実演を一週間にわたって、国語研究所の録音室で行なった。収録テープは、何回か聴取して検討を加えた後、発言の間隔をつめる、余計な発言箇所を除く等の編集を行なって、機械的分析に際して能率向上を計った。

機械的分析は、東北大学工学部電気通信研究所永井研究室に出張し、同室の

「ピッチレコーダー」によって行なった。この分析を行なうにあたっては、同教室の佐藤利男氏の指導協力によるところが大きかった。

この分析の記録は、電磁オシログラフによってオシログラフ・ペーパーに撮影された。その現像はオシログラフ・ペーパーを持ち帰って、国語研究所の暗室で行なった。

(分析の記録図は、方法は違うけれども、結果的には、2回目の実験に用いられた、ペンがきオシロコーダーの記録と同じなので、省略する。)

## 〔B〕 2回目の実験的調査

実演) 俳優座養成所の生徒(最高学年)男女各2名計4氏によって行なった。

小笠原智章 前田 亨 中川一二三 奥出和子

実演材料は、次の二つの脚本によった。

(イ) 華々しき一族 森本 薫作(新潮文庫「現代戯曲集Ⅳ」による)

(ロ) みごとな女 森本 薫作(未来劇場 No.34 未来社版による)

(イ)(ロ)ともに、養成所において練習舞台または実験小公演用に手がけたばかりのものであり、とくに(イ)からは、男性同志の会話、(ロ)からは女性同志の会話の部分を抽出してもらった。

(イ)(ロ)について一部分を示せば、次のようである。

(イ) 須貝(前田) さあ、なんです。

昌允(小笠原) どうぞ……あなたから……。

須 そうですか。つまり、ぼくはこういうことを考えてるんだが……エエッと……ぼくはなんの話をしようとしたのかな。

昌 忘れたんですか? そういうことはありますね。 妙な話ですがあなたは美納と美紓と、どっちがいいと思います。

須 いいっていうのは、どういうことです。

昌 さあ、そう念を押されても困るんだが……まあ、きれいでもいいですよ。どっちがきれいだと思います。

須 こりゃ、むずかしい話だなー。

昌 そんなことはありませんよ。

須 どちらも、同じくらいきれい、じゃ いけませんか?

昌 いけませんよ。それじゃ、返答にならない。

須 待ってください。(考える) どうも……

昌 答えてください。あなたが貰うんだから、どちらを取ります。

須 お菓子だな、まるで。

- (甲) あき子(奥出) どうしたのかしら……。あ、そうか。(ひとりで探し物をしている)

真紀(中川) おや、あき子、あなた何時帰ったの？

あ たった今よ。薬局中でみてたじゃないの。

真 いいえ、ちっとも知らなかった、母さん。

あ そう。みてるんだと思ってた。ごめんなさいね。

真 それはいいけれど、また行かなかったのね。(にやりとする)

あ あら母さん、行ったわよ。

真 お弁当を届けさせたら、おいでになりませんって、変な顔して帰ってきたよ。

ほんとは何処かで遊んでたんだろう。

あ ひどいわ。そうじゃないのよ。ほんとに行ったことは行ったのよ。そしたらね、よし子さんが、帯留ね、先からいってたでしょう、あれを買いに行くから付き合っで呉れているの。

真 お裁縫は厭だし、丁度幸いというところね。

あ でもお友達がそういうもの仕方がないわ。おつきあいよ。

分析) これらの脚本を、国語研究所の録音室でおのおの2～3回ずつ実演してもらって収録した。中で演者が録音を自身で聞いて“一番うまくできた”と判定した録音テープの材料を国語研究所の「ピッチレコーダー」にかけて分析を進めた。この分については、脚本をカナモジ化した台帳を作り、聞き取りをくり返して、イントネーションとしての記号付けを行ない、ピッチレコーダーによる分析記録と比較することによって、“聞き取り”(聴覚)と“機械的分析”(物理的分析結果)との対応関係を検討・反省することに努めた。

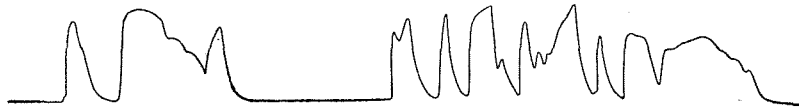
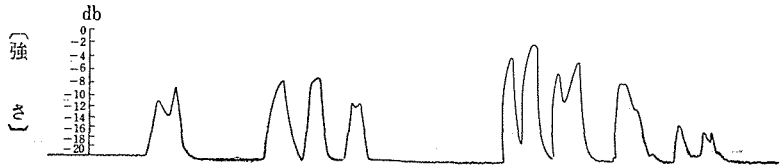
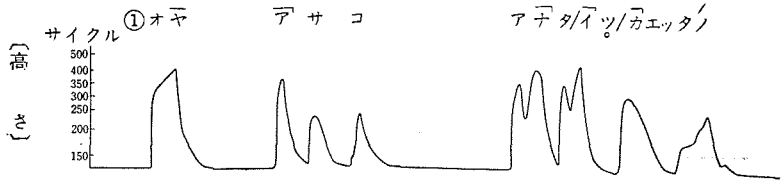
分析結果の一例を、次頁以下に示す。

#### 結果についての検討)

- (イ) 聴覚と物理的分析の結果とは、だいたい一致するところが多く、機械による分析も、有力な参考資料とすることができる。
- (ロ) 両者の一致しない部分も間々みられるが、これは、分析機械の分析能力と関係するもので、被験者の音質によって種々分析上の微妙な調整を必要とし、分析方法に対する熟練が必要である。
- (ハ) 聴覚上で、昇調1か昇調2かについて迷うものについては、機械によっても、はっきりした違いはみられず、なお、問題を残す。



[ピッチレコーダーによる記録図] (縮尺約 $2/5$ )

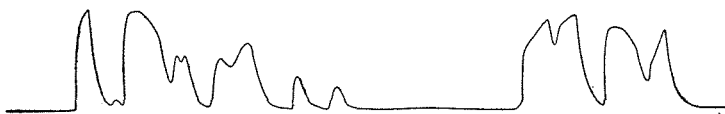


① イ イエ チッドモ/シラナカッタ/カアサン ② ソウ



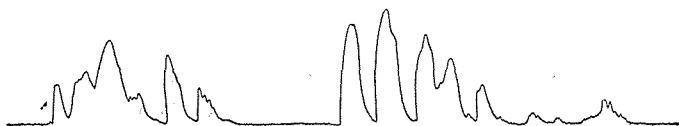
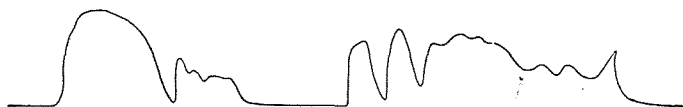
ミテルダト / オモッ テ タ

ゴメンナサイネ



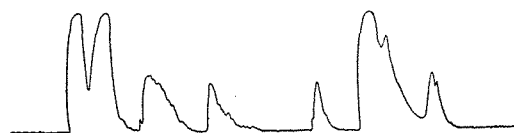
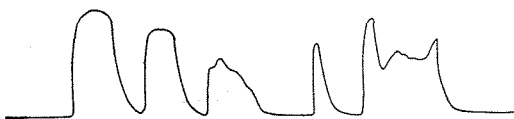
① ツレハナイケド

マタ / イカナカッタノネ



② アラ / カアサン

イッダワヨ



森本薫作  
「見事な女」による。

① 真紀 (母親)  
〈奥出和子〉

② あさ子 (娘)  
〈中川一二三〉

### 実験についての反省)

- (イ) ある形式の文を与えて、実演してもらおうといっても、ふつうの調子(平叙)と、相手に質問する調子といった条件ならば、問題はないが、ただ漠然といろいろの調子、むっとした調子、などという条件をつけても、実演者としては、やりにくいものである。これは、前にふれたように、“発話”としては、無限に近い種々のものがありうるのに対して、「むっとした調子」といった、簡単な条件を与えられても、どれを表現すべきか、なお迷わざるを得ないというのが実状である。とくに、こちらの意図している、「イントネーション」というよりも、他の音声的要素によって表現する場合の方が、よりたくさんありうるわけで、この辺に、イントネーション実演の限界があると考えられる。それでは、条件をより細かく規定すれば、やりやすいかと言えばしよせんそれにも限界があって、感情・情緒の分類がむずかしい問題であると同断である。
- (ロ) そういう意味では、個々の形式をバラバラに実演してもらうよりも、実験Bのごとく、シナリオという形式による方が、“演ぜられた”会話としての限界はあるにしても、イントネーションの基礎的問題を考えるための資料としては、よりよい資料が得られる。
- (ハ) イントネーションの実験としては、上記A・Bの、演ずる形式の実験の他に、聞く側の立場からの実験も考えられてよいであろう。

すなわち、あらかじめ用意され、機械的分析によって整理された材料各種を、聞き手に与え、平調と聞きとった例、昇調と聞きとった例というふうにチェックさせて、問題をさぐるという実験である。

### 3 資料の分析・処理

3・1 分析の手続きと表記法について 共通資料の分析に当たっては、次のような手続きおよび表記法によった。

- ① カナ文字化した資料台帳を見ながら、録音の再生を繰り返して行ない、文内部をポーズおよび高低関係によって、「発話段落」に分割する。そして、文末に該当する「発話段落」の音調を、文末のイントネーションとしてつかまえた。

○「モウ | ウグイスガ | ナイテマスネ。」

「アー | ソデスカ。 | ワタクシ | コトシマダ | イチドモ | キカナイデス。」(3<sup>12</sup>-2-5)

注) | が「発話段落」を示す区切り。

文末以外の「発話段落」についても、参考のために音調を表記した。

② 文末部の音調の表記法は次のような方法によった。

(イ) 全体の音調をアクセントに準じた高低2段観で示し、高い部分に——を附し、下がり目のところは—をもって示す。

(ロ) イントネーションとしての記号は、次のような方法によった。

|      |                 |         |       |
|------|-----------------|---------|-------|
| 平調   | 無記号             | ○.....○ | カクヨ   |
| 昇調1  | /               | ○.....○ | カクネ   |
| 昇調2  | ∧               | ○.....○ | カクネ   |
| 降調   | ∖               | ○.....○ | カクヨ   |
| ㊤ 型類 | ∧, /, ∖ などを併用する | ○.....○ | カクネ—  |
|      |                 | ○.....○ | カクネ—エ |
|      |                 | ○.....○ | カクネ—  |
|      |                 | ○.....○ | カクネ—  |

ちなみに、この表記法は、文末以外の「発話段落」にも適用した。

③ ポーズおよび高低関係によって「発話段落」に区切るということは、現実にはいろいろ問題があるが、一応次のような原則によった。

(イ) 前後にはっきりポーズの認められるものはそれぞれ一つの発話段落とした。

○ヨンジウ | ヨン... | カナ? | (12-19-9)

〈この文は、発話段落としては三つに分れているが、この文の文末のイントネーションとしては「カナ」によって、昇調1とする〉

(ロ) 高低関係から考えて、区切った方が適当と考えられるものは、ポーズがはっきりとは認められなくとも、それぞれ区切った。たとえば、次の例  
○ホネダカ : ドウダカ : シラナイワヨ。では、: の個所にポーズがあるかないかの区別はむずかしいほど、ずらずら一続きに言われている感じであるが、構文上の単位からみても区切った方が適当と思われるので、

区切って二つの発話段落とした。

(ハ) 構文上の単位からは区切られるものであっても、ポーズがなく高低関係からは一まとまりと考えられるものは、一つの発話段落とした。

○ヤリタクナッチャウ。  
 ・ダイブアル。

- ④ あきらかにアクセントの言い誤まりと考えられる例、方言アクセントによる例なども一応その具現している音調のままに表記し、カードにその旨注記した。これらの類も、イントネーションとしての考察上にはさしつかえがないと考えられる。
- ⑤ いわゆる、「模写」「象徴」「節奏」の類（金田一春彦「コトバの施律」（『国語学』第5輯））の音調についても、具現されている音調のままに表記し、その旨注記した。

3・2 資料の処理 上述のような手続きと表記法によって資料台帳の上での分析を何回か繰り返した後、別に用意された文ごとのパンチカードに、音調およびイントネーションとしてのマーク付けを転記し、これにイントネーションとしてのパンチ・コードを行なった。しかる後、「意図表現」「構文」とのからみ合いについて、考察を進めた。

#### 4 結果の概要

共通資料全6巻の資料について、イントネーションの種類別集計をみると、次のようである。

| イントネーションの種類 | 例数( ( )内は全体に対する百分比) |
|-------------|---------------------|
| 平調          | 1,651 (46.4%)       |
| 昇調 1        | 1,158 (32.6%)       |
| 昇調 2        | 52 (1.3%)           |
| 降調          | 6 (0.2%)            |
| ◎型類         | 73 (2.1%)           |
| 感動詞類<br>応答詞 | 622 (17.4%)         |

左表にみる通り、文末のイントネーションとしては、平調および昇調1が他に比べて断然多く出現している。昇調2・降調・◎型類はごくわずかしか現われていない。感動詞応答詞類はやや多くみられる。

もちろん、この調査は、実態調査の目的によって行なわれたものでは



- アレ セイヨウイチジクナンデスヨネ ウチノハ (3<sup>(2)</sup>-9-1)
- シンブンハイタツノ ヒトデスネ (5-4-15)
- ワリアイ タカイ ホウデスネ <割合 高い 方ですね> (5-2-3)
- ドッチデスカト キカレルト コマリマスガネ <どっちですかと 聞かれると 困りますがね> (3-12-24)
- アノ シンブンノニューズデスカ (5-7-17)
- ダイドコロデ ミラレル モンデスカ <台所で 見られるものですか?> (5-9-20)
- シンブン ソレジタイト シテハネー メイワクナ ジョウタイデスカ <新聞 それ自体としてはねー 迷惑な 状態ですか?> (5-6-19)
- キジャナクテ タケデスカ <木じゃなくて、竹ですか?> (5-10-1)
- ケンゾウブツ <建造物?> (5-13-22)
- ヒモジョウ <紐状?> (5-3-15)
- コタイ <固体?> (5-1-5)
- オトコ <男?> (5-4-6)

〔昇調2〕

- ソナナコト イイマスネ <そんなこと 言いますね> (3<sup>(2)</sup>-8-6)
- ウラヤマシイワネ (3<sup>(3)</sup>-6-6)
- ソウデスネ (5-16-6)
- マー ボツニ ナッテンデスネ <まあ、没になってんですね> (5-11-10)
- 〜イッセン ナナヒャク ロクジュウイチ ヨコタ <((住所は)〜1,761 (番地), 横田)> (27-7-14)

〔降調〕

- ソリャ ウイテルンデスヨー <そりゃ (ソレハ) 浮いてるんですよー> (4-2-1)
- ソナナ ゼイタクナモン ツカイマセンヨ <そんな 贅沢なもん 使いませんよ> (5-10-1)
- タカイデスヨ ゴヒャクエント ナルトネー <高いですよ。500 円となるとねー> (16-6-18)
- サンゼン ナナヒャク イクツカ <3千 7百 幾つか> (16-1-6)
- ベンガルノ ソウキヘイカ <「ベンガルの 双旗兵」(映画の題名)か> (16-5-5)

〔㊤型類〕

(1) ○-----⊗ のもの

- ダンダン ハナガ スクナクナリマスネエ <段々、花が 少なくなりますねえ>  
(3<sup>(2)</sup>-4-1)
- ナンカ チョイ チョイット ツツイテ マスネエ <なんか チョイ チョイッ  
と 突っついて ますねえ> (3<sup>(2)</sup>-10)
- ドウユウ イミナンデスカネー <どういふ 意味なんですかねー>(5-10-11)
- オドロイタネー <驚いたねー> (22-11-7)
- タイヘンダロウナー オクサン <大変だろうなー 奥さん> (16-15-22)
- シカシ サンバイ タベタカラナー <しかし、三杯食べたからなー> (16-18-9)
- 〜ウスイカラ ノミイト オモウナー <薄いから、飲みいと思うなー> (16-12-6)
- ナニ シャベロウカナー (22-1-11)
- スゲーナー (16-2-9)
- イヤダヨー (16-22-18)
- コンクリデ デキテンダヨー (22-10-15)
- デモ サンインニンググライ ナゲテ イッテンモ イレナカッタケドサー (16-7-5)

(2) ○-----⊗ のもの

- 〜カンケイ アリマスネー <〜関係 ありますねー> (5-9-9)
- ヨルハ チョット ムリデスヨー <夜は ちょっと 無理ですよー> (5-1-2)
- コレハ コノ ホソナガイ モンダヨネー タジョウ <これは、コノ、細長いもんだよねー。多少> (5-10-9)
- コンドハ チョット ムズカシイデスカネー <今度は ちょっと むずかしいですかねー> (5-11-16)
- ダケド シャシンotte ムズカシインダネー <だけど 写真って むずかしいんだねー> (16-9-8)

⊗ ㊤型類のうち、以上2種以外のものは、共通資料にはあらわれなかった。

〔感動詞・応答詞類〕

前にも述べたように、感動詞・応答詞の類の音調については、他の平調・昇



調などと同じ基準に立って、つかまえることができないという、特殊性があるので、一応、聞きとられたままの音調をカードに記入するという方法をとって、検討した。

全用例について検討してみると、およそ次のような類型がある。

(1) 1音節のもの


- a) 高く平らなもの     $\overline{\text{ア}}$   $\overline{\text{ネ}}$   $\overline{\text{ハ}}$   $\overline{\text{エ}}$   $\overline{\text{ハ}}$  (出典省略)
- b) 低く平らなもの     $\text{ア}$   $\text{エ}$
- c) 昇調1と同じ音調のもの     $\overline{\text{エ}}(\uparrow)$   $\overline{\text{ネ}}(\uparrow)$   $\overline{\text{ハ}}(\uparrow)$   $\overline{\text{ソ}}$

(2) 2音節のもの

- a) 高く平らなもの     $\overline{\text{ア}}$   $\overline{\text{ウ}}$   $\overline{\text{ソ}}$   $\overline{\text{エ}}$   $\overline{\text{ハ}}$   $\overline{\text{ホ}}$   $\overline{\text{ヘ}}$   $\overline{\text{ソ}}$
- b)  $\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}$  と考えられるもの  
 $\overline{\text{ア}}$   $\overline{\text{イヤ}}$   $\overline{\text{ウン}}$   $\overline{\text{エ}}$   $\overline{\text{オイ}}$   $\overline{\text{ナー}}$   $\overline{\text{ネ}}$   $\overline{\text{ハイ}}$   $\overline{\text{ハ}}$   $\overline{\text{フン}}$   $\overline{\text{ヘ}}$
- c)  $\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}$  と考えられるもの  
 $\overline{\text{ア}}$   $\overline{\text{イエ}}$   $\overline{\text{イヤ}}$   $\overline{\text{ウ}}$   $\overline{\text{エ}}$   $\overline{\text{オ}}$   $\overline{\text{ネ}}$   $\overline{\text{ハ}}$   $\overline{\text{ハイ}}$   $\overline{\text{ヘ}}$   $\overline{\text{ワ}}$
- d) 昇調1と同じと考えられるもの  
 $\overline{\text{エ}}(\uparrow)$   $\overline{\text{ソ}}$

(3) 3音節のもの

- a)  $\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}$  と考えられるもの  
 $\overline{\text{ウ}}$   $\overline{\text{ソ}}$   $\overline{\text{エ}}$   $\overline{\text{ハ}}$   $\overline{\text{ハ}}$   $\overline{\text{フ}}$   $\overline{\text{ソ}}$
- b)  $\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}\overline{\text{〇}}$  と考えられるもの  
 $\overline{\text{イ}}$   $\overline{\text{エ}}$   $\overline{\text{ハ}}$   $\overline{\text{ハ}}$   $\overline{\text{ヘ}}$   $\overline{\text{エ}}$   $\overline{\text{フ}}$   $\overline{\text{ソ}}$

これらのほかに、「ウーウン」(あえて示せばといったような音調)とか、言語音としての表記に迷うような、声的感動詞(応答詞)も見られた。

5 イントネーションは「文型」とどのように関係するか

すでに述べられているごとく、本研究は「文型」というものを、「表現意図」「構文」「イントネーション」の三者の総合において把握することを目標とする。

しかしながら、「イントネーション」の他の二者に対する関係は、「表現意図」に対するものと、「構文」に対するものとは、それぞれに異なった関係にあ

る。そして、それぞれ、どういう関係にあるかを考えれば、“三者総合”において、イントネーションがどういう立場に立つかが、おのずと判明するであろう。

そもそも、言語主体が、ある「表現意図」を具体化してあらわすためには、ある「言語形式」に、ある音調を添えて表出し、「文」を成立させる。この際「言語形式」は「構文」という立場からは、およそ次のような類型に分けられる。

- (1) 述語だけの文
- (2) 連用修飾語 述語 という構造をもつ文
- (3) 主語 述語 という構造をもつ文
- (4) 主語 連用修飾語 述語 という構造をもつ文
- (5) その他

こういう「構文」と、本章で見てきた「イントネーション」との関係は、きわめてうすいものである。

述語だけの文であるから平調である、主語＋述語という構造をもつ文だから昇調1である、といった対応関係は全くない。文末のイントネーションは、文の構造の違いには直接的にはほとんど関係がなく、どういう種類のイントネーションであってよい。

そして、以下に見るように、文末——述語部分にあらわれるイントネーションは、その述語が、どういう形式の語構造なり、意味的形式をもっているかによって、こんどは「表現意図」と関係してくる。すなわち、すでに「表現意図」の章で見られたように、「表現意図」をになっている個々の判叙表現なり、質問的表現なりの、それぞれの特徴的形式は、主として文末の述語部分にあらわれるのであって、そういう特徴的形式を通して、イントネーションは「表現意図」と関係がある。

つまり、イントネーションは、「表現意図」とは比較的、直接的な関係にあり、「構文」とは間接的な関係にあると言える。

であるから、「文型」にとってイントネーションがどのような関係にあるかをみるということは、「表現意図」とどのようにからみ合っているかを見ることに、出発点があるといえよう。

5.1 「表現意図」と「イントネーション」との関係 まず、現実に共通資料においては、どういう表現意図にどういうイントネーションがあらわれているかについてまとめてみると、次のようである。

| 表現意図の種類<br>イントネーションの種類 | 詠嘆表現 | 判叙表現  | 要求表現 | 応答表現 |
|------------------------|------|-------|------|------|
| 平調                     | 22   | 1,082 | 226  | 321  |
| 昇調 1                   | 3    | 526   | 545  | 84   |
| 昇調 2                   | 1    | 31    | 4    | 16   |
| 降調                     |      | 5     | 1    |      |
| ◎型類                    | 4    | 46    | 16   | 7    |
| 感動詞                    | 99   |       |      |      |
| 応答詞                    |      |       |      | 523  |

ところで、このようなイントネーションと表現意図とのからみ合いは、平調1は判叙表現だけに対応し、昇調1ならば要求表現だけに対応するといった、1対1の狭義の対応関係ではない。たとえば、平調・昇調

1ともに、表現意図の全4種にあらわれており、“対応”というよりは、結びつきとも言うべき関係である。

ただ、それぞれの表現意図をあらわす文末部の特徴的形式との関係を細かにみると、そこにある種の対応が認められるのである。

たとえば、次のような“体言止め・用言止め”という形式の「文」は、平調ならばともに「判叙表現」であるが、昇調1ならばともに「質問的表現」ということになる。このばあい、表現意図とイントネーションとの関係は密接だといえよう。

- (1) コレハ ツクエ。 コレハ ツクエ?  
 (2) ソコニ アル。 ソコニ アル?

また、命令的表現の形式の「文」は、平調だろうと昇調1だろうと、表現意図は変わらない。

- (3) コッチへ イラッシャイ。 コッチへ イラッシャイ。  
 (4) コレ クダサイ コレ クダサイ。

(註) ただし、イラッシャイ・クダサイという音調形式の昇調1の場合には、多くいわゆる「反問」になることに注意すべきであろう。

また、(1)(2)と同じく体言止め用言止め・の形式の「文」でも、次のようなものは、平調でも昇調1でも「質問的表現」であることに変わりはない。

- (5) ドコノ ヒト?      ドコノ ヒト?
- (6) ドコニ アル?      ドコニ アル?

これは、(1)(2)と異なり、「ドコ」という不定詞を含む形式であるという条件によるものである。

さらにまた、次のような形式の「文」は、平調でも昇調1でも、表現意図は変わらない。

- |      |          |          |          |          |           |
|------|----------|----------|----------|----------|-----------|
| (7)  | コレハ      | ツクエデスヨ。  | コレハ      | ツクエデスヨ。  | } 「判叙表現」  |
| (8)  | ソコニ      | アリマスヨ。   | ソコニ      | アリマスヨ。   |           |
| (9)  | ヒドイナ—    | ノ        | ヒドイナ—    | ノ        | } 「詠嘆表現」  |
| (10) | キレイダワ—   | ノ        | キレイダワ—   | ノ        |           |
| (11) | コッチヘ     | イラッシャイヨ。 | コッチヘ     | イラッシャイヨ。 | } 「命令的表現」 |
| (12) | コレヲ      | クダサイナ。   | コレヲ      | クダサイナ。   |           |
| (13) | ソウデスヨ。   | ソウデスヨ。   | } 「応答表現」 |          |           |
| (14) | ソウジャナイサ。 | ソウジャナイサ。 |          |          |           |

これは、文末部の形式のうち、それぞれの表現意図の特徴的形式ではない(表現意図に直接参与しない)形式の部分(ヨ・ナ・ワ・サ)に添えられたイントネーションであるために、表現意図に変更がないのである。

このようにみえてくると、イントネーションが、文末部の形式を通して表現意図とからみ合っているといっても、それはあくまでも表現意図をあらわす特徴的形式を通しての、からみ合いであることがわかる。そして、文末部の形式が、表現意図に直接参与しない形式をふくむ形式である場合には、表現意図とイントネーションとのからみ合いは、きわめてうすいものであると言えよう。

**5・2 具体例についての検討** 以下、共通資料にあらわれた具体例について、表現意図とイントネーションとのたらしみ合いをみてみよう。

この際、前項でみたように、次の2種の区別を立てて考える。

[A]……表現意図をあらわす特徴的形式で終っている文末部にあらわれたイントネーションの例。

[B]……表現意図をあらわす特徴的形式の後に、表現意図に直接参与しない形式、いわば附加的形式(注)を含む文末部にあらわれたイントネ

ーションの例。

(註) この形式は、ナ・ネ・ヨ・サ・ゾ・ゼ・ワ・ヤなどの、終助詞類が該当する。  
ただし、ナ・ネは、質問的表現の確認要求の形式として、〔A〕類の形式としての機能を持つことがある。

《詠嘆表現と結びついたイントネーション》

1) 平調

〔A〕 「オイシイ／」 (22-17-11)

「コレハ ウマイ／」 (5-4-23)

「キモチワリイ／」〈気持悪い〉 (22-13-18)

これらのイントネーションは、表現意図の特徴的形式に添って、とくに卓立・強調させることなく、ふつうに「文」を成立させて、そこにある意図になっている音調であるから「意図表現音調」と呼ぶことができよう(註)。以下これに準じて考える。

〔B〕 「イイナー／」 (16-11-22)

「イイナー／ アノエイガハ ジッサイ」 (16-3-4)

「オイシイワー／ スゴク」 (22-17-11)

「オイシイナ／ アレネ」 (3<sup>91</sup>-18-5)

これらの形式の文末部は、(a)「意図表現の特徴的形式」+(b)「意図表現に直接参与しない、附加的形式」という構造をもつものであり、音調の立場からすると、(a)の部分が「意図表現音調」をもち、(b)の部分は附加的形式をふつうに(昇調1のように卓立・強調することなく)成立させているという意味で「附加的音調」と呼ぶ。つまり、ここに挙げた〔B〕の用例は文末部が「意図表現音調」+「附加的音調」という音調構造をもっていると考えることができる。以下、これに準じて考える。

2) 昇調1

〔B〕 「イイワネ／」 (3<sup>91</sup>-4-8)

「イイネエ／」 (16-12-2)

「エライモンダナ」 (16-7-6)

これらは、「意図表現音調」+「附加的音調」という音調構造をもっていると

考えられる。そして、この場合の「附加的音調」は、先に述べた平調の例とは違って、昇調1であることに注意したい。昇調1は、質問に使われることもあるが、ここでは相手にうったえかけて卓立・強調するという機能を音調としてもっているから、「附加的な卓立表現音調」と呼ぶ<sup>(注)</sup>。つまり、これらの例は「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」という構造をもっていると考えられる。[A]形式にあらわれる昇調1などの「卓立表現音調」と区別するために「(附加的)」をつける。以下これに準じて考える。

なお、[A]形式の昇調1はない。「オイシイ」「ウマイ」では質問的表現となるからである。

### 3) その他のイントネーション

#### @型類

[B] 「スゲーナーノ」(16-2-9)

「キタナイナーノ」(16-1-8)

これらは、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」である。

(注) 「意図表現音調」「卓立表現音調」という用語は、先に共同研究者の1人宮地が「文末助辞と質問の昇調」(国立国語研究所論集1「ことばの研究」1959年)という論文の中で用いているが、ここでの使い方は、宮地論文と一致しない。

### 《判叙表現と結びついたイントネーション》

#### 1) 平調

[A] 「カミセイヒン」〈紙製品〉(5-5-11)

「シンブンキシヤ」(5-4-11)

「パンラ ツルス ヒモ」(5-3-21)

「ヘンシユウキョクノ カミクスカゴ」〈編集局の紙屑籠〉(5-11-11)

「クモノ ナマエデス キワメテ カンタンナ」(5-1-21)

「タケデネ コシラエテ アルモンデス」(5-10-3)

「キレデハ ナイ」(5-3-10)

「カミデハ チョット マズイ」(5-2-14)

「オッコチソウニ ナッタラ オモイダスデショウ」(5-15-2)

「ジュウゴニチゴロニ ウカガッタラ イイデショウカ」(27-4-10)

これらは、「意図表現音調」である。「～デショウ (カ)」「～ダロウ (カ)」などの形式は、質問的表現にも用いられる。

- [B] 「ス<sup>↑</sup>ポ<sup>↑</sup>ー<sup>↑</sup>ツ<sup>↑</sup>ジャ<sup>↑</sup> ナ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>デ<sup>↑</sup>ス<sup>↑</sup>ヨ<sup>↑</sup>」(5-7-23)  
 「ソ<sup>↑</sup>ソ<sup>↑</sup>ナ<sup>↑</sup> フ<sup>↑</sup>ト<sup>↑</sup>ク<sup>↑</sup> ナ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>ン<sup>↑</sup>デ<sup>↑</sup>ス<sup>↑</sup>ヨ<sup>↑</sup>」(5-3-15)  
 「ソ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>デ<sup>↑</sup> チ<sup>↑</sup>ョ<sup>↑</sup>ット<sup>↑</sup> モ<sup>↑</sup>モ<sup>↑</sup>ミ<sup>↑</sup>タイ<sup>↑</sup>ヨ<sup>↑</sup> コ<sup>↑</sup>ウ<sup>↑</sup>バイ<sup>↑</sup>ッ<sup>↑</sup>テ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>ッ<sup>↑</sup>テ<sup>↑</sup>モ<sup>↑</sup>」(そいで ちょ  
 っと 桃みたいよ 紅梅っていても) (3<sup>(2)</sup>-7-2)

これらは「意図表現音調」+「附加的音調」である。

## 2) 昇調1

- [B] 「ジョ<sup>↑</sup>ウ<sup>↑</sup>タイ<sup>↑</sup>デ<sup>↑</sup>ス<sup>↑</sup>ネ<sup>↑</sup>」(状態ですね) (5-4-5)  
 「ヨ<sup>↑</sup>ビ<sup>↑</sup>ナ<sup>↑</sup>デ<sup>↑</sup>ス<sup>↑</sup>ネ<sup>↑</sup>」(5-12-7)  
 「ワ<sup>↑</sup>リ<sup>↑</sup>アイ<sup>↑</sup> タ<sup>↑</sup>カイ<sup>↑</sup> ホ<sup>↑</sup>ウ<sup>↑</sup>デ<sup>↑</sup>ス<sup>↑</sup>ネ<sup>↑</sup>」(5-2-3)  
 「ベ<sup>↑</sup>ッ<sup>↑</sup>ダン<sup>↑</sup> ツ<sup>↑</sup>カイ<sup>↑</sup>マ<sup>↑</sup>セ<sup>↑</sup>ン<sup>↑</sup>ネ<sup>↑</sup>」(5-1-16)  
 「ダイ<sup>↑</sup>ブ<sup>↑</sup> チ<sup>↑</sup>ジ<sup>↑</sup>マ<sup>↑</sup>ッ<sup>↑</sup>テ<sup>↑</sup> キ<sup>↑</sup>マ<sup>↑</sup>ン<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup>ネ<sup>↑</sup>」(5-3-10)  
 「ヤマ<sup>↑</sup>ダ<sup>↑</sup>ネ<sup>↑</sup> コ<sup>↑</sup>レ<sup>↑</sup>ハ<sup>↑</sup>」(山だね。これは) (5-15-16)

これらは、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」である。

また、[A]形式の例はありえない。「カ<sup>↑</sup>ミ<sup>↑</sup>セ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>ヒ<sup>↑</sup>ソ<sup>↑</sup>ン」「ヒ<sup>↑</sup>モ<sup>↑</sup>」「マ<sup>↑</sup>ズ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>」では、質問的表現となり、「～デス」では反問の表現となる。

「～ネ」の形式は、場合によっては、質問的表現のうちの確認要求の表現となることもある。

## 3) その他のイントネーション

### (i) 昇調2

- [A] 「イ<sup>↑</sup>ッ<sup>↑</sup>セ<sup>↑</sup>ン<sup>↑</sup> ナ<sup>↑</sup>ナ<sup>↑</sup>ヒ<sup>↑</sup>ャ<sup>↑</sup>ク<sup>↑</sup> ロ<sup>↑</sup>ク<sup>↑</sup>ジュ<sup>↑</sup>ウ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>チ<sup>↑</sup> ヨ<sup>↑</sup>コ<sup>↑</sup>タ<sup>↑</sup>」(27-7-14)

これは、「意図表現音調」であると同時に「卓立表現音調」を兼ねている。この場合の「卓立表現音調」は[B]形式にあらわれる「(附加的)卓立表現」とは性質が異なるものと考えられる。すなわち、附加的ではなく、昇調2をとることによって卓立・強調の機能を示し、同時にそれが、「意図表現音調」としての機能をもつわけである。

- [B] 「ソ<sup>↑</sup>ン<sup>↑</sup>ナ<sup>↑</sup>コ<sup>↑</sup>ト<sup>↑</sup> イ<sup>↑</sup>イ<sup>↑</sup>マ<sup>↑</sup>ス<sup>↑</sup>ネ<sup>↑</sup>」(3<sup>(2)</sup>-8-6)

「マー ボツニ ナッテンデスネ」〈マー 没に なってんですね〉(5-11-10)

これらは、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」である。

(㊦) 降調

[A] 「サンゼン ナナヒヤク イクツカ」(16-1-6)  
「ベンガルノ ソウキヘイカ」(16-5-5)

これらは、「意図表現音調」であると同時に「卓立表現音調」を兼ねている。ただし、「卓立表現音調」といっても、特殊なもので、平調のものに比べれば、そこにある種の情緒が感じられるという音調である。

[B] 「ソリャ ウイテルンデスヨー」(5-2-1)  
「ソナナ ゼイタクナモン ツカイマセンヨ」(5-10-1)  
「タカイデスヨ、ゴヒヤクエント ナルトネー」(16-6-18)

これらは、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」である。

(㊧) @型類

[B] 「ウスイカラ ノミイイト オモウナー」〈薄いから 飲みいと 思うな  
→〉(16-12-6)  
「クイズジャ ナカッタデスネー」(5-6-6)  
「コンクリデ デキテンダヨー」(2-10-15)  
「デモ サンインニンググライ ナゲテ イッテンモ イレナカッタケド  
サー」〈でも 3インニングくらい 投げて 1点も 入れなかったけどさ  
→〉(16-7-5)  
「コンドハ チョット ムズカシイデスヨネー」(5-11-16)  
「ダケド シヤシンツテ ムズカシインダネー」(16-9-8)

これらは、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」である。

さて、次に、要求表現は、下位分類として質問の表現と命令的表現とに大きく分けられる。イントネーションとのからみ合いを見る上からも、この二つを区別した方が便利であるから別々に分けて考える。

《質問的表現と結びついたイントネーション》

1) 平調



[A] 「エキタイデシウ?」(5-1-6)

「イロイロ アルデシウ? クモノ ナマエガ」(5-1-18)

「オオイニ アリマスカ?」〈大いにありますか〉(5-7-18)

「カコウヒンデスカ?」(5-2-11)

「カタチハ マアルイデスカ? ナガインデスカ?」(5-3-5)

「ユガワラへ イッタジャナイ?」(3<sup>(3)</sup>-2-1)

「デキルノ タノシミデ イイジャナイ?」(3<sup>(1)</sup>-4-3)

「シンブンシノ イチブ?」(5-5-16)

「ニンゲンノ ジュウタイ?」(5-4-4)

「スポーツニ カンケイ アル?」(5-7-22)

「タベラレル?」(5-9-4)

これらは、「意図表現音調」である。ただし、終りの4例は、体言止め・用言止めの形式でありながら、質問的表現となっているが、これは臨時的なものと考えられる。たとえば、「スポーツニ カンケイ アル」は、「関係がある、またははない」という両様の判断が考えられる場合の一方を、判断の形式で述べて、それが、正しいか、正しくないかの応答を相手に要求することになり、結果として“質問的表現”となるものと考えられる。体言止め・用言止めの形式を質問的表現に用いるためには、本来は、昇調1をとるのがふつうであろう。

## 2) 昇調1

[A] 「ヘンシウキョクト イワレタデシウ?」(5-11-11)

「コドモニ カンケイ アルダロウ?」(5-6-13)

「シンブンノ ニュースデスカ?」(5-7-17)

「ニンゲンデスカ?」(5-4-2)

「シリニ シカレタ シンブンシデスカ?」(5-6-2)

「カミセイヒンジャ ナクッテ センイセイヒンカイ?」(5-3-7)

「アタマニ カブセテ ヒルネ シテルンジャナイ?」(5-7-2)

「ドッチデスカ?」(5-12-7)

「ナニ?」(16-5-23)

「ナーニ？」(16-4-19)

「ウツワ？」(5-3-4) 「アタッタ？」(5-6-1)

「ウツクジイ？」(5-1-8) 「コタイ？」(5-1-5)

「ガイコクヘ ユコウトスル ニッポンジン？」(5-15-11)

「ゲンコウ タノマレテ カク フリーランサー ミタイナモノ？」(5-13-

6)

「バックミタイナ モンダネ？」(22-20-16)

「トニカク クロヤマノー ヒトダカリガ シテイルンダネ？」(5-8-4)

「タベモノニ クツツイテル モンダナ？」(5-2-19)

これらは、主として「意図表現音調」であると同時に、「卓立表現音調」を兼ねている。とくに、体言止め・用言止めの形式にとっては、質問的表現であるためには、昇調1は欠くことができないと言えるほどの条件と考えられ「卓立表現音調」を兼ねているというよりも、昇調1のなかでは、もっとも純粋な「意図表現音調」である。

「～ネ」「～ナ」の形式は、判叙表現としても用いられるが、この質問的表現であるためには、昇調1をとるのが条件である。

[B] 「パカット コワレルノカネ？」(22-19-17)

「コンクリデ デキテンジャ ナイノカネ？」

これらは、「～ネ」で昇調1をとっても、先行する部分に、表現意図をあらわす特徴的形式があるために、単なる「卓立表現音調」でしかなく、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」である。

### 3) その他のイントネーション

#### (イ) 昇調2

[A] 「ウラヤマシイワネ？」(3<sup>(3)</sup>-6-6)

これは、「意図表現音調」であると同時に「卓立表現音調」を兼ねている。

#### (ロ) @型類

「ドウユウ イミナンデスカネー？」(5-10-11)

「ドウカネー？」(16-5-16)

「イ カラダ シテル モンナー？」(16-15-11)

「コレハ コノ ホソナガイ モンダヨネー？ タショウ」(5-10-9)

前2例は、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」であり、後2例は、「意図表現音調」であると同時に「卓立表現音調」を兼ねていると考えられる。後2例の「ナー・ネー」は、聞き手目当てという助詞の機能が㊸型の音調と密接に結びついている。

#### 《命令的表現と結びついたイントネーション》

##### 1) 平調

[A] 「コノ バアイハ タケデ マイリマショウ」〈この場合は「竹」でまいりましょう〉(5-10-3)

「ド ツチカ ハ ッキリ シテクダサイ」(5-1-5)

「オンラセガ イ ッタラ リレキシヨヲ モツテキテクダサイ」(12-19-20)

「チ ョット マ ツテ」(5-2-17)

「ポ スターヲ ド ウゾ」(5-5-5)

これらは、「意図表現音調」である。

[B] 「イ ワナイデ ク レヨ、モウ」(16-21-15)

「ダ カラ イ ットイデヨ」〈だから 行っといでよ〉(16-19-6)

これらは、「意図表現音調」+「附加的音調」である。

##### 2) 昇調1

[A] 「イ カガデスカ」(5-15-4)

「ナ ニカ シャ ベツ テ」(3<sup>III</sup>-1-1)

「ナ ナバンノ マ エデ オ マチニナツテ クダサイ」(12-14-22)

「オ ッシャツテクダサイ」(12-17-2)

これらは、「意図表現音調」であると同時に、「卓立表現音調」をも兼ねている。「～クダサイ」等の命令的表現形式は昇調をとると、卓立といっても、平調に比べると、相手へのいたわり、やさしさが感じられる音調であることに注意したい。

〔B〕 「コノバアイダケハ イワナイデ モライタイネ」(16-11-1)

これは、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」である。

《応答表現と結びついたイントネーション》

応答表現は、指示語を述語文節に含むものと、肯否の概念をあらわすものとの2類に、限定されているので、〔A〕〔B〕の区別は立てないで考える。

### 1) 平調

「ソウ」 「ソウソ」 「ソウデス」 「ソウヨ」 「ソウネエ」 「ソウ  
ダヨ」 「ソウデスヨ」(出典略す)

「ソウナンデス」(3<sup>(2)</sup>-9-8)

「ソウデスカ」(12-17-2)

「サヨウデゴザイマスカ」(12-12-20)

「ソウカモ シレナイ」(3<sup>(2)</sup>-2-5)

「ソウジャ ナインデス」(5-6-16)

「マサシク ソノトウリ」(5-2-20)

「アタシハ ダメヨ、ゼンゼン」(3<sup>(3)</sup>-6-1)

「チガイマシタ」(5-6-4)

これらは「意図表現音調」または、「意図表現音調」+「附加的音調」である

### 2) 昇調1

「ソウ<sup>↑</sup>オ」(3<sup>(3)</sup>-13-8)

「ソウ<sup>↑</sup>ネ」(3<sup>(3)</sup>-11-4)

「ソウ<sup>↑</sup>ネー」(3<sup>(2)</sup>-10-7)

「ソウ<sup>↑</sup>ランイワ<sup>↑</sup>ネ」(3<sup>(2)</sup>-11-19)

「ワタシモ ソウ<sup>↑</sup>ダ<sup>↑</sup>ナ」(3<sup>(3)</sup>-16-13)

「ソウ<sup>↑</sup>デス<sup>↑</sup>ネ」(27-4-23)

「ソウ<sup>↑</sup>デス<sup>↑</sup>ヨ」(5-5-13)

これらは「意図表現音調」、または「意図表現音調」+「卓立表現音調」である。

### 3) その他のイントネーション

(イ) 昇調2

「ソウデス<sup>↑</sup>ネ」

これは、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」である。

(ロ) @型類

「ソウデス<sup>↑</sup>ネエ」(3<sup>(2)</sup>-15-3)

「ソウカ<sup>↑</sup>ネー」(16-21-13)

「ソウダ<sup>↑</sup>ナー」(16-7-14)

「ソウカ<sup>↑</sup>シラ<sup>↑</sup>ネエ」(22-28-12)

「ソウナ<sup>↑</sup>ンジャー ナイ<sup>↑</sup>デシ<sup>↑</sup>ウカ<sup>↑</sup>ネー」(3<sup>(2)</sup>-11-7)

これらは、「意図表現音調」+「(附加的)卓立表現音調」である。

5・3 文末形式とイントネーションとの相関 以上、具体例について、文末部のイントネーションをみたが、同じイントネーションといっても、それがどういふ形式の文末部と結びついているかによって、次のような区別がみられた。

(1) 意図表現音調

[A] 形式の文末部にあらわれたイントネーション

(イ) 平調としてあらわれているもの

(ロ) 昇調1としてあらわれているもの(不定詞を含まない形式を質問的表現として使う場合)

(2) 意図表現音調と卓立表現音調とを兼ねている音調

[A] 形式の文末部にあらわれた、昇調1・昇調2・降調・@型類がこれに当たる。

(3) 附加的音調

[B] 形式の文末部にあらわれた平調のイントネーション

(4) (附加的)卓立表現音調

[B] 形式の文末部にあらわれた昇調1・昇調2・降調・@型類のイントネーション

これを、まとめてみると

① 意図表現音調 { 平調  
昇調1

- ② {意図表現音調} を兼ねているもの {昇調1・昇調2  
卓立表現音調} {降調・㊟型類
- ③ 附加の音調 平調
- ④ 附加の卓立表現音調 昇調1・昇調2・降調・㊟型類

イントネーションと表現意図とのからみ合いをみるためには、①および②をまとめて考察すればよいわけであるが、前章でみたごとく意図表現音調は、平調と昇調1とに主としてあらわれるが、これは、ある文末形式が、平調をとるか昇調1をとるかという対立によって表現意図と関係し合うという対応関係がみられた。そこで、これらの文末形式の立場から、平調のときは、どういう表現意図をもち、昇調のときはどういう表現意図をもつかという点をまとめてみると、次のようになる。この場合、「詠嘆表現」と「応答表現」とは、形式の上から意味的・品詞的限定があって特殊なので、一般的な「判叙表現」と「要求表現（質問的表現・命令的表現）」との二つを軸として考えることにする。

|   | 表現意図からみた特徴的文末形式                                     | 平調だと                                   | 昇調1だと                                    | 備考                                                                                                 |
|---|-----------------------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | ～ダ、～デス、<br>～ウ（意志）                                   | 判叙表現                                   | <反問>                                     |                                                                                                    |
| 2 | ～カナ、～カンラ                                            | 判叙表現<br>(判断未確定の表現)                     | 左に同じ                                     | 昇調1をとったときは、「卓立表現音調」を兼ねる。                                                                           |
| 3 | 体言止め・用言止め<br>～助動詞（～ダロウ、<br>～デショウを除く）<br>～助詞（終助詞を除く） | 判叙表現                                   | 質問的表現                                    | この類の形式が、平調で、質問的表現に用いられることがあるが、これは臨時的なものと考えられる。                                                     |
| 4 | 〔不定詞を含む形式〕                                          | 質問的表現                                  | 左に同じ                                     | 昇調1をとったときは、「卓立表現音調」を兼ねる。                                                                           |
| 5 | 〔命令表現形式〕                                            | 命令的表現                                  | 左に同じ                                     | この類の昇調1は、特殊な昇調1で（256ページ参照）、「卓立表現音調」を兼ねる。                                                           |
| 6 | ～ダロウ<br>～デショウ<br>～ジャンナイ<br>～ノ                       | 判叙、質問<br>両方に用いられるが、<br>平調のときは、主として判叙表現 | 判叙、質問<br>両方に用いられるが、<br>昇調1のときは、主として質問的表現 | 1. これらは、平調・昇調1いずれにおいても、イントネーションそれ自体が、判叙か、質問かの決め手とはならず、前後関係によって決まる。<br>2. 昇調1で判叙表現のときは「卓立表現音調」を兼ねる。 |

|   |                                           |                         |       |        |
|---|-------------------------------------------|-------------------------|-------|--------|
| 7 | ～カ                                        | 判叙，質問<br>いずれにも          | 左に同じ  | 同上1，2。 |
| 8 | ～ナ，～ネ<br>(質問的表現の確<br>認要求のときが特<br>徴的形式となる) | (平調はほ<br>とんどあら<br>われない) | 質問的表現 |        |

この表からわかるように、イントネーションの平調と昇調1との対応が、表現意図の対応として平行的な関係にある形式のものは、3の欄に属する形式のものだけである。他の形式のものは、平調・昇調1の対応が表現意図とは関係なく、昇調1をとっても、その形式が平調をとっているときの表現意図を、音調上から卓立・強調しているに過ぎない。

5・4 まとめ 以上の考察によって、イントネーションと表現意図とのからみ合いについては、次のように要約することができよう。

1) イントネーションと表現意図とのからみ合いは、あくまでも、表現意図をあらわす文末部の特徴的形式を通しての関係の上に立つものである。

2) そのからみ合いは、以下のようである。

(イ) 平調は、判叙表現・要求表現の文末形式と結びついてあらわれ、「意図表現音調」としての機能をもっている。

(ロ) 昇調1は、不定詞を含まない質問的表現と結びついてあらわれ、「意図表現音調」としての機能をもっている。また、その他の場合には「意図表現音調」と「卓立表現音調」とを兼ねる。

3) 意図表現に直接参与しない形式を含む文末にあらわれるイントネーションは、

(イ) 平調としてあらわれ、「附加的音調」の機能をもっている。

(ロ) 昇調1としてあらわれ、「(附加的)卓立表現音調」の機能をもっている。これらのイントネーションは、文末部の音調形式としては、

意図表現音調+附加的音調(または、附加的卓立表現音調)

のように把握されるため、後部要素としての音調そのものは、直接には表現意図とは関係しないものである。

- 4) 昇調2・降調・@型類は、とくにどの表現と結びつくという対応はなく主として「卓立表現音調」の機能をもっている。ただし、表現意図をあらわす特徴的形式と結びついてあらわれている場合には、「意図表現音調」と「卓立表現音調」とを兼ねている。 (吉沢典男)



### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1. 総合的文型の立て方

基礎的研究としての表現意図の研究では、表現意図に必ずる文表現の分類を行ない、それぞれの特徴的文末形式を調べた。この成果を、狭義の一種の文型とよぶことができよう。また、構文の研究では、構文における成分の組み合わせ・配列に関して調べた。この成果も一種の文型とよぶことができる。しかし、はじめからくり返し述べてきたように、われわれはさらに、表現意図・構文・イントネーションの総合としての文型をとらえることを目標としている。その総合的文型について、ここで、具体的に考え、一つの試みとして、簡単な形でまとめてみることにした。

総合のしかたもいろいろあるが、われわれは、表現意図を中心にして、それと構文・イントネーションとの対応をとらえることにした。すなわち、表現意図に必ずる各種の文表現において、どういう構文の型、イントネーションの型が用いられるかを整理してみるという立場をとった。ただし、イントネーションについては、イントネーションのうち、文型のために取り上げられる意図表現音調の体系が単純なものであるため、作業は主として、各種文表現における構文の型を整理することが中心となった。各種文表現に用いられる型を、資料と内省とによって調べ、それぞれの典型を明らかにする作業を試みた。（ここに「典型」というのは、いわゆる「基本文型」のことではない。「基本文型」は、一般に、使用頻度から割り出されるもののように考えられているが、ここにいる「典型」は、使用頻度の観点からは全く離れて、もっぱら文法的構造の上の基本性をおさえるものである。文の類型が、それ自体、基本的なものであるという意味からは、「典型」は文型における基本性のもっとも高いものということになる。）

すでに「研究の概要」で述べたように、文法研究がわれわれの立場である。すなわち、話しことばの文法的構造を明らかにしようとしている。その立場から、研究の今後の進展のための土台を作るつもりで、以上のやり方で、総合的文型について小規模の作業をした。総合的文型の設定のいわば第1段階的作業

である。このような研究の目標にしたがって、この総合的文型の作業では、文表現の分類も、あるところで下位分類を捨てて単純にし、構文の型も比較的単純な構造にして扱うことにした。資料もあえて大量のものによらず、内省を加えてまとめることにした。(具体的には後述。)ことばの学習・教育など実目的のためにも、いっそう詳しい構造の文型の設定が望まれるであろうが、それを次の課題とするものである。

なお、総合的文型の立て方として、同じく表現意図を中心とするにしても、われわれのやり方のほかに、いろいろのものを考えることができよう。たとえば、従来の文型研究のあるものに示されているような、実用的立場のもので、助詞の用法を中心にするものや、助動詞を主とする文末形式を中心にするものなどがある。したがって、われわれの考える総合的文型は、総合的文型の一種であるといわなければならない。

(1) 使用した資料

総合の作業のために、共通資料の中の、No.3「三人の女性」、No.12「職安女子部」、No.16「三鷹学生」の3巻を使った。ただし、詠嘆表現・応答表現、および、特に文例の少ない命令的表現、選択要求の表現については、No.5「新聞人二十のとびら」、No.22「“葦”雑談」、No.27「結婚式申込み」を加えて、共通資料の全6巻を使った。

なお、構文について句の関係は見ないことにしたので、句を含む文はすべて除外した。省略の表現、不整表現もすべて除外した。

(2) 表現意図についての分類

|         |   |          |                       |                         |
|---------|---|----------|-----------------------|-------------------------|
| 1. 詠嘆表現 | { | 未分化的表現   | .....                 | 1・1                     |
|         |   | やや分化した表現 | .....                 | 1・2                     |
| 2. 判叙表現 | { | 判断既定の表現  | .....                 | 2・1                     |
|         |   | 判断未定の表現  | .....                 | 2・2                     |
| 3. 要求表現 | { | 質問的表現    | {                     | 肯定要求 { 確認要求の表現..... 3・1 |
|         |   |          | { 判定要求の表現..... 3・2    |                         |
|         |   | 選述要求     | { 選択要求の表現..... 3・3    |                         |
|         |   |          | { 説明要求の表現..... 3・4    |                         |
|         |   | 命令的表現    | { 消極的行為要求の表現..... 3・5 |                         |
|         |   |          | { 積極的行為要求の表現..... 3・6 |                         |

|         |               |     |
|---------|---------------|-----|
| 4. 応答表現 | 未分化的表現……………   | 4・1 |
|         | やや分化した表現…………… | 4・2 |

判叙表現や応答表現については、さらに下位の分類がある(「表現意図」の章参照)が、ここでは、この段階にとどめた。

### (3) 構文の型の示し方

- 1) 主語の中には主題を含め、主語の構造は省略する。
- 2) 述語の構造は省略し、必要な文末助辞だけを示す。
- 3) 連用修飾語は、副詞的・体言的の2類を一括し、その構造はいっさい省略する。
- 4) 成分の順序に関してはいっさい省略し、型は「主語—連用修飾語—述語」の順で示す。(細部については、「構文」の章参照)

### (4) イントネーションの取り扱い

意図表現音調を中心に取り上げる。(詳細については、「イントネーション」の章参照)

### (5) 記述の体裁

#### ◎表現意図に応ずる文表現のそれぞれについて

- 資料にあらわれた構文の型の列挙 型ごとの例文 イントネーションの付記
- その表現のまとめ
- 資料にあらわれた例文の数
- その表現の典型

#### ◎全部をまとめた典型一覧

列挙された構文の型は、限られた資料からあげられたものであるから、可能な種類を尽くしているとはいえないが、おもな型をもらしていないといえよう。

例文の数は、型の使われ方の上の傾向をさぐるための一つの手がかりとなるものとする。

## 2. 総合的文型の試み

以下は、各表現における構文の型と例文とを中心とし、その簡単なまとめとともに、例文数・典型などを記述したものである。前節にしるしたように、少数の例文から帰納する一方、われわれの内省・観察にもとづく大略のまとめをこころみたものであって、今後の調査・研究にまつべきところが多いが、次年度の独話資料の調査に当たって、一応の日やすとし、また、今後、この観点から文型をまとめる際の、一応の参考とはなるだろうと考える。

型の記述について注意すべき事項はつぎのとおりである。

- (1)成分の順序は、主語・用修語・述語の順。独立語は適宜、その型に従って入れる。  
例文における実際の成分の順は問題としない。
- (2)主語のとの助詞は、一々しるさない。ただし、「ガ・ハ」のみは、使いわけの必要があることが多いから、記入することとした。
- (3)述語のとの文末助辞は、必要な終助詞のみを記入することを原則とし、とくにわかりにくいときに限り、助動詞をも記入する。
- (4)用修語のとの助辞類は、いっさい、記入しない。
- (5)構文の型は、そこにあらわれたものを列挙してあるが、上記助辞類の記入は、とりあげた例文のものに限って記入する。

1 詠嘆表現 言語主体の感情・感覚を表明するもの。他の表現に比べて直接的・非分析的な表現で、(1)感動詞類による未分化的な表現と、(2)形容(動)詞類その他によるやや分化した表現との2つに分かれる。

### 1・1 未分化的な表現

《あらわれた型と例文》

#### 1. 〈声的感動詞〉の独立語

アー アアー オー ハー— フーン ヘー— ホー (出典略)

注 これを「声的感動詞」というのは、上記のカナモジによって十分にその発音をあらわしうるような性質のものではなく、言語音というよりも、“声”に近いものだからである。音調の面からみても、2.の語的類型をもつ感動詞に準じたものもあるが、高低2段観では把握しにくいような複雑なものが多い。

#### 2. 〈感動詞の〉独立語

ア アー オー ハー— フーン ヘー— ホー (出典略)

注 これらの感動詞は、上記「声的感動詞」に比べると、あいまいなものではなく、言語音としての意識に支えられたもので、いわば語的類型をもつものである。音調の面からみても、「声的感動詞」に比べ、「 $\overline{\text{O}}$ 」「 $\text{O}\overline{\text{O}}$ 」「 $\overline{\text{O}\text{O}}$ 」「 $\text{O}\overline{\text{O}\text{O}}$ 」などの類型を比較的是っきり持っている。

## 1・2 やや分化した表現

### 《あらわれた型と例文》

#### 1. 〈形容(動)詞の〉述語

- 「ウマイ！」(5-3-20)
- 「オイシイ！」(22-17-11)
- 「イイナー！」(16-12-2)
- 「キレイダッターネー！」(3<sup>(3)</sup>-10-9)
- 「キタナイナー！」(16-1-8)
- 「エライモンダナ！」(16-7-6)

注 このほか、資料にはあらわれなかったが、「アツッ！」〈熱っ〉、「イタッ！」〈痛っ〉などのように、形容(動)詞の語幹による慣用的表現もある。

#### 2. 用修語—〈形容(動)詞の〉述語

- 「ナカナカ ウマイ！」(5-3-22)
- 「オイシイワー！ スゴク」(22-17-11)

#### 3. 主語(ハ)—〈形容(動)詞の〉述語

- 「コレハ ウマイ！」(5-4-23)
- 「オイシイナ！ アレネ」(3<sup>(3)</sup>-18-5)

注 主語は、「コレ」「アレ」「アノ～」のように、指示詞(または指示詞を含むもの)であることが多い。

#### 4. 主語—用修語—〈形容(動)詞の〉述語

- 「イイナー！ アノ エイガハ ジッサイ」〈いいなー、あの 映画は 実際〉  
(16-3-14)

#### 5. 副詞による慣用的表現

- 「ゼンゼン！」〈全然〉(3<sup>(3)</sup>-4-4)
- 「ナルホド！」(5-4-21, 5-4-23)

注 これらの表現は、述語省略文の転じた独立語文である。

### 《まとめ》

- (1) 未分化的な表現として、感動詞類がある。
- (2) やや分化した表現として、形容(動)詞類によるもの、副詞による慣用的表現がある。動詞による表現はここに入れない。(「表現意図」の章参照)

- (3) 形容(動)詞類による表現は、述語文節に形容(動)詞を含み、判叙表現の文型をもつ。
- (4) 主語は「コレ」「アレ」「アノ～」のように指示詞であることが多い。
- (5) 主語は、多くの場合、「ハ」をとまなう。
- (6) 述語は、その末尾に間投性終助詞「ネ(-)」「ナ(-)」などをとることが多い。
- (7) 主語・用修語をとることはあるが、2つ以上の主語または用修語をとって、長い構造の文をもつことはほとんどない。
- (8) 文型としては、判叙表現と同じ形式による表現もあるが、詠嘆表現は、音声的要素としてはある特徴をもっている。すなわち、文全体が、やや高い音域で発せられるとか、速度が増大しているとか、プロミネンスが附加されているなど、「！」によって象徴されるごとき音声的特徴をもつものである。

《例文の数》

| 1・1 未分化的な表現 | No.3 | No.5 | No.12 | No.16 | No.22 | No.27 | 計   |
|-------------|------|------|-------|-------|-------|-------|-----|
| 1.〈声的感動詞の〉独 | 36   | 63   | 2     | 14    | 8     | 2     | 125 |
| 2.〈感動詞の〉独   |      |      |       |       |       |       |     |
| 計           | 36   | 63   | 2     | 14    | 8     | 2     | 125 |

| 1・2 やや分化した表現 | No.3 | No.5 | No.12 | No.16 | No.22 | No.27 | 計  |
|--------------|------|------|-------|-------|-------|-------|----|
| 1.〈形(動)の〉述   | 5    | 7    | 0     | 5     | 2     | 1     | 20 |
| 2.用〈形(動)の〉述  | 0    | 1    | 0     | 0     | 1     | 0     | 2  |
| 3.主〈形(動)の〉述  | 1    | 1    | 0     | 0     | 1     | 0     | 3  |
| 4.主用〈形(動)の〉述 | 0    | 0    | 0     | 1     | 0     | 0     | 1  |
| 5.副詞による慣用的表現 | 0    | 3    | 0     | 0     | 1     | 0     | 4  |
| 計            | 6    | 12   | 0     | 6     | 5     | 1     | 30 |

## 《この表現の典型》

### 1.1 〈感動詞の〉独立語

### 1.2 (主語(の))—(用修語)—〈形容(動)詞の〉述語

## 2 判叙表現

2.1 判断既定の表現 話し手が、自己の既定の判断のしかたを含むさまざまなことがらを、述べあらわすものである。

### 《あらわれた型と例文》

## 1 述語

### 1) 体言どめ

「ラーメンバツカリ」〈ラーメンばかり〉 (3<sup>(3)</sup>-18-7)

「ソノ マエ」〈その 前〉 (3<sup>(3)</sup>-9-9)

「アサ クジカラ ユウガタノ ゴジゴロマデ」〈朝 9時から 夕方の 5時ごろまで〉 (12-8-4)

「ワブンカ エイブン」〈和文か 英文〉 (12-5-17)

「ベンガルワンノ ソウキヘイ」〈ベンガル湾の 槍騎兵〉 (16-6-4)

「ホント」〈本当〉 (16-22-5)

「サンビヤクエン ト ゴヒャクエン」〈3百円と 5百円〉 (16-6-14)

注 形容動詞語幹の単独用法は、体言に準ずるものと認めて、ここにおさめた。

### 2) 用言

「ナル」〈(酒のさかなに)なる〉 (3<sup>(3)</sup>-17-3)

「ジョウブデス」〈丈夫です〉 (12-21-11)

「ベンリデス」〈便利です〉 (12-14-13)

「オモシロイ」 (16-5-5)

「イヤーダ」 (16-22-19)

注1 用言に修飾語のつく型は後述するから、用言の述語は、つねに用言単独であり、「用言どめ」という必要がない。

注2 動詞単独の例文は、ごく少ない。

### 3) 副詞

「エー モチロンー」 (12-3-10)

### 4) 体言+助動詞

「コレカラナンデス」 (3<sup>(3)</sup>-6-6)

「タベナイ コトデハナイ」〈食べない ことではない〉 (3<sup>(3)</sup>-16-4)

「ナラッタバカリナンデス」〈習ったばかりなんです〉 (12-5-8)

「ヨンジユウニデス」〈42です〉 (12-19-7)

「キョウダイブンダ」〈兄弟分だ〉 (16-22-13)

「キノウマデダッタ」〈昨日までだった〉 (16-5-3)

注 上例に見られるように、「体言」としたもののなかには、体言相当と認められるものを含んでいる。

#### 5) 用言+助動詞

「イッタ」〈行った〉 (3<sup>(1)</sup>-7-3)

「タイヘンダッタ」〈大変だった〉 (3<sup>(1)</sup>-7-4)

「ナインデス」〈無いです〉 (12-13-5)

「ノレマス」〈乗れます〉 (12-20-8)

「イパッテル」〈威張ってる〉 (16-13-9)

「ガッカリシチャッタ」 (16-9-1)

#### 6) 副詞+助動詞

「ソウデモナイ」 (12-2-17)

#### 7) 体言 (+助動詞) +終助詞

「トツテモ イイ センセイ ナノヨ」〈とっても いい 先生なのよ〉 (3<sup>(1)</sup>-1-10)

「ボウフウジャナイヨ」〈暴風じゃないよ〉 (3<sup>(1)</sup>-2-7)

「シゴセンエンクライデシヨウネー」〈4・5千円くらいでしょうねー〉 (12-3-15)

「ニホンタイプネ」〈日本タイプね〉 (12-5-19)

「ナイヨウジャンインデスモノネ」〈内容じゃないんですものね〉 (16-12-13)

#### 8) 用言 (+助動詞) +終助詞

「オモシロイノヨネ」 (3<sup>(1)</sup>-11-6)

「ダメデスネ」 (3<sup>(2)</sup>-1-1)

「フツチャウノ」〈降っちゃうの〉 (3<sup>(1)</sup>-10-6)

「イタダイテタノネー」 (12-3-7)

「ニガインデスヨ」〈苦いんですよ〉 (16-12-7)

「オコラレチャッタモンナー」〈怒られちゃったもんなー〉 (16-2-6)

「ヨッパラッテタヨ」〈酔っぱらってたよ〉 (16-11-10)

#### 9) 副詞 (+助動詞) +終助詞

「チョットネ」 (3<sup>(2)</sup>-3-8)

「コウダヨ」 (16-8-8)

「フワフワフワーダヨ」〈フワフワフワーだよ〉 (16-8-8)

注 述語は、当然のことであるが、「詞+文末助辞」のかたちをとる。ややこまかく



言えば、「体言マタハ用言マタハ副詞十助動詞十終助詞」のかたちをとる。ただし、文末助辞は、かたちのうえにあらわれないことがある。これも、こまかく言えば、助動詞または終助詞、またはその両者が、かたちのうえにあらわれないことがある。上記した述語の構造は、1) から 9) までで、そのすべてをつくしている。以下に、文の型のなかに用いられる述語は、みな、その意味で、このような内部構造を持つ可能性があるが、つねに、そのすべての構造を持ちうるかどうかはわからない。くわしくは、「構文」の章を参照されたい。ここでは、述語だけの文について、これを、やや、こまかく見て、以下の文の型にあらわれる述語の構造を、一つ一つ述べる手間を省略することとした。

## 2. 用修語—述語

- 「アマリ ウマクナイミタイ」(3<sup>(3)</sup>-5-10)  
 「ア、コナイダ タベタ」〈あ、こないだ 食べた〉(3<sup>(3)</sup>-19-8)  
 「ミンナガ ノムノ シラナカッタ」〈みんなが 飲むの 知らなかった〉(3<sup>(3)</sup>-5-3)  
 「アノー ケイトモノヲ ケンビンシテタンデス」〈あのー 毛糸ものを 検品して なんです〉(12-1-14)  
 「イマノトコロ ナインデス」〈今の所 無いんです〉(12-8-10)  
 「ソレジャ キョウハ ケッコウデス」〈それじゃ 今日は 結構です〉(12-19-24)  
 「トタンニ クビダ」〈とたんに 首だ〉(16-17-16)  
 「アトー ニサンブン」〈あとー 2・3分〉(16-22-18)  
 「チュウガクン トキカラ ナゲテル」〈中学ん 時から 投げてる〉(16-7-13)

## 3. 用修語—用修語—述語

- 「モウ チョイチョイ キテマスヨ」〈もう ちょいちょい 来てますよ〉(3<sup>(2)</sup>-2-8)  
 「オイシインダ、マタ ソノ トキハ」〈おいしいんだ、また その 時は〉  
 (3<sup>(2)</sup>-14-1)  
 「アアイウノ ミンナ キッテシマウダソウデスヨ」〈ああいうの みんな 切っ てしまうんだそうですよ〉(3<sup>(2)</sup>-4-5)  
 「アノ タイプト ジムヲ スコシ ヤリマシタ」〈あの タイプと 事務を 少し やりました〉(12-9-1)  
 「ドウモ オテスウ カケマンタ」〈どうも お手数 かけました〉(12-12-20)  
 「ヤハリ アノー トウキョウノ マンナカガ イイト オモイマスケド」〈やはり あのー 東京の まん中が いいと 思いますけど〉(12-7-5)  
 「コレダケデ ロクジュウエングライ スッタモン」〈これだけで 60円ぐらい 買ったもん〉(16-2-11)  
 「キノウ ウエノノ トシヨカンヘ イッタンダヨネ」〈昨日 上野の 図書館へ 行ったんだよね〉(16-3-8)  
 「ソレデ カエリニ 『チャンピオン』 ミテキタ」〈それで 帰りに「チャンピオン」

見て来た〉(16-3-13)

#### 4. 用修語—用修語—用修語—述語

「チャント ヤッパリ イッペン ヤイテアンノネ」〈ちゃんと やっぱり 一べん 焼いてあんのね〉(3<sup>(9)</sup>-18-1)

「イツモ コウ スイッスイッスイッスイット カラダヲ ウゴカシテイルンデスネ」〈いつも こう スイッスイッスイッと 体を 動かしているんですね〉

(3<sup>(2)</sup>-3-8)

「ダケド コノゴロハ モウサ キリカエガ バット ツク ヨウニナッタ」〈だけ ど このごろは もうさ 切りかえが バット つくようになった〉(3<sup>(9)</sup>-12-5)

「ツマリネ アンノ アナタノ バアイネ チュウガッコウソツギョウグライデネ マ ジムインサン ナル バアイ ダイタイ ミナライノ ジムデスネー」〈つまりね あの あなたの 場合ね 中学校卒業ぐらいでね ま 事務員さん なる 場合 大体 見習いの 事務ですね〉(12-17-15)

「ウエカラ コウ ナンカ ツルスンダヨ、ヤネヲ」〈上から こう なんか 吊る すんだよ、屋根を〉(16-14-10)

「コノ マエン トキ ヤッパリ スズキサン トコ イッタンダヨ」〈この 前ん 時 やっぱり スズキさん 所 行ったんだよ〉(16-12-9)

「イロンナ トコ イクカラネ、ショツチュウネ、ジュンギョウダノナンダノ」〈い ろんな 所 行くからね、しょっちゅうね、巡業だのなんだの〉(16-15-22)

#### 5. 用修語—用修語—用修語—用修語—述語

「モウ アレー サイゴノ トキナンカ ヒトノ ステタ パイナンカ ミテイナイ ナ」〈もう あれー 最後の 時なんか 人の 捨てた 牌なんか 見ていないな〉(16-22-23)

注 「アレー」は「アレデハ」の意だろうと解釈したから用修語と認めたが、間投語とすれば、用修語は1つ減ずる。用修語4つと見られるのは、この1例だけであった。

#### 6. 主語—述語

##### 1) 述語が体言文節または副詞文節のもの

「アノ ヒトタチハ イッパク」〈あの 人たちは 1泊〉(3<sup>(9)</sup>-5-6)

「ウチノ コモ ソウ」〈うちの 子も そう〉(3<sup>(9)</sup>-19-10)

「コレネ コンナ オオキナネー ミナンデスヨ」〈これね こんな 大きなねー 実なんですよ〉(3<sup>(2)</sup>-7-7)

「アレハ スミダク リョウゴクデスネ」〈あれは 墨田区 両国ですね〉(12-8-18)

「シュミハ ドクショデス」〈趣味は 読書です〉(12-21-3)

「イチバン サイゴガ アガッタノハ ソノ マエ」〈一番 最後が 上がったのは

その 前〉 (16-1-18)

『ベンガルノ ソウキヘイ』 ナンテネー ワタクシノー ジョガッコウノ ニネン  
グライノ トキダッタ」〈「ベンガルの 槍騎兵」なんてねー 私のー 女学校の  
2年ぐらいの 時だった〉 (16-5-21)

「オノデラガ スキナノ ミヤモト ムサン」〈オノデラが 好きなの 宮本武蔵〉  
(16-20-5)

## 2) 述語が用言文節のもの

「ウデガ チガウ」〈腕が 違う〉 (3<sup>(1)</sup>-20-3)

「モラッタ ホウハ ワスレテイル」〈もらった 方は 忘れている〉 (3<sup>(1)</sup>-7-8)

「イロイロナ カタチガ アルノネ」 (3<sup>(1)</sup>-6-4)

「オキュリョウガ ノビルンデスヨ」〈お給料が 延びるんですよ〉 (12-3-8)

「ソウデスネー キョジュウチカラ チカイ ホウガ イイデスヨ」〈そうですねー  
居住地から 近い 方が いいですよ〉 (12-21-20)

「ソレダケノ ドキヨウハ ゴザイマセン」〈それだけの 度胸は ございません〉  
(12-11-18)

「オヨイデイク トコロ ウツッテル」〈泳いでいく 所 写ってる〉 (16-9-6)

「シラナイ、ボクダッテ」〈知らない、僕だって〉 (16-19-2)

「ノメナイネ、ビールダケハ」〈飲めないね、ビールだけは〉 (16-12-5)

注 ここでは、述語の構造のこまかいことは、問題としないで、2分するにとどめた。主語は、体言または体言相当の語句に、助詞「ガ・ハ・ナンテ・ダッテ」などがつくことがある。零記号㊦のばあいもある。くわしくは「構文」の章を参照されたい。以下、主語・述語については、これ以上、こまかくは、述べない。判叙表現にあっては、「構文」の章に扱うところを、ほとんど、適用しうるからである。ただし、格別の必要を認めたときは、適宜、記す。

## 7. 主語<sup>(イ)</sup>—主語<sup>(カ)</sup>—述語

「ココロノハネ アノ シャリシャリッテ アジガ アルノネ」〈こころのはね あ  
の シャリシャリって 味が あるのね〉 (3<sup>(1)</sup>-17-4)

「ワタン ヤマキタノ ホウニ イチド イッタ コト アルンダケド」〈私 山北  
の方に 1度 行った こと あるんだけど〉 (3<sup>(1)</sup>-13-4)

「ココラヘンノハ アジガ ナイノヨ」〈こころ辺のは 味が ないのよ〉  
(3<sup>(1)</sup>-17-2)

「ワタンハ ソウカヤキガ スキダ」〈私は 草加焼が 好きだ〉 (3<sup>(1)</sup>-18-3)

「ソレハ ジシंगा アリマス」〈それは 自信が あります〉 (12-20-12)

「ナイ ホウガ イイヨ、アンナノ」〈無い 方が いいよ、あんなの〉 (16-14-13)

「オッシュウジ ヘタナンデス、ジガ」〈お習字 ヘたなんです、字が〉 (12-17-6)

注 1. 最後の例は、意味的に重複した一種の不整表現とも見られるが、この型とも

見られるので、参考のために添えておく。

注 2. 主語のかさなるとき、ふつう1つは主題をあらわす。以下同じ。

## 8. 主語—用修語—述語

「ワタシナンカ マダ ダメダワ」〈私なんか まだ だめだわ〉(3<sup>(3)</sup>-12-7)

「モウ ウグイス ナイテマスネ」〈もう 鶯 鳴いてますね〉(3<sup>(2)</sup>-4-1)

「ソイデネ ダイタイネ ジュウバイネ、オミズガ」〈そいでね 大体ね 10倍ね、お水が〉(3<sup>(3)</sup>-12-6)

「アノー ベツニ ナイショクッテ シタ コト ナインデスケド」〈あの— 別に内職って した こと 無いんですけど〉(12-10-6)

「コドモハ アノ ブンキョウクノ ホウノ ガッコウヘ カヨッテイルンデス」〈子供は あの 文京区の方の 学校へ 通っているんです〉(11-11-3)

「シジスル ヒトガ ナンワリカ イルンダヨ」〈支持する 人が 何割か いるんだよ〉(16-21-20)

「スピードナンカ ゼンゼン デナインダモン」〈スピードなんか 全然 出ないんだもん〉(16-8-2)

「オレガ トッタノハ ダイタイ イインダヨ」〈おれが 取ったのは 大体 いいんだよ〉(16-9-20)

## 9. 主語—主語—主語—述語

「ショウセツナンテ アレ ナイモン、アレ」〈小説なんて あれ 無いもん、あれ〉(16-22-6)

注 1例だけである。これは、最後に主語（「アレ」）のくりかえしがあらわれるので、臨時的な形と認められる。したがって、型としては、「主語—主語—述語」（「ショウセツナンテ アレ ナイモン」）と認めてよい。しかし、ここにあげておくのは、指示語が先行または後行することによって、主語または用修語がくりかえされることは、ときに見られることであって、これは、話しことばの一つの文型に準ずるものと認められないではない。この例は、たまたま、それが、両方とも指示語であったにすぎないと解釈しても、あやまりではないと考えられるから、その意味で、念のため、示す。

## 10. 主語<sub>(イ)</sub>—主語<sub>(ロ)</sub>—用修語—述語

「ヤッパリ タベル モノハ ミタメモ キレイナ ホウガ イイワネ」〈やっぱり 食べる 物は 見た目も きれいな 方が いいわね〉(3<sup>(3)</sup>-3-8)

「ワタシ ソンナ コト ナイワ、チットモ」〈私 そんな 事 無いわ、ちっとも〉(3<sup>(3)</sup>-3-8)

「トクベツ ナンニモ トクギハ ナインデスノ」〈特別 なんにも 特技は 無いんですの〉(12-11-12)

「アレモ サイゴニ ゲーリークーバーガ シヌンダ」〈あれも 最後に ゲーリー  
クーバーが 死ぬんだ〉(16-5-8)

「パチンコハ ミンナ ホントニ スキダネ、デモ」〈パチンコは みんな 本当に  
好きだね、でも〉(16-2-7)

#### 11. 主語—用修語—用修語—述語

「ボクモ ソウイウ コトハ センゼン シラナインダ」〈僕も そういう 事は  
全然 知らないんだ〉(16-20-1)

「ボクナンカ トウキョウカラ イッポモ デナイゼ」〈僕なんか 東京から 1歩  
も 出ないぜ〉(16-8-14)

「ヤマナカクン コノゴロ パチンコ ヤッテルンダッテネ」〈ヤマナカ君 このご  
ろ パチンコ やってるんだってね〉(16-12-12)

「アノ トキ ズイブン ヒョウバン ヨカッタネ」〈あの 時 随分 評判 よか  
ったね〉(16-5-4)

#### 12. 独立語, 主語—用修語—述語

「ソノ マエノ カイネ, アレハネー ズルインダヨネ, スゴクネ」〈その 前の  
回ね, あれはねー ずるいんだよね, すごくね〉(16-1-19)

注 提示の独立語のある文例は、この1例だけであった。

#### 13. 主語—主語<sub>(s)</sub>—主語<sub>(o)</sub>—用修語—述語

「ジツサイ アノ エイガ ハクリョク アッタネ, アスコノ アノ ボクシングノ  
トコハ」〈実際 あの 映画 迫力 あったね, あすこの あの ボクシングの  
所は〉(16-4-1)

注 前記9・とは、やや性質のちがう、主語3つのある文例で、これ1例だけであった。  
最後の「アスコノ アノ ボクシングノ トコハ」が、“所”をあらわす語である  
ために、用修語に近いものであって、その意味で、これは、「主語—主語—用修語  
—用修語—述語」という後記14・の型に準ずるものである。

#### 14. 主語<sub>(s)</sub>—主語<sub>(o)</sub>—用修語—用修語—述語

「ダイタイ コノヘンハ ヤハリ コイシカワトカネ ヤッパリ コッチノ ホウメ  
ンガ オオインデスヨ」〈大体 この辺は やはり 小石川とかね こっちの 方  
面が 多いんですよ〉(12-2-21)

「シカン アレハ ボクノ ホウニモ チャント イチリ アルンデスネ」〈しかし  
あれは 僕の方にも ちゃんと 一理 あるんですね〉(16-20-18)

#### 15. 主語—用修語—用修語—用修語—述語

「ノンチャンハ ヨク ヤマヘ イッタワネ, キョネンハ」〈ノンちゃんは よく  
山へ 行ったわね, 去年は〉(3<sup>(9)</sup>-2-1)

「ソウイエバ ツボミガ ダイブ アリマスネ、マダ」〈そう言えば つぼみが 大部 ありますね、まだ〉(3<sup>12</sup>-6-5)

「デモ ダイナンカ アノー アレネ ジキノ トキハ スゴク タクサン モ マエカラ ツクットクラシイワネ」〈でも 台なんか あのー あれね 時期の 時は すごく 沢山 も 前から 作っとくらしいわね〉(3<sup>11</sup>-10-8)

「オレナンカ マイバン オヤジノ オジョウバンダヨ、コレニ イッパイダケ、マイバン」〈おれなんか 毎晩 おやじの お相伴だよ、これに 1杯だけ、毎晩〉(16-12-4)

注 最後の用例は、くりかえしによる用修語で、臨時的な形と認めることもできる。

## 16. 主語<sub>(イ)</sub>—主語<sub>(カ)</sub>—用修語—用修語—用修語—述語

「ジムインサンハ ダイタイ イマ イチバン オオインデスヨ、キュウジンガネ」〈事務員さんは 大体 今 一番 多いんですよ、求人がね〉(12-13-18)

「ナンカ ナマデ スグ タベラレル モノヲ カウノハ チョット キモチガ ワルイワ、ドウシテモネ」〈なんか 生で すぐ 食べられる ものを 買うのは ちょっと 気持ちが 悪いわ、どうしてもね〉(3<sup>11</sup>-4-1)

## 17. 主語—用修語—用修語—用修語—用修語—述語

「ウチニモ イチジクノ キガ フタツグライ アッタンデスヨ、モト ニシノ ホウニネ」〈うちにも いちじくの 木が 2つくらい あったんですよ、もと 西の方

2・2 判断未定の表現 話し手が、自己の未定な判断を、述べあらかずものである。

《あらわれた型と例文》(例文が少ないので、全例をかかげる。)

### 1 述語<sub>(カ・カナ・カンラ)</sub>

#### 1) 体言(十助動詞) + 終助詞

「ソノヘングライマデジャナイカシラネー」(3<sup>11</sup>-10-4)

「ヨンジュウヨソカナ」〈44かな〉(12-19-9)

「ニジュウク、サンジュウカ」〈29, 30か〉(16-20-10)

「ソノ マエカ」〈その 前か〉(16-1-18)

「レスラーカ」〈レスラーか〉(16-4-12)

「オオエミチコカナ」〈大江美智子かな〉(16-20-2)

#### 2) 用言(十助動詞) + 終助詞

「デキマスカ」〈出来ますか〉(12-13-12)

#### 3) 副詞(十助動詞) + 終助詞

- 「ソウカシラ」(3<sup>(2)</sup>-7-6)  
 「ソウカシラネ」(3<sup>(2)</sup>-12-10)  
 「ソウジャンイカシラ」(3<sup>(2)</sup>-8-6)  
 「ソウカナー」(16-12-6)

2. 用修語—述語<sub>カナ</sub>

「イマハ コマッテルンジャンイカナー」〈今は 困ってるんじゃないかなー〉  
 (16-10-14)

3. 用修語—用修語—述語<sub>カシラネ</sub>

「ヤッパリ フルイノハ キッチャウノカシラネ」〈やっぱり 古いのは 切っちゃ  
 うのかしらね〉(3<sup>(2)</sup>-11-8)

4. 主語—述語<sub>カナ・カナ・カシラ</sub>

「コナイダノ アレ ソウカシラ」(3<sup>(2)</sup>-3-5)  
 「シッポガ ナガイノカシラ」(3<sup>(2)</sup>-3-8)  
 「アレカ、サイゴニ シヌノハ」〈あれか、最後に 死ぬのは〉(16-5-11)  
 「コレ オレノカナ」(16-5-19)

5. 主語—用修語—述語<sub>カナ・カナ</sub>


「アソコニ アンノカ、カンエイジッテ」〈あそこに あんのか、寛永寺って〉  
 (16-18-23)  
 「オレハ ジュウニジゴロ オキタカナ、アレデ」〈おれは 12時ごろ 起きたか  
 な、あれで〉(16-12-22)

6. 主語<sub>(ハ)</sub>—主語<sub>(ガ)</sub>—用修語—述語<sub>カナ</sub>

「アサクサハ ゴロツカイグライ イッタ コト アルカナ」〈浅草は 5・6回ぐ  
 らい 行った こと あるかな〉(16-19-18)  
 「コトシナンカ トクベツ ニンズガ スクナインジャンイ」〈今年なんか 特別  
 人数が 少ないんじゃない〉(3<sup>(1)</sup>-2-5)

注 上記の「コトシナンカ…」の文例は、相手に対する質問の形をとっているが、実  
 は、「…スクナインジャンイカナ」の意味をあらわしている。自己の未定の不明確  
 な判断をあらわすのに、臨時的に、相手に対する質問の形を借りている。型として  
 は、とりあげたいが、一つには、判断未定の表現の文例をすべてあげることにし  
 たため、また、一つには、注意すべき表現として、記す。

《まとめ》

- (1) 主語は、～～ガ・～ハ・～ナンテ・～ツテ など。主題をあらわすも  
 のも含めてあるから、1文に主語が2つ以上あらわれることがあるけれど  
 も、そのばあい、1つは主題をあらわすものであり、一般には、それが前置

されることが多い。また、「カンケイガ アル」「キモチガ ワルイ」など、主語述語のつながりが、比較的緊密で、その間に、連用修飾語の挿入されることが、かなり少ないものもある。型としての表示には、一括して、主語はすべて連用修飾語より前置してあるから、この点、実際に、そぐわないことがある。主語・用修飾語・述語の語順の細部については、型の、かなり大まかなものを見るにとどめたこの作業では、触れるゆとりがないが、「構文」の章を参照されたい。

- (2) 述語は、すでに述べたように、「詞（十文末助辞）」のかたちをとり、判叙表現においては、そのこまかい分化はあるけれども、これ以外に格別の特徴と言えるほどのものは、ほとんど、ない。しかし、その一部、判断未定の表現には、～カ・～カナ・～カシラ などの特徴がある。
- (3) 連用修飾語は、かなり自由に用いられている。
- (4) イントネーションは、（卓立表現音調を兼ねるものは別として、意図表現音調に関する限りでは）、大多数、平調と認められる。
- (5) 構文の型としてはとりあげる必要がないが、「反唱の表現」が、上記以外に、13例ある。

《例文の数》

| 2・1 判断既定の表現     | No. 3 | No.12 | No.16 | 計    |
|-----------------|-------|-------|-------|------|
| 1. 述            | 34    | 78    | 106   | 218  |
| 1) 体言           | ( 7)  | (24)  | (27)  | (58) |
| 2) 用言           | ( 1)  | ( 3)  | ( 5)  | ( 9) |
| 3) 副詞           | ( 0)  | ( 1)  | ( 0)  | ( 1) |
| 4) 体言+助動詞       | ( 1)  | (10)  | ( 3)  | (14) |
| 5) 用言+助動詞       | ( 3)  | (29)  | ( 7)  | (39) |
| 6) 副詞+助動詞       | ( 0)  | ( 1)  | ( 0)  | ( 1) |
| 7) 体言(+助動詞)+終助詞 | (11)  | ( 9)  | (25)  | (45) |
| 8) 用言(+助動詞)+終助詞 | (10)  | ( 1)  | (37)  | (48) |
| 9) 副詞(+助動詞)+終助詞 | ( 1)  | ( 0)  | ( 2)  | ( 3) |
| 2. 用 述          | 32    | 13    | 56    | 101  |
| 3. 用 用 述        | 20    | 4     | 23    | 47   |
| 4. 用 用 用 述      | 6     | 1     | 6     | 13   |
| 5. 用 用 用 用 述    | 0     | 0     | 1     | 1    |



|                    |              |              |              |          |
|--------------------|--------------|--------------|--------------|----------|
| 6. 主 述             | 38           | 11           | 54           | 103      |
| 7. 主 主 述           | 5            | 2            | 4            | 11       |
| 8. 主 用 述           | 29           | 5            | 42           | 76       |
| 9. 主 主 主 述         | 0            | 0            | 1            | 1        |
| 10. 主 主 用 述        | 3            | 1            | 7            | 11       |
| 11. 主 用 用 述        | 2            | 1            | 14           | 17       |
| 12. 独 主 用 述        | 0            | 0            | 1            | 1        |
| 13. 主 主 主 用 述      | 0            | 0            | 1            | 1        |
| 14. 主 主 用 用 述      | 0            | 1            | 1            | 2        |
| 15. 主 用 用 用 述      | 3            | 0            | 1            | 4        |
| 16. 主 主 用 用 用 述    | 1            | 1            | 0            | 2        |
| 17. 主 用 用 用 用 述    | 1            | 0            | 0            | 1        |
| 計                  | 174          | 118          | 318          | 610      |
| <b>2・2 判断未定の表現</b> | <b>No. 3</b> | <b>No.12</b> | <b>No.16</b> | <b>計</b> |
| 1. 述               | 6            | 2            | 5            | 13       |
| 1) 体言(+助動詞)+終助詞    | ( 1)         | ( 1)         | ( 4)         | ( 6)     |
| 2) 用言(+助動詞)+終助詞    | ( 0)         | ( 1)         | ( 0)         | ( 1)     |
| 3) 副詞(+助動詞)+終助詞    | ( 5)         | ( 0)         | ( 1)         | ( 6)     |
| 2. 用 述             | 0            | 0            | 1            | 1        |
| 3. 用 用 述           | 1            | 0            | 0            | 1        |
| 4. 主 述             | 2            | 0            | 2            | 4        |
| 5. 主 用 述           | 0            | 0            | 2            | 2        |
| 6. 主 主 用 述         | 0            | 0            | 2            | 2        |
| 計                  | 9            | 2            | 12           | 23       |

《この表現の典型》

2・1 (主語<sub>(ガ、ハ)</sub>)—(用修語)—述語

2・2 (主語<sub>(ガ、ハ)</sub>)—(用修語)—述語<sub>カ・カナ・カンテ</sub>

3 要求表現

3・1 確認要求の表現 話し手が自己の判断について相手の確認を求めることの明瞭な表現である。

《あらわれた型と例文》

1. 述語 系・チ・ダロウ・デシヨウ・ジャンナイ・ジャンナイノ・ジャンナイカ

「イカナカッタ系」〈行かなかったね〉 (3<sup>93</sup>-7-1)

「ユキノジョウヘンゲダヨナッ」〈<sup>9</sup>雪之丞変化<sup>9</sup> だよなっ〉 (16-20-7)

「サンカイメグライダロウ」〈3 回目ぐらいたろう〉 (16-5-23)

「テンインサンデシヨ」〈店員さんでしょ〉 (12-13-16)

「ソレジャー イイジャナイ」 (3<sup>(2)</sup>-9-2)

「ソウジャナイノ」 (16-4-21)

「イイジャナイカ」 (16-16-21)

このほかに、

「シカタガナイ」 (12-4-1)……「しかたがないというのだね」の意

「ノレル」 (12-2-13)……「乗れるのだね」の意

などがあり、これは上記の類型的文末の助辞が、臨時的に略されたものと認められる。

注 1. この表現にも、用言文節の述語、体言文節の述語、副詞文節の述語がある。

注 2. この表現の文例全体を通じて、～ネ、～ナ、～ダロウ、～デシヨウは、大部分昇調1のイントネーションをもつ。～ダロウ、～デシヨウには平調のイントネーションのものが少数あるが、～ネ、～ナには昇調1以外の例はほとんどない。また、～ジャナイ、～ジャナイノ、～ジャナイカ、には、平調のイントネーションのものが多く、そのほか少数、昇調1のイントネーションのものがある。

## 2. 用修語—述語 系・ショウ・ダロウ

「ヤッバリ ソレジャ カンゼンナ トウキョウベンジャナイネ」〈やっぱり それじゃ 完全な 東京弁じゃないね〉 (16-8-11)

「シツギョウホケンハ ハイッテナカッタデスネ」〈失業保険は はいってなかったんですね〉 (12-9-13)

「ソイカラ タニガワヘ イッタデシヨウ」〈そいから 谷川へ 行ったでしょう〉 (3<sup>(3)</sup>-8-4)

「イチネンカン コウカイシナインダロウ」〈1年間 公開しないんだろう〉 (16-6-14)

「ユガワラヘ イッタジャナイ」〈湯河原へ 行ったじゃない〉 (3<sup>(3)</sup>-2-9)

「オウチニ イラッシャル」 (12-19-18)

「ガッコウヘ イッテタノ」〈学校へ 行ってたの〉 (12-4-8)

注 終りの2例は、類型的文末が臨時的に略されたものと認められる。文末は昇調をとっていないから、反唱とも取れるものであるが、文脈上、確認要求の意図が強い。

## 3. 用修語—用修語—述語 チ・デスネ・デシヨ

「アノ トキ マイッタモンチ、ジッサイ」〈あの 時 参ったもんな、実際〉

(16-12-18)

「タイプモ マダ ヤッテラッシャルナインデスネ」 (12-13-14)

- 「アノ ハナビラ ヒトツヒトツ ヤルンデシヨ」〈あの 花びら 一つ一つ やる  
んでしょ〉(3<sup>(1)</sup>-5-4)
4. 用修語—用修語—用修語—述語 デシヨウ・デシヨ  
「イマ ヨソマンガライシカ ウレテナインデシヨウ, マダ」〈今 4万ぐらいしか  
売れてないんでしょ, まだ〉(16-6-16)  
「ダカラ キョネンノ クリスマスナンカ ジブンノ ウチデ ケーキ ソクッタデ  
シヨ」〈だから 去年の クリスマスなんか 自分の うちで ケーキ 作ったで  
しょ〉(3<sup>(1)</sup>-4-6)  
「クロガ…クロガネカラ ズット ケントクヘ イッタデシヨ」〈くろが…黒金(山  
名)からずっと 乾徳(山名)へ 行ったでしょ〉(3<sup>(1)</sup>-9-10)
5. 用修語—用修語—用修語—用修語—述語 デシヨウ  
「キョネンハ ダッテー ハル イチバン サインヨ タンザワヘ イッタデシヨ  
ウ」〈去年は だっテー 春 一番 最初 丹沢へ 行ったでしよう〉(3<sup>(1)</sup>-8-4)
6. 主語(ガ・ハ)—述語 デシヨ・ダロウ・ネ・ジャナイカ  
「アメカナンカ フッタデシヨ」〈雨かなんか 降ったんでしょ〉(3<sup>(1)</sup>-10-1)  
「アレ ソレンケイナンドロウ」〈あれ ソ連系なんだろう〉(16-4-13)  
「キユウリョウガ チハイスルノネ」〈給料が 運配するのね〉(12-3-9)  
「ジブンモ セイネン, ジブンモ セイネンジャナイカ」〈自分も 青年, 自分も  
青年じゃないか〉(16-20-14)  
「リンジハ イヤ」〈臨時は いや〉(12-3-25)  
注 主語には, ~ガ, ~ハその他があるが, 詳しくは触れない。
7. 主語—用修語—述語 ネ・デシヨ・ジャナイカ・ジャナイノ  
「ダケド アレガ イチバン ウレルンダッテネ」〈だけど あれが 一番 売れる  
んだってね〉(16-22-8)  
「ホケン モラッテル アイダニ ショウカイガ アッタデシヨ」〈保険 もらって  
る 間に 紹介が あったでしょ〉(12-4-10)  
「ソノ マエニ アッタジャナイカ, ナンカ 『ワナ』ッテイウノガ」〈その 前に  
あったじゃないか, 何か 「罠」ってものが〉(16-4-3)  
「ナンカ モンダイ オキテタジャナイノ」〈何か 問題 起きてたじゃないの〉  
(16-15-23)
8. 主語—主語(ガ)—用修語—述語 ネ・ダロウ  
「デモ タカインダモノネ, アレネ, チョットネ, オネダンノ ホウガ」〈でも 高  
いんだものね, あれね, ちよっとね, お値段の 方が〉(16-19-23)  
「ダケド 『ニジュウノヒラ』モ ソウトウ チョウシュリツガ アルンダロウ」  
〈だけど 『二十のとびら』も 相当 聴取率があるんだろう〉(16-21-11)

9. 主語一用修語一用修語一述語 系・デショウ・ジャナイ

「コンナカデハサ、アナタガ イチバン アマトウネ」〈こん中ではさ、あなたが一番 甘党ね〉(3<sup>(3)</sup>-15-2)

「ソイカラネ、ナツハ アンタ アソコヘ イッタデショウ」〈そいからね、夏はあんた あそこへ 行ったでしょう〉(3<sup>(3)</sup>-8-10)

「コンド オノデラ スキナノガ クンジャナイ、メイジザデ」〈今度 オノデラ好きなのが 来んじゃない、明治座で〉(16-20-1)

10. 主語一主語(ガ)一用修語一用修語一述語 デショウ

「アレ アノ ジキニ アリガ ツクデショウ、ナカヘネ」〈あれ あの じきに鐵が つくでしょう、中へね〉(3<sup>(2)</sup>-9-8)


11. 主語一用修語一用修語一用修語一述語 系・デン


「ソコダッテネー バス オリテカラネ アノー ミズウミマデネ ダイブ アルノネ」〈そこだってねー バス 降りてからね あのー 湖までね 大分 あるのね〉(3<sup>(2)</sup>-15-8)

「サイショ ホラ アノ ウグイスガネ アノー ス ツクッタデショ、ホラ ハラソノ ナカニ」〈最初 ほら あの 鶯がね あのー 巢 作ったでしょ、ほら 葉蘭の 中に〉(3<sup>(2)</sup>-2-1)

「ソシタラネ モー ナンニモ トニカク スル コト ナイデショ、タベル コトイガイハサ」〈そしたらね もー 何も とにかく すること ないでしょ、食べる こと以外はさ〉(3<sup>(3)</sup>-13-1)

《まとめ》


(1) 述語は、～ネ・ナ、～ダロウ・デショウ、～ジャナイ(ノ・カ)等の形式をもち、これが典型と考えられる。また、～もしばしばあらわれるが、これは反問の気持ちを含むばあいが多いと見られる。

(2) イントネーションは、～ネ・ナは昇調1、～ダロウ・デショウは大部分が昇調1、～ジャナイ(ノ・カ)は大部分が平調、～は平調である。イントネーションの対応の型としては、

～ネ・ナ・ダロウ・デショウ……昇調1

～ジャナイ(ノ・カ)……平調

のように見てよかろう。

(3) 主語は、～ガ、～ハ、～などで、この表現としての特色はない。

(4) 連用修飾語は、かなり自由に用いられる。

《例文の数》

| 3・1 確認要求の表現   | No. 3 | No.12 | No.16 | 計   |
|---------------|-------|-------|-------|-----|
| 1. 述          | 3     | 45    | 9     | 57  |
| 2. 用 述        | 11    | 9     | 10    | 30  |
| 3. 用 用 述      | 2     | 6     | 6     | 14  |
| 4. 用 用 用 述    | 2     | 0     | 3     | 5   |
| 5. 用 用 用 用 述  | 1     | 0     | 0     | 1   |
| 6. 主 述        | 9     | 13    | 12    | 34  |
| 7. 主 用 述      | 4     | 5     | 12    | 21  |
| 8. 主 主 用 述    | 0     | 0     | 2     | 2   |
| 9. 主 用 用 述    | 3     | 0     | 3     | 6   |
| 10. 主 主 用 用 述 | 1     | 0     | 0     | 1   |
| 11. 主 用 用 用 述 | 3     | 0     | 0     | 3   |
| 計             | 39    | 78    | 57    | 174 |

《この表現の典型》

3・1 主語(カ・ハ)―(用修語)―述語 ネ・チ・ダロウ・デンジョウ・ジャンナイ(ノ・カ)

3・2 判定要求の表現 話し手が、自己の判断の成立するか否かを、相手の判定にまつもので、yes, no, をもって答えることのできるものである。

《あらわれた型と例文》

1. 述語(カ・カイ・フ・ッテ)

「キイタ」〈聞いた?〉(16-1-3)

「チャンピオン」(16-3-16)

「デキマスカ」(12-20-19)

「ゴヒャクエンカイ」〈5百円かい?〉(16-6-14)

「デキルフ」(3<sup>20</sup>-14-8)

「カッテクレルッテ」〈買ってくれるって?〉(16-2-16)

注 1. この表現にも、述語に用言文節のものと、体言文節のものがある。副詞文節のものもありうる。

注 2. 「ノ」「ッテ」は体言・副詞に直接つくことはない。

注 3. 大多数は昇調1のイントネーションをもつ。特に文末助辞があらわれないばあいに著しい。

2. 用修語―述語(カ・フ)

「モウ オワッタンデスカ」〈もう 終わったんですか?〉(12-4-19)

「ソソナニ ヒドイ<sup>フ</sup>」(16-8-20)

「スコシハ シンボシ<sup>タ</sup>」〈少しは 進歩した?〉(3<sup>(3)</sup>-4-3)

3. 用修語—用修語—述語 (カ)

「ニモツ ツケラレマス<sup>カ</sup>, シテンジャ<sup>ニ</sup>」〈荷物 つけられますか? 自転車に〉  
(12-16-24)

「アサクサ ズー<sup>ット</sup> イカナカ<sup>ッタ</sup>」〈浅草 ゴーっと 行かなかった?〉  
(16-19-19)

4. 用修語—用修語—用修語—用修語—述語 (ジャナイ)

「ヤッパリ ナツハ デコレーシ<sup>ョン</sup>ハ アンマリ コシラエナイ<sup>ン</sup>ジャナイ<sup>?</sup>」〈や  
っぱり 夏は デコレーションは あんまり こしえられないじゃない?〉  
(3<sup>(11)</sup>-10-3)

5. 主語(ハ・ガ)—述語 (フ・カ・カイ・デショウ)

「チヨノヤマ ケッコンス<sup>ン</sup>」〈千代の山 結婚すんの?〉(16-15-20)

「ジムインサンデス<sup>カ</sup>, ゴキボウ<sup>ハ</sup>」〈事務員さんですか? ご希望は〉(12-13-16)

「ソレニ シタカラノ キョリガ アルンデシ<sup>ョウ</sup>, ナンメートル<sup>ルッテ</sup> イウ<sup>?</sup>」〈そ  
れに 下からの 距離が あるんでしょう? 何メートルって いう〉(3<sup>(12)</sup>-1-4)

「ハシラ<sup>ッテ</sup> シホンバン<sup>ラ</sup>」〈柱<sup>って</sup> 四本柱?〉(16-13-14)

「センベイ<sup>ヲ</sup> タベテ<sup>ル</sup> オトモ ハイ<sup>ル</sup>カイ<sup>?</sup>」〈煎餅を 食べてる 音も はい  
るか?〉(16-18-2)

注 主語には、～ハ、～ガその他があるが、詳しくは触れない。

6. 主語—主語—述語 (カ)

「ガリバンナン<sup>カ</sup> ガッコウ<sup>デ</sup> キッタ コト アリマス<sup>カ</sup>」〈がり版なんか 学校  
で 切った こと ありますか?〉(12-17-3)

「ケンテイ<sup>ハ</sup> ウケ<sup>タ</sup> コト<sup>ハ</sup> ナイ<sup>?</sup>」〈検定は 受けた ことは ない?〉  
(12-16-14)

「ナイシ<sup>ョク</sup>モ ヤッ<sup>タ</sup> コト ナインデス<sup>カ</sup>」〈内職も やった こと ないんで  
すか?〉(12-10-5)

7. 主語—用修語—述語 (フ・ンテショウカネ)

「モウ キタン<sup>ン</sup>ジャナイ<sup>?</sup>, エイガ<sup>ハ</sup>」〈もう 来たんじゃないの? 映画は〉  
(16-5-15)

「ヤッパリ テイレガ アルンデシ<sup>ョウ</sup>ウカネ<sup>?</sup>」〈やっぱり 手入れが あるんでし  
ょうかね?〉(3<sup>(12)</sup>-4-2)

8. 主語—用修語—用修語—述語 (ンジャナイ・フ)

「デモー ナンカ ソウイウ ザイリョウ…ザイリョウッテ イウノカシラ, テンピ  
トカ ソウイウ モノガ ズイブン イルンジャナイ」〈でもー なんか そうい  
う 材料…材料って いうのかしら, 天火とか そういう ものが ずいぶん い  
るんじゃない?〉 (3<sup>11</sup>-9-6)

「ホカニモ オデシサンガ タクサン イル」〈ほかにも お弟子さんが たくさ  
ん いるの?〉 (3<sup>11</sup>-2-3)

以上のほか、文型には加えられないが、省略質問文が、この表現には多くあ  
らわれる。

「アナタハ」〈あなたは?〉 (3<sup>11</sup>-3-7)

「ソノ ナカヘ ナマデ」〈その 中へ 生で?〉 (3<sup>11</sup>-12-5)

「ハジメテ」〈始めて?〉 (3<sup>11</sup>-4-2)

《まとめ》

- (1) 主語は、「ハ」「ガ」をともなうことが多い。しかし、普通は、～ハ～デア  
ルカ、～ハ～スルカであろう。
- (2) 述語は、「カ」「ノ」をともなうことが多い。「～カ」が普通の形式といえ  
よう。
- (3) 述語は、大多数のばあい、昇調1のイントネーションをもつ。
- (4) 連用修飾語は、かなり自由に用いられる。

《例文の数》

| 3・2 判定要求の表現  | No. 3 | No.12 | No.16 | 計   |
|--------------|-------|-------|-------|-----|
| 1. 述         | 17    | 32    | 22    | 71  |
| 2. 用 述       | 14    | 6     | 14    | 34  |
| 3. 用 用 述     | 5     | 5     | 3     | 13  |
| 4. 用 用 用 用 述 | 1     | 0     | 0     | 1   |
| 5. 主 述       | 7     | 37    | 7     | 51  |
| 6. 主 主 述     | 0     | 0     | 7     | 7   |
| 7. 主 用 述     | 11    | 15    | 3     | 29  |
| 8. 主 用 用 述   | 2     | 0     | 0     | 2   |
| 計            | 57    | 95    | 56    | 208 |

《この表現の典型》

3・2 (主語 (ガ・ハ))—(用修語)—述語 (カ)

3・3 選択要求の表現 これは、判定要求の表現が、2つ、特殊な形で連結し、そのどちらかの判断を相手に選択することを要求するものである。

《あらわれた型と例文》

1. 述語、…述語

「アサデスカ、バンデスカ」〈朝ですか、晩ですか？〉 (5-1-20)

「シンブンシャノ ニンゲンカ、シャガイノ ニンゲンカ」〈新聞社の人間か、社外の人間か？〉 (5-12-6)

「コタイデスカ、エキタイ」〈固体ですか、液体？〉 (5-1-4)

注 この類のものには、なお、下に示す例のごとく「選択要求」と「説明要求」の複合した型があり、それは「Aカ Bカ、ドッチデスカ」と表現される。

「シンブンニ カンケイガ アルト イッテモデスネー コノ ヘンシュウテキナ コトカ、アルイハ ソノ シンブンノ ジギョウト イウ センタイノ ケイエ イテキナ コトカ、ドッチデスカ」〈新聞に 関係があると 言ってもですねー この 編集的な ことか、あるいは その 新聞の 事業と いう 全体の 経営的な ことか、どっちですか？〉 (5-12-21)

2. 述語、…用修語一述語

「キョネンノ イマゴロカ、モット マエカ」 (16-10-7)

3. 用修語一述語、…独立語、…述語

「マエニ …ノヨウナ オシゴトラ キボウシテマスカ、ソレトモ アノー コウインサンナラ ホカノ オシゴトデモ イインデスカ」〈前に …のような お仕事を 希望してますか、それとも あの 工具さんなら ほかの お仕事でもいいんですか？〉 (12-1-21)

4. 用修語一用修語一用修語一述語、…独立語、…用修語一述語

「カラダノ ホウ ジブンデ ヒカクテキ ジョウブト オモワレマス、ソレトモ ビョウキ シヤスイデスカ」〈体の方 自分で 比較的 丈夫と 思われます、それとも 病気 しやすいですか？〉 (12-6-18)

「カラダ ジブンデ ヒカクテキ ジョウブト オモワレマス、ソレトモ アマリ ジョウブデナイト オモイマス」〈体 自分で 比較的 丈夫と 思われます、それとも あまり 丈夫でないと 思います？〉 (12-21-11)

5. 主語一用修語一述語、…述語

「ゴク カタチハ マールイデスカ、ナガインデスカ」〈ごく 形は <sup>丸</sup>丸いんですか、長いんですか？〉 (5-3-5)

《まとめ》

(1) この表現は、判定要求の表現を、「述語、述語」の形で、2つ並べたもの



のである。述語と述語とを、独立語（接続詞）でつなぐこともある。

(2) 主語は、2つの述語に対して1つですませることが多く、2度くり返すことは、あまりない。

(3) 連用修飾語は、かなり自由に用いられる。

《例文の数》

| 3・3 選択要求の表現             | No. 3 | No. 5 | No.12 | No.16 | No.22 | No.27 | 計 |
|-------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---|
| 1. 述, …述                | 0     | 3     | 0     | 0     | 0     | 0     | 3 |
| * (述, 述), …述            | 0     | 1     | 0     | 0     | 0     | 0     | 1 |
| 2. 述, …用 述              | 0     | 0     | 0     | 1     | 0     | 0     | 1 |
| 3. 用 述, …独, 述           | 0     | 0     | 1     | 0     | 0     | 0     | 1 |
| 4. 用 用 用 述, …独,<br>…用 述 | 0     | 0     | 2     | 0     | 0     | 0     | 2 |
| 5. 主 用 述, …述            | 0     | 1     | 0     | 0     | 0     | 0     | 1 |
| 計                       | 0     | 5     | 3     | 1     | 0     | 0     | 9 |

注 \*のものは「選択要求」と「説明要求」の複合した型, 「AカBカ, ドッチデスカ」と表現される例である。

《この表現の典型》

3・3 (主語(ハ))—(用修飾語)—〈判定要求の形式の〉述語, —(独立語,) —(用修飾語)—〈判定要求の形式の〉述語

3・4 説明要求の表現 不定詞を含む質問の表現で、その内容を説明することを相手に求めるものである。

《あらわれた型と例文》

1. 〈不定詞を含む〉述語 (カ・カンラ)

「ナニ」(3<sup>(1)</sup>-2-6)

「ドウシテ」(16-2-2)

「ナンドデスカ」〈何度ですか?〉(12-18-14)

「ドウカンラ」(3<sup>(3)</sup>-3-8)

「ナンダイ」(16-9-18)

不定詞が、述語にかかる連体修飾語のなかで用いられるばあいがある。

「イクンチグライノ ヤマ」〈幾日ぐらいの 山?〉(3<sup>(3)</sup>-3-3)

注 大多数が昇調1のイントネーションをもつ。特に終助詞をとまなわなばあい  
に著しい。

2. 用修語—〈不定詞を含む〉述語 (㍁)

「サイテイ ドノクライデシヨウカ」〈最低 どのくらいでしょうか?〉(12-14-9)

「ユウガタ ナンジゴロマデデスカ」〈夕方 何時ごろまでですか?〉(12-8-5)

注 この型の例は、3. 4. などの型に比べて著しく少ない。あらわれたのはこの2例  
だけである。この2例も別の型とも解釈されるが、この型としてかかしておく。

3. 〈不定詞を含む〉用修語—述語 (㍂)

「ダレニ マケルゾ」〈だれに 負けるの?〉(16-15-10)

「ドノクライ スキ」〈どのくらい 好き?〉(3<sup>(2)</sup>-15-14)

「イツカラ イツマデ オツトメ シテイラッシュイマシタ」(12-8-19)

4. 用修語—〈不定詞を含む〉用修語—述語 (㍃)

「タイプハ ナンカゲツ オヤリニ ナリマシタ」〈タイプは 何か月 おやりにな  
りました?〉(12-15-9)

「ソレデ アジハ ドンナノ ツケルゾ」〈それで 味は どのの つけるの?〉  
(3<sup>(1)</sup>-12-10)

「ドウシテ ヤメルッテ イウゾ」(16-21-1)

5. 用修語—〈不定詞を含む〉用修語—用修語—述語 (㍄)

「シュミハ ドンナ モノニ シュミヲ モッテラッシュイマスカ」〈趣味は どん  
な ものに 趣味を 持ってらっしゃいますか?〉(12-21-2)

注 この文例は不整表現に近いものと思われるが、こういう構文はしばしば用いられ  
るので、一応かかける。

6. 主語 (ハ)—〈不定詞を含む〉述語 (㍅)

「オトウサン オイクツデスカ」(12-19-6)

「ソロバンハ ドウデスカ」(12-2-7)

「ナンブセンベイツテ ドンナ カンジ」〈南部煎餅って どのな 感じ?〉  
(3<sup>(2)</sup>-17-1)

「ドウシテ ナンダロウネー、アレ」(16-9-11)

注 「～ガ」の形式の主語があらわれていない。すなわち、このばあいの主語はすべ  
て主題をあらわすものである。

7. 〈不定詞を含む〉主語 (カ)—述語 (㍆・㍇)

「ナンニン グライ シテルゾ」〈何人ぐらい してるの?〉(3<sup>(1)</sup>-1-3)

「ナニガ キマスカ」〈何が 来ますか?〉(3<sup>(2)</sup>-1-2)

「エトカネ、ソウイッタ シュミデスネ、ナニカ ゴザイマセンカ」〈絵とかね、そ

ういった 趣味ですれ、何か ございせんか?〉 (12-13-23)

不定詞が、主語にかかる連体修飾語に用いられるばあいがある。

「ドンナ オソゴトガ ヨロシインデシ ヲウカ」 (12-13-4)

注 「〜ハ」の形式の主語ないし主題をあらわすものはあらわれない。

8. 主語—主語—〈不定詞を含む〉述語 (カ)

「オバサン ヤマナンカ ドウデスカ」〈おばさん 山なんか どうですか?〉

(3<sup>(3)</sup>-11-4)

9. 主語—〈不定詞を含む〉主語 (ハ・ガ)—述語 (ア・カ)

注 不定詞を含まない主語は主題をあらわす。以下、主語が重なるときは同じ。

「バシヨハ ドノヘンガ イインデスカ」〈場所は どの辺が いいんですか?〉

(12-2-7)

「ノンチャンチ ナニガ オイシイ

(3<sup>(3)</sup>-20-5)

「ナニカ オスキデ ヤッテイラッシャル コトハ ゴザイマセン」 (12-13-14)

10. 主語—〈不定詞を含む〉用修語—述語 (カ・カネ)

「ゴシュジンハ ドウ ナサルデスカ」〈ご主人は どう なさるんですか?〉

(12-10-17)

「ジカンハ ナンジゴロマデ ヨロシインデスカ」〈時間は 何時ごろまで よろしいんですか?〉 (12-14-14)

「レンズガ ドウカ シテタノカネー」 (16-9-18)

11. 〈不定詞を含む〉主語—用修語—述語 (カ)

「デ ダレ カッタ、イチバン」〈で だれ 勝った? 一番〉 (16-1-23)

「イッポンカンニ ドノクライ ウテマスカ」〈1分間に どのくらい 打てますか?〉 (12-15-17)

12. 主語 (ハ)—主語—〈不定詞を含む〉用修語—述語 (カ)

「コレハ バシヨ ドコン ナリマスカ」〈これは 場所 どのん なりますか?〉

(12-8-16)

(注 「ドコン」は「ドコニ」の意)

13. 主語—〈不定詞を含む〉主語—用修語—述語 (カ)

「ホカニハ ナニカ ゴキボウ アリマセンカ」〈ほかには 何か ご希望 ありませんか?〉 (12-14-18)

「ジカンハ ダイタイ ナンジカラ ナンジマデノ トコロガ ヨロシウゴザイマスカ」〈時間は 大体 何時から 何時までの ところが よろしゅうございます

か?〉 (12-8-2)

14. 主語—用修語—〈不定詞を含む〉用修語—述語 (カ・フ)

「ゲッシュウハ サイショ ドノクライ ゴキボウデスカ」〈月収は 最初 どのくらい ご希望ですか?〉 (12-17-11)

「サイキン ニュースエイガッテ ナニ ヤッテルゾ」〈最近 ニュース映画って 何 やってるの?〉 (16-16-25)

「ダイタイ シュウニュウ オイクラクライ アリマシタ, コノ トキニ」〈大体 収入 おいくらくらい ありました? この 時に〉 (12-8-24)

不定詞が、連用修飾語にかかる連体修飾語のなかで用いられるばあいがある。

「ウンドウハ ドンナ モノ ヤリマスカ, ダイタイ」〈運動は どんな もの やりますか? 大体〉 (12-20-23)

15. 主語—〈不定詞を含む〉主語—用修語—用修語—述語 (カ)

「アトネ イマ ワタクシガ オキキシタイガイニネ ナニカ オデキニナル コト アリマセンカ」〈あとね 今 私が お聞きした以外にね 何か おできになる こと ありませんか?〉 (12-11-11)

以上のほか、文型には加えられないが、不定詞を含む省略質問文「ナニガ」が相当数あらわれた。

〈まとめ〉

- (1) 不定詞が主語に含まれるばあい、述語に含まれるばあい、連用修飾語に含まれるばあいがある。
- (2) 不定詞が、主語・述語あるいは連用修飾語にかかる連体修飾語のなかで用いられることがある。
- (3) 不定詞を含む主語は、「ガ」を伴なうことが多い。「ハ」は現われない。
- (4) 不定詞を含まない主語は、「ハ」を伴なうことが多い。「ガ」はほとんど現われない。
- (5) 述語は、「カ」「ノ」をともなうことが多い。「カ」が普通であろう。
- (6) 述語は、大多数のばあい、昇調1のイントネーションをもつ。
- (7) 不定詞を含む述語に連用修飾語が用いられることは少ない。
- (8) 不定詞が2個以上用いられたものはあらわれなかったが、主語・連用修飾語ともに不定詞を含むばあいは、ありうる。

《例文の数》

| 3・4 説明要求の表現       | No. 3 | No.12 | No.16 | 計  |
|-------------------|-------|-------|-------|----|
| 1. <不> 述          | 4     | 1     | 4     | 9  |
| 2. 用 <不> 用 述      | 0     | 2     | 0     | 2  |
| 3. <不> 用 述        | 3     | 4     | 5     | 12 |
| 4. 用 <不> 用 述      | 3     | 10    | 2     | 15 |
| 5. 用 <不> 用 用 述    | 0     | 1     | 0     | 1  |
| 6. 主 <不> 述        | 1     | 6     | 3     | 10 |
| 7. <不> 主 述        | 2     | 3     | 0     | 5  |
| 8. 主 主 <不> 述      | 1     | 0     | 0     | 1  |
| 9. 主 <不> 主 述      | 1     | 4     | 0     | 5  |
| 10. 主 <不> 用 述     | 0     | 2     | 2     | 4  |
| 11. <不> 主 用 述     | 0     | 3     | 1     | 4  |
| 12. 主 主 <不> 用 述   | 0     | 1     | 0     | 1  |
| 13. 主 <不> 主 用 述   | 0     | 2     | 0     | 2  |
| 14. 主 用 <不> 用 述   | 0     | 7     | 1     | 8  |
| 15. 主 <不> 主 用 用 述 | 0     | 1     | 0     | 1  |
| 計                 | 15    | 47    | 18    | 80 |

《この表現の典型》

- 3・4 (主語 (ハ))—(用修語)—<不定詞を含む> 述語 (カ)  
 (主語 (ハ))—(用修語)—<不定詞を含む> 用修語—述語 (カ)  
 <不定詞を含む> 主語 (ガ)—(用修語)—述語 (カ)  
 <不定詞を含む> 主語 (ガ)—(用修語)—<不定詞を含む>用修語—述語 (カ)

3・5 消極的行為要求 (すすめ・希求・依頼など) の表現

《あらわれた型と例文》(例文が少ないので、全例かかげる。)

1. 述語

「カエマシヨウ」<変えましょう> (22-16-11)

「イカガデスカ」(5-15-4)

2. 用修語—述語

「スポーツノ ハナンデモ ドウデスカ」(22-16-12)

「シナモノ キメマシヨウ」<品物 決めましょう> (5-10-9)

「ソウイウノハ ヤメマシヨウ」(22-1-22)

「ソノ オカタイ オゲイジュツノ ハナジハ ヤメマシ ョウヨ」〈その お堅い お芸術の 話は やめましようよ〉(22-1-17)

「コノ バアイダケハ イワナイデモライタイネ」〈この 場合だけは 言わないで もらいたいね〉(16-11-1)

### 3. 主語一用修語一述語

「グット コウチャノ ハナシナド イカガデス」〈ぐっと 紅茶の 話など いかがです〉(22-17-11)

#### 3・6 積極的行為要求(いわゆる“命令”)の表現

《あらわれた型と例文》(例文が少ないので、全例かかげる。)

#### 1. 述語

「アゲテ」〈(話をさげないで) 上げて〉(22-17-6)

「ダカラ イットイデヨ」〈だから 行っといでよ〉(16-19-6)

#### 2. 用修語一述語

「チョット マッテ」(5-2-17)

「サンツカエナイ テイドニ オカキイレ クダサイマシ」〈さしつかえない 程度に お書き入れ くださいまし〉(27-2-24)

「ドウゾ オハイリクダサイマセ」(27-8-15)

「ノドラ オシメシクダサイ」(22-16-8)

「オチャラ メシアガッテクダサイ」(22-16-7)

「トウキョウノ ヤナカ イッテゴランナサイ」〈東京の 谷中 行ってごらんなさい〉(22-8-12)

「ドッチカ ハッキリシテクダサイ」(5-1-5)

「ドウゾ オカケクダサイマシ」(27-6-4)

「ショウショウ オマチクダサイマセ」〈少々 お待ちくださいませ〉(27-8-6)

「ヘンナ コトラ イワナイデクレヨ」(16-20-5)

「イワナイデクレヨ, モウ」(16-21-15)

「ウソー ツケ」〈嘘 つけ〉(16-20-1)

注 最後の例は、《嘘を つくな》(禁止)の意味をあらわすもので、一種の慣用的表現である。

#### 3. 用修語一用修語一述語

「ドウゾ ココ オカケクダサイマセ」(27-8-17)

「ドウゾ コチラへ オカケクダサイ」(27-6-3)

「イチオウ デモ ムコウデ ソウダン シテミテクダサイ」〈一応 でも 向こうで 相談 してみてください〉(12-5-2)

「アンマリ ヘンナ コト イワネーデクレヨ」(16-10-23)

「マア ノミネー, ミズ」〈まあ 飲みねー, 水〉(16-10-27)

《まとめ》

- (1) 消極的行為要求の表現の述語は、～シマショウ・～シテイタダキマショウ・～シテモライタイなど、すすめ・希求・依頼をあらわす形式であり、イカガデスカ・ドウデスカのごとく、不定詞を含む形式であることもある。
- (2) 積極的行為要求の表現の述語は、～(命令形)・～シテ・～シテクダサイ・～シテゴランナサイ・～シテクダサイマシ(セ)・～シテクレ・～シナ・～スルナ〔禁止〕などである。
- (3) 主語をとることは、他の表現に比べて少ないが、とるばあいには「ガ」「ハ」をともなうことが多い。
- (4) 連用修飾語は、かなり自由に使われるが、あまりたくさん使われることはない。

《例文の数》

| 3・5 消極的行為要求 | No. 3 | No. 5 | No.12 | No.16 | No.22 | No.27 | 計  |
|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 1. 述        | 0     | 2     | 0     | 0     | 1     | 0     | 3  |
| 2. 用 述      | 0     | 1     | 0     | 1     | 3     | 0     | 5  |
| 3. 主 用 述    | 0     | 0     | 0     | 0     | 1     | 0     | 1  |
| 計           | 0     | 3     | 0     | 1     | 5     | 0     | 9  |
| 3・6 積極的行為要求 | No. 3 | No. 5 | No.12 | No.16 | No.22 | No.27 | 計  |
| 1. 述        | 0     | 0     | 0     | 1     | 1     | 0     | 2  |
| 2. 用 述      | 0     | 2     | 0     | 3     | 3     | 4     | 12 |
| 3. 用 用 述    | 0     | 0     | 1     | 2     | 0     | 2     | 5  |
| 計           | 0     | 2     | 1     | 6     | 4     | 6     | 19 |

《この表現の典型》

3・5 } (主語(ガ・ハ)―(用修語)―〈すすめ・希求・依頼・命令などを表わ  
 3・6 } す形式の〉述語

注 命令的表現には、以上のほかに、つぎのような慣用的表現によるものがある。

- (1) 副詞句によるもの

「ドウゾ」(5-15-10)

「ドウゾ コチラへ」(27-6-3)

「ポスターヲ ドウゾ」(5-15-20)

「トクイノ ウタヲ ドウゾ」〈得意の 歌を どうぞ〉(16-22-20)

(2) 体言によるもの

「チョット スミマセン ミズ」(16-3-5)

これらの表現は、臨時的に命令をあらわすが、述語省略文であるから、消極的の行為要求か積極的の行為要求かは、形式の上からは決められない。

4 応答表現 相手のことばに対する言語主体の応答を表明しようとするもので、詠嘆表現と同じく、(1)未分化的な表現と、(2)やや分化した表現との2つに分けられる。

4・1 未分化的な表現

《あらわれた型と例文》

1. 〈声的受けの〉独立語

ア エ ハ ヘ ウン ヘー エー

注 これらを「声的受け」というのは、カタカナ表記によって十分にあらわされているとは考えられないもので、言語音というよりは、「声」に近いものだからである。これらの声的受けは、以下の応答表現が、肯定と否定の別をあらわすのに対して、相手のことばを一応「受け」ることを表現したもので、肯否の別はあらわさない。

2. 〈応答詞の〉独立語

アー アー ウン ウーン エー エー ネット ハー ハー  
ハ ハイ フン フーン  
イヤ イヤー イエ イイエ

注 これらの応答詞には、1.の「声的受け」と同じ形式のものもあるが、1.に比べると、いわゆる語的類型をもっているもので、肯否の別がある。

音調の面からみると、「 $\overline{\text{O}}$  ( $\underline{\text{O}}$ )」「 $\overline{\text{OO}}$ 」「 $\overline{\text{OO}}$ 」「 $\overline{\text{OOO}}$ 」「 $\overline{\text{OOO}}$ 」などの類型をもつものが多いが、高低2段階では把握の十分でないものもみられる。

4・2 やや分化した表現 上記「未分化的な表現」に比べ、やや分化した表現。指示詞その他の類型的表現によるもので、肯定と否定とがある。

《あらわれた型と例文》

1. 述語文節に指示詞を含むもの

1 述語



ソウ ソウオ ソウヨ ソウネ ソウネー ソウカ ソウカー ソ  
 ウカイ ソウカナ ソウカネー ソウカシラ ソウカシラネー ソウカ  
 モシレナイ ソウダ ソウダヨ ソウダヨナ ソウダネ ソウダナー  
 ソウデス ソウデスネ ソウデスネー ソウデスカ ソウデスカネ ソ  
 ウデシヨウ ソウジャンイデシヨウカネー ソウラシイ ソウラシイヨ  
 ソウラシイワネ ソウナノ ソウナンデスノ サヨウデゴザイマスカ ソ  
 ウジャンイノネ ソウジャンインデスケド ソウデモナイワヨ ソウデナイ  
 ンダッテ ソーナンデモナイワヨ (出典略)

## 2 用修語—述語

「ダイタイ ソウネ」(3<sup>(3)</sup>-12-9)

「ソウネ, タシカニ」(22-25-19)

「ソウカシラ, キット」(3<sup>(3)</sup>-24-3)

注 資料には、否定の例はあらわれなかった。

## 3 主語 (ハ)—述語

「ソウラシイワネ, アレハネ」(22-12-14)

「ボクモ ソウナンダ」(22-2-10)

「ワタンモ ソウダナ」(3<sup>(3)</sup>-16-3)

「ソレハ ソウナンデスガネ」(5-1-3)

注 資料には、否定の例はあらわれなかった。

## 4 主語—用修語—述語

「アホウッテ イウノ ホントニ ソウネ」〈阿呆って いうの ほんとに そうね〉  
 (22-29-4)

注 資料には、否定の例はあらわれなかった。

## II. その他の類型によるもの

### 1 述語

「ソノトオリ」(5-9-3)

「ソノクライ」(16-11-18)

「ホントネ」(3<sup>(3)</sup>-13-6)

「シラナイ」(22-17-20)

「チガウ」(3<sup>(3)</sup>-1-10)

「チガウワヨ」(3<sup>(3)</sup>-9-9)

「チガイマシタ」(5-6-4)

「チガウンデスケド」(12-4-16)

「シヨウチイタシマシタ」〈承知いたしました〉(27-2-24)

注 「ホント」「チガウ」「シラナイ」(および後出「ダメ」)などは、その意味として、

肯否の応答をあらわすもので、すでに、慣用として、「ソウダ」「ソウデハナイ」などに準ずると認められる。しかし一方、これらは、形式は同じでも、判叙表現として用いられるばあいもあることは、指示詞を含む形式よりも著しいであろう。その区別は、前後の意味関係によって認定するよりはかはない。

## 2 用修語—述語

「ソノクライデモ アリマスネ」(5-10-24)

「ソнна ナラナイワヨ」(3<sup>(3)</sup>-17-3)

## 3 主語(ガ・ハ)—述語

「カンケイ アリマス」(5-4-9)

「ソウイウ バアイモ アルデショウネ」(5-14-16)

「ソレハ チガイマス」(5-4-13)

「ソнна コトハ ナイデショウケドモネ」(12-11-17)

注 前記2の例文「ソノクライデモ アリマスネ」および、これら「カンケイ アリマス」「ソウイウ バアイモ アルデショウネ」「ソнна コトハ ナイデショウケドモネ」に見られる類型は、「指示詞を含む修飾語(または主語)—形式用言『アル・ナイ』を含む述語」である。

## 4 主語(ハ)—主語—述語

「ソннаコト カンケイ アリマセン」(5-14-14)

「セイジ カンケイ アリマセン」〈政治 関係 ありません〉(5-8-1)

「ソレハ カンケイ アリマセン」(5-13-3)

「ソレモ カンケイ アリマセン」(5-6-18)

注 資料には、肯定の例はあらわれなかった。

これらの「カンケイ アリマセン」は、慣用として、「チガウ」の類に準ずる応答表現と認めた。

## 5 主語—用修語—述語

「アタシハ ダメヨ, ゼンゼン」(3<sup>(3)</sup>-6-1)

注 資料には、肯定の例はあらわれなかった。

《まとめ》

- (1) 未分化的な表現として、「声的受け」と「応答詞」とがある。
- (2) やや分化した表現は文的類型をもち、Ⅰ. 指示詞を述語文節に含むもの、Ⅱ. その他の類型によるもの、がある。
- (3) 上記のⅠ.の類の文の主語は、「ハ」「モ」をとることが多く、また、指示詞・代名詞を含むことが多い。

- (4) 上記のⅡ.の類の文は、形式としては、判叙表現と同じである。
- (5) 同上Ⅱ.の類の文の主語は、「ソレ」「ソノ～」「ソウイウ～」「ソнна～」など、「ソ」系の指示詞を含むことが多い。
- (6) 「声的受け」を除いて、他の形式のものには、肯定・否定の別がある。

《例文の数》

| 4・1 未分化的な表現      | No. 3 | No. 5 | No.12 | No.16 | No.22 | No.27 | 計     |
|------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1. <声的受けの> 独     | 109   | 61    | 114   | 100   | 112   | 59    | 555   |
| 2. <応答詞の> 独      |       |       |       |       |       |       |       |
| 計                | 109   | 61    | 114   | 100   | 112   | 59    | 555   |
| 4・2 やや分化した表現     | No. 3 | No. 5 | No.12 | No.16 | No.22 | No.27 | 計     |
| I. 述語文節に指示詞を含むもの |       |       |       |       |       |       |       |
| 1. 述             | 129   | 72    | 18    | 65    | 62    | 35    | 381   |
| (1) 指示詞          | (81)  | (20)  | (1)   | (33)  | (29)  | (4)   | (168) |
| (2) 指示詞+文末助辞     | (48)  | (52)  | (17)  | (32)  | (33)  | (31)  | (213) |
| 2. 用 述           | 3     | 0     | 0     | 0     | 1     | 0     | 4     |
| 3. 主 述           | 2     | 1     | 0     | 1     | 2     | 0     | 6     |
| 4. 主 用 述         | 0     | 0     | 0     | 0     | 1     | 0     | 1     |
| II. その他の類型によるもの  |       |       |       |       |       |       |       |
| 1. 述             | 4     | 18    | 1     | 1     | 1     | 6     | 31    |
| 2. 用 述           | 1     | 2     | 0     | 0     | 0     | 0     | 3     |
| 3. 主 述           | 0     | 5     | 1     | 0     | 0     | 0     | 6     |
| 4. 主 主 述         | 0     | 4     | 0     | 0     | 0     | 0     | 4     |
| 5. 主 用 述         | 1     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 1     |
| 計                | 140   | 102   | 20    | 67    | 67    | 41    | 437   |
| 全 合 計            | 249   | 163   | 134   | 167   | 179   | 100   | 992   |

- 注 1. 未分化的な表現とやや分化した表現とは、連続してあらわれることも多い。たとえば、「エー ソウデス」「ソウデス、エー」「ハイ ソウデス、エー」のように。
- 注 2. 述語が同じ形式で繰り返されてあらわれることもある。たとえば、「ソウ ソウソウ」「ソウデス、ソウデス」のように。

《この表現の典型》

4・1 〈応答詞の〉 独立語

4・2 (主語 (ハ))—(用修語)—〈応答を表わす形式の〉 述語

5 各表現の典型一覧

1 詠嘆表現の典型

1・1 〈感動詞の〉 独立語

1・2 (主語 (ハ))—(用修語)—〈形容(動)詞の〉 述語

2 判叙表現の典型

2・1 (主語 (ガ・ハ))—(用修語)—述語

2・2 (主語 (ガ・ハ))—(用修語)—述語 カ・カナ・カンラ

3 要求表現の典型

3・1 (主語(ガ・ハ))—(用修語)—述語 系・チ・ダロウ・デショウ・ジャンナイ(ノ・カ)

3・2 (主語(ガ・ハ))—(用修語)—述語(カ)

3・3 (主語 (ハ))—(用修語)—〈判定要求の形式の〉 述語, — (独立語,) —(用修語)—〈判定要求の形式の〉 述語

3・4 (主語 (ハ))—(用修語)—〈不定詞を含む〉 述語(カ)

(主語 (ハ))—(用修語)—〈不定詞を含む〉 用修語—述語(カ)

〈不定詞を含む〉 主語 (ガ)—(用修語)—述語(カ)

〈不定詞を含む〉 主語 (ガ)—(用修語)—〈不定詞を含む〉 用修語—  
述語(カ)

3・5 } (主語 (ガ・ハ))—(用修語)—〈すすめ・希求・依頼・命令などを表わ

3・6 } す形式の〉 述語

4 応答表現の典型

4・1 〈応答詞の〉 独立語

4・2 (主語 (ハ))—(用修語)—〈応答を表わす形式の〉 述語

## おわりに ー反省ー

報告書の記述を終えて、反省されることを書きとめておくことにする。

1. この研究は文法論的考察を土台とすべき仕事で、一応、そういう順序を取って進めたが、これに時間を費やすことが大きく、使った時間のわりに、成果が少ないという印象を、報告書の上では、防ぎえないかもしれない。そこから出発すべきところが、結果となっているという観をなしているところもある。むしろ、考察の過程をより積極的に記述する方が、有意義であったかとの反省ももたれる。

しかし、なお、文法論的考察が十分に尽くされたとは言えない。なお未熟にとどまり、それが文の認定を中途半端な処置に終らせたり、構文の分析・整理において、基礎的問題の解決に不十分のうらみを残したりした点のあることが反省される。すなわち、文の認定はもっと技術的操作に徹する方がよかったかとも思われるが、そのためには、文法論的考察を尽くした上で、そこから技術的操作のしかたをきめることが望ましい。どちらも不十分であったと思われる。構文については、後述する。

2. 文法は一般に音声要素を捨象して考えられているが、われわれは、一般的な考え方の一部を改めて、文法研究にも音声要素を参与させるべきだと考えて、まずイントネーションを取り上げた。しかし、音声要素の参与しうる限界というものについて、必ずしもはっきりした見通しをもたずにとりかかって、摸索的に作業を進めたところがあった。今になって、その限界もある程度おぼろげに見えてきたようであるが、ここまでの仕事は十分に能率的ではなかった。しかし、この点の考察は、なお進められなければならない。これは「話しことばの文法」の、基本的な問題の一つであると思われるからである。

3. 表現意図・構文・イントネーションの総合としての文型は、目標であったが、一つの試みとしての、小規模な作業による簡単なものを示すにとどまった。これは当初の計画によるものではない。一応、仕事のしめくくりをつけようとして、この形を取ったが、さらに総合的文型について詳しく明らかにする

文型研究の発展が、今後に残されている。

4. 待遇表現は一応問題にしないことにしたが、特に話しことばとしては、この問題を無視することはできない。また、文法上、特に構文の問題としても重要である。今後のこまかい調査を要する。

年齢別・性別その他の諸要因のはたらきかたについても、同様である。

5. 表現意図の複合は、原則として、認めなかった。しかし、部分的には複合を認める必要の起ったところがある。この問題もなお考察の必要がある。

6. 構文については、文法研究の現段階が、文型を明らかにするという立場からは、基礎的な研究の積み重ねを必要とする段階であるので、全体的な把握を目ざす作業には多くの困難を伴う。

述語を「自動詞」「他動詞1」「他動詞2」「形容詞・形容動詞」「名詞」「副詞」と分けたが、「自動詞」と「他動詞1」とを一括し、「副詞」は「形容詞・形容動詞」と合わせることも可能であろう。

一次の部としての体言的修飾語・副詞的修飾語・述語の配列・組み合わせを調べたが、基礎的に、まず、体言的修飾語と述語との関係、副詞的修飾語と述語との関係を十分に明らかにすべきであったろう。

格の種別と識別にも問題がある。部の格、句の格を立てたが、対体言格・対用言格などを立てることもできよう。「美しく咲く」「りっぱにやってのけた」などを句と扱ったが、これらを副詞的修飾格と同等に取り扱う立場もあろう。主格と扱うか、体言的修飾格と扱うか、副詞的修飾格と扱うか、それらの間の区別にも異論があろう。格助詞などを、構文の立場で、どの程度に細分すべきか、これについては大体の考察にとどまり、細密な調査を行なうゆとりがなく、詳しくはなお今後に残された。

部の交換の自由、不自由のことは、今後の研究の進展のための足がかりとして、大まかな線を示したにすぎない。

7. イントネーションについては、結論になお不安・迷いがいいではない。さらに今後、吟味を加えたい。

イントネーションに関する実験的調査は、準備が不足で、結果のまとめ方・生かし方も不十分であった。実験の結果についての見通し、実験をどう役立て

ようとするかの態度を十分はっきりさせずに取りかかった不用意が、反省される。

実験的調査についての不備は、イントネーションに関するだけでなく、表現意図に応ずる発話の実験的調査においてもあった。

なお、イントネーションとして把握した以外の音声要素、たとえば、プロミネンス・模写・音象徴・節奏などといわれるものについての見解を、今後いっそうたしかにし、それとイントネーションとの関連をはっきりさせていくことが、イントネーションの把握のためにも、必要である。

8. 作業過程における技術上の問題で反省されることは多いが、特に取り上げるべきことは、資料の文字化から、資料定本・決定カードの作成の過程にむだの多すぎたことである。これは、主として、録音資料の聞き取りのむずかしさによるものであったが、聞き取りのむずかしさというまぬがれがたい一般的な条件のもとで、今後はもう少し賢明な技術的処理のしかたを考えなければならない。

以上、この研究の進行・結果をふりかえって当面の反省を述べたが、さらに全体的に、特に総合的文型ということを目標とした新しい方法による研究であったため、作業計画の見通しも当初において十分でなく、そのために作業が十分能率的に進められなかったこと、また、共同研究としての進め方にも完全でない点のあったことなどが反省される。これらの経験も今後に生かしたい。

なお、このほかさらに、根本的なことについて考えさせられるものがある。

すなわち、われわれの当面の目標である文型研究は、「話しことばの文法」の研究というわれわれの大きな課題と、どのようにかわりあうものであるか、大きな課題への途上でどういう位置にあり、どういう役割を果たすものか。その点の見通しをもっとはっきりさせることが、ぜひとも必要である。文型研究の作業計画も方法も、それにもとづいてきめられるところが多いが、その点への考察と準備がわれわれにおいては十分でなかったと反省せざるをえない。今後さらに考えていかなければならないところである。

## 参 考 文 献

この研究において引用あるいは参照した文献、およびこの研究に関連する文献のおもなものをかかげる。

- (1) 大槻 文彦 広日本文典 1897年
- (2) 文 部 省 国定教科書編纂趣意書 1904年
- (3) 山田 孝雄 日本文法論 1908年
- (4) 鶴田 常吉 日本口語法 1924年
- (5) 松下大三郎 改撰標準日本文法 1928年
- (6) 山田 孝雄 日本口語法講義 1929年版
- (7) 安田喜代門 高等国語法 1929年
- (8) 湯沢幸吉郎 解説日本文法 1931年
- (9) 山田 孝雄 日本文法学概論 1934年版
- (10) 湯沢幸吉郎 口語法精説 国語科学講座 1934年
- (11) 佐久間 鼎 現代日本語の表現と語法 1936年
- (12) 松尾捨治郎 国語法論攷 1936年版
- (13) 橋本 進吉 国語法要説 国語科学講座 1934年
- (14) 木枝 増一 高等国文法新講(文章篇) 1938年
- (15) 佐久間 鼎 現代日本語法の研究 1940年
- (16) 金田一京助 新国文法 1941年
- (17) 佐久間 鼎 日本語の特質 1941年
- (18) 時枝 誠記 国語学原論 1941年
- (19) 木枝 増一 語法の論理 1941年
- (20) 岡本千万太郎 日本語教育と日本語問題 1942年
- (21) 市河三喜編 英語学辞典 1942年版
- (22) 佐久間 鼎 日本語の言語理論的研究 1943年
- (23) 岩井 良雄 標準語の語法 1944年
- (24) 藤原 与一 日本語 1944年



- (25) 文 部 省 中等文法 口語 1947年
- (26) 岩淵悦太郎 新しい口語文法 1948年
- (27) 波多野完治 新聞記事 1948年
- (28) 三尾 砂 国語法文章論 1948年
- (29) 矢田部達郎 児童の言語 1949年
- (30) 波多野完治 文章心理学 1949年
- (31) 藤原 与一 日本語方言文法の研究 1949年
- (32) 時枝 誠記 日本文法 口語篇 1950年
- (33) 吉沢 義則 日本語法(理論篇) 1950年
- (34) 波多野完治 現代文章心理学 1950年
- (35) 湯沢幸吉郎 現代口語の実相 1951年
- (36) S.I. ハヤカワ 大久保忠利訳 思考と行動における言語 1951年
- (37) 角野 喜六 日英対照文章読本 1952年
- (38) 遠藤 嘉基 松井 利男 わたくしたちのことばと文法(口語文章篇) 1953年
- (39) 鶴田 常吉 日本文法学原論(前・後篇) 1953年
- (40) 三上 章 現代語法序説 1953年
- (41) 喜多 史郎 シナリオと口語表現 1954年
- (42) 大関 将一 中基 隆 記号論理学教本 1954年
- (43) 国立国語研究所 談話語の実態 1955年
- (44) 時枝 誠記 国語学原論 純篇 1955年
- (45) 国語学会編 国語学辞典 1955年
- (46) 三上 章 現代語法新説 1955年
- (47) 水谷 静夫 待遇表現の基礎 1955年
- (48) 大石初太郎 話しコトバの性格 1956年
- (49) 白石 大二 日本口語文法 1956年
- (50) 阪本一郎・岡本奎六 言語心理学 1956年  
佐藤泰正・村石昭三
- (51) 西尾実ほか編 国語教育辞典 1957年版
- (52) 波多野完治編 現代の言語心理学 1957年  
沢田 慶輔

- (53) E. A. ナイダ  
太田 朗訳注 英語シンタクスの概要 英語教育シリーズ8 1957年
- (54) 三尾 砂 話しことばの文法 1958年
- (55) 白石 大二 教育文法論 1958年
- (56) フリーズ  
石橋幸太郎訳注 意味と言語分析 英語教育シリーズ1 1958年
- (57) ホワイトホール  
江川泰一郎訳注 英語構文の基本問題 英語教育シリーズ12 1958年
- (58) 倉沢 栄吉 文法指導 1959年
- (59) 佐伯 梅友 国語概説 1959年
- (60) 永野 賢 学校文法文章論 1959年
- (61) 橋本 進吉 著作集7 国文法体系論 1959年
- (62) 森重 敏 日本文法通論 1959年
- (63) 大塚 高信編 新英文法辞典 1959年
- (64) 青年文化協会 日本語基本文型 1942年
- (65) 国際文化振興会 日本語表現文典 1944年
- (66) 語学教育研究所編 基本英語文型 1947年
- (67) 大原 信一  
伊地智善継 中国語表現文型 1956年
- (68) 宮城県  
教育研究所 基本文型とことばの指導 昭和31年度報告書 1957年
- (69) 堀川勝太郎 基本文型による読解指導—学力向上のための実践文法—  
1957年
- (70) ミシガン大学英語研究所編  
伊藤健三訳注 英文の型 英語教育シリーズ4 1957年
- (71) 遠藤 嘉基  
松井 利男 文型による文法学力調査 1958年
- (72) 永野 賢 学校文法概説 1958年
- (73) 佐久間 鼎 日本音声学 1929年版
- (74) H. O. Coleman  
岩崎 民平訳 音調と強調 英語学パンフレット第3篇 1933年
- (75) 大西 雅雄 教育音声学 1936年
- (76) 服部 四郎 音声学 1951年

- (77) 土居 光知 日本音声の実験的研究 1955年
- (78) 平凡社刊 音楽事典(「ピッチレコーダー」の項) 1956年
- (79) E. Sapia  
黒川新一郎訳注 音声構造の型 英語教育シリーズ11 1958年
- (80) H. E. Palmev A Grammar of Spoken English 1924年
- (81) M. Schubiger The Role of Intonation in Spoken English  
1935年
- (82) O. Jespersen Analytic Syntax 1937年
- (83) H.R. Stokoe, M.A The Understanding of Syntax 1937年
- (84) Jensen: Schmitz: Thoma Modern Composition and Rhetoric  
1941年
- (85) K.L. Pike English Intonation 1942年
- (86) C. Morris Signs, Language and Behavior 1949年版
- (87) C. C. Fries The Structure of English 1952年
- (88) A.S. Hornby A Guide to Patterns and Usage in English  
1954年
- (89) L. Kellner  
宮部 菊男注 Historical Outlines of English Syntax 1956年
- (90) M. Schbiger English Intonation 1958年
- 〈 以上単行本, 以下論文 〉
- (91) 中村 通夫 談話のことばと放送のことば 言語生活 第2号 1951年
- (92) 伊佐早敦子 はなしことば序 国語国文 第22巻第3号 1953年
- (93) 遠藤 嘉基 話し言葉と書き言葉 言語生活 第21号 1953年
- (94) 金田一春彦 日本語〈文法〉 世界言語概説 下 1955年
- (95) 大石初太郎 話し言葉とその研究 国語学 第24輯 1956年
- (96) 西尾 実 ことばの生態的考察 国語学 第24輯 1956年
- (97) 芳賀 綏 “話しことば” “書きことば” 文学論叢 第10号 1958年
- (98) 服部 四郎 具体的言語単位と抽象的言語単位 コトバ 復刊第2巻  
第12号 1949年

- (99) 泉井久之助 語順の原理 国語国文 第24巻第8号 1955年
- (100) 大石初太郎 話しことばと書きことば 講座現代国語学Ⅲ 1958年
- (101) 服部 四郎 意味に関する一考察 言語研究 第22・23号 1953年
- (102) 池上 禎造 「はい」と「いいえ」 国語国文 第21巻第8号 1952年
- (103) 阪倉 篤義 「対話」—戯曲のことば— 国語国文 第23巻第11号  
1954年
- (104) 山本 俊治 対話の表現法—大阪方言を素材として— 武庫川女子大学  
紀要 第2集 1955年
- (105) 藤原 与一 対話の文末の「よびかけことば」 広島大学文学部紀要  
第9号 1956年
- (106) 山本 俊治 対話表現法研究試案 国文学攷 第18号 1957年
- (107) 桑原文治郎 文と文とのつながりに関する考察 島根県国語教育研究会  
研究紀要1 1957年
- (108) 長田 久男 対話における単位の考え方—倒置の表現をめぐる—  
論究日本文学 第9号 1958年
- (109) 田口 孝之 談話文に関する発達心理学的研究 福島大学学芸部論集  
第9号の3 1958年
- (110) 田辺 正男 句点を超える一つの場合 国語研究 第8号 1958年
- (111) 宮地 敦子 うけこたへ 国語学 第39輯 1959年
- (112) 浅野 信 「基本文型」の問題—文型と文体と— コトバ 第3巻第2  
号 1941年
- (113) 垣内松三ほか 特輯日本語の基本文型 コトバ 第3巻第2号  
1941年
- (114) 三尾 砂ほか 共同研究基本文型への手がかり コトバ 第3巻第2号  
1941年
- (115) 神保 広至 基本文型について 国語 第3巻第1号 1949年

- (116) 松下 厚 日本語基本文型試論 静岡大学教育学部浜松分校研究年報  
5 1955年
- (117) 加藤十久雄 文型に関する一考察 言語研究 第29号 1956年
- (118) 永野 賢 基本文型 日本文法講座5 1958年
- (119) 三上 章 基本文型 国語教育のための国語講座5 1958年
- (120) 中沢 政雄 文法教育の体系と方法 (小学校) 国語教育のための国語講  
座5 1958年
- (121) 鳥山 榛名 文型指導の諸問題 ことばの教育 第106号 1958年
- (122) 遠藤 嘉基 文型教育について ことばの教育 第106号 1958年
- (123) 遠藤 嘉基 文法 コトバの科学7 1958年
- (124) 白石 大二 助詞助動詞の用法から考えた口語の文型 教育科学 国語教育  
No.11 1959年
- (125) 杉山 栄一 文章法に就いて 現代日本語の研究 1942年
- (126) 水野 憲 センテンスの定義に関する一考察—言語哲学的立場より—  
学苑 第14巻第10号 1952年
- (127) 泉井久之助 否定表現の原理—一つの意味論的分析— 国語国文 第22巻  
第8号 1953年
- (128) 樺島 忠夫 文の長さについて 国語学 第15輯 1953年
- (129) 木原 茂 文の表現効果とその構造 広島女子短期大学研究紀要 第  
5集 1954年
- (130) 樺島 忠夫 文の構造について 国語国文 第23巻第3号 1954年
- (131) 樺島 忠夫 倒置法の一効果—文の要素の分凝より— 国語国文 第23巻  
第12号 1954年
- (132) 山口 正 文法論における「文」 茨城大学文理学部紀要 (人文科学)  
第4号 1954年
- (133) 宮地 裕 いわゆる文の性質上の種類の原理とその発展 国語国文  
第23巻第11号 1954年
- (134) 進藤 正邦 「場」による「文」の分類について 山口女子短期大学研  
究報告 第3号 1954年

- (135) 田辺 正男 謂はゆる対等の関係にある文節について 国語研究 第3号 1955年
- (136) 西尾 光雄 文表現の分類 解釈と鑑賞 第20巻第6号 1955年
- (137) 長田 久男 文末の構造とその類型 立命館文学 1955—5 1955年
- (138) 宮地 裕 疑問表現をめぐる 国語国文 第25巻第9号 1956年
- (139) 榎垣 実 Aspect 論 帝塚山短期大学年報 第4号 1956年
- (140) 田中 章夫 近代東京語質問表現における終止形式の考察 国語学 第25輯 1956年
- (141) 谷脇 道彦 日本語における省略法の研究 文学論叢 第4・6号 1956・7年
- (142) 田中 章夫 命令表現をめぐる破格表現について 武蔵野文学 第4集 1957年
- (143) 宮地 裕 文と表現文 国語国文 第27巻第5号 1958年
- (144) 進藤 正邦 「連用修飾語」について—補充語と「客語」とを中心にして— 山口女子短期大学研究報告 第10号 1958年
- (145) 田中 章夫 文構成 続日本文法講座1 1958年
- (146) 宮地 裕 日本語のシンタクス 講座現代国語学Ⅱ 1959年
- (147) 宮地 裕 はなしことばの文 言語生活 第90号 1959年
- (148) 中山 崇 現代婦人語の終止表現について 国語研究 第1号 1952年
- (149) 福田 良輔 文の陳述性について 国語国文 第21巻第9号 1952年
- (150) 桑田 明 陳述の性格と助動詞の表現性 国語学 第6輯 1953年
- (151) 渡辺 実 叙述と陳述 国語学 第13・14輯 1953年
- (152) 三上 章 「陳述度？」 国語学 第17輯 1954年
- (153) 芳賀 綏 陳述とは何もの 国語国文 第23巻第4号 1954年
- (154) 時枝 誠記 詞と辭の連続・非連続の問題 国語学 第19輯 1954年
- (155) 奥村 三雄 辭の形態論的性格 国語国文 第25巻第9号 1956年
- (156) 渡辺 実 辭の連続 国語学 第33輯 1958年
- (157) 渡辺 実 詞の連続 国語国文 第27巻第11号 1958年

- (158) 松村 明 主格表現における助詞「が」と「は」の問題 現代日本語の研究 1942年
- (159) 森重 敏 応答詞とその分化 国語国文 第21巻第2号 1952年
- (160) 永野 賢 表現文法の問題—複合辞の認定について— 金田一博士古稀記念言語民俗論叢 1953年
- (161) 金田一春彦 不変化助動詞の本質(上・下) 国語国文 第22巻第2・3号 1953年
- (162) 藤原 与一 日本語表現法の文末助詞—その存立と生成— 国語学第11輯 1953年
- (163) 村内 英一 文末助詞の考察 和歌山大学学芸部(人文科学)紀要Ⅲ 1953年
- (164) 青木 伶子 主語承接の「は」助詞について 国語と国文学 第31巻第3号 1954年
- (165) 中西 宇一 不定詞の分類 国語国文 第24巻第12号 1955年
- (166) 神鳥 武彦 日本語表現法上の文末助詞「ノ(ノー)」—文末の卓立音調— 国文学攷 第15号 1956年
- (167) 宮地 敦子 誤用—「ガ」を中心として— 国語国文 第25巻第1号 1956年
- (168) 佐治 圭三 終助詞の機能 国語国文 第26巻第7号 1957年
- (169) 船田 逸夫 国語「～は」「～が」と英語の表現 英文法研究 第1巻第10号 1958年
- (170) 石井 光治 英米人のみた格助詞「は」「が」 英文法研究 第2巻第3号 1958年
- (171) 藤原 与一 方言「文末助詞」(文末詞)の研究について 方言研究年報 第1巻 1958年
- (172) 宮地 裕 文末助辞と質問の昇調 国立国語研究所論集1 1959年
- (173) 青木 伶子 国語主格形式究明への問題点 共立女子短期大学部紀要 第3号 1959年

- (174) 金田一春彦 日本語動詞のテンスとアスペクト 名古屋大学文学部研究  
論集Ⅹ文学4 1955年
- (175) 石垣 幸雄 現代日本語の受身 名古屋大学会報13(別冊) 1958年
- (176) 榎垣 実 日英文  
法比較 「時」の考え方・表わし方 英文法研究 第2巻第  
1号 1958年
- (177) 榎垣 実 日英文  
法比較 「相」の考え方・表わし方 英文法研究 第2巻第  
5号 1958年
- (178) 榎垣 実 日英文  
法比較 「様態」と「動作態」 英文法研究 第2巻第6号  
1958年
- (179) 田中 章夫 近代東京語命令表現の通時的考察 国語と国文学 第34巻  
第5号 1957年
- (180) 阪倉 篤義 上代の疑問表現から 国語国文 第27巻第11号 1958年
- (181) 田中 健子 疑問表現形式の史的変遷—会話文を中心として— 文学・  
語学 第1号 1958年
- (182) 外山 映次 質問表現における文末助詞「ゾ」について 国語学 第  
31輯 1958年
- (183) 茂中 進 禁止表現における否定辞「な」について 国語学 第32輯  
1958年
- (184) 大西 雅雄 視覚文法と聴覚文法 安藤教授  
還暦祝賀 記念論文集 1940年
- (185) 豊田 実 日英語比較音声学 英米文学語学講座 1944年
- (186) 服部 四郎 具体的言語単位と抽象的言語単位 コトバ 復刊第2巻第  
12号 1949年
- (187) 服部 四郎 文節とアクセント(1)(2) 方言と民俗 第3・4号 1949年
- (188) 服部 四郎 メンタリズムかメカニズムか? 言語研究 第19・20号  
1951年
- (189) 金田一春彦 コトバの旋律 国語学 第5輯 1951年
- (190) 渡辺 実 象徴辞と自立語—音と意味(1)— 国語国文 第21巻第8号



1952年

- (191) 渡辺 実 音と意味(序説) —表情表現の破壊力と知的形式の抵抗力—  
国語国文 第23巻第11号 1954年
- (192) 土居光知ほか オッシログラフによる日本語アクセントの研究 日本  
学士院紀要 第12巻第1号 1954年
- (193) 安倍 勇 イントネーションの論理と心理 音声学会会報 第88号  
1955年
- (194) 安倍 勇 英語イントネーションの記述法 音声学会会報 第90号  
1956年
- (195) 川上 葵 昇降調の三種 音声学会会報 第92号 1956年
- (196) 川上 葵 文頭のイントネーション 国語学 第25輯 1956年
- (197) 川上 葵 準アクセントについて 国語研究 第7号 1957年
- (198) 安倍 勇 日本語とプロミネンス 音声学会会報 第94号 1957年
- (199) 川上 葵 東京語の卓立強調の音調 国語研究 第6号 1957年
- (200) 大石初太郎 プロミネンスについて —東京語の観察にもとづく覚え書—  
国立国語研究所論集1 1959年
- (201) 黒木総一郎 聴覚の心理学 現代心理学大系15 1957年
- (202) 寿原 健吉 発音の物理 コトバの科学6 1958年
- (203) 吉沢 典男 ソナグラフによる音声研究について 国語研究 第9号  
1959年

< 補 >

- (204) K. L. Pike Intonation of American English 1943年
- (205) K. L. Pike Tone Languages 1948年
- (206) W. Jassem Intonation of Conversational English 1952年
- (207) 浅野 信 文成立における相対性 国語研究 第8号 1958年
- (208) 浅野 信 「日本文法学」の「文」 国学院雑誌 第61巻第4号  
1960年

# 事項索引

1. この索引は、本書の中のおもな事項を五十音順に示したものである。
2. 人名・文献名は省略した。
3. 関連項目は、2か所にわたって出ていることがある。
4. 数字は、ページ数を示す。

## 〔ア〕行

|          |                                                                      |               |                   |
|----------|----------------------------------------------------------------------|---------------|-------------------|
| あいさつ     | 131                                                                  | 入子型構造         | 139               |
| ～ことば     | 145                                                                  | インテンシティ       | 250               |
| わかれの～    | 131                                                                  | イントネーション      | 7～8, 20, 250, 327 |
| 相手       | 86, 87                                                               | ～記号           | 268               |
| アクセント    | 59, 253                                                              | ～5種           | 260               |
| ～形式      | 253                                                                  | ～素            | 255               |
| ◎型類      | 257～259, 272                                                         | ～と表現意図とのからみ合い | 286～288           |
| 言いかえ     | 80                                                                   | ～と「文型」との関係    | 273～274           |
| 言いさし     | 62, 63                                                               | ～の型           | 16                |
| ～の表現     | 58                                                                   | ～の実演材料        | 263               |
| 言いなおし    | 40                                                                   | ～の実験テキスト      | 261               |
| ～文を含む文   | 82                                                                   | ～の実験的調査       | 261               |
| 移行態      | 94                                                                   | ～の種類別集計       | 269               |
| 意志の表現    | 104                                                                  | ～の取り扱い        | 291               |
| 一次の部     | 150～154, 168                                                         | 詠嘆表現と結びついた～   | 277～278           |
| ～の認定のしかた | 152                                                                  | 応答表現と結びついた～   | 284～285           |
| 一般的表現    | 15～16                                                                | 句末の～          | 250               |
| 一般的表現意図  | 15                                                                   | 質問的表現と結びついた～  | 280～284           |
| 意図       |                                                                      | 判叙表現と結びついた～   | 278～280           |
| ～表現      | 58                                                                   | 表現意図と～との関係    | 275               |
| ～表現音調    | 44, 277, 278, 279,<br>280, 281, 282, 283, 284,<br>285, 286, 287, 288 | 文頭の～          | 250               |
| ～表現成分    | 44                                                                   | 文末形式と～との相関    | 285               |
| 質問をあらわす～ | 63                                                                   | 文末の～          | 250               |
| 表現者の～    | 44                                                                   | 命令的表現と結びついた～  | 283～284           |
| 意味       | 84                                                                   | 受け            | 65                |
| 依頼       | 119, 121, 123                                                        | 受身            | 98                |
|          |                                                                      | 詠嘆表現          | 88, 89, 126, 292  |

|                 |                                  |
|-----------------|----------------------------------|
| ～と結びついたイントネーション | 277～278                          |
| エツクス            |                                  |
| X-question      | 69                               |
| エンファシス          | 250                              |
| 応答詞             | 65, 66, 126, 320                 |
| ～文              | 77                               |
| 感動詞や～の音調        | 260                              |
| 語的類型を持った～       | 128                              |
| 応答表現            | 65, 66, 88, 89,<br>126, 127, 320 |
| ～と結びついたイントネーション | 284～285                          |
| 押さえの表現          | 65～66                            |
| 音声要素            | 42, 84, 85, 250, 325, 327        |
| 音調              | 84                               |
| ～の型             | 57, 251                          |
| 意図表現～           | 277, 291                         |
| 感動詞や応答詞の～       | 260                              |
| しり上がりの～         | 251                              |
| しり下がり～          | 254                              |
| 卓立表現～           | 279                              |
| 附加的～            | 277                              |
| 附加的卓立表現～        | 278                              |

〔力〕行

|         |               |
|---------|---------------|
| 係り助詞    | 145, 178, 202 |
| 可逆性     | 71, 75        |
| 不～      | 71            |
| 格       | 154～168       |
| ～の種別と識別 | 326           |
| ～の認定    | 157, 162, 164 |
| 格助詞     | 211           |
| 確認      | 67, 68        |
| 確認要求の表現 | 109, 305      |
| 過去      | 99            |
| 可能      | 98            |
| 緩急      | 252           |

|                                   |                    |
|-----------------------------------|--------------------|
| 漢語動詞的な名詞                          | 254                |
| 勸奨                                | 119                |
| 感情                                | 60                 |
| 間投詞                               | 54                 |
| 文頭の～                              | 65                 |
| 感動詞                               | 65, 126, 292       |
| ～文                                | 77, 247            |
| ～や応答詞の音調                          | 260, 272～273       |
| 語的類型を持つ～                          | 91                 |
| 声的～                               | 90, 292            |
| 間投助詞                              | 145                |
| 勧誘                                | 119                |
| 慣用句                               | 151                |
| 慣用的表現                             | 293                |
| 完了                                | 93                 |
| 機械による音声の分析                        | 23～24              |
| 聞き取り（聴覚）と機械的分析（物<br>理的分析結果）との対応関係 | 264                |
| 希求                                | 119, 121, 122, 123 |
| ～の表現                              | 103                |
| 基本文型                              | 19                 |
| 文型と～                              | 18～19              |
| 疑問                                | 107                |
| 疑問詞                               | 115                |
| 疑問兆候                              |                    |
| ～の表現                              | 131                |
| 強弱                                | 84, 252            |
| 強調                                | 60                 |
| ～の型                               | 251                |
| 共同作業                              | 64                 |
| 句                                 | 144, 155           |
| ～であるかどうか                          | 156                |
| ～と句との関係                           | 168                |
| ～の格                               | 155, 158           |
| ～の格かどうか問題になるもの                    |                    |
|                                   | 166                |
| ～連結                               | 155                |

|                |               |
|----------------|---------------|
| 句末のイントネーション    | 250           |
| くり返し           |               |
| ～表現としての文節または文節 |               |
| 連結を含む文         | 79            |
| ～表現の一つごとの文     | 78            |
| 形（「形容詞」の略）     | 177           |
| 形式             | 57            |
| 形容詞            |               |
| ～・形容動詞文        | 227～238, 238  |
| 形容動詞           |               |
| ～と名詞           | 169           |
| ～のついている連部      | 148～149       |
| ～文             | 247           |
| 名詞と～との問題       | 170           |
| 形容(動)詞         | 293           |
| ～類による表現        | 91            |
| ～を含む文的類型による表現  | 91            |
| 言語意識           | 21, 54～57, 86 |
| 言語主体           | 87            |
| 現在             | 100           |
| 語              | 55            |
| ～的表現           | 68            |
| 行為要求           |               |
| 消極的～           | 122           |
| 消極的～の表現        | 119           |
| 積極的～           | 125, 126      |
| 積極的～の表現        | 122           |
| 後置             | 71～75         |
| ～成分            | 71            |
| 降調             | 254, 257, 271 |
| 高低             | 252           |
| ～2段観           | 253           |
| 行動発話録音調査       | 29            |
| 肯定             | 65, 129～130   |
| 肯否             |               |
| ～の応答           | 65            |
| ～要求            | 109           |

|                |                                                                         |
|----------------|-------------------------------------------------------------------------|
| 構文             | 5～7, 20, 137                                                            |
| ～観             | 138～139, 141～142                                                        |
| ～における対象        | 137～138                                                                 |
| ～の型            | 16, 57, 137, 138, 139～<br>140, 141, 143, 144, 152,<br>168, 176, 176～248 |
| ～の型（表）         | 181～248                                                                 |
| ～の型の示し方        | 291                                                                     |
| ～の姿            | 142                                                                     |
| ～の整理のしかた       | 168                                                                     |
| 主語が先行する～       | 188, 191, 205                                                           |
| 主語が体修語に先行する～   | 180,<br>192, 193, 206, 223,<br>226, 234, 243                            |
| 主語が副修語に先行する～   | 222, 232, 242                                                           |
| 副修語が主語に先行する～   | 232, 242                                                                |
| 副修語が先行する～      | 188, 205                                                                |
| 副修語が体修語に先行する～  | 180, 184, 213                                                           |
| 第1回の～小調査       | 159                                                                     |
| 第2回の～小調査       | 160                                                                     |
| 声の質            | 252                                                                     |
| 語順の倒錯          | 38                                                                      |
| ことばの不足         | 38                                                                      |
| コミュニケーション      | 58, 88                                                                  |
| ～の成立そのものに関する表現 | 131                                                                     |
| 誤用文            | 77                                                                      |
| 孤立格            | 155, 156, 176                                                           |

〔サ〕行

|      |    |
|------|----|
| 再生装置 | 58 |
| 作業   | 83 |
| 使役   | 97 |
| 自己確認 | 65 |

|                         |                   |                          |                          |
|-------------------------|-------------------|--------------------------|--------------------------|
| 指示語                     | 68, 79            | 被～成分                     | 71                       |
| 指示詞                     | 76, 320           | 連用～格                     | 71                       |
| ～(十文末助辭)                | 128               | 終助詞                      | 296, 302                 |
| 事實の叙述                   | 92, 107           | ～的用法                     | 56                       |
| 自然下降                    | 254               | 間投性～                     | 66                       |
| 実験的調査                   |                   | 接続助詞由來の～終止文              | 77                       |
| イントネーションの～              |                   | 主格                       | 72, 156                  |
| 27～28, 261, 326         |                   | ～と対象格との区別                | 161                      |
| 表現意図に応ずる発話の～            | 23, 28            | 主語                       | 70, 155, 173, 293～324    |
| ～29, 122, 124, 125, 126 |                   | ～が先行する構文                 | 188, 191, 205            |
| 質問                      | 68, 107, 133      | ～が体修語に先行する構文             | 180,                     |
| ～形式                     | 120               | 192, 193, 206, 223,      |                          |
| ～的形態                    | 68                | 226, 234, 243            |                          |
| ～という陳述                  | 63                | ～が副修語に先行する構文             | 222, 232, 242            |
| ～の昇調                    | 63                | ～が二つ以上ある場合               | 181                      |
| ～の表現                    | 63, 69            | ～・体修語…の特徴を表わして           |                          |
| 省略～文                    | 63                | いる辭                      | 168                      |
| 質問的表現                   | 88                | ～・体修語…を構成している中           |                          |
| ～と結びついたイントネーション         |                   | 心の詞の性質                   | 168                      |
| 280～284                 |                   | 主・述の関係                   | 154                      |
| 実例                      | 61                | 主題                       | 157, 173                 |
| 自動詞                     | 177               | ～たる主語                    | 169                      |
| ～・他動詞の区別                | 172               | 述語                       | 61, 63, 70, 71, 77, 155, |
| ～・他動詞を区別                | 169               | 155, 181, 201, 209, 227, |                          |
| ～文                      | 176, 181～200, 200 | 238, 245, 293～324, 326   |                          |
| 習慣                      | 55                | ～の詞性                     | 143～144                  |
| 個人～                     | 55                | ～並列的表現の一つごとの文            | 78                       |
| 社会～                     | 55, 61～63, 70,    | ～を欠く文                    | 63                       |
|                         | 71, 77, 86, 87    | 受容者                      |                          |
| 終止                      | 63                | 一般的～                     | 88                       |
| あいまい婉曲な～                | 62                | 個別的～                     | 88                       |
| 接続助詞～                   | 62                | 消極的行為要求(すすめ・希求・          |                          |
| 特殊な～                    | 76                | 依頼など)の表現                 | 317                      |
| 修飾                      |                   | 突声                       | 90                       |
| ～機能の違い                  | 144               | 情態副詞                     | 174                      |
| ～語                      | 70                | 情緒                       | 60                       |
| ～成分                     | 71                |                          |                          |

|                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| 昇調                |                     |
| ～1                | 255～256, 270        |
| ～2                | 256～257, 271        |
| 質問の～              | 63                  |
| 文末～               | 113                 |
| 「象徴」              | 269                 |
| 小調査               |                     |
| 第1回の構文～           | 159                 |
| 第2回の構文～           | 160                 |
| 省略                | 53, 58, 62, 76      |
| ～質問文              | 63, 65              |
| ～の表現              | 61～65               |
| ～文                | 61, 63, 64, 77, 238 |
| ～文由来の慣用による完全な文    | 79                  |
| 述語～               | 76                  |
| 文頭～               | 76                  |
| 文末～               | 76                  |
| 助詞の誤発             | 38                  |
| 助動詞               | 295～296, 302        |
| 問題になった～           | 173                 |
| しり下がり音調           | 254                 |
| 資料                |                     |
| ～の取捨選別            | 21～22               |
| 使用した～             | 290                 |
| 推定の表現             | 103                 |
| 数詞                | 72, 73, 75          |
| すすめ               | 119, 123            |
| 正位置               | 70                  |
| 声的受け              | 127, 320            |
| 声的感動詞             | 90, 292             |
| 性別                | 326                 |
| 積極的行為要求（いわゆる“命令”） |                     |
| の表現               | 318                 |
| 「節奏」              | 269                 |
| 接続詞               | 72, 74, 76          |
| 接続助詞              | 55                  |

|                              |                                     |
|------------------------------|-------------------------------------|
| ～終止                          | 62                                  |
| ～の終助詞的用法                     | 55                                  |
| ～由来の終助詞終止文                   | 77                                  |
| 説明要求                         | 69                                  |
| ～の表現                         | 115, 313                            |
| 選述要求                         | 109                                 |
| 選択要求                         |                                     |
| ～表現文                         | 81                                  |
| ～の表現                         | 68～70, 114, 312                     |
| 総合                           |                                     |
| 表現意図・構文の型・イントネーションの型の～としての文型 | 15, 16                              |
| ～的文型                         | 8～10, 325                           |
| 挿入                           | 67                                  |
| ～的提題文を含む                     | 80                                  |
| ～文を含む文                       | 80                                  |
| 存続経験                         | 94                                  |
| 存続                           | 94                                  |
|                              | [夕] 行                               |
| 待遇表現                         | 326                                 |
| 体言                           | 302                                 |
| ～的対述修飾格                      | 156, 157                            |
| ～ども                          | 295                                 |
| ～文節                          | 298                                 |
| 体修格                          | 72, 157, 158, 173, 174              |
| 体修語                          |                                     |
| ～が主語に先行する構文                  | 180, 192<br>193, 193, 234, 234, 243 |
| ～が先行する構文                     | 191                                 |
| ～が副修語に先行する構文                 | 179, 184, 213                       |
| ～の2つある構文                     | 179                                 |
| 主語・～……の構成している中心の詞の性質         | 168                                 |
| 主語・～……の特徴を表わしている辞            | 168                                 |

|                 |                                           |
|-----------------|-------------------------------------------|
| 対述修飾・述の関係       | 154, 155                                  |
| 対象語             | 173                                       |
| ～たる主語           | 169                                       |
| 主格と～格との区別       | 161                                       |
| 他1・他2           | 177                                       |
| 態の表現            | 93                                        |
| 対話単位            | 69                                        |
| 卓立表現音調          | 279, 280, 282, 283,<br>284, 285, 286, 287 |
| 附加的～            | 278, 280, 282, 283,<br>284, 285, 286, 287 |
| 他動詞             |                                           |
| ～1              | 169, 177                                  |
| ～2              | 169, 177                                  |
| ～+タイ            | 164                                       |
| ～+テアル           | 164                                       |
| ～+レル・ラレル        | 168                                       |
| 自動詞・～の区別        | 169, 172                                  |
| 他動詞文            |                                           |
| ～1              | 176, 201～208, 208                         |
| ～2              | 176, 209～227, 227                         |
| 単位部             | 144, 145                                  |
| 単純提示文           | 78                                        |
| 断定の表現           | 101                                       |
| 断定の様相           | 92, 107                                   |
| 遅速              | 84                                        |
| 中絶              | 38                                        |
| 中断文             | 77                                        |
| 調査              |                                           |
| イントネーションの実験的～   | 261                                       |
| 構文の小～           | 159, 160                                  |
| 発話の実験的～         | 125, 126                                  |
| 表現意図に応ずる発話の実験的～ | 120, 124                                  |
| ～単位             | 144                                       |
| 重複              | 40                                        |
| ～型              | 125                                       |

|                |                               |
|----------------|-------------------------------|
| ～の表現           | 58～61                         |
| 陳述             | 43, 44, 54, 61, 63, 70, 77    |
| 質問という～         | 63                            |
| ～副詞            | 145, 175                      |
| つなぎことば         | 145                           |
| 提示格            |                               |
| ～にすべきかどうかと迷うもの | 166                           |
| 提示の表現          | 66～68                         |
| 提題文            |                               |
| ～を含む文          | 81                            |
| 程度副詞           | 175                           |
| 適当・許容の表現       | 102                           |
| 典型             |                               |
| 各表現の～一覧        | 324                           |
| 伝聞             | 96                            |
| 電話の応対          | 55                            |
| 動詞             |                               |
| ～のついている連部      | 147～148                       |
| 「ト」の用法         | 75～77                         |
| 当然・義務の表現       | 102                           |
| 倒置             |                               |
| ～の表現           | 70～75, 79                     |
| ～の文            | 138, 176                      |
| 時の表現           | 98                            |
| 独立格            | 72                            |
| 独立語            | 61, 77, 292, 301,<br>312, 320 |
| 独話             | 63                            |
| ～資料            | 17, 21～22, 30                 |

〔ナ〕行

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 「に」格                  | 174 |
| 2段観(高低の)              | 268 |
| 音色 <small>おいろ</small> | 84  |
| 年齢別                   | 326 |

〔ハ〕行

|                   |                         |
|-------------------|-------------------------|
| 発音                |                         |
| ～に切れ目がない          | 59～60                   |
| 短く一気に～される         | 59                      |
| 発話                | 15, 57, 66, 86, 93, 250 |
| ～の意味              | 60                      |
| ～の実験的調査           | 125, 126                |
| ～行動               | 86                      |
| ～資料               | 21～22, 26               |
| ～段落               | 250                     |
| 話しことば             | 57                      |
| ～・書きことば           | 10～11                   |
| ～の文法              | 11～12                   |
| 話し手               | 86, 87                  |
| 場面                | 64, 76, 86, 87          |
| 反語の表現             | 131, 133                |
| 判叙表現              | 87, 88, 92, 294         |
| ～と結びついたイントネーション   | 278～280                 |
| 反唱の表現             | 131                     |
| 反唱文を含む文           | 82                      |
| 判断                |                         |
| ～辞                | 64, 65                  |
| ～への疑念             | 107                     |
| ～への疑念の表現          | 105                     |
| ～未確定              | 107                     |
| ～未確定の表現           | 105                     |
| ～未定の表現            | 88, 107, 108, 302       |
| 判定要求の表現           | 112, 309                |
| ピッチレコーダー          | 23, 263                 |
| ～による記録図           | 265～266                 |
| 否定                | 130                     |
| 表現意図              | 4～5, 20, 57, 69～86      |
| ～とイントネーションとの関係    | 275                     |
| ～とイントネーションとのからみ合い | 286～288                 |
| ～についての分類          | 290                     |

|                                                                |                                        |
|----------------------------------------------------------------|----------------------------------------|
| ～の2類                                                           | 87                                     |
| ～の複合                                                           | 326                                    |
| 一般的～                                                           | 87                                     |
| 個別的～                                                           | 87                                     |
| 表現者                                                            |                                        |
| 一般的～                                                           | 88                                     |
| 個別的～                                                           | 86                                     |
| 表現の典型                                                          | 295, 305, 309, 311, 312, 317, 319, 324 |
| 頻発                                                             | 97                                     |
| 部                                                              | 144, 144～154                           |
| ～の格                                                            | 154, 155                               |
| ～の交換された形の構文                                                    | 151                                    |
| ～の交換の自由・不自由                                                    | 326                                    |
| ～の詞性                                                           | 170                                    |
| ～の順序                                                           | 151                                    |
| ～の順序が自由であるか固定しているか                                             | 168                                    |
| ～の配列                                                           | 178～184                                |
| ～連結                                                            | 155                                    |
| 附属的な～                                                          | 146                                    |
| 附加的音調                                                          | 277, 279, 283, 284, 286, 287           |
| 不可逆性                                                           | 71                                     |
| 副 <sub>1</sub> ・副 <sub>2</sub> ・副 <sub>3</sub> ・副 <sub>4</sub> | 177                                    |
| 副詞                                                             | 72, 73, 293, 295～296, 302              |
| ～的文を含む文                                                        | 81                                     |
| ～文節                                                            | 298                                    |
| ～の第1類                                                          | 174                                    |
| ～の第2類                                                          | 175                                    |
| ～の第3類                                                          | 175                                    |
| ～的対述修飾格                                                        | 157                                    |
| ～文                                                             | 245～247, 247                           |
| 問題になった～                                                        | 172                                    |
| 副修格                                                            | 157, 158                               |
| 副修語                                                            | 174, 176, 176, 177                     |
| ～が主語に先行する構文                                                    | 232, 242                               |



|              |                                                |                             |                  |
|--------------|------------------------------------------------|-----------------------------|------------------|
| ～が先行する構文     | 188, 205                                       | ～の構造                        | 58               |
| ～が体修語に先行する構文 | 180, 184, 213                                  | ～の成立条件                      | 61               |
| ～第1類         | 176, 177                                       | ～の選別                        | 37               |
| ～第2類         | 176, 177                                       | ～の直接的構成要素                   | 140              |
| ～第3類         | 176, 177                                       | ～の特徴                        | 59               |
| ～第4類         | 176, 177                                       | ～の認定                        | 2～4, 42, 60, 325 |
| ～の順序         | 178                                            | ～表現の形式                      | 88               |
| ～の分類         | 169                                            | ～連結                         | 155              |
| 先行する～        | 178                                            | 言いなおし文を含む～                  | 82               |
| 時を表わす～       | 179                                            | 引用文を含む～                     | 81               |
| 副助詞          | 170                                            | 詠嘆～                         | 89               |
| 不整           |                                                | 応答詞～                        | 77               |
| ～・誤用         | 11                                             | 感動～                         | 89               |
| ことばの～        | 21                                             | 感動詞                         | 77               |
| ～表現          | 37～40, 64                                      | 疑問～                         | 89, 108          |
| ～文           | 77                                             | くり返し表現の一つごとの～               | 78               |
| 不定詞          | 115, 313～317                                   | くり返し表現としての文節また<br>は文節連結を含む～ | 79               |
| 一般～          | 116                                            | 誤用～                         | 77               |
| 数に関する～       | 117                                            | 質問～                         | 108              |
| 副詞的～         | 118                                            | 述語を欠く～                      | 63               |
| 連体詞的～        | 118                                            | 述語並列的表現の一つごとの～              | 78               |
| 部内格          | 155, 156                                       | 省略～                         | 63, 77, 83       |
| 部内連結         | 155                                            | 省略質問～                       | 63               |
| 部分提示の表現      | 67                                             | 省略文由来の慣用による完全な～             | 79               |
| プロミネンス       | 250, 257                                       | 接続助詞由来の終助詞終止～               | 77               |
| 文            | 15, 20, 43, 56, 57, 77,<br>83, 84, 85, 86, 250 | 選択要求表現～                     | 81               |
| ～認定の基本問題     | 54                                             | 挿入文を含む～                     | 80               |
| ～の意義         | 60, 87                                         | 挿入的提示文を含む～                  | 80               |
| ～のカード        | 45                                             | 単純な～                        | 77               |
| ～の規定         | 56, 64, 70                                     | 単純提示～                       | 78               |
| ～の切り取り方      | 36                                             | 中断～                         | 77               |
| ～の緊張体系       | 139                                            | 提題文を含む～                     | 81               |
| ～の組み合わせ      | 60                                             | 倒置～                         | 54               |
| ～の構成要素間の関係方式 | 154                                            | 反唱文を含む～                     | 82               |
| ～の構成要素の配列    | 137                                            | 判断～                         | 89               |

|                |                    |
|----------------|--------------------|
| 不完全～           | 53, 54, 62, 76, 82 |
| 副詞的文を含む～       | 81                 |
| 不整～            | 77, 82             |
| 文的要素を含む～       | 79                 |
| 補充表現としての完全な～   | 79                 |
| 命令～            | 89, 108            |
| 文音調            | 250                |
| 文型             | 42, 57, 86         |
| ～とは何か          | 13～15              |
| ～と基本文型         | 18～19              |
| ～研究            | 12～18              |
| 言語教育の方法としての～   | 14～15              |
| 語の用法に関する～      | 13～14              |
| 総合的～の試み        | 291                |
| 総合的～の立て方       | 289～324            |
| 対話資料による～研究     | 16～18              |
| 表現の種々の場合における～  | 13～14              |
| 文の構造に関する～      | 13～14              |
| 文法論としての～       | 14～15              |
| 文頭             | 67, 68             |
| ～のイントネーション     | 250                |
| ～の間投詞          | 65                 |
| 文内成分(提示)       | 155                |
| 文法             |                    |
| ～体系            | 54, 56             |
| 規範～            | 53                 |
| 文法論的考察         | 325                |
| 文末             |                    |
| ～形式とイントネーションとの |                    |
| 相関             | 285                |
| ～最後部           | 93                 |
| ～述語            | 143, 155, 168      |
| ～述語(の詞)        | 142                |
| ～述語と直接に関係を結んでい |                    |
| る部             | 150                |
| ～述語とは孤立的関係にある  | 150                |
| ～助詞            | 181                |

|                 |               |
|-----------------|---------------|
| ～部              | 142           |
| ～のイントネーション      | 250           |
| 指示詞(十～助辭)       | 128           |
| 表現意図に応ずる文表現の～部  |               |
| 分               | 89            |
| 文脈              | 64, 76        |
| 並立対等の関係         | 154, 155, 155 |
| 「へ」格            | 174           |
| 平調              | 252～255, 270  |
| 変化              | 95            |
| ポーズ             | 84, 253       |
| 放任              | 122           |
| 補充              | 54            |
| ～の表現            | 75            |
| ～表現としての完全な文     | 79            |
| 補足の表現           | 79, 80        |
| 〔マ〕行            |               |
| 間               | 71            |
| 未分化的表現          | 88, 292, 320  |
| 未来              | 98            |
| 名詞              | 238           |
| ～と形容動詞との問題      | 170           |
| 問題になった～         | 171           |
| 名詞文             | 238～245, 245  |
| 命令              | 119           |
| 命令的表現           | 109           |
| ～と結びついたイントネーション | 283～284       |
| 面接録音調査          | 28～29         |
| 文字化             | 58, 84        |
| 「模写」            | 269           |
| もてあまし           | 97            |
| 問題点のまとめ         | 77            |
| 〔ヤ〕行            |               |
| やや分化した表現        | 88, 293, 320  |

|                     |              |
|---------------------|--------------|
| 融合形                 | 147          |
| 様 <sup>よう</sup> の表現 | 97           |
| 要求表現                | 88, 108, 305 |
| 用言                  | 295~296, 302 |
| ~文節                 | 299          |
| ~省略                 | 245          |
| 問題になった~             | 172          |
| 用修格                 | 72           |
| 用修語                 | 293~324      |
| 呼び掛け                | 131          |
| 4段観(高低の)            | 253          |

〔ラ〕行

|             |              |
|-------------|--------------|
| 例示          | 94           |
| 例示経験        | 97           |
| レーザー        | 58           |
| 連体修飾・被修飾の関係 | 155          |
| 連部          | 145~150, 146 |
| ~としたものの一部   | 147          |
| 形容詞のついている~  | 148~149      |
| 動詞のついている~   | 147~148      |
| 連文節         | 139          |
| 連用修飾・被修飾の関係 | 155          |
| 録音          | 58, 63       |
| ~機械         | 58           |
| ~資料の文字化     | 35~36        |
| ~テープ        | 44           |

〔ワ〕行

|       |     |
|-------|-----|
| 話線の混淆 | 38  |
| 話線のそれ | 38  |
| 話頭    | 66  |
| ~の間投語 | 65  |
| 「を」格  | 174 |

〈記号類〉

|                      |               |
|----------------------|---------------|
| ○「文の認定」に関するもの        |               |
| 線                    | 45~53         |
| / /線                 | 45~53, 56     |
| ——線                  | 45~53, 56, 57 |
| -----線               | 45~53, 56     |
| △印                   | 45~53, 57     |
| *印                   | 45~53, 58~77  |
| ★印                   | 72, 75        |
| ○「構文」に関するもの          |               |
| ガ a, b, cなど          | 1, 2, 3など     |
| (1), (2), (3)など      | i, ii, iiiなど  |
| (i), (ii), (iii)など   | ( )           |
| < > ~                | 177           |
| —   =   .....   ~~~~ |               |
| •   ○   △            | 178           |
| ○「イントネーション」に関するもの    |               |
| —   ┌                | 268           |
| /                    | 255, 268      |
| ^                    | 256, 268      |
| \                    | 257, 268      |

— 国立国語研究所刊行書 —

|              |                                 |                     |
|--------------|---------------------------------|---------------------|
| 国立国語研究所報告 1  | 八丈島の言語調査                        |                     |
| 国立国語研究所報告 2  | 言語生活の実態<br>—白河市および付近の農村における—    | (秀英出版刊)<br>¥ 300.00 |
| 国立国語研究所報告 3  | 現代語の助詞・助動詞<br>—用法と実例—           |                     |
| 国立国語研究所報告 4  | 婦人雑誌の用語<br>—現代語の語彙調査—           |                     |
| 国立国語研究所報告 5  | 地域社会の言語生活<br>—鶴岡における実態調査—       | (秀英出版刊)<br>¥ 600.00 |
| 国立国語研究所報告 6  | 少年と新聞<br>—小学生・中学生の新聞への接近と理解—    |                     |
| 国立国語研究所報告 7  | 入門期の言語能力                        |                     |
| 国立国語研究所報告 8  | 談話語の実態                          |                     |
| 国立国語研究所報告 9  | 読みの実験的研究<br>—音読にあらわれた読みあやまりの分析— |                     |
| 国立国語研究所報告 10 | 低学年の読み書き能力                      |                     |
| 国立国語研究所報告 11 | 敬語と敬語意識                         |                     |
| 国立国語研究所報告 12 | 総合雑誌の用語 (前編)<br>—現代語の語彙調査—      |                     |
| 国立国語研究所報告 13 | 総合雑誌の用語 (後編)<br>—現代語の語彙調査—      |                     |
| 国立国語研究所報告 14 | 中学年の読み書き能力                      |                     |
| 国立国語研究所報告 15 | 明治初期の新聞の用語                      |                     |
| 国立国語研究所報告 16 | 日本方言の記述的研究                      | (明治書院刊)<br>¥ 900.00 |
| 国立国語研究所報告 17 | 高学年の読み書き能力                      |                     |
| -----        |                                 |                     |
| 国立国語研究所資料集 1 | 国語関係刊行書目 (昭和17~24年)             |                     |
| 国立国語研究所資料集 2 | 語彙調査<br>—現代新聞用語の一例—             |                     |
| 国立国語研究所資料集 3 | 送り仮名法資料集                        |                     |
| 国立国語研究所資料集 4 | 明治以降国語学関係刊行書目                   | (秀英出版刊)<br>¥ 300.00 |
| -----        |                                 |                     |
| 国立国語研究所論集 1  | ことばの研究                          |                     |
| -----        |                                 |                     |
| 国立国語研究所 共著   | 高校生と新聞                          | (秀英出版刊)<br>¥ 280.00 |
| 日本新聞協会 共著    | 青年とマス・コミュニケーション                 | (金沢書店刊)<br>¥ 280.00 |
| 国立国語研究所 共著   | 青年とマス・コミュニケーション                 | (金沢書店刊)<br>¥ 280.00 |
| 国立国語研究所編     | 国語年鑑 (昭和29年版)                   | (秀英出版刊)<br>¥ 450.00 |
| 国立国語研究所編     | 国語年鑑 (昭和30年版)                   | (秀英出版刊)<br>¥ 600.00 |
| 国立国語研究所編     | 国語年鑑 (昭和31年版)                   | (秀英出版刊)<br>¥ 450.00 |
| 国立国語研究所編     | 国語年鑑 (昭和32年版)                   | (秀英出版刊)<br>¥ 480.00 |
| 国立国語研究所編     | 国語年鑑 (昭和33年版)                   | (秀英出版刊)<br>¥ 480.00 |
| 国立国語研究所編     | 国語年鑑 (昭和34年版)                   | (秀英出版刊)<br>¥ 500.00 |

|           |                   |    |
|-----------|-------------------|----|
| 昭和 24 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 1  |
| 昭和 25 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 2  |
| 昭和 26 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 3  |
| 昭和 27 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 4  |
| 昭和 28 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 5  |
| 昭和 29 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 6  |
| 昭和 30 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 7  |
| 昭和 31 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 8  |
| 昭和 32 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 9  |
| 昭和 33 年 度 | 国 立 国 語 研 究 所 年 報 | 10 |

昭和 35 年 3 月

## 国立国語研究所

東京都千代田区神田一ツ橋1-1

電話 九 段 (331) 代表 4 2 9 5

U D C 4 9 5 . 6 : 4 1 5

N D C 8 1 5

996

A RESEARCH  
FOR MAKING SENTENCE PATTERNS  
IN COLLOQUIAL JAPANESE  
( 1 )

(On Materials in Conversation)

Introduction

I Outline of Research

Outline -- Purpose -- Method -- Administration --  
Materials

II Fundamental Studies

Definition of a Sentence -- Sentence Moods --  
Syntax -- Intonation

III "Synthetic Sentence Patterns"

Method -- Trial (List of Patterns)

For Further Research

Bibliography

Index

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
KANDA-HITOTUBASI, TIYODA, TOKYO

1960